
魔法少女リリカルなのはvivid 鮮烈で桜色の物語

楚良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはvivid 鮮烈で桜色の物語

【Nコード】

N3435R

【作者名】

楚良

【あらすじ】

JS事件から4年後。成長した桜やヴィヴィオ達の物語。

みんなで楽しく、熱く、鮮烈な物語が今、始まる！！

※オリキャラがちよっと増えます。

「桜の花が咲くころに」の続編です。

キャラクターなどがわからない場合は前作を読むことをお勧めします。

プロローグ

機動六課解散から約4年。

桜の花が咲く季節がまたやってきた。

ある日出会った、家族を失った少女。

その子はなんだか昔の自分に重なって見えた。

だから俺はその子を引き取ろうと思った。

今は母さん達と一緒にじゃなく、1人で暮らしている。

さて、どう母さん達に報告すればいいのやら・・・。

困ったものです。

ま、何がどうあれとりあえずこれからどうなるのかが楽しみだ。

そう言えば、ヴィヴィオ元気してるかな？

1年以上会ってないから気になるな。

母さん達とはよく仕事場で会うけど。

でもその内戻るかもしれないからな。

と言うことで

「魔法少女リリカルなのは Vivid 鮮烈で桜色の物語」
始まります。

プロローグ（後書き）

どうも楚^{ソウ}良です。

今日から「桜の花が咲くころに」の続編を描かせていただきたいと思います。

オリキャラは後にキャラ紹介とかで紹介したいと思います。

これから応援よろしくお願いします。

感想お待ちしております。

キャラ紹介

名前..高町 桜ハル

年齢..16歳

性別..男

身長..だいたい170ちょい

体重..60ぐらい

容姿..子供のころよりも少し大人っぽくなって、髪が伸びている。
アルとの契約が切れているため黒髪である。

性格..だれにでも優しい。

ヴィヴィオ達やちびっこに対してはもっと優しい。
戦闘時は誰が相手だろうと常に全力の本気で挑む。
シヤナには意外に甘い方(?)

資格..教導資格、バイク免許、スター式特許権、調理師免許、他

デバイス..ウィムダトゼロWHZERO
ストライクートツヴァイ
STH?

後に→の2機を改造、合体させる気である。

ゼロ
ZERO (改造後)

備考..宝石の埋め込まれたプレートに
翼のエンブレムが描かれている。

WとS Tの2体分の容量があるためモードが豊富。

ソード、ツインソード、サイズ、ヴァリス、

ハイパーヴァリス、バスターライフル、

ツインバスターライフルのモードがある。

エクシード、フルドライブももちろんのこと

翼もしっかりついている。

基本形態はヴァリスから。

ツインソードは連結させて長剣にも可能。

2体のメモリーを共有しているため性格などはそのまんま。

容量ギリギリまで入っているため

メンテがととても大変(桜談)

死霊秘方Ⅱアル・アジフ

備考…最初の方に唯一壊されていない

ロイガーとツアールの召喚のための

ページが乗ってあるが今は召喚出来ない。

術式…スター式ミッド混合(正式に特許を取っている)

魔力光…白銀

眼の色…エメラルドグリーン

髪の毛…黒

趣味、特技…料理(腕が上がっている)、

機械いじり(その気になればデバイスも作製可能なほど)、

読書、ストライクアーツ、ストライクアーツスター式、

双剣術(高町流士郎さん直伝、桜流)、他

好きな人..フェイト（恋人）、ノーヴェ（結構仲がいい）

なのは（母親だから）、ユーノ（父親に見える）

スバル（一緒にいると飽きない）

ヴィヴィオ&シャナ（妹だから）

エリオ（親友）、アギト（大親友）、他

備考..機動六課解散後に教導隊へ移動となった。

教導隊での教え方は好評で、

自分が年下でもしつかり言うことを聞いてくれる。

13歳のころに変身魔法および年齢偽装をして

DSAインターミドルに参加。

その際に優勝をしているが誰にも言っていない。

六課解散直後にスター式の特許を取り

誰にも使えないようにした。

使っているのは自分が認めた者だけ。

14歳のころから士郎に「小太刀二刀御神流」

を習い始める。

15歳の時になのは達とは別居。

違う教導隊で教えることになる。

16歳になった翌日にはバイク免許を取りに行く。

約1ヶ月程で免許を貰った。

3月ごろにあった火災事件で

スバルの協力をしてる際にシャナをみつける。

シャナには最初のころは警戒されていたものの

今では物凄く仲良くなっている。

最近ではシャナに魔法とストライクアーツを教えている。

その内学校にも行かせようと思っている。

名前.. 本名シャナ・トール・ヘイズ
後に正式に高町シャナとなる

年齢.. 10歳

性別.. 女の子

身長.. ヴィヴィオより小さい

体重.. 教えたら殴られます b y 駄作者

容姿.. 「灼眼のシャナ」のシャナと同じ。
ただし炎髪灼眼ではなく黒髪。

性格.. ツンデレではなくお兄ちゃんっ子。
いつでもどんな時でも桜にベタ甘。
世界がどうなろうと桜さえいればいい
と思うぐらいのブラコン。

デバイス.. FHフレネムト (桜自作)

備考.. 桜がシャナのために作ったデバイス。
そこら辺のデバイスとは違い機能は十分。

待機状態は「灼眼のシャナ」のコキユートス。
学校に通い始めてから貰ったもの。

フォームは剣術用のソードフォーム。

ストライクアーツようにナックルフォーム。

ナックルはほとんど補助がメイン。

本人が桜の翼を見てから作ったことから
背中に赤い翼が付いている。

術式…近代ベルカ式、炎熱変化持ち

魔力光…紅

眼の色…桜と同じ

髪の毛…→に同じ

趣味、特技…運動、魔法の練習、剣術（シグナムも高評価）、

ストライクアーツ（桜&スバル直伝）、他いろいろ

好きなこと…桜、桜の料理、と言うか桜に関わること全部（笑）

最近は桜のベッドで一緒に寝ること。

一番好きなのは桜が作るメロンパン。

備考…3月ごろにあった火災事件で家族を亡くしてしまう。

その際にその場でずっと泣いていた所を桜に助けられる。

最初は警戒していたが毎日会いに来てくれる

桜にちよつとずつだが心を開いていく。

最終的には桜が大好きになってしまい

一緒に暮らすようになった。

毎日起きたらまずはランニング。

その後桜と一緒に魔法の練習とストライクアーツ、剣術。たまにスバルも来て一緒にやることもある。剣術はシグナムと桜に教えてもらっている。シグナムには高評価を貰っている。頭の良さはコロナと同じくらい。桜に教えてもらうことがよくあり、そのおかげで頭が良くなっているとも言える。一度桜が試しに作ったカリカリもふもふのメロンパンを食べて病みつきになった。一緒に寝るときに断られそうになると涙眼＋上目使い（無意識）で攻撃してくる。風呂にはたまに潜入する。

キャラ紹介2

名前…アウル・オーシャン

年齢…10歳

性別…少年

身長…ヴィヴィオ達と同じくらい

体重…40ぐらい

容姿…短髪

性格…基本無口（桜以外）
ちよつと頭脳派。

デバイス…SP スナイプ

術式…ミッド式

魔力光…水色

眼の色…青

髪の色…水色

備考…無口だけど頼れるセンターガード。

狙った獲物は百発百中で当ててきたスナイパー。

実力はヴァイス以上。

1年前事故で親を亡くす。

それ以来無口になり人間関係を亡くしている。

昔は元気に喋っていたが今は違う。

精密射撃が得意で、兆弾をよく利用する。

桜を兄として、家族として慕っている。

頭のよさは中の上ぐらい。

名前…リーフ・ブレイド

年齢…15歳

性別…男

身長…168

体重…50ぐらい

容姿…エリオのツンツンをさらに広くした感じ。

性格…頑張りや。ワンパターン

デバイス…オーガO

術式…近代ベルカ式

魔力光…黄色

眼の色…オレンジ

髪の色…紫

備考…剣術のできるみならいフロントアタッカー。

同じ教導隊にいるサジの友達。

剣術の実力は悲しい事にシャナ以下。

まだまだ半人前だが伸びしろのある新人。

元気が取り柄？のムードメーカー。

名前…リナ・ストライク

年齢…15歳

性別…女

身長…160ぐらい

体重…不明

容姿…ちよつと長いツインテール

性格…素直で優しい。

ちよつと心配性。

デバイス…SGシムルゲ

術式…近代ベルカ式ミット混合ハイブリット

変換資質…炎

魔力光…碧

眼の色…赤

髪の色…白髪

備考…優しく仲間を常に心配するガードウイング（仮）。

夢は執務官になる事と姉を追い越すこと。

マリナの実の妹。

ストライクアーツを学んでおり

桜によく組み手の相手をしてもらうことがある。

先天魔法をスバルとノーヴェに教わり

1日で習得したやればできる子。

桜に憧れていて、同時に好意を寄せている。

恋人のフェイトとはライバル関係（笑）

頭の良さはティアナ並。

名前…雅瑠璃^{みやびるり}

年齢…12歳

性別…少女

身長…キャラと同じくらい

体重…不明

容姿…長髪で後ろで束ねている

性格…基本優しい。ドジな時がある

デバイス…TS テュルソス

術式…ミッド式

魔力光…琥珀色

眼の色…琥珀色

髪の色…黄色

備考…父親が地球出身の優しいフルバック。

レアスキルこそないがキャラ以上の実力を内に秘めている。

訓練次第ではガチンコで

六課メンバーの誰かに勝てるかも！？

エリオに一目惚れしてキャラとライバル関係。

キャラと気が合う時とそうでない時が激しい。

ルーテシアとは（後々）知り合って

間もないものの結構中が良い。

召喚魔法、圧縮魔法は桜に直伝だ。

キャラ紹介3

名前…八神（高町）桜（チビ桜）

年齢…不明。外見6〜7歳（実年齢16歳）

性別…少年（男の娘？）

身長…シャナより小さい。と言うかマジでチビです

体重…めっちゃくちゃ軽い・・・かも？

術式…エンシエント真正古代ベルカスター

変換資質…氷結（水、風、氷）

備考…もう一人の桜で、もう一人の主人公。

八神家の末っ子の立ち位置にすっかり収まってしまった男の娘。

容姿は昔の桜とほとんど変わらないが片目が蒼色に変わったオッドアイになり、少し顔つきが女の子っぽくなっている。

性格は昔のものとガラリと変わりめっちゃくちゃ甘えん坊且つ正直。

思った事はほとんど口に出してしまいが本人に悪気はない。

はやてが母親として大好きで、ミウラが友達としてなのかどうかはわからないが好きらしい。

術式は八神家全員の映像を見て完璧にコピー、超近接特化兼奇襲型と言う戦闘スタイルになった。ちなみにはやての魔法は劣化版だが全て完璧にコピーしてある。

インターミドルに参加するためのデバイスがUCじゃイヤだと言うがはたして・・・。

名前…マリナ・ストライク

年齢…20歳

性別…女

身長…169?

体重…秘密だそうです

備考…ヒロインの1人。

教導隊での桜となのはの上司で階級は三佐。

容姿は銀髪のショートカットで目の色がリナと同じ赤。

桜が自分の教導隊に来てからの数年間、優しく強い彼が次第に好きになり告白。その際に桜に襲われかけるがリナの乱入により中断。

それ以降は事あるごとに桜を誘惑している。

シグナムとは本局勤めの時に知り合った。意外に仲が良いが桜のこととなるとどうなるのかは不明。一応八神家のみんなとフェイトとも知り合っている。

番外編 ステージX 01 (前書き)

サウンドステージXを番外編として書き始めます！

vividの4巻を買うまでは番外編を更新することが多くなると
思います。

その度に更新報告で番外編を更新したと書くのでよろしく願います。

番外編 ステージX 01

新暦78年。

ミッドチルダで少しの間騒ぎになっていた事件。

通称『マリアージュ事件』

この事件を解決に導いたのはティアナ・ランスター執務官。

それに協力した元機動六課FWメンバー、現在は災害救助活動をしているスバル・ナカジマ防災士長、自然保護隊でコンビを組み密漁者などを捕まえている竜騎士エリオ・モンディアルと竜召喚師キャロル・ルシエ。そして、かつて『翼の英雄』と呼ばれていた高町桜一等空尉教導官。

他元ナンバーズ数名、108陸士部隊のギンガ・ナカジマ陸曹。

このたくさんの協力者により、マリアージュ事件は無事解決、容疑者のルネッサ・マグナスも逮捕出来た。

今から話すのはこの事件の概要。

イクスベリアと桜の逢いの物語・・・。

side out

「はい、もしもし」

その連絡は突然だった。

まあ、スバルさんだからしょうがないだろう。

どうせほぼ毎日家に来ているんだから直接言えばいいのに、なんて

思ってしまう。そう言えばティアさんが来たらしい。だから最近来なかったのかと納得し、直接言えないのがわかった。

『それで、それで、桜も休みとれる?』

「あゝ、どうですかねゝ。まあ、たぶん取れますよ」

『ホント!? それじゃあ――』

「ん? あ!」

『どしたの?』

「いや、もう時間が! あ、あとでかけ直すんで! すいません!」

急いで電話を切り、テラスから出る。

休憩時間を名残惜しくも感じながら今日だけ来ることが出来た上司の元へ向かう。

意外と時間に厳しいから遅れたりしたら溜まったもんじゃない。他のヤツには時間とかとやかく言わないのに何で俺だけなんだと思いつながら脚はそっちの方へ向いていた。

「あゝ、今日は遅れなかったねゝ」

「毎回時間の事とやかく言われればな。マリナ・ストライク三佐」

「もう、フルネームと階級付けて呼ぶのやめてって言ってるでしょ。ちゃんと名前で呼んで」

「はいはい、マリナさんよ」

「ふふっ」

「はぁ・・・」

「ため息つくと幸せ逃げるよ？」

「誰のせいだよ」

「私？」

「自覚してんのかよ・・・」

うかつだった、わざとこんなことやっているなんて。

これからは気をつけなければ・・・とか言うけど結局は忘れるパターンだなこれ。

って、また電話だよ。誰からだ？というか今日は多いな。母さんにフェイトさん、ヴィヴィオ、そしてスバルさん。今日はなんかあんのか？

「悪い、また電話だ」

「えゝ、またゝ」

「六課時代の同僚だよ。あ、もしもし」

『もしもし、桜？』

「あ、ティアさん！」

電話の相手はまさかのティアさんだった。

珍しいんじゃないかな？ティアさんから電話をかけてくるなんて。

「久しぶりですね。こっち来てるんですね？スバルさんから聞いてますよ」

『ええ、今はある事件を追ってこっちに来てるんだけど、ちょっと手伝ってもらえないかしら？』

「え？事件？」

『連続殺人事件って言えばわかるかしら？』

「・・・今から、時間空けられますか？」

『そう言うと思って無理言って午後はオフにしておいたわ』

「ナイスです。じゃ、今から待ち合わせで」

『了解。場所はこっちが指定するから、またあとでかけ直すわ』

「はい、では。ということではちょっと行ってくる」

「桜君はどうしていつもそうなのかな？」

「こういう性格だから」

「・・・鈍感」

「なんか言ったか？」

「なぐんにも」

「そうか。じゃ、後頼む」

そう言い残してその場から走って立ち去る。

別にマリナと一緒にイヤだからじゃないぞ？資料集めとかできる限りは自分でしておかないといけないから早めに行くんだ。

とりあえず、自分のデスクに向かう。

荷物整理をしてからコンソロールを叩く。

えっと、連続殺人事件つと・・・。

「キーワードが断片的だな。そこら辺はティアさんの情報に任せるか」

そう言いながら荷物を持ち、教導隊（母さん達とは別）を後にする。まさか、この事件がとんでもないことになるとはこの時思いもよらなかった。

番外編 ステージX 01 (後書き)

次回はどうぞしような。

スバルさんやエリオ達を出そうかとは思っていますがどう出そうかなーとか思ってますから。

誤字脱字、感想あればお願いします。

番外編 ステージX 02

「お久しぶりです、ティアさん」

「久しぶり。懐かしいとかいろいろあると思うけど、今はこっち。一応機密事項だから漏らしちゃダメよ？」

そう言いながらクロスミラージュを見せるティアさん。

俺が今回呼ばれたのは事件捜査の協力。出来る限り協力はしたいけど、情報が無ければ協力も何もない。

とりあえず、今わかっている事だけでも情報は頭に入れておくべきだ。

「・・・やっぱり、キーワードが断片的すぎる。『古代ベルカ文字』と『マリアージュ』がまともに関連しているのは確かなんですけど・・・」

「さすがにこれだけじゃやっぱり無理か・・・」

「この古代ベルカ文字はオットーかデイドに頼んだ方がいいッスね。ちよつと連絡してみませあ」

決まったらまず行動だ。

早速携帯を取り出し聖王教会に電話してみる。

さて、時間が開いているかな？

「あ、もしもし。こちら高町桜です。カリムさんですか？」

『ええ、久しぶりね桜』

「えっと、オットーかディードいますか？替ってもらえたら嬉しいんですけど」

『ちょっと待ってね』

少しの間、電話から声が聞こえなくなる。
しばらくすると中性的な声が聞こえてきた。

『もしもし』

「あ、オットー久しぶり」

『桜か。久しぶり。どうしたんだい？』

「ティアさんからの頼みで捜査資料の調査依頼だ。今から送るから頼んでもいいか？」

『うん、いいよ』

「サンキュ。じゃあ、切ったら送る」

『わかった』

そう言い残し、電話を切る。
そしてコンソロールを叩きデータを送った。
こっちはこれで良いだろう。
でも、他はどう対処したらいいもんか。

「W、STこれコピーしといてくれ」

『All right』

『Yes sir』

「そう言えばティアさんは夜どうしてるんですか？」

「え？」

「寝泊まりどうしてんですか？」

「スバルの家よ。でもどうして？」

「いや、気になっただけです。もしホテルなら家にでも泊って行けばいいのになって」

「ごめんね。あ、でも良いかもね。桜の料理、久しぶりに食べたいし」

「なら、スバルさんも呼びます？ 今日は無理でも明日とか」

「いいわね。じゃあ今日は桜の家にお邪魔しようかしら」

「大歓迎です」

side out

翌日。

昨日は結局俺への情報提供しか出来なかった。

情報から得られる新たな情報はなく、ヒントすら見当たらなかった。

しょうがないと言えましょうがない。

キーワードがほとんど断片的、絡合うものもほとんどなし。

マリアージュと古代ベルカ文字。

関係は深いが、それ関連の知識をあんまり持っていない俺にはこれを解決に近付けるのは無理がありそうだ。

「ティアさん、おはようございます。よく眠れましたか？」

「おはよう、よく眠れたわ」

話を変えよう。

今日はスバルさん達に誘われて遊びに出かける。

ティアさんは残念ながら仕事で参加できずだ。

エリオとキャロ、アルトさんも誘ったらしい。

みんなと会うのはすごく久しぶりだ。

そう言えばこのメンバーってティアさんがいないだけで元機動六課の休憩室メンバーじゃないか。

「あ・・・／＼ご、ごめんなさい！」

「え？」

俺の家は部屋っちゃ部屋だが、3部屋分つながっている。

昨日は2人だけだったから俺がリビングのソファ、ティアさんが俺の寝室で寝ていた。

一応起こしに来たんだが、それが失敗だったようだ。

ティアさんはベッドの上で寝ている姿のままだったから、俺はその姿を見てしまったんだ。

急いで部屋から出てドアの隣に背を預ける。

「え、えっと、ちょ、朝食の用意が出来たんで・・・／＼」

「ありがとう、着替えたら頂くわ。それと、どのくらい見た？」

「え？そ、その・・・ぜ、全体・・・」

「そお。フェイトさんにチクったら死ぬわね」

「い、言わないでくださいさいよ？」

「朝食が美味しかったら言わないわ」

「ありがとうございます」

「あら、自分の料理が美味しいって自覚してるの？ナルシスト発言ね」

「な!？」

何たる口のうまさだ。

やっぱり俺はティアさんに口で勝つことは出来ないんだな。六課時
でいでも今でも変わらない、この関係はどうやっても覆せないだろ
う。

そんなことを考えていると部屋からティアさんが出てきた。

黒い制服に身を包み、俺の横で止まる。

「今日の朝食はなんなの？」

「え、えっと、洋食です。サラダとソーセージとか、トーストは今からですけど焼きます」

「なら、お願いするわ」

「はい」

今日の朝はそれなりに（眼福的な意味で）良い朝だった。

番外編 ステージX 02 (後書き)

今回はFWメンバーとアルトが登場。

遊び先で大火災が起き、救助活動をします。

誤字脱字、感想あればお願いします。

番外編 『七夕』 みんなで願いを（前書き）

※時間軸は関係ありません。

チビ桜はまだ存在していません。

アルも復活してない設定です。

シャナはいます。

番外編 『七夕』 みんなで願いを

「・・・ふあゝ」

早朝5時起き。

あくびをしているがしつかり目を覚まさなければ。

「・・・誰も起きてないよな。桜もまだ寝てるし」

1階の様子を見てみると母さんはおろかフェイトさんも起きてはいなかった。休みだから咎めるつもりはないが、いつもなら起きている時間帯だと思う。

自分の中に居るもう一人の自分、桜もまだ眠っている。
朝食を作る前に体を少し動かしておこう。

「散歩のついでに食材買っておくか。冷蔵庫の中身が少ないしな」
そんなことを呟きながら家を後にした。

side out

散歩は特に何もしない。

面白いものも見つからず本当に何もない散歩となったが、外の空気は以外にも心地よかった。若干冷たさが混じっていたが、眠気を覚まさせてくれたから何よりだ。

散歩コースをちょっと外れ、朝でもやっているスーパーへ。
こっちも何か特別な事はやっておらず、いつも通りのスーパーだった。

買い物を終えて数分後。

無事帰宅し、耳を澄ます。

「あれ！？桜がない！」

「お兄ちゃんが消えた！」

朝5時起きで本当に助かった。

というか起きたんだったらちゃんと降りてきて下さいよ。

はあ、とため息をつきながらも台所へ向かった。

「あ、おはよ」

「おはよ、母さん」

さすがは母さん。

休日でも早起きは欠かせないわけですね。

俺もそんなに母さんのこと言えないけど。

「何処行ってたの？」

「散歩のついでに買いだし。冷蔵庫の中身が少なくなってきたから」

「そっか。ありがとね」

「気にしないでいいよ。眠気覚ましにはなったから」

そう言いながら買ってきたものを冷蔵庫へ入れていく。
冷蔵庫の中身を見ながら朝食を何にするかも考えていく。

「そう言えば今日って七夕だったね」

「ん？ ああ、そっか。なら笹買わなきゃな。頼んでもいい？ 俺は今日、非番じゃないからさ」

「あれ？ 休み取ってないの？」

「ごめん。取るの忘れててさ」

「そっか。わかった。探してみる」

朝食を作りながらそんな話をしていた。
まあ、たぶん探せばあると思う。なかったらどうしようかと思うけど。

「うん、美味しい」

今日も朝食は美味しくできていた。

side out

時間は経って夜。

桜が家に帰ってくると――

「どしたの」

「「「筐が無かった・・・」」」

「ほう・・・」

4人とも落ち込んでいた。

先ほどの言葉通り、筐が見つからなかったようだ。

管理外世界の品を扱う店を訪ねてはみたが意外や意外、見つからなかった。扱っている場所もあったが、数が少ないうえに売り切れていたそうだ。

「せっかく着替えたのに・・・」

「しょうがないよ。また来年、ね？」

ちなみに4人とも浴衣姿。

気分だけでも、と行きたかったのだがこの様子では逆効果なようだ。テーブルの上には短冊も置いてある。

よほど期待していたのが見えるが、どうしたものか。

「はぁ・・・予想的中」

「「「え？」」」

「こうなるだろうと予測して、筐は帰りに買ってきたよ」

ぐいっと奥の方から筐を引っ張ってくる。

ガサガサと音を立てながらも、少し小さな筐はみんなの眼には輝い

て見えた。

「これで七夕できるだろう？」

「さっすがお兄ちゃん！」

「やっぱり桜は頼りになるね！」

とりあえず、庭の方へ出て笹をザクリと地面に突き刺す。
よし、あとは夕食の準備とかだけだな。

「母さん、手伝って。ちょっちゃんと夕食作っちゃおう」

「うん♪」

side out

「ねえ、桜はなんて書いたの？」

「お、俺ですか？そ、それはちよつと・・・」

「そうだよフェイトママ。こういうのは見せちゃダメなんだよ」

「あ、そう言うことで。すいません」

「そっか。見せて願い事が叶わなかったらイヤだもんね」

—みんなとずっと一緒に居られますように—
ヴィヴィオ

—お兄ちゃんとずっと一緒に居られますように—
シャナ

—この平和がずっと続きますように—
フェイト

—桜やみんなが無理しませんように—
なのは

—いつか、相棒^{アル}が帰ってきますように—
桜

短冊につづった願いが叶うのかは神のみぞ知る・・・。

コラボ 前篇 四神伝奇（前書き）

今回はエドワード・ニューゲート様書いている『四神伝奇』とのコラボ前篇！

『四神伝奇』は結構面白いので時間がある方は読んでみるといいと思います！

ちなみにこのコラボ内では桜はハーレムではありません。

※本編第34話以降のネタばれが含まれます。

それでも良い方はお進みください。

コラボ 前篇 四神伝奇

『高町家の皆様へ』

今週末、旧機動六課隊舎でパーティーを行います。
皆様の参加をお待ちしております。

機動六課元部隊長、八神はやてより』

「————だつてよ」

一週間の始まり。

月曜日（珍しく俺と母さんは非番の日）に届いた手紙。

だがパーティーをするのはいいいだが、何か祝うことがあっただろうか。

うゝん・・・。

「今週末って、確か機動六課が始動した日じゃなかったっけ？」

「ああ、そっか。今年で4周年か」

どうせまた俺が料理を作るんだろう。

まあ、別にイヤでもないし。拒否はしないだろう。

それに今年はいろいろと親しい人が増えたしな。

ちようどいいし、教導隊メンバーもつれていくか。

「そう言えば、これって任務中のフェイトさんにも行ってるのかな？」

「今週末に帰ってくるって言ってたから、たぶん行ってるんじゃない

い？」

「教導隊メンバーを連れて行ってもいいと思う？」

「いいんじゃない。みんなで楽しくだよ」

「じゃ、今のうち新メニューでも考えとかないとね」

（パーティー、パーティー！！）

頭の中で声が響く。

小さい頃の自分、すごく小さく純粹無垢なもう一人の俺だ。

（桜も楽しみか）

（うん！）

side out

何だかんだで週末。

結局新メニューは出来なかったが、以外と有意義な一週間であった。

ちなみに今日のメンバーは六課メンバーに加えて、俺の教導隊メンバーとチビ達。みんなで楽しくの精神のもと俺が誘いまくった。

「桜」

「フェイトさん、ティアさん・・・と君達は・・・」

フェイトさんに声をかけられ、振り向いた。
ティアさんもいたのだが、その後ろにさらに2人。

1人は男で、茶髪の散切り。

もう1人は女で、黒髪を腰のあたりまで伸ばしたポニーテール。

六課メンバーでない事は確かだ。

なら、ティアさんの知り合いかな？

「この子たちは私達が任務先で知り合った」

「囑託魔導師の東郷龍清^{とうこうりゆうせい}18歳で、この子はユニゾンデバイスの春青です」

「クキュ〜」

「同じく囑託魔導師の秋西麗^{あきにし}（チョウ・シーリー）18歳、この子もユニゾンデバイスで白秋って言います」

「ニャ〜」

「初めまして。時空管理局航空武装隊所属、戦技教導官の高町桜一等空尉だ。年齢は16だからそんなかたくならずに、お互い気軽に
行こう」

そう言いながら右手を出す。

龍青が先に手を伸ばして来たのだが――

「クキュ〜」

「ニャ」

春青と白秋が俺に飛びついてくる。

春青は俺の頭の上に、白秋は危なかったから抱きかかえた。

「おわっ！？っと、どうした？そこが気に入ったか？」

「キュク！」

「ニャー！」

「俺は動物に好かれやすいな」

「まさか白秋が私意外に懐くなんて」

「春青は人懐っこいから、すいません」

「んにゃ、気にしないでいい。俺は召喚獣持っている時もあったからそれで慣れてる」

「そ、そうなんですか」

「あれ？そう言えば”高町”って・・・」

「桜はなのはの息子さんだよ。養子だけどね。それに私の恋・・・人・・・」

顔を赤らめながら言ったフェイトさん。

そうなるなら言わなきゃいいのにと思いながらも、2人に向き直る。

「な、なのはさんの息子!？」

「それにフェイトさんの恋人って!」

「あははは、おはずかしながらその通り。フェイトさんとは六課時代からかな。て言うか母さんを知ってるの？」

「知ってると言うか、少し前に知り合ったんです」

なるほど、母さんがこの前いなかったのはその時か。たぶんものすご勢いでしごかれたんだろうな。いろんな意味でかわいそうに。

「そうか、ん？お、やべ。俺はそろそろ行かなきゃな」

「また作るの？」

「うん、リアクエストあれば作るけど、ある？」

「私はないけどティアナは？」

「私もあります。2人はわかりませんが」

「ぼ、僕たちは、その」

「遠慮すんなって。めちゃくちゃ美味しいの作るから言ってみって」

「な、なら、和風なものを」

「私は中華で」

「OK。期待してるよ。あ、あぶね。この2匹は返さないと。またあとでな」

「キュク」

「ニャ」

そう言いながら先の白秋を渡し、次に春青を渡す。
シヤンタク達と気が合ってくればうれしいんだがな。

side out

『では、みなさん。今夜は食べて飲んで騒いで楽しみましょう！乾杯！』

『乾杯！！』

主催者であるはやてさんの声でパーティーは始まった。
ちなみに、今回も”全て”俺が作った。
みんなが美味しいと言いながら食べてくれるのを見ていて、ものすごくうれしかった。

そして開始直後、真横を向いてみると。

「「がつがつ」」

「「もぐもぐ」」

「やっぱりかぁ・・・」

スバルさん、ギンガさん、エリオにアルフさん。

この大食いメンバーが一つのテーブルを占領していた。

「相変わらずすごい勢いですね」

「あ、桜。いつにも増して美味しいよ!!」

「さすが桜君ね。もう病みつきになっちゃうわ」

「腹だけは壊さないでくださいね。壊れないと思いますけど」

『はい』

このメンバーはいつも通りだな。

ただ今日はバリエーションが多いから果たして全て食べられるかな？食べられると思うけど。

「はやてちゃん、絶対に桜にお酒を飲ませようとしちゃダメだからね！」

「わかつとるって、なのはちゃん。もうあの大惨事はイヤやからな」

（お母さんだ!）

「何物騒な話してんの」

「あ、桜」

「いや、桜にお酒を飲まして大変なことになったからなく。同じ過ちは繰り返さないようにせんと」

「もし飲ませたらまっさきにはやてさん狙いますね♪」

「怖！で、でもちっちゃい桜がゆるさへんと・・・」

「桜を抑えつけてでも狙います」

「ごめんなさい・・・」

即座に謝ったよこの人。絶対プライドないって。

しかし、この人に狸キャラが定着してきたように感じるのは俺だけか・・・？

とりあえず、2人との話はちょうどいいところで切り上げる。

他の所にも顔を出した方がいいと思うしな。

「おっす、楽しくやってるかー？」

「あ、お兄ちゃん」

今度はチビ達。

アインハルトもいるし、ノーヴェさんがちゃんと誘ってくれたのがわかる。

リオもコロナも楽しそうにしているし、改めてヴィヴィオに誘わせた事を言い判断だったと思う。

「すごくおいしいです。これ全部桜さんが作ったんですよね？」

「ああ、今日は和風と中華メインだ。美味しいって言うてくれて何よりだよ」

「そんなことないです！本当に美味しいですから！」

子供は素直でいいね。

感想はほとんど同じだけど、素直さで嬉しさが倍増するよ。

さて、今度はあそこへ行こうか。

そう、動物チーム。

「よっす」

「あ、桜君」

「動物多いな。まあ、瑠璃が一番多いんだけどな」

「そ、そりゃあみんな桜さんが呼び出したんですから。アルもいい子ですし」

え、動物が多いです。

鳴き声が多いです。

そうそう、俺の召喚獣達は現在瑠璃の召喚獣になっている。

瑠璃は竜召喚とかレアスキルを持っていないからちよいどいいと思っただし、何より一番ハスターが瑠璃に懐いていたから、いっそのことアルも含めて瑠璃が主になればいいとなった。

「龍清と西麗も、楽しんでるか？」

「はい、美味しいし、楽しいです」

「この子たちも友達増えて嬉しいみたいですし」

「料理はまだまだあるから、じゃんじゃん食べてくれよ」

「「はい！」」

そう言い残してその場を後に。

さて、今のところ顔を出してないのはどこだっけ？

（あ！）

（どした）

（ミウラを誘ってない！！）

（・・・ごめん）

（今すぐ誘う！！）

（え！？イヤ、ダメだろ！）

（それでも誘う！！お兄ちゃん誘って！！）

（ああ、もう、わかったから。ちょっと待ってろ）

携帯を取り出し、電話を試みる。

出てくれるか。いや、その前に出てくれたとしても来てくれるか。

『もしもし』

「もしもし、ミウラ」

『ハ、ハハハ、桜さん！？ど、どうして急に！』

「いや、桜がミウラも誘うって聞かなくてな。今、みんなでパーティーやってんだ。来ないか？」

『い、行きます！行かせて下さい！』

「そうか。なら、今から迎えに行くから、待っててくれ」

『は、はい！』

携帯をしまい、はやてさん達にミウラを迎えに行くと言って外に出た。バイクで来たのは正解だな。速度をギリギリまで守って全力疾走したのは言うまでもなかった。

side out

ミウラを迎えに行った後、全員でゲーム大会となった。ビンゴ、クイズ、その他いろいろ。

結構盛り上がったからこれはいい思い出になるだろう。

「で、これは何のくじですか？」

「もちろん部屋割りや。誰とペアになっても恨みっこなしやで」

「はぁ・・・では、これで。お？4番」

「あ、私4番です」

手を上げたのは西麗だった。

という事は俺のペアは西麗という事か。

それにしてもなんだろう。

後ろの方から殺気が飛んでくるのは。

気にしたり振り向いたりしたらダメなんだろうきつと。

「じゃ、俺は先に寝るから後頼んだ」

「わかりました」

以外に疲れたので先に寝ることに。

翌日、ものすごい事になり、大変な目にあうとも知らず・・・。

コラボ 前篇 四神伝奇（後書き）

はい、前篇なので後篇まで続きます。

ちなみにこのコラボの回では第34話以降に考えられている設定を使っています。

簡易的に書くと次のようになります。

- ・桜とチビ桜は心の中で話せる。
- ・桜とチビ桜の人格はお互いの同意で交換できる。
- ・召喚獣とアルの主は瑠璃に変わった。
- ・銃型デバイスは既に完成していてチビ桜が所持している。
- ・ミウラとの仲がさらに良くなり、桜とも仲が良い。

ぐらいですかね。

まあ、今のところですから変更があるかも。

次回は、本当に大変なことになります。

誤字脱字、感想あればお願いします。

コラボ 後篇 半動物化3人の悲劇（前書き）

今回は『四神伝奇』とのコラボの後篇です！

コラボ 後篇 半動物化3人の悲劇

翌朝。

いつも通り、少し早起きをした桜だったが。

「ん？何だ？頭の方とお尻のあたりに違和感が・・・」

ベッドから起き上がり、部屋に備え付けられていた鏡をしてみる。
そこに移っていた自分の姿は――

「なんじゃこりやああ！！！！？？」

体がまた小さくなっていた。

いや、それだけならまだ良いだろう。薬の効果が切れただけなのだったらまだよかった。だが副作用なのか何なのか知らないが、頭には犬の耳らしきもの、お尻のあたりには尻尾のようなものがあった。

とりあえず触ってみよう。

おお、モフモフするな。

「く、薬！え、嘘だろ・・・ない！？」

「ん・・・桜さん、おはようございます」

「ああ、ごめん、起こしちゃったか――――ってお前、それどうした！」

「へ？」

起きた西麗の方へ向いた桜。

だがそこへ移ったのは、猫ミミと尻尾を付けた西麗があった。

一方西麗は桜の姿に驚いている。

なんで小さくなっているの!?!と聞いたそうだが、それよりも可愛
いから抱きしめたい!なんて顔になっていた。

「と、とりあえず、お前も鏡見ろって!」

「は、はい」

小さくなった桜に手を引かれ鏡の前へ。

そして自分の姿を見てみると――――

「にゃああああ!?!?!?!?!」

当然の反応であった。

だが、この声が意外に大きかった。

当然隊舎じゅうにその叫びは響き渡りやがては人を呼んでしまった。

「何かあったの!?!」

「まさか桜に襲われたんか!?!」

「ええ!?!桜!う、浮気は私は許さないよ!?!」

言葉を言い終わった後、スペアキーを使い鍵を開ける。

そしてバンッ!と勢いよく扉を開けたはやて達だったが、誰もい
ない。声や物音すら聞こえない。気になり奥へ進むが、やはり誰も
いない。

気のせいだったのか、はたまた夢であったのか。
わからないまま部屋を出ようとした時だった。

『ニャ〜』

「「!？」」

「やばい見つかった!逃げるぞ!!」

「は、はい!白秋、行くよ!!」

「ニャー!!」

ガタンッ!とクローゼットが開けられ、その中から2人と一匹が出てきた。

不意打ちであったためか、捕まえることが出来ずそのまま逃がしてしまったが、はやてはしっかり見ていた。

小さくなった桜の頭の犬耳と尻尾、その後について行く西麗の頭に付いた虎柄の猫ミミと尻尾を見逃さなかった。

直感的に、面白い事になる、そう判断したはやてはすぐさま行動に出る。

「よし、追うで!他のみんなにも連絡や!」

「わ、わかった」

「もしかしたら本当に桜が浮気しとるかもな」

「!？」

はやてがフェイトに耳打ちをした時だった。
違う部屋から叫び声が聞こえる。

『なんだこれえええ!!!?』

最速でその部屋に駆け付けたのは言うまでもなかった。

side out

「あ! いました!」

「うおお、見つかったあ!? ——へぶっ!」

六課前線メンバー＋αに追われている最中。

途中で合流した龍清を合わせた3人と2匹で逃げている時だった。

ちなみに龍清には頭にちっちゃな角、背中にはこれまたちっちゃな羽、そして龍の尻尾がついていた。

まさか自分と縁のある動物の姿になるのだろうか。

あ、でも俺のは鳥とか龍とかの方が多いのに何で犬なんだ? はっ、まさかアルフだとも言うのだろうか・・・。

話を元に戻そう。

一旦休憩を兼ねて情報を整理しようとしていたが、運悪く見つかってしまった。

そして走り出そうとした瞬間、盛大に転んだ。

「うう・・・痛い・・・」

「桜さん、大丈夫ですか!？」

「たぶん・・・」

「乗って下さい! その体じゃ走りにくいでしょ」

「え、でも・・・」

「捕まって酷い目逢っちゃいますよ!」

「西麗! 早く! きちやうよ!」

「うう・・・あとで謝るから頼む!」

「飛ばしますからしっかりつかまって下さいね!」

西麗に背負ってもらいながらも再び闘争開始。

今更だが西麗の脚の速さは結構すごい。これならリナといい勝負だ。今は龍清に合わせているが、最初に俺と走っている時なんて俺が追いつけなかったほどだ。なるほど、これほどなら実力はあるって事だな。

そんな無駄な事を考えながらも逃げる道を指示して行く。

途中途中で鉢合わせになるが、何とか逃げ切ったいた。

（お兄ちゃんおはよ〜）

（桜、起きたか。悪いがもう少し寝ててくれないか?）

（ん、何面白そうなことしてるの？）

（・・・もう少し寝ててくれないか？）

（あ、絶対面白いことしてるね）

（今度、体を好きに使わせてやるから少し寝ててくれ）

（あ！それならOK！！お休み～）

今の状況で桜が起きたら面倒なことになる。

とりあえず、分の悪い条件だが今を乗り切ることが大切だからよしとしよう。

「そこ、左」

「わかりました」

最終的には外に出た。

あとはあそこに行けば問題はないはずだ。

隊舎の機能が生きているんだ。あそこの機能も生きているだろう。

「降ろして」

「あ、はい」

「ほーほー、ふむふむ。お、こりゃ使える。よし、これでOKだとおも——「追いつめたで！！」——むう、感づかれたか」

「桜、鬼ごっこはおしまいだよ」

「う、浮気なんて認めないからね!!」

「浮気って何の話!？」

フェイトさん達が追いついてきてしまったようだ。

だが、こっちにはまだ逃げ場がある。

そうそれは訓練場だ。

「逃げるが勝ちさ!!」

「あ! 待て!!」

「ははは! 訓練場のシステムが生きてて助かったぜ!! イタクア、ユニコーン、セットアップ!!」

小さい姿では戦にくい。

なのでセットアップして変身魔法をかけて身長を少しばかり大きくする。

ヴィヴィオ達の魔法を見てコピーできたから桜に教えておいたことが功を奏したようだ。まあ、本人はいつもの体の方が好きらしいが。

「2人とも、あっちへ逃げるぞ!!」

「了解!」

既にセットアップ状態だった2人を連れて、訓練場の中へ逃げる。その後をみんながセットアップして追ってきた。

3対19と4匹って無理があると思うが、逃げまくって地道に削ればどうにかできるはずだ。3人チームでも大勢相手に勝てるって所見せてやる！！

side out

正直今俺は驚いている。

囑託魔導師と言っていたが、あれは本局の魔導師にも絶対引けを取らない。

あの2人は陰陽師というものらしく、俺と同じようにミッドとは違う術式を使っている。

龍清はオールラウンダーだが、どちらかというと援護向きだ。

そして西麗はスピードを生かしたアタッカー。

今現在は教導隊チームとチビ達を倒してしまっている。

シャンタク、ティンダロス、ハスターの3匹。リナとアウルとリーフ、そして瑠璃、彼女と融合していたアルのチームと、ヴィヴィオを筆頭とした元気な子供たちはいとも簡単に破れてしまった。

俺の教えが悪かったとかじゃなく、相手が悪かったんだ。

だが、そのせいで大いに消耗している。

そろそろ下がらせるのが得策だろうか。

「2人とも下がれ！準備は完了した！」

「了解です！」

「ナイスタイミングです！」

「呪文詠唱完了。灰白^{ほのしろ}き雪の王、銀の翼^も以て、眼下の大地を白銀に染めよ。来^こよ、氷結の息吹・・・アーテム・デス・アイセス!!」

『!?!』

はやてさんの魔法は全部コピーしてある。

無論、こう言った広域魔法は劣化版ではあるが、フィールド形成するには十分だ。

その上、俺には変換資質で氷が付いている。
調整は出来るが、ちよつと大変だ。

「さてと。ユニコーン、カートリッジロード！」

『Explosion』

「星流^{せいりゅう}、流れ星・・・!!」

拳を前に突き出した状態で、一気に加速して突っ込む。
外しても、切り返してまた突っ込む。
だがほとんど避けられてしまった。

「ありゃ? かすった程度?」

「桜、本当に浮気してないよね！」

「いや、だから何の話!? 浮気って何のこと!?!」

フェイトさんが言っている事は未だにわからない。
浮気というのはどういうことだろうか。さっぱりだ。

「ふう、ようやく捕まえたぞ」

「たく、手間かけさせやがって」

「・・・へ？」

後ろの方からシグナムさんとヴィータさんの声が聞こえる。
今の発言の意味はまさか・・・。
バツと後ろを振り向いたが予想した通りだった。

「桜さ〜ん！」

「ごめんなさ〜い！」

「捕まったのか!？」

龍清と西麗は捕まっていた。
マジでこの状況からどう脱出しろと？

そんなことを考えていると肩にポンツと手が置かれた。
あの、母さん？なんですか？

「もう逃げられないよ？」

「あははは・・・」

この後3人ともみんなにモフモフされましたさ。

side out

「また逃げた!!」

モフモフされているのが嫌になった俺はまた逃げだした。
だが、逃げようとした矢先、西麗に当たってしまいこれまた転んでしまった。

「大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫」

「そうそう、桜さんにこれ言い忘れてました」

「? 言い忘れてたこと？」

西麗がちよっと頬を赤らめている。

どうしたんだろうか。

だが、そんなことは次の瞬間考えられなくなる。

—————チュツ

頬になんだがされた事がある感触が。

え? まさかこれって——

「今日はいろいろかつこよかったですよ?」

「そ、そう・・・か？」

後ろからの殺気に気付けるほどになっていた俺もちょっと顔を赤らめていた。そしてその後、旧機動六課隊舎に叫び声に似た悲鳴が響き渡った。

———おわり。

コラボ 後篇 半動物化3人の悲劇（後書き）

結局オチはこうなるんか！

ごめんなさいエドワード・ニューゲート様。

こんなオチって言うか、西麗のキャラを壊してしまい、本当にすいません。

誤字脱字、感想あればお願いします。

番外編 クリスマス（前書き）

今回は番外編！

設定ぶち壊しで行きたいと思います！

- ・チビ桜はいない
- ・アルは二代目ではなく初代
- ・アミティエ達と会っている

まあ、大体はこんな感じですよ。
では、どうぞ！

番外編 クリスマス

「ということで、クリスマスは海鳴で過ごそうか」

「・・・はい？」

「やったー！」

「ウミナリ？」

クリスマスイヴ、前日。12月23日。

突然なのはに言われ、桜はどう反応すればいいかわからない。

聞けばはやて達と計画していたらしい。

知らないのは子供メンバーだけ。

連れていくのはいつものメンバーのようだ。

この中で唯一海鳴を知らないシャナは頭に「？」を浮かべている。
軽く桜が説明すると納得したか、楽しみだと言いたそうな顔をした。

「俺、休み取ってないんだけど」

「大丈夫。マリナさんに言っておいたから」

「よく了承したなあ・・・」

「とりあえず、明日の朝に出発だよ」

「「はい」」

「了解」

side out

そんなこんなで翌日。

次元航行船に乗り、約数時間。

なのはとはやての生まれ故郷、海鳴市にやってきた。

「うわ、雪結構積もってんな」

「そうだね。さすが冬って感じがする」

「というか、今回はいつにもまして人数多いなあ」

「ここの別荘じゃなかったらどうなったことか。本当に多すぎよ」

上から桜、フェイト、はやて、アリサの順番。

今回は六課時代で使ったアリサ達の別荘で過ごすことになっている。
人数が人数なので、翠屋では無理があるのだ。

子供メンバー3人。

八神家メンバー7人。

高町家メンバー＋フェイトの6人の合計16人。

もしこれにナカジマ家メンバーも加えてたら大変なことになっているだろう。ナカジマ家メンバーのみんなはまた来年、ということになった。

「子供メンバーが遊んでる間に、ちゃっちゃと準備をすませましょ
うか」

「そうだね。頑張って飾り付けとかしなきゃ」

「なら、俺とフェイトさん、はやてさんと母さんが料理担当。それ
以外が飾り付け担当でお願いします。あ、後、シャル先生は厨房
に入ることを禁止します。毒物ができたら大変ですから」

「シャル先生、料理出来るもん！」

「とりあえずお願いします」

「無視されたー！」

しくしく泣くようなしぐさをしながら走り去るシャル。
ごめんなさいと、小さくつぶやいた桜はすぐさま料理に取り掛かっ
た。

対して、アリス達は部屋の飾り付けに取りかかった。

「桜君、指示出すの上手だったね」

「まあ、なのはと同じ仕事をしてるからね。仕事柄慣れちゃって
るよ、きっと」

「そっか。あ、アリスちゃん、それとって」

「ん。はい」

こっちはこっちで楽しく飾り付けをしている。

ヴォルケンスとアルもシャルを慰めながら楽しくやっていた。

「そういえば、アミタさんやシュテルたち元気かなあ」

「あゝ、そやね。ディアアーチェやユーリのことも気になるなあ」

「レヴィも、どうしてるかな」

「？」

何のことかわからない1人わからないでいる桜。

手は止めていないが、気になってしょうがない。

そんな顔をしている。

そこで同じように手を止めず、フェイトが説明をした。

異世界エルトリアからの渡航者。

アミティエ・フロリアンとキリエ・フロリアン。

そして紫天の盟主ユーリ。

3人を元にしたマテリアルのシュテル、レヴィ、ディアアーチェ。

過去、桜が闇の書の闇を消し去った後の約3ヶ月後にあった事件で知り合ったそうだ。

「あれ？材料が足んない？」

「あ、ホントだ。どうしよう」

「なら、買いに行きましようか」

「それなら家に寄って、ケーキ貰ってきてくれる？」

「ん、了解。アル、出かけるぞー」

「おう、了解した」

「じゃ、行きましようか」

「え、でも、料理が」

「大丈夫。ほら、準備して」

「う、うん」

side out

場所は変わって買い物道中。

アルはアウトフリームで大きさを変え、フェイトと手をつないで歩いていた。

道には雪が積もっていて、凍っている部分もある。

転ばないようにと頑張ってやったのだが、なんだかアルは恥ずかしそうだ。

しかもはたから見れば夫婦。

アルが娘で桜が父親。フェイトが母親。

たぶん、その意味でアルは恥ずかしいのだろう。

「フェ、フェイトさん・・・」

「なに？」

「あれ・・・違います？」

「あれって、なにが？」

「だから、あれ」

ふと桜がフェイトに聞く。

そして失礼だが、桜は恐る恐る指さしていた。
その先には――――

「ほら、レヴィ。行きますよ」

「ああ、待ってよみんな」

「お前は、まったく」

「もう少ししっかりしてください」

「しかし、本当に寒いわねえ」

「そうですねえ」

小さいころのフェイト達に似た子供が3人。

15、6歳ぐらいの少女が2人。いちばん小さいウェーブがかかった髪をした少女が1人。

フェイトは見た瞬間すぐに分かった。

10年以上たっただけでも忘れはしない。

あの子たちが誰かわかった。

「レ、レヴィ・・・？」

「ん？あー、へいとだー」

「だからフェイト」

「お、お主は！」

「ア、アルなのですか？」

「そうだぞ！久しいではないか、ユーリ！幾年ぶりだ？」

「え、何この状況。俺だけ取り残されてる？」

目の前にいる6人組。

それは少し前まで話をしていた人たちだった。

赤髪の子が姉のアミティエ。

ピンクの長髪をした子が妹のキリエ。

ウェーブがかかった子がユーリ。

フェイト似の水色の髪の子がレヴィ。

なのは似のショートヘアーの子がシュテル。

最後に残ったはやて似の子がディアーチェだそうだ。

「どうしたの？もしかして、エルトリアが元に戻ったの？」

「はい。なので、正規の次元渡航でやってきました」

「そっか。良かったね」

「・・・」

1人取り残されている桜。

急いでフェイトが紹介してくれたおかげで、何とか話に混ざることができた。

立ち話はあれだ、ということでも歩くことに。

買い物を済ませ、翠屋に寄った後、別荘に向かうこととなった。その途中。

「この方が、今のアルの主なのですね」

「おう。最高の相棒だ」

「ふふっ。なんだか物凄く嬉しそうです。大好きなんですよね？」

「な!？」

「ああ、俺も好きだぞ」

「お、おう・・・」

「なんだ、この空気は？」

side out

「ええー！ー！！」

「いや、母さん驚きすぎだって」

「でも、さっきまで話してたよね！？ね！？」

「うん、話してたから。とりあえず落ち着こ？」

帰宅後、見事になのはたちは驚いていた。

少し前まで話題になっていた彼女達がやってきたのだ。
驚かないのは無理だろう。

「さて、続き続き。頑張ってますませましょう」

「あのー、私も手伝いますか？」

「お、なら手伝ってくれ」

「はい。頑張りますよおー」

厨房に入ってきたユーリが加わり、調理開始。

マテリアル達は子供メンバーと遊んでおり、対応はしなくてもよさそうだ。

アミティエとキリエは飾り付けの手伝い。

ヴォルケンズといろいろ話しながら楽しそうにしていた。

（1時間後）

ようやく調理終了。

さきほど料理を並べ終えたところだ。

「では、メリー」

『クリスマスツ！』

夕方6時。

ついにクリスマスパーティーが始まった。

「アミタさん、キリエさん、どうですか？」

「はい。とっても美味しいですよ」

「ホント。ビックリするぐらいだわ」

「きよ、恐縮です」

珍しく桜はフェイト達ではなく、アミティエ達のいるところで食べていた。

いつでも会える他のメンバーよりも、今日初めて会った異世界組のメンバーと一緒に過ごし、親睦を深めるのが一番だろう。

そう考えていた桜は、以外にもチビツ子の4人に懷かれていた。

特にユーリ。

頭が撫でられると嬉しいそうだ。

「なのは。今度、エルトリアへ行ったら試合をしましょう。13年前の約束通り」

「うん。負けないよー！」

「はい、私も負けません」

向こうは向こうで物騒な話をしていた。

まあ、前からの約束を果たすだけだそうだが、それだけを聞くと怖い。

本人たちを見ていると、まるで母親に挑む子供とその親のように見える。

「へいと?」

「フェイト」

「あれ? うーん、フェイト、フェイト・・・へいと?」

フェイトはレヴィに自分の名前を覚えてもらおうと必死。

何回やってもまともに覚えてくれないので、ちよつとがっかりしている。

前は「オリジナル」という呼び方があったのだが、それでもやはり名前と呼んでほしいというフェイトの思いだろう。

「こうしてみると、なんや姉妹やのおて親子やなー」

「な!?! 誰と! 誰が!」

「ウチとディアーチェのことやで。なー、みんな」

『うん（はい）』

そしてこっちは家族入りを果たしていた。

ディアーチェは鬱陶しそうにしているが、少し嬉しそう。
こんな大家族が憧れだったのかもしれない。

まあ、みんながみんな楽しそうで何より。
ヴィヴィオとレヴィがすごく仲が良かったり。
アインハルトとシュテルはお互いに（少しだけ？）気があったり。
他のメンバーとも普通に打ち解けていた。

「さあ、ここで王様ゲームや！」

食事が終わり、みんなが広いリビングに集まる。
温かいカーペットの上に座り、はやてがみんなの前で仕切っている。
異世界組にはルールがわからないということ以轻く説明。
人数が多い分、今回はいろいろできそうだ。

「あー、ユーリずるーい！僕も僕もー！」

「ユーリ！そこは妾の特等席だぞ！」

レヴィとアルが、胡坐をかいている桜の脚の間に座っているユーリ
をみて文句を言いだした。まあ、文句というよりは羨ましがって
るだけだが。

しかしユーリは早い者勝ちだと言い張り、まったくどうとしな
かった。

「懷かれちゃいましたね」

「あはは、まあ、気にしてませんから」

「桜君って、もしかしてロリコン？」

「っ!?(グサリッ!)」

「キリエ!」

「あ、ごめん!まさか当たってるなんて思わなくて」

「嘘ですよね!?普通に同年代が好きなんですよね!?!」

「ひ、否定はできません・・・」

「「ええ!?!」」

「ほら、そこ3人。はよ選ばんかい!」

急かすはやての言葉通り、目の前に座っているユーリが棒の入ったコップを持っていた。そして中に余っているのは3本。ちょうどアミティエとキリエ、桜の3人分だ。

キリエは姉のアミティエから譲られ、先に拝借。残った2本のうち、レディファーストなのでアミティエが片方を。桜が余った最後の1本を引いた。

「王様だーれだ?」

「お、あたしだ」

最初の王様はアギト。

どんな命令を下そうか、腕を組んで悩みだす。そしてすぐに答えは出たようだ。

「2番と9番、18番が王様ゲームが終わるまでメイド服を着ることに！」

「あー、僕だー」

「私もです」

「わ、我もか・・・」

運が悪いと言うか、何と言うか。

マテリアルの3人がアギトの選んだ数字を引き当てていた。

数分後

はやてがどんな状況にも対応できるように用意しておいた衣装他の中から引っぱり出してきたメイド服に身を包んだマテリアル3人。普通に似合っているため、なにも言えない。

無言の状態が続く中、ついにディアーチェがしびれを切らした。

「お前ら！何か言ったらどうなんだ！？」

「いや、別に・・・なあ？」

『うん』

「なあ！？」

「まーまー、僕、この格好結構好きだよ？」

「私も。嫌いではありません」

「本当にお前らが我を尊敬しているかわからなくなってきたぞ・・・」

気を取り直して2回戦。

先ほどの王様であるアギトの命令を守り、ディアーチェ達はメイド服のまま。

棒を回収し、再び配り始めた。

「あ、私です」

今度の王様は桜の脚の間にちょこんと座っているユーリ。

先ほど桜に頭を撫でてもらったのを思いだし、もう一度撫でて欲しいと思った。

正直に言えばいいのだが、ユーリ自身すごく恥ずかしいらしく、言えないでいたのだ。

そこでユーリはチラッと桜の番号を盗み見る。
確認するや否や、さっそく発言した。

「では、4番の人が、王様の頭を撫でること」

「あ、4番は私です」

「あれっ？」

4番の番号を引いたのは桜————ではなくその隣にいたアミティエ。

ユーリはどうしてこうなったからわからず、驚いている。
せっかく盗み見たのに失敗なんて、どういふことなのか。

それは意外と簡単なミスだった。

「桜さんは、14番ですよ。」

「ん？ああ、そうですよ。ユーリ、おいしい数字だったな」

「うう・・・」

そう、一桁違っていたのだ。

アミティエが4番、桜が14番。

見事にユーリは4番だけしか見ていなかったのだ。

「あまり難しいものじゃなくて助かりました。では、ユーリ。ご命令通り、頭をなでなでしますよ」

「はい」

結局、ユーリは桜ではなくアミティエに頭を撫でてもらうことに。少し残念な気もしたが、どちらにせよ頭を撫でられるのは嬉しい。そう思っているユーリだった。

side out

その後、何度か王様ゲームは続いた。

なのはが王様になった時は、子供メンバー5人が歌を歌い。フェイトが王様になれば何故かアリサとすずかが被害に遭い。はやてが王様になるとアミティエとキリエは胸をもまれる。

そんな感じでいろいろと命令が出されながら時間は過ぎて行つた。
そして次のゲームに移る、ということで最後の王様ゲーム。

「王様だーれだ？」

「お、俺？」

最後の王様は桜。

今まで被害にしか遭っていないため、運が良かったのだろう。

だが、桜はこれといって思いつかない。

特に誰かに何かをやってほしいと言うものもない。

しかし、それではなにもなくてつまらない。

腕を組み、悩みだしてしまった。

「・・・あっ」

そんなとき、ふと頭に思い浮かんだ。

無難に誰かに歌ってもらおう。

そう思った瞬間、ちらりとフェイトの番号が見えた。

ザフィーラや他のメンバーじゃ荷が重そう。

フェイトなら何度かこう言ったもので歌ったことがあるから大丈夫
だろう。

そう思いながら命令を下した。

「では、21番の人が歌を歌うこと。アンコールがあれば必ずこた
えること」

「え？わ、私？」

「あ、そうですか。ではお願いします、フェイトさん。曲は・・・」

「・・・え、それ？」

「はい。少しばかり気に入っていて」

「そ、そっか。じ、実は私も・・・（ボソツ）」

「ということで、どうぞ！」

♪ PHANTOM MINDS ♪

（脳内再生でお願いします）

「~~~~♪」

早速、ということで一曲歌い終えるフェイト。

そして当然のごとくアンコールがきた。

先ほどの桜の命令にはアンコールにも応えること、というのがあったため、断れないフェイトは、しぶしぶ違う曲をもう一曲歌う。

その日、その歌声はみんなの頭の中に強く残った。

♪ ROMANCERS・NEO ♪

（脳内再生でお願い済みます）

番外編 クリスマス（後書き）

『ROMANCERS・NEO』はエンディングとして扱ってくだ
さい。

なのはGODを買って、ストーリーが終わった後に書きたくなりま
した。

まあ、いろいろ会って日にちはめちゃくちやずれてしまったんです
が。

読者の皆様が楽しめたのであれば何よりです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第01話 言い忘れてました（前書き）

今作からのオリキャラの名前は『シャナ』としました。
容姿は黒髪の方のシャナと同じです。

性格はツンデレじゃないですよ!?

桜にベタ甘なだけですよ!?

とりあえず楽しんで読んでくれればうれしいです。

その前に設定をどうぞ。

名前.. シャナ

年齢.. 10歳

性別.. 女の子

身長.. ヴィヴィオより小さい

体重.. 教えたら殴られます by 駄作者

容姿.. 「灼眼のシャナ」のシャナと同じ。

ただし炎髪灼眼ではなく黒髪。

性格.. ツンデレではなくお兄ちゃんっ子。

いつでもどんな時でも桜にベタ甘。

世界がどうなるう桜さえいればいいと思うぐらいのブラコン。

デバイス.. 考え中

術式…近代ベルカ式、炎熱変化持ち

魔力光…紅

眼の色…桜と同じ

髪の毛…→に同じ

趣味、特技…運動、魔法の練習、剣術（シグナムも高評価）、ストライクアーツ（桜&スバル直伝）、他いろいろ

好きなこと…桜、桜の料理、と言うか桜に関わること全部（笑）

最近は桜のベッドで一緒に寝ること。

一番好きなのは桜が作るメロンパン。

第01話 言い忘れてました

JS事件、および機動六課解散から約4年。
また桜の花が咲く季節がやってきた。

つい1ヶ月ほど前のことだ。

俺の住む家（1人暮らし）に新しい家族がやってきた。
名前はシャナ。

家族を失い、1人なあの子を見ていたらなんだか昔の自分と重なって見えてしまい、つい声をかけてしまったのだ。

1人になって、誰も守ってくれなくて、誰も信じる人がいなくて、いつも不安でしうがなかった。

最初は俺の事警戒してたんだけど、だんだん慣れてきて普通に接してくれるようになった。

で、「一緒に暮らさないか？」って言ったらOKしてくれた。
意外にあっさりかもしれないけど、気にしない。

『って事になったんだけど、エリオとキャロ、特に桜は聞いてたりした？』

「俺はヴィヴィオだけ1年近く直接会ってないんで良くわかんないッスね。大人モードって単語は聞いてたんですけど、まさか変身制御とは……。流石ヴィヴィオだな」

『僕達も桜と同じですね』

『やっぱりー？』

今はヴィヴィオが初等科4年生になったということでデバイスを渡したことで、変身制御のことについて話してる。

「ま、いいんじゃないですか。ヴィヴィオはあれでしつかり——」
お兄ちゃん誰と話してるの〜!」——ちょ! シャナ、いきなり飛びつくよ」

『『……』』

『桜、その子は……』

「あれ? 言ってませんでしたっけ? 1ヶ月前から俺が引き取って一緒に住んでるって」

『聞いてないよ!?!?』

「え〜、じゃ今言いました」

『そういう問題じゃないからね!?!?』

今思いだした。

そう言えばどう報告しようか迷って結局投げ出したんだった。それならフェイトさんの驚きもわかるな。

「お兄ちゃん、誰と話してるの?」

「ん〜。俺の大切な人と親友さ〜。こんど会わせてやるからな」

「うん」

『そう言えばみんな、お仕事の調子はどお?』

『今日もホントに平和でしたよ』

『今やってる稀少種観測も、もう少しで一段落ですから、来月にはフェイトさんの所に帰れそうです』

「俺も特に異常はないですね。教えてるみんな筋がいいですし。それと俺の方もあとちょっとでこっちの教導が終わりなんで、来週かその前辺りには帰れますよ。シャナと一緒に」

『ホント? それじゃ、私も休暇の日程調節してみるね』

「どっか2人で出かけますか?」

『うん♪』

「ぶゝ。私も一緒に行くゝ!!」

「シャナは来週から学校だろ。その内どっか連れてってやるから我慢しろ」

「ぶゝ」

フェイトさん親子の定期連絡+αでの連絡を切ってから今夜の食事をどうするかをすっかり忘れてた。

実は連絡が来るちよっと前に帰ってきたから食べてないんだった。

「シャナは何が食べたい?」

「お兄ちゃんの料理!!」

「つまりなんでもいいんだな」

「うん!」

〳数分後〳

「はい、出来上がり」

「おお!!!! 早!!!!」

「それでは」

「いただきます」

この後普通に飯を食べて風呂に入って寝た。
風呂に入っているといきなりシャナが入ってきたからビックリした。

第01話 言い忘れてました（後書き）

ちょっと短めの1話でしたがどうでしょうか？

なんだか2人目の妹がいたら楽しいんじゃないかなって思ったので、シャナを描きました。

最近久しぶりに「灼眼のシャナ」を見てたら釘宮病に侵されてしまい、ロリコーーげふん！げふん！になってしまい、友達からは「ロシ」するというあだ名を付けられました（笑）

あだ名の由来は、まあ、そのまんまッスね。

とりあえず感想お待ちしております。

第02話 引っ越し前日（前書き）

どうも楚良です。

今日、スター式のちよつとだけ細かい設定を考えました。
ではどうぞ。

名称…スター式

戦法…圧縮魔法主体

対人、対軍

接近、後方、援護

タイプ…オールラウンダー

使用可能魔法…全て。

圧縮魔法はミッド、ベルカよりも数倍

召喚魔法も同じく（ただし転送は除外）

代表魔法…アトランティス・ストライク

レムリア・インパクト

戯曲「黄衣の王」

他桜の作った魔法。

備考…桜だけが使える魔法。

圧縮魔法が主体のため魔力が多い人向け。

空気中にある魔力も使えるが未熟な者には使えない。

桜のストライクアーツの技にも応用されている。

D S A A インターミドル参加時は使わなかった
（完成していなかった）が翌年に完成している。
圧縮魔法主体のためインパクト時の威力が半端ない。
手加減する場合は数秒の圧縮で十分らしい。
教導隊では圧縮魔法の使い方を
教えてほしいとの声を経たないとか。

第02話 引っ越し前日

「と言うことで今日は明日に備えて引っ越しの準備をします」

「おおー!!」

フェイトさん達との連絡の数日後。

俺は休暇をとって引っ越しの準備をすることになった。

明日になったのは、意外に早く教導隊のみんなが俺のプランを終わらせてくれたから。

「ついでに買いだしでシャナの勉強道具他を買いしたいと思います」

「やったー!!」

「よし、じゃ最初にシャナは自分の荷物まとめな。俺は違うところやるから」

「うん！」

何故か朝からテンションの高いシャナ。

スバルさんが来たってのもあったのかいつも以上だ。

現在は朝8時。

今日中に全部まとめておかなきゃ明日が大変だ。

「♪♪」

まあ、助かったところがいくつかあった。

俺が住んでいたのが一軒家では無かったことだ。

一番下の階の一番大きな部屋を借りていた。

そのおかげかシャナが来ても不自由がなかったし、逆に1人じゃちよっとさびしいんじゃないかってぐらいだった。

「お兄ちゃん終わったよ!」

「おお、早いな。じゃ、今度はこっちを手伝ってくれるか?」

「了解!」

〳数時間後〵

時間はだいたい午前1時。

シャナも手伝ってくれたおかげで早く終わった。

荷物もあんまり多い方ではなかったので早く終わるのも頷ける。

「お腹すいた〵」

「だったらどっか食べに行くか。ついでにシャナの勉強道具とか買うからな」

「やった〵!」

「よし、じゃ、出かける用意しろ」

「うん」

〳数分後〵

「しっかりつかまったか?」

「うん！」

「じゃ、飛ばすから絶対に離すなよ！」

ついこの前取ったばかりのバイク免許。

そのついでに自分用のバイクを買っていいおた。

シャナが来るちよつと前辺りに買ったバイク。

サイドカーは・・・高いから買っていない。

それにしてもシャナのつかまる力が強いな。

はつきり言ってしまうえば少し痛い。

気にはしないし、しっかりつかまってももらわないと大変なことになるから何も言わないが、力加減があるものじゃないのか？

そんなことを考えながらバイクを飛ばしていたら目的の場所に着いた。

街の大きなデパート。

中には食事が出る場所もある。

「さうて、何食べようかなって」

「あれがいい!!」

「ん？あゝ、あれか。俺は何でもいいし、あそこで食うか」

「うん！」

シャナが指をさした場所は最近話題になっているチェーン店。時間が良かったのか、運が良かったのか意外にすいていた。

すぐさま店に入って注文をした。
後は待っているだけだったが。

「てめえ！俺にぶつかつていてただで済むと思ってんじゃねえよな
！？」

「ご、ごめんなさい！わ、わざとでは」

「調子乗ってんじゃねえよこの野郎！！」

店の中でちよつとしたいざこざがあった。

トイレに行こうとした青年が店に入ってきた男にぶつかってしまい、
男の方がキレている状態。

面倒なことだ。

それにあの人、困ってそうだし助けるか。

「シャナはここでじっとしてろ」

「ふえ？あ、うん」

静かに2人の元まで歩いて行く。

他の客は黙って見ている。

何かされたら怖いからだろう。

「おい、おっさん。そいつ謝ってんじゃねえか。さっさと放してや
れよ」

「あん？なんだてめえ。俺に喧嘩売ってんのか？」

「さあな。とりあえず、そいつ放してやれよ。謝ってんだしよ」

「何でお前なんか指図されなきゃいけねえんだよ!!」

そう言いながら男は殴りかかってきた。

やっぱり、こういうのってあえてくらって正当防衛を成立させる方が楽なんだよな。

「へ、どうだ。ざまあみろ」

「あゝ、いってゝ。そっちから手え出したんだから後悔すんなよ?」

「は?」

「それとひとつ忠告だ。場所が悪ければ死ぬほど痛いから我慢しろよ」

「な、ちょ・・・」

「烈空拳・・・」

「がはっ・・・!!」

3年ぐらい前に完成したスター式ストライクアーツの一番初歩の技。手に魔力をこめて相手を殴る技だ。

今回はまあ、一般人相手と言うことで2秒ぐらいの圧縮で十分だった。

「えらいな。動いてたらもっと痛かったぞ?次からはあんまりこういうことをするなよ?」

「は、はい」

この後なんだかデジャヴのようなものを感じた。
後ろの方から歓声がわきあがる。

うん、確実にデジャヴだ。

注文していたものがやってきて2人で美味しく頂いた後、シャナの制服他を買って帰る事にした。

んでだろう。

あのチンピラぶっ飛ばしてから妙に気分がいい。

なんて言うか爽快感だ。

でも、あんまり人を殴るのは良くないな。

かたづけの終わった家（部屋）に戻ってくると俺は1人今日買った荷物をまとめた。

シャナは今は風呂に入っている。

そうだ、まだ、あれをやっていなかったな。

「さあ、W、ST。今日こそあれをやるぞ!!」

『ま、待って下さいマスター!!』

『そうです! 待って下さい!!』

「何を言っている! もう1ヶ月以上待ってやったと言うのに、まだ待てと言うのか!？」

『ですが!』

『やめましょうよ！それにちょっと怖いです！！』

「大丈夫だ！痛いのか怖いのかはたぶん一瞬だけだと思うから！！」

『たぶんってなんですか！？』

「問答無用だ！最初はまずSTからだ！」

『あ、ちよ、やめ——・・・』

『ST！！』

目にもとまらぬ速さでSTを解体する。

もはや神業の域と言ってもいいぐらいの速さだ。

「さあ、W。今度はお前だ！！」

『マ、マスター！ホント、やめ——・・・』

「ふう。とりあえず解体完了だ。さて、今日は徹夜だ」

この後シャナが風呂から上がってきた後も改造は続いた。フォーム、モード、いろいろ設定することもある。

と言うか頑張ればデバイスマスターになれそうなんじゃね？翌日にはWとSTは面影を残しながらも変わってしまった。

第02話 引っ越し前日（後書き）

どうでしたか？

途中で出てきた『烈空拳』は桜流ストライクアーツの技の一つです。他にも色々考えて出して行きたいと思います。

そして最後に改造されたWとST。

一体どういう姿になったかは後のお楽しみです。

とりあえず楽しく読んでくれたのであれば嬉しいです。感想等お待ちしております。

第03話 早速やろうか（前書き）

どうも楚良です。

前に投稿したキャラ紹介を編集しました。

桜とシャナのデバイスの事とかを描き足したんで良かったら見てください。

これを見る前に見て下さるとちょっとは楽しめると思います。

第03話 早速やろうか

改造が続いて翌朝。

「ふう、ようやく出来た。新デバイスだ」

WとSTが解体、改造された状態から造られた新しいデバイス。
WとSTの記憶とかは残したまんまだからたぶん使いやすいと思う。
名前は——考え中だ。

「うーん、お兄ちゃんおはよー」

「おお、おはよ。今、朝ごはんの準備すっからな。その間に顔とか洗って制服に着替えな」

「うーん」

今日からヴィヴィオが通っている「St. ヒルデ魔法学院」にシャナを通わせることにした。

いろいろと学んでほしいし、友達も作ってほしいとか、いろいろ考えた結果こうなった。

ま、本人が楽しんでくれればいいっていうのが一番なんだけどな。
あ、今新デバイスの名前思いついた。

「よし、今日は肩慣らしも含めて気合い入れていくぞ。ZER^{ゼロ}O」

『イエスマスター』

〜数十分後〜

現在俺は「St. ヒルデ魔法学院」に向かっている。
最初にシャナを送って行くのが目的だ。

帰りはヴィヴィオと一緒に帰ってこいって言うてある。
自宅（母さん達が住んでいる家）には送った後だな。

学校が近づいてくるにつれ登校する生徒が増えてくる。
そのせいかちよっと注目されきみだな。

だがその中に久しぶりに見る顔があった。

「おい、ヴィヴィオ!!」

「あ、お兄ちゃん!!」

小さめのツインテールをした金髪、虹彩異色の少女。
俺のもう一人の妹のヴィヴィオだ。

「あれ？その子は？」

「ヴィヴィオには言ってなかったな。新しい家族のシャナだ。お前
と同じ10歳だから仲良くするように」

「うん」

「それとシャナはここからヴィヴィオと一緒に行きな。俺は母さん
達の所に行くからさ」

「うん！」

「それじゃ、今日からちゃんと勉強するように！」

2人が見送る中Uターンして自宅へ向かう。
そう言えば、コロナは元気してるかな？

あいつとも会ってないからちよっと気になるな。

side out

さつき突然あんなこと言われたけど、なんだか久しぶりにお兄ちゃんに会えてうれしかったな。

それに新しい家族が出来てさらにうれしいよ！

「ヴィヴィオ、おはよ〜」

「あ、リオ、コロナ！」

「あれ？そっちは？」

「シャナって言うんだ。よろしく」

「よろしく」

「よろしくな！」

そう言えば新しい家族って事は今日から一緒に暮らすんだよね？
だったら私と一緒に部屋ってことかな？

side out

「何でこうなった？」

現在俺はシャナを送ってから家に荷物を置いた後。
フェイトさんが家に居て少しラッキーだと思ったのだが・・・。

〽回想開始〽

「ただいま」

「あ、桜おかえり」

「あれ？フェイトさん、今日はどうしたんですか？」

「今日はお休み取っておいたんだ。べ、別に、桜が帰ってくるからじゃないよ！？た、たまたまだからね！！」

「はぁ。で、どうして休みを？」

「え、えっとね、ハ、桜がいつ帰ってくるかわからなかったから、その、とりあえず取っておいたって言うかその・・・」

「つまり俺が帰ってくるから休みを取っておいたんですね。それが偶然今日で重なったってだけだ」と

「・・・うん」

「つまりは俺が帰ってくるからですか」

「え、えっと、あの、その」

「じゃ、どっか出かけますか。久々に」

「う、うん」

く回想終了く

ってこれは成り行きじゃないか。

それとこの後何故か花見に来ている。（歩き）

どうしてこうなったかって？

と言うかどういいう状況を言おう。

俺は今、めっちゃくちゃ幸せだけど死にそうです。

うん、フェイトさんめっちゃ近い。

隣に居るじゃなくて近い。

腕に抱きつくの良いけど力加減考えて。

そして腕に当たってるから。

何がってあれだよ、あれ。

お————だよ。

（申し訳ありませんが作者がまだ15で描いたらいけないんじゃないかな
いかと思ってるので自粛させていただきました。わからない方は
諦めるか誰かに聞いてください）

しかもなんだかちよっと注目されすぎみだしよ。

うん、幸せだけど死にそう。

「どうしたの桜？ 顔色悪いよ？」

「大丈夫ですよ。たぶん」

「それにしてもきれいだね」

「そうですね。やっぱり桜の花はきれいじゃないと」

「本当に大丈夫？」

「す、すみません。ちょっと徹夜してたもんで。な、ZERO」

『その通りです。マスターは徹夜明けです』

「あれ？そのデバイスって」

『私はWとSTが元のデバイスで、マスターに改造されて1機のデバイスにされたのです』

「って事は」

「俺が作ったデバイスですよ」

「すごいよ桜！これならデバイスマスターも夢じゃないよ!!」

俺は空戦魔導師でデバイスマスターになる気はありませんよ？
それに教導の方もあるし。

「さ、とりあえずなんか食べましょうよ。俺、腹減ってんですよ」

「うん♪」

花見の時期だと言うことで意外に屋台的なものもあるものだ。

足りなくなった飲み物を買うためとかすぐ食べれるようにいろいろ売ってある。

ホント、楽しいや。

久々だし、でも、ある意味死にそうだ・・・。

「あ、そう言えば俺、教導隊の方に挨拶行かなきゃな」

「え？ そうなの？」

「はい」

「そっか」

「あの、そんな今にも泣きそうな眼をするのをやめてくれませんか。帰ってきたら美味しい物作ってあげますんで。もちろんリクエストがあればなおさら」

「なんだか子供を相手にされてるみたい」

「え!？」

「食べ物で釣ってくるなんて、私が子供みたいに扱われてると思うんだけど」

実際、シャナを1ヶ月間相手をしていて癖がついたか食べ物を良く使ってしまうようになった。

うん、子供扱いされれると思うのも無理はないな。

「んゝ、じゃ、今日、——じゃダメですか？」

「ホント!? あ、いや、でも」

「ま、嫌ならいいんですけど。どうすりゃ機嫌直してくれるかなゝ」

「うう／＼じゃ、今日、いい？」

「はい」

なんだろう。

フェイトさんの扱い方がわかったような気がする。
俺限定でだけど。

とりあえずバイクで家まで戻って、フェイトさんを家まで送った後に母さんのいる教導隊へ向かう事に。

うん、バイクに乗ってる時も抱きつく力があれだった。

しかもシャナとは違い、背中にお——が当たって、精神が持つか不安だった。

なんでかって? 思春期だからだよ。遅いと思うけど。

ってなわけで着いたぜ教導隊。

とりあえず挨拶しとくか。

「あ、あの!」

「はい?」

「た、高町 桜一等空尉ですか？」

「そうだけど・・・」

「うわー！！本物の『翼の英雄』だー！！あ、握手して下さい
！！」

「いいけど。君は？」

「あ、申し遅れました。僕はここの訓練生のー「サジ！お前あれ終
わったのか！？」ーげ！忘れてた！あ、握手ありがとうございます
た！！」

「お、おう。なんだかすげー元気なヤツだったな」

教導隊で最初に見たのがあの元気っ子。
だいたい11歳からそのあたりだろう。
ま、その内また会えるだろう。
今は母さん達に挨拶が先だ。

く訓練スペースく

現在訓練スペース。

ちよつと遠くから見えます。

母さんと、あれはヴィータさんだな。

頑張ってるな。

あ、終わったみたいだ。

行って挨拶するか。

「おーい！」

『? ? ? ?』

「あ、桜!？」

「お前どうして! 違う教導隊じゃなかったのかよ」

「終わったんでこっち戻って来たんですよ。だから挨拶しに」

『おい、あれ翼の英雄じゃないか?』

『あの二代目エース・オブ・エース!?』

『すげえ! 俺、初めて生で見た!!』

俺ってそんなに有名?

翼の英雄って異名は一応認めてるけどそんなに広まってる——ヴァイスさんだな。

ま、とりあえず俺は結構有名な訳ね。

あの人のせいで。

「どうせだから模擬戦でもしてみる?」

「誰と?」

「誰でもいいけど。そうだな、じゃ母さん相手してくれる? 久々に全開で」

「え、でも」

「見るのも勉強」

「んー、じゃ、いいよ。それに久々だけど全力全開で行こうか。リミッター付きだけど」

「一応言っておくけど、俺のデバイスが変わっても文句言わないでね」

「え？」

『中継回せ!! 今から親子対決が見れるぞ!!』

『急げ! 教導隊全部に回せ!!』

『了解!!』

妙に周りが騒がしいな。

でも全力なんて久々だから盛り上がるのも無理ないか。
とりあえず隊舎を破壊しない程度に行きましようか。

第04話 家族がそろった（前書き）

やっと更新できた！！

現在アニキの携帯で執筆中。

俺は宮城に住んでいるからこれでしか更新できないんです。

ま、とりあえず頑張って生き延びるので応援よろしくお願いいたします！！

第04話 家族がそろった

教導隊。ここで桜となのはの模擬戦が始まろうとしていた。

「それじゃこれからなのはと桜の模擬戦を始めるぞ」

「さ、ZERO。相手は母さんだ気合い入れろよ」

『イエスマスター』

「では、始め!!」

ヴータの合図と同時に二人は動き出す。

先に仕掛けたのは桜だ。

「それじゃ、早速いきますか」

『サイズフォーム』

「え!?! いきなり!?!」

ZEROの新フォームの1つ。

黒い鎌へ形を変えてなのはへ迫る。

その攻撃を驚きながら簡単に防ぐなのは。

防がれた桜は距離をとる。

「やっぱり簡単にはいかないか」

「こっちはそっちの手の内を知らないのに簡単に言わないで欲しい

な」

「じゃ、こっちはいつも通りいかせてもらうよ。ZERO！」

『イエス。ツインソード』

こんどはライオットの代わりに作ったフォーム。
小太刀ではないが二刀流もつかえる。

「RH！」

『アクセルシューター』

無数の魔力弾は桜に襲いかかる。

それを剣で斬り落とし、翼で防いだりする。
だが――

「な！？ バインド！？」

斬るのと防ぐのに集中している間に捕まってしまったのだ。

「ちょっと早いかもしれないけど終わらせてもらうよ」

「え、マジ？」

「うん。マジだよ」

「ちくしょー！！！！」

「エクセリオン――」

「なんてね」

砲撃を放とうとしたときだった。
バインドで捕まっているはずの桜はガラスのように砕け
後ろに回り込んでいる。

「あ」

「形成逆転！アトランティス・ストライイク！！」

こうして少し早めだが桜となのはの模擬戦は終わった。
この模擬戦は教導隊全部に映像として放送されたのだった。

「桜の幻術のことすっかり忘れてたよ」

「俺は簡単に捕まったことが少し悲しいよ。急いですり替えたから
よかったものの」

「それじゃ、みんなは訓練再開ね」

『はい！！』

「じゃ、俺は帰って夕食の用意してるよ」

「ホント！？」

「リクエストは？」

「特にないかな」

再び隊舎の中。

歩いているとまたあの少年がいた。

「君、さっきの」

「あ！桜さん！さっきの模擬戦とても凄かったです！！」

「ありがと。それと君の名前、まだ聞いてないんだけど」

「あ、申し遅れました。僕、サジ・リットナーって言います」

「よろしくサジ。俺、今日はもう帰るからまた明日な」

「はい！」

～自宅～

教導隊の帰りに夕食の材料を買ってから帰宅した。

家に帰るとフェイトさんだけでなく、ヴィヴィオとシャナもいた。

「お兄ちゃん、お帰り～！！」

「うおっ！つと。シャナ、ちゃんとヴィヴィオと仲良くやってたか？」

「うん！」

帰ってくるやいなやシャナが飛び付いてきた。

「さ、夕食の準備準備」

「あ、手伝うよ」

「いいですよ。今日ぐらい俺が全部やりますから」

　　約1時間30分後　

「ただいま」

「「「お帰り」」」

「あれ？桜、この子は？」

「言ってなかったっけ？新しい家族のシャナだよ」

「シャナです！」

　　なのはは哑然としていた。

　　いきなりそんなことを言われてビックリしているのだろう。

「ま、細かい話は食べながらしようよ」

　　～食事が終わりお話し中（シャナとヴィヴィオはお風呂）～

「と言うこと」

「そう言うことだったんだ」

　　なのはとフェイトにシャナを引き取った理由を話した桜。

二人ともちゃんと納得してくれて一安心だ。

この後風呂に入った。

そしてまさかのフェイトが入ってきて桜が鼻血をだしたそうだ。

第05話 朝は時として地獄に変わる（前書き）

今回はかなり短めです。

ちょっとしたスランプ的なものに陥ってしまったので何も思いつかないんです。

でも楽しんでくれればうれしいかな？

それにしてもほのぼの考えるのって大変ですね。

では本編へどうぞ。

第05話 朝は時として地獄に変わる

ある日の夜中の1時。

高町家、桜の部屋。

「ふう、流石にデバイスを一から作るのは大変だな」

今夜はシャナもフェイトも違う部屋で寝ている。

徹夜でシャナのためのデバイスを作っていたのだ。

ちなみに材料はというと。

自分で集めたガラクタ

+

シャーリーとマリーに貰った部品+a

「あとはシャナがいろいろ設定をすればいいか。俺はもう寝る!!
休み取っておいてよかった・・・」

机の上にデバイスを残し桜は眠りについた。

この時桜は気付いていなかった。

ドアの向こうに誰かがいる事を。

（翌朝）

だいたい時間は8時ごろ。

シャナとヴィヴィオはすでに学校へ行っていて、さらになのはももう教導隊へ行ってしまったている。

なので現在は桜とフェイトしか家に居ない。

「ん？」

顔に何やら柔らかい感触を感じながら桜は目を覚ました。
寝ぼけている状態なのでその柔らかいものが何かはわからない。
だがいい感触なのでそのままにしておいた。
声が聞こえたのだが――

「ん、桜・・・」

「・・・え？」

「もうちょつと寝とこうね・・・」

「うわっ！」

いきなりがっちりとホールドされた。
え？俺、誰にホールドされてるの？

寝ぼけていた頭はすでにフル稼働していた。
昨日は徹夜でデバイス作り。

シヤナは一緒に寝ていない。

フェイトさん達は先に寝ている。

起きたらいい感触&ホールドされてる。

あれ？

俺、誰とも一緒に寝ていないよな？

それと今何時だ？

て言うかこの人だ――

「桜、そんなに抱きついちゃダメだよ・・・」

――・・・。

フェイトさんか。

抱きつかれてるのは俺なんだけど・・・。

何の夢見てるのフェイトさん？

俺が何かしてるの？

というかこの人抱きつく力強！！

俺、抜け出そうにも抜け出せないんだけど。

しかも顔に、当たってる。

柔らかくていい匂いだ。

っていかんいかん！！

俺は何を考えているんだ！！

「うゝん」

「ふぁ、ふえいふおふぁん。ふおふいまふいふぁ？（あ、フェイトさん。起きました？）」

「・・・えへへ、桜だぁ」

「むぐう！！」

起きたかと思ったらさらに抱きつく力が強くなった。
しかも顔がにやけている。

よほどいい夢を見ているのだろう。

「ぎゅーーー！！」

「ふあふえふあ、ふあふえふあふあふえふえー！！！！（誰か、誰か助けてー！！！！）」

（2時間後）

やっと解放されたさ俺。

精神面がもう持ちそうにないよ。

「えっと・・・、ゴメンね？」

顔が胸に当たって息が難しかった俺。
ちよくちよく息継ぎ出来てたからよかったけど、もし出来なかったら俺死んでたんじゃない？

「ハ、桜？」

そう言えばシャナにデバイス渡すのすっかり忘れてたな。
徹夜したから寝過ぎしまった。
帰ってきたら渡すか。

「ホント、ゴメン！嫌いにならないで！！！」

「うわっ！！！」

突然フェイトさんが抱きついてきた。
何で？

「ゴメン、だから——」

「何言ってるんですかフェイトさん!？」

「え? 怒ってないの？」

「いや、怒る理由がないのに怒るってただのヤツ当たりじゃ・・・って違って、俺は怒ってませんよ？」

「よかった。返事してくれないからもしかしたら桜に嫌われたと思ったから」

「はあ、そんなわけないじゃないですか。でも、次は気をつけて下さいね？」

「うん!!」

第06話 無口な少年（前書き）

今回は一気にオリキャラが増える！！

5人ぐらいかな？

1人はほとんどどうでもいい人だけど。

第06話 無口な少年

「え？新しい訓練生？」

朝の出来事。

当然言い渡された事だった。

「数名なんだけど頼めるかな？」

「まあ、いいですけど・・・」

「なんだか不満そうだね」

この上司の名前はマリナ・ストライク。

不満と言えば不満だ。

いきなり押し付けられたって感じがして仕方がない。

「大丈夫ですよ。ちゃんと教えますから」

「うむ、では頑張ってくれたまえ」

こんな感じで俺とあいつらの出会いは始まった。

とりあえずマリナから新しいメンバーを教えろとのご命令が下った

ので早速ロビーへ。

どういうメンバーか確かめてみないといけないからな。

「ふむ、4人か」

ロビーへ行けばもうすでに集まっていた。
男女2人ずつのバランスのいいメンバー。

「とりあえず自己紹介してもらえるかな？あと、得意な事とか」

「リーフ・ブレイドです！得意なのは身体強化と剣術です！」

「リナ・ストライクです。得意なのはストライクアーツです」

ん？ストライク？
って事は……。

「お前、まさかマリナの妹か？」

「はい、確かこの教導隊に居るって聞いてますけど」

そうか。

マリナが俺に押し付ける理由はこれか。
それにしても妹がいるって初耳だぞ。

「雅 瑠璃みやび るりです。えっと、得意なのは補助とかサポートです」

「地球出身なのか？」

「はい、父親がそうなんです」

「そうなのか。えっと最後は」

「・・・」

「えっと、自己紹介してくれる？」

「・・・アウル・オーシャン。・・・精密射撃」

「よし、自己紹介すんだな。俺は今日からお前たちを教える事になった、高町 桜だ。よろしく」

全員の自己紹介が終わり早速訓練スペースへ。

とりあえず今回は全員の実力を知るため模擬戦をやろう。

「今回は俺との模擬戦だ。4人がかりで俺を撃墜しろよ。ちゃんとしたチームワークを見せてくれよ」

「「「はい！」」」

「・・・」

（模擬戦中）

「せいっ！」

「うわっ」

「ほら、リナ、足とられない。転んでるうちに攻撃来るぞ」

「はい！」

「おりゃあああ！！」

リナの相手をしている間に後ろからリーフが来る。
だがそれをソードにしたZEROで防いだ。

「いい太刀筋だけど、まだまだ甘いな！おらよっと！」

「おわっ！！」

剣をずらして流してやる。

バランスが崩れた所に軽く蹴りを入れて距離を取った。

「全員の動きしてるな。まだまだあまちゃんだけど伸びしろがある。それにしてもアウルはどこに——っ！？あぶね！」

いきなり顔面狙って魔力弾が飛んできた。

しかしどこから飛んできた？

アウルの姿は見えない。

「……。そこか！」

アウルがいた場所は俺の真後ろの瓦礫の中。

魔力弾が飛んできたのは俺の真横。

つまり、俺に居場所をばらさないようにするため兆弾させたってわけか。

瓦礫を撃って破壊。

その際にアウルも撃墜完了。

残るはリーフ、リナ、瑠璃の3人か。

「模擬戦終了」

全員撃墜完了。

少しリーフが粘ってきたから手こずったな。

「よし、今回の模擬戦から見てもまず言える事どんどん行って句からしっかり覚えろよ」

「「はい」」

「・・・」

「まずリーフ。粘るのはいいがもっと考えろ。さっきみたいに何度も流されて隙作っていると簡単に倒される。動きのバリエーションを増やせるようになれ。どんな事態にもすぐさま対応できるようにするとなおいい」

「はい！」

「次にリナ。問題は足場の確保だな。何か先天魔法でも使えるといいんだけど、それはその内俺の知り合いに教えてもらおうとして。もう少し形をコンパクトにした方がいいな。あと、防御もしっかりするように」

「はい！」

「次は瑠璃。お前は補助役なんだ。あんまり前に出すぎるな。無理

だと思ったらすぐに下がれ。あと、狙われてるってわかったら逃げ回るんだ。それ以外は結構良かったぞ」

「ありがとうございます」

「最後にアウル。お前は仲間に頼らなすぎだ。上下左右、全部が前の味方なんだ。その事をしっかり頭に入れて単独行動は控える事。せっかく精密射撃が出来るんだ、それを生かして仲間を援護してやれ。わかったか？」

「・・・（コク）」

全員に指摘できるところを指摘して個人スキルに入った。

リーフは太刀筋やいろいろ、特に剣術に力を入れる。

リナの場合は俺との組み手。

防御をしっかり入れてコンパクトな動きに仕上げるための対人戦闘。

瑠璃は体力向上。

いろいろな補助魔法の習得訓練を。

アウルは精密射撃をもっと正確に、もっと早く撃つための訓練。

そして出来る限り相手に場所を気付かせないようにするための阻害魔法習得を目指す。

「マリナ、ちょっといいか？」

『なにか？放棄なら君の首が飛ぶけど？』

「んなことするわけないだろ。アウルの事だよ」

『あゝ、その事？』

「そうだよ。何があったか教えてくれ。無口なのは別に構わないんだが、気になってしょうがないんだ」

『いいよ。えっとね———という事なんだ』

「それで」

『そ。ま、あとは自分で頑張ってね。それじゃ』

一方的に通信を切られた。

こういう行動がむかつく行動の一つになるのも知らないで。

それにしてもアウルの過去……。

シヤナに似てるな……。

親を事故で亡くして以来無口になった。

人との関わりを亡くしている、か。

しかも前の教導隊では言うこと聞かなかったって。
無茶しまくったって事も。

なんだこれ。

俺やティアナさんみたいじゃねえか。
だったら慰めてやるか。

く勤務終了く

「おい、アウル」

「……？」

「お前、今日俺の家で飯食ってけ」

「・・・何で？」

「いいからいいから。俺の家結構近いから寄ってけよ」

そう言いながら半ば強引にアウルを家に連れて行った。

アウルも最終的には自分から行くかのように歩きだしていた。

「ただいま」

「「おかえり」！」

「お、お邪魔します・・・」

「おかえり〜ってその子は？」

「俺の生徒の」

「アウル・オーシャンです・・・」

「寮で暮らしてるらしいから寄って飯食って行けって言って連れてきた」

「そうなんだ。ゆっくりして行ってね」

「は、はい」

高町家の歓迎を経てリビングへ。

年が同じということでヴィヴィオとシャナが相手をしている。

「何か食いたいもんあるか？何でもいいぞ」

「・・・え、いや・・・」

「遠慮すんなって」

「え、えっと・・・」

「「ハンバーグ！」」

「おう！いいぜ！アウルは？」

「じゃ、じゃあ、僕もハンバーグで」

「おっしや、んじゃ、ちょっと待ってろよ。めっちゃ美味しいの作るかな」

「30分後」

「はい、完成」

「・・・わぁ」

「気合い入れすぎたな。」

「ちょっと豪華にしすぎたか？」

「冷蔵庫の中身は・・・明日買い出しに行かなきゃな。」

「お代わりもあるからな。たくさん食べてくれよ。母さん達も」

「いただきます!!」

「いただきます」

「い、いただきます」

「じゃ俺も、いただきます」

「もぐもぐ。ごくっ。お、美味しい!」

「だろ?そこらへんのプロ顔負けだからな」

このあとも食事は続いた。

アウルが食べ過ぎて喉に詰まらせたりして大騒ぎ。
楽しい食事会だった。

「ぼ、僕はこれで」

「待てよ。風呂入ってけ。頭洗ってやるからよ」

「え、でも・・・」

「いいからいいから。寮にはシャワーしかねえんだろ?」

「う・・・でも・・・」

「いいから入っていけって」

またもや半ば強引に誘った俺。
こいつ、押しに弱いな?

で、風呂の中。

「マリナから聞いたぞ。お前、事故で両親亡くしてるんだって？」

「・・・」

「こういう風に誰かと一緒にご飯食べたりの、久しぶりなんじゃないか？」

「・・・」

「前の教導隊では大変だったらしいな。言うこと聞かないで無茶やっただけ」

「・・・」

「実はな、俺もそうなんだ」

「・・・。って、へ？」

「俺は昔母さんとかの言うこと聞かないで無茶やって大怪我したのとあんだ」

「桜さんが、ですか？」

「ああ。だから俺とおまえは似た者同士だ。言うこと聞かないで無茶やったどうしな」

「・・・」

ありゃ、泣きだしちったか。
ま、うれし泣きだろうな。

「いつでもいいんだ。いつでも家に来い。来たら暖かい飯と風呂入
れといてやつからよ」

「・・・うん」

「お前が1人がいやだって言うだったら俺がお前の家族になってや
る。だから、無茶とかしなくていいんだ。俺がついてやるから」

「・・・だ、だったら」

「ん？なんだ？」

「に、兄さんって呼んでもいい？」

「おう、好きなように呼べ」

く風呂上りく

「あ、ありがとうございます」

「いいのか？バイクで送ってやるけど」

「大丈夫です。今日は本当にありがとうございます」

「そうか。じゃ、明日な」

「はい。お休みなさい、兄さん」

これからもっとあいつらと仲良くなろう。
そう心の中で1人決意した俺だった。

第06話 無口な少年（後書き）

次回！

アウルたちのキャラ紹介！！

第07話 霸王現る

「これの最終調整をしてたらすっかり夜中になっちまったな」

またもや夜中。

シヤナのためのデバイスをまだ渡していなかったためどうせだから最終調整をしようと思いやっていたら夜中までかかってしまった。

「・・・デジャヴか・・・よし、鍵でもかけておこうかな」

ドアの向こうでガタンツと言う音がした気がする。
開けてみると真っ暗。

だが――

「何やってんだシヤナ」

「え、えっとトイレ」

「トイレあっちだぞ」

「あ、そっか」

「ちゃんと寝るんだぞ」

ドアを閉めてからちよつとあける。
そこには――

「やっぱりか。何やってんですかフェイトさん」

「え、えつとトイレ」

「トイレは逆方向ですよ？」

「あ、そうだったね」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

ドアを閉めて今度こそ寝ようと思って鍵を閉める。
だがその前にいやな予感がしたので音がしないように鍵を開けてみると。

「「おじゃましま〜す」」

「2人とも、安眠妨害というのをご存知かな？」

「「え！？寝たんじゃなかったの！？」」

「何してんの？」

「「桜（お兄ちゃん）と一緒に寝に来た」」

頭の中で何かがキレる音がした気がする。
気のせいかもしれないがちよつと叱ろう。

「いい加減自分の部屋で寝ろや〜！……！！！！！！」

2人を部屋の外へ放り出し鍵を3重ぐらいかけて寝る事に。

流石にこう何度も安眠妨害されてたら誰だってキレルだろう。

（翌朝）

「・・・何でさ」

起きたらそこにはシャナとフェイトさん。

どうやった！

どうやってあの3重のカギを解いた！

一つはオレしか知らない暗号式だぞ！？

とりあえずシャナを起こさないようにしてどかす。

そして脱出成功！

デバイスを持って1階へ。

「誰も起きてるわけがないか」

現在朝5時。

みんなまだ寝ている時間だ。

あと1時間もすればみんな起きるだろう。

「あ、あれ忘れてた」

自分の部屋へ戻って忘れ物を取りに。

3年前DASSインターミドルに出場した時に使ったデバイス。
オリジナルで優勝を果たした経験があるもう一つの相棒。

「UC^{ユニコーン}、久しぶり・・・か？」

『だいたい2ヵ月ぶ

りぐらいかな』

「調子はどうだ？」

『調整もしてくれないのにそれは嫌味ですか？まあ、良好だけど』

「悪いな。今夜してやるからよ」

この後全員起きてきた。

フェイトさんとシャナが「桜（お兄ちゃん）がいない！」って言うておりてきた時はちよつと面白かったな。

シャナにデバイスを渡したら大喜び。

まあ、本当はもっと早く渡すつもりだったんだがな。

今日は俺は休暇を取っていた。

なのでヴィヴィオとシャナと共に聖王教会へ。

そう、1年前から寝たきりのイクス所へ行くことにした。

side out

なんやかんやでついたよ聖王教会。

ノーヴェさん達もいるし、暇にはならないだろう。

「こちらです」

セインの案内でイクスのいる部屋へ。

そして入ると眠っているイクスがいた。

「久しぶり、イクス。調子は・・・」

手を握って話しかける。
その手は暖かった。

「よさそうだな」

イクスのお見舞いの後。
俺らはウエンディ達と合流した。

「みんなごきげんよう♪」

「ああ、これは陛下」

「陛下、イクスのお見舞いはもう？」

「うん、デイド。いっぱい話したよ」

オットーとデイドと話しているヴィヴィオ。
そして”アレ”をやり市街地へ行くこととなった。

場所は変わって待ち合わせ場所。
そこにはコロナと新しい友達かな？

「コロナ、久しぶりだな」

「はい、お久しぶりです！」

「えっと、君は・・・」

「リオ・ウェズリーです！」

「よろしくなりオ。俺は高町 桜って名前だ」

「高町 桜・・・ってあの翼の英雄ですか!？」

ものすごくびっくりされる。

まあ、もう慣れてしまっているので普通に返そう。

「ああ、一応な」

この後ノーヴェも自己紹介。

先生だって聞いてますって言われて照れてたな。

また場所は変わって中央第4区公民館。

ストライクアーツ練習場。

そう、”アレ”とはストライクアーツの事だ。

全員が着替え終わった後練習に取り組むことに。

「さて、ヴィヴィオ。今日は久々に俺とやるか」

「うん! セイクリットSH! セット・アップ!」

「すみません、ここちよつと使わせてもらいます」

組み手をするとなるとみんなざわつき始める。
中心に来てお互いに構えた。

「行くよ。お兄ちゃん」

「どっからでも来い」

少しして組み手は終了。

周りはやっぱりざわめきが収まらないまま。

久しぶりにノーヴェさんとの組み手をやって今日の練習が終了した。

「悪い、チビ達送ってやってくれ」

「いいッスけど2人とも何かご用事？」

「救助隊の手伝い」

「了解ッス」

全員と別れ救助隊の手伝いへ。

そう言えばノーヴェさんと歩くのってすげー久々な気がする。

そう思っていると上の方から声が聞こえた。

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんと、翼の英雄、高町 桜さんだとお見受けします。あなた方にいくつか伺いたいことと、確かめさせていただきた事が」

第07話 覇王現る（後書き）

次回！

アインハルトと桜が激突！

勝つのはどっちだ！？

※ノーヴェは戦いません。

第08話 天に翼 地に覇王（前書き）

約1カ月ぶりの更新です。

スランプから若干抜け出てきてます。

とりあえず、楽しみにしていた方は楽しんでくれたら幸いです。

第08話 天に翼 地に覇王

「あなた方にいくつか伺いたいことと、確かめさせて頂きたいことが」

「質問をするならまずバイザーを外して名を名乗ったらどうだ？」

電灯上にたつ少女にそう伝える。

すると正直にバイザーを外して名乗った。

「失礼しました。カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルト。『覇王』を名乗らせて頂いています」

「噂通り魔か」

「否定はしません」

電灯から降りて同じ目線にしてくる覇王。
そして伺いたいことを聞き始めた。

「伺いたいののはあなた方への知己である『王』達についてです。聖王オリヴィエの複製体クローンと冥の炎王イクスベリア。あなた方はその両方の所在を知っていると――「知らねえな」――？」

「聖王のクローンだの、冥王陛下だのなんて連中と知り合った覚えはない。俺らが知ってるは、一生懸命生きてるだけの普通の子供と、俺の妹だ」

「――理解出来ました。その件については他を当たるとします。」

ではもう一つ、確かめたいことは——あなた方の拳と私の拳、いったいどちらが強いからです」

確かめたことは2人にとっては以外だった。まさか、こんなことを言ってくるとは。

「なので、防護服と武装をお願いします」

「いらねーよ。ガキ相手に使う気になれるか」

「そうですか」

そう言いながら桜は準備運動をする。

使う気にならないと言いながらもやる気なんじゃないかと思ってるノーヴェだった。

「それに、あんま俺と変わんないぐらいか？何でこんなことしてんだよ」

「強さを、知りたいんです」

「ふーん、馬鹿馬鹿しい——なっ！」

同年代相手に不意打ちをかました桜。普通の喧嘩好きだったら防げもしない攻撃を、覇王は防いだ。

「（初撃を防いだ。言うだけのことはあるっぽいな）UC!!」

デバイスを使ってもいいレベルだと、そう判断した桜はUCをセットアップさせる。

バリアジャケットはZEROの時とは違い、機動性に眼を置いたものとなっていた。

なので、フェイト程ではないがバリアジャケットは薄くなっている。

ちなみに、桜のこの状態での武装は腕の魔力刀のビームトンファーだけ。

内心、しまったとは思っている。

本当は足にビームサーベルが合計6本あったはずだが、あれはこの状態じゃなくて変身魔法を使った時だけだったと。

設定しなおすんだったと。

「ありがとうございます」

「こっからは全快でいく。ちなみに聞くが、強さを知りたいって言うのは正気か？」

「正気です。そして、今よりももっと強くなりたい」

「ならこんなことはやめて、真面目に練習するなりして自分を磨け。ただの喧嘩馬鹿ならここでやめろ。ジムなり道場なり、いいところ紹介するぞ?。」

「ご厚意、痛み入ります。私の確かめたい強さは、生きる意味は、表舞台にはなんです」

そう言って構えた霸王。

だが、この距離で構えても桜との距離は離れていた。

その場から何かをすると考えても、たいていは砲撃戦が予想される。しかし、霸王はそんな考えではなかった。

「な!?!」

なんと覇王は突撃チャージを使ってきた。

確かに、この距離からであれば奇襲にもなるだろう。

「(速い!?!? ステップ 歩法か!) うわっ!」

瞬く間に懐へもぐりこまれ、一撃を腹に入れられる。

ギリギリのところまで左手を間に入れ、受け止める形で防御できたが、勢いまでは止められず後ろへ下がってしまう。

「列強の王達を全て斃し、ベルカの天地に覇を成すこと。それが私の成すべき事です」

「ふー、寝ぼけたこと抜かしてんじえねえよ」

ただ静かに、桜は言った。

熱く、重い攻撃を仕掛けながらも言葉は静かに。

「昔の王なんざみんな死んでんのさ。生き残りや末裔だって普通に生きているんだ」

「弱い王なら、この手でほふるまで」

その言葉を聞いた瞬間、桜の頭の中にヴィヴィオとイクスの顔が思い浮かんだ。

ただ聖王のクローンだから、ただ冥王だから、こういう風に狙われて戦いに巻き込まれるのか?

あの素直な笑顔を、あの無邪気な笑顔を奪われるのか?

ふざけるな！

そんなことしていい権利なんて誰にも無いんだ！
俺にも、お前にも！

「この、バカ野郎があ！！！！！！！！」

「！！」

「ベルカの戦乱も！聖王戦争も！全部、ベルカって国そのもの！！
もうとっくの昔に終わってんだよ！！！！」

頭の中で、何かがキレる音がした。

同年代相手でも手加減なんて言う容赦はなくなり、ただ怒りにまかせて攻撃を仕掛けた。

しかも逃げられないよう、避けられないように両足と右手をバインドで止めて。

「アトランティス・ストライク！！！！」

決まったと、ノーヴェも桜も確信した。
だが、それが甘かった。

「！？」

一気に体の自由が効かなくなる。
何をされたかは一瞬で理解出来た。

（カウンターバインド！？捨て身でこの反撃をしようと言うのか！
？一歩間違えたら死んでたぞ！？）

「まだ、終わってないんです。私にとっては何も」

そう言って右手のバインドを碎き、ゆっくりと上げた。
そして一気に振り下ろす。

「霸王——断空拳」

「・・・ZERO」

振り下ろされると同時に、桜を縛っていたバインドが碎けた。

バインドは背中に現れた翼に引きちぎられたのだ。

そして桜は、その振り下ろされてきた右手をわし掴みにしてそのまま背負い投げをかける。

「がはっ！」

「ふう、まだやるんだろ」

「・・・はい。まだ、決着がついていませんから」

すぐさま立ちあがり、体制を立て直す霸王。

しかし、そんなのお構いなしで桜は右手に魔力を溜めて圧縮し始めた。

「だったら、この一撃で終わりにしようじゃないか」

「望むところです」

白銀の光が右手に宿る。

そう、あれを使う気なのだ。

「悪い、今俺は怒ってるんだ」

「!?!」

眼の前から桜が消えたと思うと、後ろから声が聞こえた。いつの間にか後ろに回り込まれていたのだ。

振り返るが時すでに遅し。

もう、桜の攻撃は当たっていた。

「レムリア・インパクト（弱）・・・」

眼の前が一瞬で白き光に包まれた。

side out

翌日。

少女、アインハルト・ストラトスは目を覚ました。だがいつもとは違う部屋だったので少し驚いている。

「あ、起きたみたいだな」

「・・・あ、あの、ここは・・・?」

コンコン

と、戸をノックする音が部屋に響く。それに対して桜は軽いノリで返した。

「はいはい」

入ってきたのはティアナとノーヴェだった。
ちなみにまだアインハルトはここが何処だかわからないでいる。

「おはよ、桜。それから・・・」

「自称覇王イングヴァルト。本名アインハルト・ストラトス。St.
ヒルデ魔法学院中等科1年生。間違いはないな」

「は、はい」

「ごめんね、コインロッカーの荷物出させてもらったの。ちゃんと
全部持ってきてあるから」

それを聞いてアインハルトは自分の荷物を確認した。
ちゃんと全部あるようで安心したようだ。

「制服と学生証持ち歩いてるなんて、ずいぶんボケた喧嘩屋だな」

「が、学校帰りだったんです。それに負けるなんて思ってませんでしたから」

顔を赤らめて言ってるが、それが本当だと言う事は全員知っている。
制服を持っていると言う事は学校帰りしかありえないのだから。

「ま、こいつに勝つなんて無理みたいなもんよ」

「俺の事化け物みたいな言い方やめてくれませんか？」

「あら？違った？」

「間違いすぎでしょ！俺だって負ける時ありますよ！・・・たぶん」

「たぶんなら間違っていないわね」

「もう諦めます。最近ティアさんに口で勝てる気しなくなっていました」

「あ、あの・・・、あの後はどうなったんですか？」

急にその事を聞いてきたアインハルトに桜は優しく答えた。

「なくに、ちょっといろいろなことがあっただけさ」

～回想～

「ふう、やっちゃったぜ☆」

「やっちゃったじゃねえよ！何やってんだよお前は！」

「え？レムリア・インパクト（弱）」

「技名聞ってるんじゃないやねえよ！何で本気で相手してんだ！」

「いやゝだってむかついちゃったから。ほら、ノーヴェさんだってアレ聞いてていらっと来たでしょ？」

「ま、まあ、そうだが・・・」

「とりあえず、この子を運びましょうか。さすがに風引いちゃう」

「そうしたのはお前だな」

「さて、助けを呼ぶか。あ、スバルさん、お久しぶりです。え？あゝ、それは後出でいいですか？とりあえず今からそっち行くんで。あ、ティアさんも居るんですか？はい、はい、じゃ、後でゝ。．．．と云うことでスバルさんどこ行きますよ」

「どういふことでだよ！！」

「だって、俺、この子家に連れ帰れる勇気ないですよ。帰ったら絶対シヤナがキレますって。俺、ある意味で死んじゃいますよ？」

「それはお前の教育の問題だろうが！まあ、いい。さっさと行くぞ」

「あ、これコインロッカーのカギだ。ノーヴェさんこれ頼んだ」

「は？アタシがやるの？」

「当たり前でしょ。俺、この子背負ってるし。てか女の子の荷物を男があさるのって犯罪みたいなもんですよ？」

「地味に説得力あるから言い返せねえ．．．」

「はいはい、とっとと行きましようよ」

「りょゝかい」

～回想終了～

「ってな感じだ」

「よく判らないんですけど・・・」

「つまり、気絶したお前をここまで運んだってことだ」

「そ、そうなんですか・・・」

「そうだ」

半ば強引にも感じるが、それは仕方ないと言うことでアインハルトも納得した。

横でノーヴェは、果たしてあれでよかったのか？なんて顔をしているが桜はそれを華麗にスルーすることにした。

「あー、みんなおはよ～」

ドアの向こうから聞こえる陽気な声に全員は反応する。
そして入ってきた蒼い髪の女性は手に料理を持っていた。

「お待ちせ♪朝ごはんです」

「なんだ、言ってくれば作ったのに」

「たまにはアタシのも食べてよ！いつも桜の料理ばかり食べてたらそれ以外食べられなくなっちゃうし・・・」

「確かにそうよね。あれにハマったら当分は抜け出せないわね・・・」

「俺の料理が毒物みたいに言わないでくださいよ。シャル先生が作ったものじゃないんだから」

「違う意味では毒物だよな」

「失敬な。美味しい料理と言ってください」

「はいはい、そこまで。とりあえず食べましょ」

「そうですね」

「あ、初めましてだねアインハルト。スバル・ナカジマです。事情とかいろいろあると思うんだけど、まずは朝ごはん食べながら、お話聞かせてくれたら嬉しいかな」

「ってなわけでお食事タイム& a m p; お話しタイム。
あ、旨いなこれ。」

「さて、とりあえず説明しておくか。ここはこの人、ノーヴェさんの姉、スバルさんの家だ」

「うん」

「で、こっちがスバルさんの親友で俺の元同僚の本局執務官」

「ティアナ・ランスターです」

「お前を保護してくれたのはこの2人だから、感謝するように」

大雑把な説明はだいたいOKだろう。
本人も、納得した、と言う顔をしているし。

「でも、ダメだよ桜。いくら同意の上での喧嘩だからってこんなちっちゃい子に酷いことしちゃ。下手したら犯罪だよ?」

「あ、あのスバルさん? お、俺、犯罪犯しかけましたっけ?」

「ようじ——」「言わなくていい!!」——そお?」

危うく、俺がロリコンになるところだった。
あれ?

シヤナと2人暮らししてた時でもうすでにロリコンになってんじゃね?

・・・よし、気にしないで次にいこう。
うん、それがいい。

「格闘家相手の連続襲撃犯があなたって言うのは・・・本当?」

「・・・はい」

「理由、聞いてもいい?」

「大昔のベルカの戦争が、こいつの中では終わってないそうなんです。そして自分の強さを知りたくて」

「あとは、なんだ聖王と冥王をぶっ飛ばしたいんだっけ?」

「最後のは・・・少し違います。古きベルカのどの王よりも、覇王のこの身が強くなること。それを証明できればそれでいいだけで・・・」

「聖王家や、冥王家に恨みがあるわけではない？」

ティアナの問いにコクリと頷くアインハルト。

それを聞いてスバルと桜はお互いに顔を見合わせて少し笑った。

「そう。それならよかった」

「もし、恨みがあつての行動だったらまたキレてたな」

「スバルと桜はその2人と仲良しだから」

「そうなの」

「兄妹だからな」

「あ、冷めちゃうから、よかったら食べて」

「・・・はい」

「後で近くの署に一緒に行きましょう。被害届は出てないって話だし、もう路上で喧嘩とかしないって約束したらすぐに帰れるはずだから」

「ああ、ティアさん。今回、先に手を出したのは俺です。なので俺も一緒に行きます。喧嘩両成敗ってやつです。アインハルトも、それでいいよな」

「・・・はい、ありがとうございます」

「もうちょっと元気出せよ、反省しているのはわかったから。もう少し明るくした方が可愛いぞ？」

「そ、そうですか？／＼」

「ああ、俺はそう思う」

「じゃ、じゃあ、少しだけでも明るくします／＼」

この後、全員で近くの署へ向かった。
ちなみに――

「俺、今日の教導どうしよう・・・」

「もしかしたらなのはさんに怒られるんじゃない？」

「違う、怖いのは母さんじゃなくてマリナだ・・・」

「どうして？」

「俺の首が飛ぶ・・・」

『・・・まあ、理由を話せば大丈夫だよ（だと思えます）』

「まだ、全員にちゃんと教導してねえのにクビなんていやだくくく
！！！！！」

第08話 天に翼 地に覇王（後書き）

はい、次回はとりあえずアインハルトとヴィヴィオの回です。

時間かかるかな？

俺の気分次第だな。

とりあえず誤字脱字、感想あればお願いします。

第09話 ハーレムへの第一歩（笑）（前書き）

今回はアインハルトとヴィヴィオの回のつもりでしたが、変更をしてちょっとお楽しみなタイムにしました。

今回はまさかあの人がこんな行動に出るとは！！

ある意味で必見です（笑）

第09話 ハーレムへの第一歩（笑）

「とりあえず連絡しとかなきゃな」

そう言いながらおもむろに携帯を取りだす。
そして、ある相手に電話をかけた。

「あ、もしもし」

『もしもし桜君？』

「あゝ、そうだが？」

『今日来るの？早く来ないと君の首が本当に飛ぶよ？』

「いや、その事なんだが・・・」

『あ、もしかして彼女とデート？私と言うものがあるなら』

「どういう意味だ！？と言うかお前は俺の何なんだよ！！」

『上司？』

「怖いわ！」

『で、どうするの？このまま休むなら君の首が飛ぶけど』

「いや、それだったらいくよ！そのかわり遅くなるけどいいか？」

『はいはい、わかったよ。それじゃ』

そう言って電話が切れる。

さて、出来るだけ早く行かなければ。

「行くのか？」

「はい。まあ、ある程度の遅刻はしてもいいと言われたので、終わったら」

「そうか。じゃ、アインハルトは任せとけ」

「頼みます」

この後、アインハルト達と別れ教導隊へ向かった。
アインハルト達、うまくやってくれるといいんだけどな。

side out

「で、結局どうして遅れたのかな？」

えー、現在土下座中。

理由は普通に謝るためです、はい。

「正直に話してくれれば許してあげない事もないよ」

「えーっと、12歳の子供相手に喧嘩を売られて、その喧嘩を買ってぼこぼこにした後、知り合い（女性）の家まで運んで泊らせてい

ただき、そして今朝、被害届け等を書いてきてこの状態になりました。本当にすみません」

「桜君はいつからロリコンになったのかな？私のがっかりだよ」

「え！？いや、俺はロリコンじゃ——」

「まだ顔上げない」

「はい・・・」

めっちゃ怖いです。

女の人って怒るとどうしてこんなに怖いのか？

俺はどうしてこんなに頭が上がらないんだ？

上司だから？怒ってる女の人だから？

どちらにせよ、今の俺は限りなく無力だ。

「・・・ふむ。よし、立っていいよ」

「ありがとうございます」

「その代わり、今からお仕置きでもしようかな。眼、瞑ってくれる？」

「こうですか？」

言われるがままに目を瞑る。

えっと、今から何されるんですか？

こんな時ってチラ見とかしたいよな。

こう、薄目でチラッと――

「んむ!？」

・・・マジで？

これ、冗談とかじゃないよな？

俺、今キスされてる？

「・・・」

「・・・ん」

この状態になってからどのくらい時間が流れたのだろうか。

わからないぐらい体感時間がクルって来てる。

しかも、お互い何故か動けないから放せない。

「・・・」

「マ、マリナ・・・？」

「ふふ、どう？私の唇」

「ど、どうって、お前」

「私ね、本当に桜君が好きなんだよ。だから、ファーストキス、あげちゃった」

「え、お前それって・・・」

「このまま、この先もしちゃう・・・？」

そう言いながら再び顔を近づけてくるマリナ。
後ずさりをするが、最終的に壁まで付いてしまった。
そしてさっきから、胸の高鳴りが止まらない。
ドキドキしていて、マリナの顔をまともに見れない。

「お、おい、俺まだ16なんだけど・・・」

「気にしないでいいよ。こういう時は、年上の私がリードしてあげるから」

「そう言う問題じゃなくて――」

「大丈夫。みんな事務作業やら、教導やらで忙しいから。よほどのことが無い限り誰も来ないよ」

俺の右手を取り、そのままその手を自分の胸元へ持っていく。
柔らかい感触と、ドクン、ドクンと言う鼓動が感じられた。
なんだか、こっちもそんな気分にもなってしまう。

「わかる？私の胸、こんなにドキドキしてるんだよ。これも全部、桜君の事考えるとこうなっちゃう」

「マ、マリナ・・・」

「だから」

そう言って再びキスをしようとした時だった。
コンコン、とドアをノックする音が部屋の中へ響く。
その音を聞いた瞬間、ドキドキは冷めて、2人とも即座に離れた。

「ごほん。・・・どうぞ」

「失礼します」

「リナ、どうしたの？」

「えっと、桜さんが――ってあれ？桜さん、来てたんだすか？」

「ああ、さっきな。で、マリナに・・・謝りに来ていたんだ」

さっきまでの事を、誰かに言うのはマジでまずい。
俺とマリナが・・・もう、この事を考えるのはいったんやめよう。

「遅刻で？」

「そう」

「珍しいですね」

「そうか？俺も人間だ。寝坊もするし、遅刻だってする。まあ、今回は例外だな」

「例外？」

「あ、それはこっちの話だ。気にしないでいい」

「そう、ですか。とりあえず、今日も来てくれてよかったです。昨日はちょっとさびしかったんですよ。アウルもなんだか寂しそうな顔もしてたし。リーフも私も瑠璃も、みんな寂しかったんですよ？」

「すまんすまん。休み取る時は言わなきゃな。みんなに心配かけちゃうし」

「・・・」

「？ ああ、悪い、後で行くから戻ってろ」

「わかりました」

そう言い残してリナは部屋を出て行った。
そして、再びさっきの状況へ戻る。

「なあ、マリナ」

「・・・何？」

「考えさせてくれ。なんか、さっきのは勢いとかもあってな、あのままりナが来なけりや本当にやってたかもしれない。だから、考えさせてほしい」

「・・・ちゃんと、私を選んでよ」

「難しいな。好きな人が増えるのって」

「私は桜君一筋だけど」

「わかったから」

この後、俺も部屋を後にした。

そして、みんなの教導へと移ったのだった。

第09話 ハーレムへの第一歩（笑）（後書き）

はい、なんだかすつごく奇妙な回でしたねw

まさかマリナがヒロインに加わるとは!!

（自分でもどうしてこうなったかわからない）

さてはて、果たして桜君はフェイトとマリナ、そして後に出てくるであろうヒロインたちの誰を選ぶであろうか。

（それは未定です）

そう言えばあの人がいるじゃないか！

よし、そうときまれば行動だ！

善は急げってヤツだ！

ちなみにここと言えばネタばれになるので言いません。

でも、察しがいい人はわかるかも？

とりあえず次回もまだまだ未定です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第10話 高町桜の憂鬱 第二

「ねえ、クロノ」

「なんだユーノ」

「僕ら、桜に呼ばれたんだよね」

「ああ、なんでも相談に乗ってほしいだったか？ こういう時は、年上が相談に乗ってやらねば、誰が乗ると言うのだ」

「いや、そうじゃなくて。なんで僕らかって事だよ。桜だったら母親のなのはや、恋人だっけ？ フェイトもいるし、もっと言えばやて達だっている。それにスバルやティアナも居るよ。なのにどうして本局や無限書庫にいる僕らなの？」

「・・・それは・・・どうしてだ？」

「いや、僕に聞かれても・・・」

2人の他愛もない話。

14年前からの付き合いなのでこういう話をするのはわからないでもない。

と、そんな話をしている時だ。

「すみません！遅くなりました！」

向こう側から今回呼びだした張本人、桜がやってきた。

遅れていた理由は――読者の方々なら察してくれるだろう。

「いや、僕たちもさっき来たところだよ」

「ごめんなさい、上司といろいろありまして」

「大丈夫なのか？悩みも抱えているようだし」

「はい、なので今回はお二人に相談がありましたー」

その後2人は桜の話聞いた。

その内容は、この2人だからこそ驚くものであった。

side out

「と言う事なんです」

「簡単にまとめると、つい先日上司のマリナ・ストライク三佐に告白をされ、さらに危うく襲いかけた、で良いのか？」

「はい。お恥ずかしいことながら、フェイトさんがいるのに・・・」

顔を伏せたままそう言ってくる桜。

なんだかその顔は不安の色しか見えない。

2人から見ても、他人から見ても「悩んでるな」と言えるような顔でもあった。

「俺、どうしたらいいのか。なんだかいやな予感しかしません。この先、絶対誰かが出て来ます」

「誰かとは？」

「わかりません。でも、なんだかそんな予感がするんです」

「（これは・・・）」

「（相当だな・・・）」

「で、母さんたちにも相談はしたいんですけど・・・なんて言うか、言い出せなくて。俺の唯一ってわけじゃないですけど、男の知り合いが2人しかいなくて。とりあえず、2人に相談してみようって思って今日来てもらいました」

なんだかもうどうしたらいいかわからない子供のような顔だ。
泣きそうではないものの、やっぱり顔に「不安」と堂々と書かれて
いるようにも見える。

母親や知り合いにはほとんどが女性。

女の人はいろいろと恋愛関係の相談には強そうだ。

だが、やはり言い出そうとするとなかなか話せない。

同性の男であるクロノとユーノなら話せると思ったのだろう。
でも、やっぱり悩んでいる。

「（なあ、ユーノ）」

「（な、なにかな?）」

「（これをどうしろと?）」

「（どうって、なのは達には言いたくなさそうだし、他にもあてがなさそうに見えるし、放っておいたらなんかそのまま永遠の旅にも出ちゃいそうだから放っておけないんだけど・・・）」

「（やっぱり）」

「「（僕は恋愛経験があんまりない！！）」」

「お二人なら、恋愛経験とか・・・なさそうだけど、なんだか力になってくれないかなって思いました。・・・助けて下さい」

ずばり心を見抜かれた2人。

しかも桜はなんだか今にも泣きそうな顔に代わっている。
ますます放っておけなくなってきた。

「そ、その、なんだ、そう考えすぎるな」

「そ、そうだよ。とりあえず、飲み物でも飲んで落ちつこう」

「はい・・・、ありがとうございます」

「「（ダメだ！完璧に落ち込んでる！！）」」

side out

一方その頃。
教導隊では。

「また休み取るなんて、桜さん、何かあったのかな？」

「んー、俺らが考えてもしょうがないだろ。今度来たら聞いてみようぜ。で、困ってたら相談乗ってさ」

「桜さんが元気じゃないと私達もなんだか元気がなくなっちゃいますよね」

「兄さん・・・」

「あれ？アウルって桜さんの事そう呼んでんの？」

「・・・（コク）」

「あ、なのはさんだ。ちょっと聞いてみようよ」

「そうだな」

ちょうど通りかかったなのはへ声をかける4人。
その声になのはは振りかえり、話をする事に。

「え？最近桜に元気がないからその原因を知らないかって？」

「はい。今日も休みを取って、何処かに行ったみたいで。私達との訓練の時もぼーっとしてて一本取られちゃうとかありまして」

「確かに、最近は元気ないね。朝起きたら、ぼーっとしてることも多いし、デスクワーク中も画面見たまま固まっちゃうこともあるし、料理作ってる時も砂糖と塩を間違っちゃうし。私もどうしたんだろ

うねうねって思ってたんだ」

「そこで、母親であるのはさんは原因になりうる事を知ってるんじゃないかって思い」

「うーん・・・あんまりないかな。フェイトちゃんとシヤナは最近自重してるし、ヴィヴィオも何かしたってわけでもないし、私もこれと言って何かしたわけでもないし・・・」

「もしかして、気付かないうちに何か言ったとか・・・ってそんなことありませんよね。家族ですもん」

「・・・」

「なのはさん？」

そこで黙り込むのは。
ちよつとの間、考え込んでいる。

「・・・言っちゃったかもしれない。たぶん・・・」

「ええ!？」

「マジですか!？」

「わかんない。でも、今度聞いてみよう!」

「お願いします! 桜さんが元気ないと、みんなも元気なくなるんで!」

「そうです！お願いします！」

「う、うん！」

こっちはこっちでいろいろと悩んでいた。

side out

「はぁ・・・」

こちらに戻ってきて桜の様子。

未だに何の解決なしの表情でさっきからため息ばかりついている。

「（・・・これは相当だな。筋金入りと言ってもいい）」

「（いや、これはそこらへんの恋愛小説に出てくる恋する乙女以上だよ。考えすぎも程があるって）」

「あ、やば、時間・・・」

ここで腕時計を見た桜が声を漏らした。

今日はもともと、休み時間を延長しまくってきていたのだ。

なので時間が来れば戻らなければいけない。

「・・・解決してないがいいのか？」

「・・・良いわけじゃないですか。でも、時間なんで戻らなきゃ」

「でも・・・」

「2人には俺の気持ち、理解できますか？好きな人が1人じゃなくて、2人に増えるって相当悩むんですよ。今の今まで好きだった人を取るか、つい先日告白された上司を取るか。一途で一筋な2人に、理解できますか？」

「うう・・・」

「そう言われると・・・」

「でしょ？だから、こういう時は1人で限界まで考えます。それで答えが出なけりゃ・・・その時はその時でどうにかします」

その言葉を聞いて2人は目を合わせる。

もう、何を言っても無駄なのだろうと確信した。

そして同時に「桜は本当に一途で一筋で初心」だと言う事を理解した。

「何かあったらすぐに言え。いつでも相談相手になってやる」

「そうだよ。僕らはいつでも味方だからさ」

「ありがとうございます。あ、これ以上遅れるとまたマリナに怒られるな。それじゃ」

そう言い残して先にその場を去る桜。

その背中にはシャキツとしているのか、ダラーンとしているのか、よく判らない背中であった。

2人はやはり心配で、その背中が見えなくなるまで見守っていたのか。

side out

「・・・あんなこと言ってきちゃったけど、やっぱり1人じゃ無理だな・・・。誰に頼ろう。ヴァイスは・・・信用できないし、フェイトさんは・・・殺されるな、誰が一番適任なんだろう・・・」

こんな時に一番頼りになる人と言うのは意外に見つからないものだ。しかも、先ほどにも説明したように周りにはほとんどが女性。この事を言い出せて、さらには頼れる人なんてそういない。

「・・・あの人なら、ばっさり切ってくれるかもな。・・・あ、もしもし、お久しぶりです。え？いや、そんなじゃないですよ。えっと、空いてる日、ありますか？明日・・・ですか。いや！そんなことはありません！じゃあ、明日、教導隊の方に来てもらえますか？ちよっと、頼みたい事がいくつか。はい、ありがとうございます」

連絡を終えて電話を切る。

その顔は未だに、と言うか最初よりも不安な感じになっていた。何が不安なのか、何がいやでそんな顔をしているのか全く分からない。

だが、これだけは言える。

悩みを抱えてるんじゃないと言うことだ。

第10話 高町桜の憂鬱 第二（後書き）

えー、今回のゲスト（相談相手）はクロノとユーノでした。

ちなみに今回から、桜の相談相手がどんどん出て来ます。

もしかしたらその中にフラグを立てる人もでてくる！？

サブタイトルが当分続くかもしれません。

と言うか続きます。

とりあえず、応援してくれると嬉しいです。

誤字脱字、感想もあればお願いします。

第11話 高町桜の憂鬱 第二 前（前書き）

今回はあの人ゲスト（相談相手）！

姉御！相談乗って下さい！！

第11話 高町桜の憂鬱 第二 前

「ただいま」

「お帰り」

家に帰るとヴィヴィオが出迎えてくれた。

シヤナもその後ろから出てきた。

それに、ヴィヴィオの顔がなんだか嬉しそうだ。
何かあったのかな？

「どうした？ 良いことあったのか？」

「うん！ 今度、ノーヴェが紹介してくれた新しい格闘技をやってる人と試合するの！」

「へー、それで気合い入ってるのか」

「その通り！」

新しい格闘技をやってる人？

・・・ノーヴェさんが紹介したって事は・・・。

「その子、アインハルトって名前か？」

「え？ なんで知ってるの？」

当たり前。

仲良くやってるみたいで何よりだ。

「ノーヴェさんと同じタイミングで俺も知ったからな。一応手合わせはしてあるぞ」

「そうなんだ」

「今日は、何食べたい？」

「何でもいいよ。お兄ちゃんの料理美味しいもん」

「シヤナはリクエストあるか？」

「うん・・・」

「無理に考えなくてもいいからな。なければないで美味しいもん作るから」

「うん、思いつかないや」

「そっか。じゃ、手伝うか？」

「うん！」

一旦何もかもを忘れたい気分だ。

どうすればいいんだよ、俺は。

なあ、こんな時お前がいてくれたらどうする？
アル・・・。

side out

「はぁ・・・」

夕食を取り、風呂にも入った。
後は特に何もすることもなく、とりあえずベランダで空を眺めていた。

「あ、あれまだだったな」

毎日欠かさずやっていたあ”れ”とは。
おもむろに魔導書——死霊秘法を取り出し、開く。

「我、死霊秘法の主なり。管理人格、アル・マジフの体を形成するために必要な魔力は後どれほどだ？」

問いかけるが応答しない。

だがこれはいつものことだ。

ページをペラペラとめくり、文字が書かれていたページを見つけた。

そこには『現在、267ページ分の魔力が溜まっております。管理人格の体を形成し、再び活動させるためには後233ページ分の魔力が必要とされます。なお、この魔力は今も流れ続けているため、供給をやめてしまえば溜まっていた魔力は0ページとなってしまいますので、供給を絶やさないでください。———』などなど、いろいろな書かれていた。

ふむ、今のところ267ページ。

これまでの期間は半年近く。

ちよびちよび入っていたが、この調子なら、頑張ればもう少しと言

ったところだろうか。

「・・・魔力供給をする。今回はギリギリまでやってくれ」

ページに書かれていた文字が一気に消え、そして一言浮かび上がった。

『了解』、と。

その直後、全身の力が抜ける。
なんだか久々に魔力切れに危険性を感じた。

しばらくして、脱力感は消え去った。

ページを見てみると『今回の魔力供給で87ページ分の魔力が溜まりました。後、180ページ分の魔力が必要です』と書いてある。

俺の魔力で87ページ・・・。

でも、半分近くは流れて意味無くなるんだろうな。

「さて、今日はもう寝よう。明日は気合い入れなきゃな。あの人の相手はつらいんだし」

こうして夜は更けて言った。

side out

翌日。

今日は、いや、今日もと言った方が良いな。

何故か最近、マリナやフェイトさんが夢に出てくる。

そのことを考えて朝はぼーっとしたままの事が多い。

「お兄ちゃん、朝のランニングいこ〜！」

「・・・」

「あ、またぼーっとしてる。どうしよう？」

「なのはママたちに言っておいて、私達は行こ」

「そうだね」

「・・・あれ？誰かいた？」

ぼーっとしていると周りの声も聞こえない。

いや、本当どうしたらいいんだろうか・・・。

side out

「えっと、今日は来てくれてありがとうございます。シグナムさん」

「うむ、私もお前やマリナに久しぶりに会えてうれしいぞ」

「あ、知り合いだったんですか・・・」

「ああ、本局でな」

「そうですか」

現在は仕事場、教導隊だ。

今回はシグナムさんに来てもらい、教導と相談、二つをやってもらおうかと。

ええ、相談の方は言ってますんよ。

まあ、もともとそっちが目的で呼んだのに言っていないってどうかと思うけど別に気にしない。

「その、なんだ、私としてはお前に呼ばれると言うものが意外だな。シヤナの世話ではなく、教導の頼みなど。お前なら、全部一人でできるんじゃないか？」

「こう見えても俺は器用貧乏です。でも、シグナムさんは剣術に特化している。なので、その点で力になってほしいかなと」

「ふっ、まあいい。私を呼んだんだ。覚悟は出来てるな」

「え?」

「やるぞ、模擬戦を」

「あ、あははは・・・マジすか・・・」

side out

例によって例がごとく、シグナムさんと呼ばばたいの確率で模擬戦確定。

まあ、このくらい覚悟は出来ていたさ。

でもさ、ちよつとの確立に掛けてたけど、こうあっさり碎かれると

ショックを受けるって言うか、なんというかわからない気持ちになる。

とりあえず、さっさと終わらせよう。

そして、バツサリと切ってもらおう。

別にMじゃないからな？

この状況から早く抜け出したいからなんだ。

「では、行くぞ」

「えっと、今更謝っても無意味ですよね？」

「謝ってもいいが、それで私が満足すると思うなよ」

「聞いた俺がバカでした」

よし、さっさとやってさっさと終わらせようか。

うん、それがいい。

良いに決まってる。決まってるはずが無い！

「最初から本気で行かせてもらう！」

「おっと、不意打ちッスか？」

「こんな程度ではお前は落ちないだろう？」

「どうだか。今の俺、どうかしてるんで簡単に落ちますよ？」

「なら、これをまともに受けて目を覚まさせてやろう。紫電——」

RTを上げ、構えを取る。

そして渾身の一撃を叩き落とした。

「一閃!!」

「!?!」

彼女の最強の一撃が、見えなかった。

否、見ようとしてなかった。

自分でもわからない。

何で見ようとしていなかったのか、こんなの自分らしくない。

この一撃をくらい、下へと真っ逆様。

土煙を上げ、瓦礫の中へと突っ込んだ。

「けほ・・・」

「どうだ？目は覚めたか？」

「・・・ええ、ちょっと余計な事考えすぎてました。こっからは、本気と書いてマジで行きますよ」

そうだ、一旦何もかも忘れよう。

マリナのこと、フェイトさんのこと、なやんでること全部。

今は目の前の相手を叩き潰すことだけを考えろ。

どれだけの屈辱を与え、どれだけの恐怖を味あわせられるか、そのことだけを考えるんだ。

「ZERO」

『サイスフォーム』

「戯曲・・・終焉の漆黒・・・」

「な!？」

ガキン!

武器と武器がぶつかり合う音がした。

だが、一撃だけで終わる気もないし、終わらせる気もない。
なにせ、”柄”で攻撃したんだから当然だろ？

「さあ、我が手の内で躍れ」

抵抗の隙も与えない、あげる気にもなれない。

切って、殴って、蹴って、何回も何回も切り刻む。

どんな状態になろうと、どんなに叫ぼうと、やめるなんて絶対にしないから安心しろ。

「全ては終焉の時を迎え、破壊と、創造を繰り返す・・・」

もうすぐ終わりだ。

残念だが、これで終わりにしよう。

「さあ、終幕の時だ」

最後の一撃はお前がやったのと同じように渾身の一撃にしよう。
気にするな、切られて死にはしない。

ただし、衝撃などの何かのショックで死ぬかもしれないがな。

「終わりを迎え、消えるがいい!!」

魔力を込めた、渾身の一撃がシグナムさんを切り裂いた。
最後には、何も残っていない・・・。
残っていたのは俺だけだった・・・。

第11話 高町桜の憂鬱 第二 前（後書き）

最後の方の桜はめちゃくちゃ暴走してましたね。

思考がいららない状態だったので、しょうがないと言えましょうがな
いですよね（笑）

ちなみにあの時の桜のの頭の中の事は「悩み関連」「ストレス」「
他」でした。

で、「悩み関連」を取り除いたので、残った「ストレス」を発散す
るために暴走したって訳です。

とりあえず、サブタイトルに「前」と書いたので、次回もシグナム
さんが出て来ます。

ええ、フラグを立てますとも。

言わなくてもわかってましたよね？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第12話 高町桜の憂鬱 第二 後

桜とシグナムが模擬戦を始めるちよつと前。
モニターで見ていたマリナは・・・。

「むう、なんだか桜君とシグナムの仲が異様にいい気がする・・・」

嫉妬していた。

いや、ちよつと違うかもしれない。
とりあえず2人の様子を見守っていた。

「まさか、シグナムもライバル・・・!?」

「マリナさん、仕事してください」

「これは・・・強敵ね・・・」

「無視しないでください!!」

シグナムをライバル視していたマリナであった。

side out

「で、話とはなんだ？」

現在、午後がオフシフトだったので八神家へ来ている。
教導が終わったあと、シグナムさんに話を聞いてもらおうと思い、

結果的には教導隊で話すのは気まかったので家に行こうとなったのだ。

ちなみに桜の顔は今にも泣きそうなぐらいの顔でもあり、もってしまえば、まさしく子犬のような顔だ。

「え、えっと・・・なんて言うか、その・・・」

ユーノとクロノの時とは違い、相手は女性だ。
やはり言い出しにくい。

だが、ここまで来たら言わなくてどうする。

「なんだ？ 言いにくいのか？」

「え、えっと、ええ、まあ、はい・・・」

「そう固まるな。今、お茶を持ってくる」

「あ、ありがとうございます」

そう言って部屋を後にするシグナム。

今日ははやて達も居たのか、違う部屋での話声も聞こえていた。
しばらくしてから、戻ってきたシグナム。

その手には紅茶が入ったカップが握られていた。

「安心しろ。主はやて達も居るが、聞こえはしないだろう」

「はあ・・・」

「それに、私はお前の悩みが気になる。いつものお前なら悩みなど、

すぐに解決しそうなのだがな」

「これは・・・その、言える人が周りには少ないんで、解決まで時間がかかるんです」

「そうか。でもまあ、なんにせよ安心しろ。私に聞いて悩みが晴れるなら、力になるぞ」

この時のシグナムの顔を見た桜はついこう思ってしまった。

この人に頼ってよかった、と。

そして、感謝の意味を込めて、今までの最大の笑顔で返した。

「ありがとうございます」

この笑顔は、まさしく殺人スマイル。

お堅いシグナムも、これの前では面食らう。

「お、おう／＼」

「じゃあ、早速本題に入ってもいいですか？」

「あ、ああ。望むところだ」

Side out

「と、言う事なんです」

「ほう。つまりつい先日、マリナに告白をされ、さらには襲いかけ

たと

「まさしくその通りです」

「・・・そうか、お前も大変なのだな」

「はい・・・」

「とりあえず、お茶のお代わりでももってこよう。解決はその後だな」

「ありがとうございます」

また部屋を出ていくシグナム。

しかし、今度はなんだか違っていた。

何が違うのかは本人にもわからない。

でもなんだか桜を見ているとドキドキすると言った感じだ。

「どうしてしまったのだ私は。あんな笑顔一つでここまで動揺するとは」

「それはたぶん恋やな」

「あ、主はやて！」

「シグナムも恋をするようになったか。まあ、相手は桜や。強敵やで。さらに周りも強敵だらけやな」

ちなみに周りの強敵とはフェイトの事だ。

あの人は本気がなれば大変なことになるだろう。

もしかしたら途中で強敵が増える可能性も・・・。

「ま、待って下さい！それはわ、私が、桜が好きだと言う事ですか？」

「そうやな。気になるんやろ？桜のこと」

「ええ、まあ」

「それなら、ちゃんとアプローチせなあかんよ。鈍感な子は本当に、正直に伝えな気付かんしな」

「は、はぁ・・・」

「ちなみにウチもノリで好きになってみようかな。気になる人もおらんし」

「ええ!？」

「ま、ほとんどはシグナムを応援するけどな」

「ビ、ビックリさせないでください。本当に驚いてしまいましたから」

「ゴメンゴメン。ほら、待たせたらあかんよ」

「は、はい」

こうして部屋へ戻って行った。
と言うか、はやてのノリってそんなに軽いものなのか。

たぶん、後々本気で好きになるのだろうな・・・。

「すまん。待たせた」

「いえ、そんなことは」

「そ、そう言えば、迷っていると言っていたな？」

「え？ああ、はい。フェイトさんとマリナ、どっちもは選べませんし」

「そうか。なら――」

シグナムは決意を決めた。

好きなら好きで、最後まで突き通す気だ。
そして告白する。

「なら、私を好きになれ！／＼」

「・・・へ？」

「だから！私を好きになれと言っているんだ！／＼私はお前が好きだから・・・」

「え、えっと・・・ええ！？」

「テストロッサやマリナが怖いと言うなら、促成事実を作ってしまうばいい！！」

「ちょ、なにさりげなく危ない事口走ってんですか！！て言うかど

うしてそんな結論に!？」

「ええい! ウジウジするな! 男であろう!」

じわじわと迫ってきたシグナム。

あれ? なんかこれ、デジャヴじゃね?

おかしいな、これ、前にもあったよな?

と言うかそんなことはどうでもいいから、今はこっちをどうにかしなきゃ!

「ストップ!! さすがにこれ以上はストップや!!」

「はやてさん・・・」

「主はやて・・・」

「あのな、シグナム。いくらアプローチと言っても、勢いに任せすぎるのはあかん。さすがに桜も困ってたやろ?」

「は、はい」

「だいたいな、こういう時は——」

この後淡々とはやてによるシグナムへの説教が続いたとき。

そして、この状態では例によって例がごとく、桜は空気と化していた。

side out

「え、えっと、俺は何を手伝えば？」

はやてさんが説教をしている間。

俺は何もすることが無いのでシャル先生の手伝いをすることにした。

と言っても、何か特別な事をするわけではない。

「うーん、じゃこの中、かたずけるの手伝ってくれる？」

「はい、わかりました」

開けられた扉の向こうは薬だらけだった。

きつと、いろんな効果の薬があるんだろう。

絶対に落としたりしちやいけないな。

「うーん、何からかたずけよう。おっと」

「大丈夫？何かあったら言ってね」

「はい。って、うわっ！！」

最速で転んだ。

いや、何に引っかけたかすらわからない。

とりあえず、体を起こした時だった。

ガンッ、と大きな音がする。

それと同時に、頭のとっぺんへ痛みが走った。

どっかの棚にぶつけたのだろう。

そして、ぐらぐらと音がする。

まさか、この状態は・・・上を見てはいけないんだろう。

上を見ずにその場にいたら次の瞬間――

「痛っ!!」

頭に何かが落ちてきた。

しかも数個。

液体も入ってたみたいだし、やばい気がする。

そして、この辺りで意識は途切れた。

side out

「桜君？だいじょ――」

シャルがパリンっという物音を聞き、駆け付けた。
だが、時はすでに遅かった。

いや、もう少し早く着いても結果は同じだったろう。

なにせ、頭に落ちていたものは代わらなかったのだから。

そして、桜を見たシャルは言葉を失った。

理由は、見ればわかる状態であった。

そこには桜がない。

その代わり、見知らぬ少年が座っていたのだ。

「き、君、大丈夫？」

「・・・??？」

その振り向いた姿は、まさしく昔の桜だった。

第12話 高町桜の憂鬱 第二 後（後書き）

よし、これでシグナムさんとのフラグは立てたな。

はやてはついでとして。

後は誰を追加しようかな（2828

とりあえず、今回のシグナムさんは暴走気味でしたね（笑）

そして、最後の桜の幼児化。

次回はどうなる！？（未定です）

ちなみに、次回のサブタイトルは変わりますが、また今回と同じサブタイトルになる時があります。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第13話 幼児化桜八神家入り!

「ひっく・・・ぐす・・・」

八神家の一室。

そこで少年は泣いていた。

そして、はやては見つけた。

1人悲しく泣いている少年を。

「どうして泣いているか、教えてくれへん？」

「もう・・・殺したくない・・・。殺したら・・・誰も居なくなる・・・。1人はイヤだよおう・・・寂しいのはイヤだよおう・・・」

「そか・・・。なら、もう殺さなくてええんよ」

「本当・・・？」

「うん、本当。だってウチも寂しいのはイヤやもん。だからもう、殺さなくてもいいんよ。それに泣きたい時は泣いてもええ」

「本当に本当・・・？」

「本当に本当やって。ほら、泣いてもええから」

膝を抱え、少し泣きながら答えてくれた少年は顔を上げる。

そこには手を広げていたはやてがいた。

そして、そののまま抱きついて泣きだしたのであった。

side out

「??.?」

桜がいる場所。

さらに言えば、”いた”場所だろうか。

そこに1人の少年はだぼだぼの服を来て、頭の上にたくさんの疑問符を浮かべていた。

「あ、あの――」

「!?!」

物音を聞き、駆け付けたシャマルが声をかける。

その声に反応したか、すぐに振り向くやいなや、だぼだぼの服を結び動きやすくした。

そしてあろうことか次の瞬間――

パリイイインッ!!!!!!

窓ガラスを割って庭へと飛び出したのであった。

side out

パリーイインッ！！！！！！

窓ガラスが割れる音が家全体に響く。

その音のおかげでシグナムへの説教も中止にとりあえず、音がした部屋へ全員が急いだ。

「シャル！」

「なにかあったんか！？」

「え、えっと・・・桜君が・・・」

「桜がどうかしたのか！？」

「うーん、言いにくいんだけど・・・」

困惑気味のシャルにずいずいと迫るシグナム。
本気で心配なのだろう。

「？ これは、数種類の薬品が入ってたヤツじゃないか？」

「え？ あ、そう！ えっと、桜君がそれを頭から被っちゃって！ それで来てみたらちっちゃな男の子がいて、それで桜君のだぼだぼな服を着てその窓からお庭へ！」

「・・・待て。つまりはその男の子とやらが桜なんじゃないか？」

「あ、そっか」

「って、納得しとる場合やないやろ！ はよ捕まえんと！」

「そ、そうですね！」

「とりあえずみんなは桜を追ってな。ウチはヴィータに連絡しておく」

「了解です!!」

追いかけるメンバーはシャマル、シグナム、ザフィーラ、リィン、アギト、はやての6人。

今日もヴィータは教導なのでまだ帰ってきていない。

「あ、もしもしヴィータ！」

『どうしたんだよはやて。そんな大声出して』

「そこになのはちゃんおる!？」

『え? うん、いるよ』

「じゃあ、大急ぎで! 至急なのはちゃんと一緒に帰宅するんや! 事情は帰ってき事情は説明する!!」

『ええ!?! ああ・・・とりあえず、急いでみる』

「頼んだで!」

これで増援は確定だ。

と言うかどうしてここまで大騒ぎなのだろうか。
普通に捕まえればいいものの。

だが、全員は桜の身体能力を知っていた。
9歳のころの身体能力でもあれほどだ。

それより小さくなったってさほど変わりはないだろう。

と言うか、小さくてすばしっこくてやけに強いなんて聞いただけで
大変だ。

もしストレス発散のために家を壊されたらたまったものではない。

なんにせよ、早急に捕獲することが大切なのであった。

side out

「まちなさーい！」

「待てよー！」

現在桜君（仮）逃走中。

だぼだぼだったズボンのベルトを無理やり締め、だぼだぼなTシャツを着て、八神家の庭を爆進していた。

それにしても、なぜ逃げるのだろうか。

普通なら、逃げる理由などないはずなのに。

だが、その考えは甘かった。

被った薬品の中には何故か記憶喪失になる作用があるものもあった。
しかし、他の薬品も混ざり効果が弱くなったか、中途半端に記憶が残ってしまい、逃げる事を選択してしまっていたのだ。

「・・・しつこい・・・」

ちなみに、記憶は体に合った当時のもの。
もっと言えば、昔の研究所にいた頃の記憶である。

殺し合いをしている中、心得たのか。

どうやらシグナムや、シャマル達の事を直感的に危険だと察知したのだろう。

本人たちが聞けばがっかりすることが理由であった。

「むう、すばしっこいですね」

「あんな恰好で何であんな速く走れるんだ？」

「わからんが奥の手だ」

ザフィーラが突然止まった。

そして、叫んだと同時に桜（仮）の眼の前へ白い壁が現れた。

「あ・・・」

「さあ、追いつめたぞ」

「・・・」

後ずさりをするも、すぐ後ろは壁。

そして今度もあろうことか驚きの行動に出た。

そう、壁を破壊するのだ。

しかも数回の攻撃だけで、魔法を使わず。
まずは両肘を思いっきり叩きつける。

そして、その後左手のストレートを叩きこんだ。

するとどうだろう。

壁の一部だけがバラバラと崩れ落ちる。

これを使ったザフィーラは相当ショックだろう。

なにせ、魔法を使わずに破壊されたのだ。

他にいるかもしれない守護獣も真っ青だ。

「な!？」

「ええ!？」

「マジかよ!」

みんなが啞然としている中、桜（仮）は出来た穴の中へ入り、そしてさらに走り出す。

ちよっとしてから全員は見失ったのに気付き、また探し出すのであった。

そして、この後いろいろあり、ようやく桜（仮）は捕まった。

と言うより、はやてと一緒にいて、みんなが驚いたそうだ。

兎にも角にも、大事に至らなくて何よりではある。

side out

冒頭に戻ってからのこと。
とりあえず、はやてに懷いてしまった。

「で、何があったの？」

ちなみに現在のはなを呼び、全員でリビングに集まっていた。
一応なのはも居るのでヴィータも帰ってきていると言う事になる。

「うーんとな、ほら、出て来な」

「・・・」

はやての陰から先ほどの少年、桜（仮）が出てくる。

その姿はまさしく人見知りをする子供のようで、なのはを見るなり
再び隠れてしまった。

「・・・えっと、桜？」

「そう。ちょっと、いろいろあってな・・・ってなのはちゃん？」

「・・・」

「ど、どないしたん？」

「・・・こ——」

「ん？」

「これ抱きしめていい！？すっごく可愛いよ！！」

つい大きな声を出してしまうのは。

その声にビクツと、少年はさらに怯えてしまう。
このせいで、どんどん隠れていってしまった。

「なのはちゃん、あんま大きな声出さんといて。こわがっとなるから」

「でも、この子、すっごく可愛いんだもん」

「だから、事情説明するから落ちついてねな」

「うん。ごめん、ちょっとテンション上がったちゃって」

「事情説明中」

「と言う事なんや」

「つまり、シャマルさんの手伝いをしていて、棚から落ちた薬品数種類をかぶって小さくなった挙句に、記憶も少し飛んじやったって事？」

「まあ、そんな感じや」

説明をし終わってほしいとめ上げた。
なのは本人はどうしようかと迷ってる。

「うーん、どのくらいで治りますか？」

「それがわからないのよ。今日中に治るかもしれないし、明日かもしれない。もしかしたら来週かもしれないし、運が悪ければ一生このまま・・・」

「ええ!？」

「解毒薬が作れるかどうか知らないのよ。チャレンジはしてみるけど、時間がかかると思う」

「じゃあ、それまでの間は家で預かりますか？」

「それがいいかもしれんな。テストロッサやヴィヴィオ達も居るのだ。帰らなければ心配するだろう」

「でもよ、シグナム」

「なんだ？」

「これみて、連れ帰れると思うか？」

横を振り向いてみると、そこにははやての服の端を掴みながら少し泣きそうな顔で首をフルフルと振って、「帰りたくない」と言うアピールをしている桜（仮）が見えた。

これを見てはなのは無理やり連れ帰るのは出来ないだろう。

「なんか、懷かれてしもうた」

「まあ、良いんじゃないかな。フェイトちゃんたちには私がなんとか言っておくし」

「それなら助かるわ。もし、フェイトちゃんが家に来て暴走でもされたらひとたまりもあらへんしな」

こうして桜（仮）は八神家入りを果たしたのであった。

第13話 幼児化桜八神家入り！（後書き）

さてはて、次回はどうしたもんかな。

とりあえず、ネタばれとしてははやてと桜の風呂シーンを（えー

確実に決まってるのは桜が入った八神家の夜ですね。

フェイトさんとマリナがどうか・・・（2828

誤字脱字、感想あればお願いします

第14話 新しい八神家の夜（前書き）

今回から桜は当分「チビ桜」になります（笑）

第14話 新しい八神家の夜

「そう言えば、名前」

「・・・？」

「君の名前。教えてもらってなかったやろ？」

「・・・ない」

「は？」

「だから、名前なんてない」

「・・・ええ！？」

はやての驚きはもつともであつた。

この少年が桜本人と言う事は、なのはがわかっていたのでそれでいいでしょう。

だが、どうして自分の名前を覚えてないのだろうか。

「桜は番号で呼ばれてたんだよ。とりあえずこの子も桜だし、名前
で『桜』^{ハル}って付けてあげて」

なのはは驚いているはやてに小さく耳打ちをする。

それを聞いて、はやてはなるほどと言った顔でチビ桜に寄る。

「じゃあ、名前をつけたる。君は今日から桜^{ハル}や。『桜』^{さくら}と書いて桜^{ハル}
や」

「桜？」

「そ、それが君の名前。良い名前やろ？」

「桜・・・うん！」

もともとはなのはが考えた名前なのだが、今は気にしてはいけ
ないのだろう。

本人がこんなに喜んでいるんだ。
そんな話、していたらいけない。

「じゃあ、そろそろ私は帰るね」

「うん。本当、ゴメンな」

「ううん。今日は可愛い桜を見れたからそれでいいよ。また今度、
遊びに来るよ」

「次来る時までには治つてるとええんやけど」

「別に治って無くてもいいよ」

「へ？」

「だって、可愛いから」

今のなのはの頭の中はこうだろう。

「可愛ければいい」

前の状態の桜の強さとかっこよさ、今の状態のチビ桜の可愛さ。

比べれば断然後者の方が大きかった。

これによりわかるとこは女の子は可愛いものが大好きであると言う事が、確実に嘘ではないと言う事だけだ。

後、ついでに今のなのはちよっとおかしいこと。

「さ、なのはちゃんも帰ったし、ご飯にしか」

「やったー！」

「飯だ！飯！」

時間ですってしまえばもう夕方を過ぎていた。

外は日が落ち始めていて、オレンジ色の空になっていた。

きれいな夕日も見れ、まさしく夕方を意味している。

そして、このタイミングで夕食の準備の開始。

みんな喜んでいるが、チビ桜1人は頭に疑問符を浮かべたままだった。

「あ、そうだ。シャマルとシグナムは夕食まで時間あるから、桜の服買ってきてえな」

「わかりました」

「はーい♪」

「???」

またもや頭に疑問符。

もう、完全に混乱していた。

「ほら、行くぞ」

そんなチビ桜にシグナムは手を伸ばす。

チビ桜は迷うことなく、その手を握った。

そして、3人で仲良く服を買いに行ったのであった。

side out

てな訳で服屋。

選ぶのが迷うくらいの量がある大型の店だった。

「い、いろいろあるな」

「子供用の服……って桜君何歳？」

「……わかんない。眼がさめてからどのくらいたったのか覚えてないから」

「そっか、その身長だと、だいたい6歳か7歳ぐらいよね」

「そうなの？」

「うーん、たぶん」

ちなみに今のチビ桜の身長は、六課の初期時代よりも低く。外見年齢だけで言えば、6〜7歳前後であった。

もつと言えば、ヴィヴィオやシャナ、フルサイズのリンよりも小さい。

まさしく「末っ子」と言う言葉が似合いそうだ。
ちなみに、今のチビ桜は――

「これなんかどうかな？」

「おお、良いんじゃないか？では、こっちはどうだろうか」

「あ、それもいいね。じゃあじゃあ、今度は――」

着せ替え人形にされていた。

本人も面白がっていたのでそれでよかったが、もし記憶があったら絶対に怒っていただろう。

そして――

「これがいい！」

「お、それか」

「いいわね。すっごくいい」

選んだ服は、半袖にパーカー、七分のだぼだぼズボンだった。

少年らしさ満開で、かっこいいという言葉と、可愛いという言葉がどちらも当てはまりそうだった。

「じゃ、買ってこようか。早く着たいしね」

「うん！」

「元気で何よりだ（抱きしめたい！！／＼）」

side out

「ただいまー」

『お帰り〜』

服を数着買ってきてからの帰宅。

辺りはもうすでに日が落ち、夜になっていた。

玄関で靴を脱ぐや、何やらしい香りが漂う。

きっと今夜の夕食の匂いだろう。

「お帰り〜。お、桜、かつこよくなったな〜」

「えへへ。ブイ！！！」

褒められ、嬉しくなったチビ桜はVサインをしながら笑顔で返す。
クスクスと少し笑いながら、はやては頭を撫でてあげた。

撫でてもらってる時のチビ桜の顔は最初に褒められた時よりもよっぽど嬉しそうだ。

「さ、ご飯にしょ。桜もお腹すいてるやろ？」

「うん！」

そう言いながらみんなリビングへ入る。

数種類のおかずが、テーブルの上へ並べられ、湯気を上げながら食べしてくれるのを待っていた。
そして、全員が席に着く。

「では」

『いただきます』

「い、いただきます・・・」

おぞおずとみんなに続き、チビ桜も言う。
この辺りなどは、ほとんど見よう見まねだ。
とりあえず、慣れない箸を使い一口。

「美味しい！」

「だろ？はやての料理はギガうまだからな」

「すっごく美味しい！」

「ふふ、それなら作ったかいがあるな」

今日から新しく、家族が1人増えての夕食は、いつにもまして楽しそうだった。

side out

「・・・（じー）」

夕食も食べ終わり、はやては1人洗い物をしていた。
ちなみに他のみんなは先にお風呂に入っている。

「・・・（じー）」

「？ 気になるん？」

「・・・（コク）」

小さい頃の桜、つまりチビ桜は大抵の物を見て覚えていた。
料理の仕方、洗い物のコツ、その他もろもろ全部を他人から見覚え、自分のものにしていた。

なので今回も同じように、はやての手の動きを見て覚えるつもりなのだろう。

「待ってな、もう少しで終わるから」

「・・・（コク）」

「（なんか、すごく可愛いな・・・。そう言えば、まだお風呂には
いっとらんし、ウチと入る気なんかな？）」

その考えはビンゴだった。

今の時間までシグナム達とお風呂に入らないと言う事は、ザフィー
ラかはやてしか一緒に入る人がいないだろう。

だが、いままでの行動から見て。

ほとんどはやてに懐いているチビ桜は入る相手がいくらザフィーラ
でもイヤがるだろう。

つまりは、はやてと一緒に風呂に入ると言う事が確立されるのだ。

ちなみにチビ桜はさっきからこっちを見ている。

一緒にお風呂に入れたそうな顔であり、言いくそうな顔だ。

いくらなんでも正直に「一緒に入ろうよ」なんて言える勇氣はこの男の娘にはない。

「(ま、まあ、ちっちゃい子供やし。別に、危ない事があるって訳はないやろ。ましてや記憶が戻るなんて・・・)」

で、はやて本人はめっちゃ戸惑っていた。

抵抗があるのか、可愛いから一緒に入ってもいい。

だけど、もし記憶が戻ったらお互い大変なことになる。

危険が重なりながらもどうするか。

いろいろな事を考えて、一瞬で頭がショートする。

「はやてちゃん、次どうぞー」

「はい」

タイミングはジャストだった。

もうしょうがない、なるようになれだ。

そうして一緒にチビ桜と一緒に風呂に入るのであった。

side out

「お？頭、さらさらやな」

「???」

はやてはチビ桜の髪の毛をワシャワシャと洗っていた。
ちなみにタオルを巻いているので見えてはいない。

チビ桜の髪は、男の子が持っているようなバサバサとした髪ではなく、女の子のようにさらさらとした髪をしていた。
それだけではない。

肌も異様に白く、日焼けなんてしていない本当に真っ白な肌だった。

「さ、流すから目、瞑ってな」

「ん・・・」

頭のとっぺんからお湯が掛けられ、泡が流れ出す。
髪を流し終わるのを確認すると、チビ桜は犬のように首を振り、水を弾き飛ばした。

「ひゃ!?! ちょ、ビツクリするやん」

「あ・・・」

「だめやなく、次はやったらあかんぞ?」

「・・・(コクコク!)」

「なら、許す」

この後、湯につかり温まっていた。
蔭ではシグナムが羨ましそうに見ていたとか・・・。

こうしてチビ桜が入った八神家の夜は更けていったとき。
ちなみにチビ桜ははやてと寝ました。

第14話 新しい八神家の夜（後書き）

> i 2 4 1 3 4 — 2 0 5 4 <

→ 寝る前の光景。

はやて

「桜、そろそろ寝——ってもう寝とるんか」
チビ桜

「スー、スー」

はやて

「おやすみ、桜」

こんな感じな内容ですね。

さて、今回はミウラでも出そうかな。

と言うか、チビ桜をいつまで小さくしておこう。

とりあえず、合宿の回までには戻したいと思います。

ちなみに、チビ桜は「ハヤテのごとく！」の「三千院ナギ」が若干モチーフとなっております。

似てるところが少ないかもしれないけど気にしたら負けだと思っています。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第15話 衝撃告白!まさかの展開!

「ん・・・」

翌朝、はやては1人目が覚めた。

頭はちよつと寝ぼけているが、手に何やら感覚があった。

チビ桜の手だ。

一緒に寝たから、いつの間にか握っていたのだろう。

「スー、スー」

「・・・もう少し寝よか」

きれいな寝息を立てながら、はやての手を軽く握っている。

この顔を見たら、フェイトはもちろんのこと、シグナム、マリナ、他全員が「可愛い」と言うだろう。

はやては軽く握られていた手をこっちから握り直し、さらに、余っていた手でチビ桜を抱きしめるように寄せて、再び眠りに就くことにした。

side out

今日のはやては非番だ。

そのおかげもあってか、チビ桜とゆっくり寝ることが出来た。

ちなみに朝食はリンとアギトが担当。
シャルはもちろんキッチン入りを禁止されているので、毒物は生産されていない。

「今日はどうしような」

「？」

朝食を食べ終え、今日の予定を立てていた。
チビ桜は特に何もすることはなく、はやても同じようにこれと言って予定が無かった。

「うーん・・・道場にでも行ってみよか？」

「どうしよう・・・？」

八神家は道場を持っている。
ザフィーラがメインで、ヴィータとシグナムもちょくちょく顔を出していた。
はやとシャルもよく行き、おやつなどの差し入れも持っていく事があった。

「八神家道場」

場所は変わって八神家道場。
たくさん生徒が組み手をしたりしている。

「おお！」

「ザフィーラ、桜も入れてあげて」

「わかりました」

と言うわけで早速仲間入り。

どのくらいできるかは八神家みんなが知っているのとおり、とりあえずザフィーラが相手で組み手だ。

「よっ、はっ、とっ」

「お、なかなかいい動きだな」

若干6、7歳の体でザフィーラをまともに相手をしている。その光景を、他のみんなは動きを止めて見入ってしまう。

「ミウラ、相手をしてみろ」

「は、はい！」

組み手を途中でやめ、1人の生徒の名を呼ぶ。

彼女はミウラ・リナルディ。

シグナムやヴィータと練習試合出来るほどの実力の持ち主だ。

「手加減するなよ。ちなみに、こんななりだが実年齢は16だ。今はいろいろあって記憶をなくしていて、こんな状態だが実力は本物だ」

「ええ!？」

まあ、誰でも驚くだろう。

こんな自分より背の低い女の子に見える男の娘の実年齢が6、7歳

ではなく16なのだ。
さらには記憶喪失。
驚く要素が満開過ぎる。

ちなみにチビ桜は殺気をバリバリ出している。
完璧にスイッチが入ったのだろうか、眼が本気だ。

「桜、殺すなよ？」

「あ、そっか。じゃあ、掴みと投げは？」

「ありだ」

ザフィーラの言葉で我に帰る。

そしてこの発言Ⅱ掴んで投げる気満々だと言うことだ。

「お、お願いします！」

「よろしく」

「では――始め!!」

お互いに一礼をし、ザフィーラの合図で組み手は始まった。
開始直後の先制攻撃はミウラ。

きれいにジャブを繰り出し、反撃をさせないでいる。

「・・・」

「はああ!!」

一方、チビ桜は防戦一方。

それでも、ミウラの攻撃を一発もかすらず、いとも簡単にかわしている。

しかも無言で、まるで見定めているようにも見えた。

「んん・・・」

「え?」

右手を左手で受け止め、しっかり掴む。

さらにそのまま、左手を外される前に右手で胸ぐらをつかむ。

そして最後に、右足でミウラの足を掛け、自身はグルンと回転し、背負い投げをいとも簡単に決めて見せた。

「え・・・」

『ええええええええ!!!!???』

ほんの一瞬のことで、道場全体が驚きに包まれた。
投げ飛ばされたミウラ自身はそれ以上だった。

身長差がある中、あんなに簡単に投げ飛ばされた。
ついでに胸も触られて、動揺しまくりだ。

「あんだよあいつ!」

「ザフィーラさんとの組み手もすごかったけど、ミウラとの組み手もすごかったよな!」

「あのミウラの攻撃に一度も当たってないだど!?!」

「あんなに身長差があんのに簡単にミウラを投げ飛ばしたぞ!？」

生徒の中からはいろいろな感想が聞こえてくる。

本人からしてれば、「何のことだろう？」で済まされそうだが、ミウラは全然そうじゃない。

さっきも書いた通り、動揺しまくりなのでどうしたらいいかわからないでいる。

「大丈夫？」

「う、うん!／＼大丈夫!／＼」

笑顔で手をさしのばされたミウラ。

大きくても小さくても、桜の笑顔は殺人スマイルなのか。ミウラも面食らってしまった。

とりあえず、差し出された手を取り立ちあがる。顔が赤いままだが、チビ桜は気にかけていない。

「・・・ザファイラ」

「? どうした？」

「もっかいやってもいい!？」

「あ、ああ。いいが。ミウラはいいのか？」

「あ、はい!」

「じゃ、やろう！すぐさまやろう！瞬く間にやろう！瞬時にやろう！」

ミウラが無事十投げた時の快感Ⅱ面白いが、チビ桜の頭の中に確立していた。

やらなければ気が済まないのかもしれない。

一応手加減する気なのだが、投げ飛ばしたいのだろう。

この後、何回もミウラとの組み手が始まった。

その全部がチビ桜の背負い投げで終わったのは言うまでもないだろう。

side out

「ふう、疲れた」

「すごいね桜さん。何回も投げられちゃった」

「？ ”さん”？」

「あ、そっか。いや、なんでもないよ」

「そお？なんか変だな」

練習も終わり、みんなが帰ってる中、ミウラとチビ桜は残っていた。何度も投げられていて、その度に笑顔で手を差し出される。面食らいながらも立ちあがるを繰り返した結果、完璧にミウラは落ちていた。

チビ桜本人もミウラに懷いてそうなのでまあいいのだが。
シヤナがどういう反応するかが、すごい気になる気がする。

「じゃ、僕も帰るね」

「あ、ミウラ」

「ん？何？」

この後の言葉はものすごく衝撃な内容だった。
その場にザフィーラとはやてだけだったからよかったものの、シグナムやフェイトが聞いていたら大変なことになっていただろう。

「僕、ミウラの事好きだよ」

この言葉を聞いた時のミウラは顔が真っ赤だったとか。

第15話 衝撃告白!まさかの展開! (後書き)

まさかの終わり方 (笑)

次回はどうなるのやら。

まだまだ未定ですね。

さて、元に戻ったらどうなるんでしょうか。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第16話 理由は普通／朝起きたらある意味ハッピー

「僕、ミウラの事好きだよ」

その一言は凄まじい威力だった。

特に、言われた本人のミウラは相当なものだろう。

いや、もしかしたらそれ以上かもしれない。

と言うかなんでいきなり告白したのだろうか。

それはきつと、今のチビ桜が正直だからなのかもしれない。

「え、えつと、うーんと・・・」

一方、ミウラは戸惑っていた。

いきなり告白されれば、誰だって反応に困る。

「・・・あゝ、ミウラもう遅いから帰るか？」

沈黙を破ったのはザフィーラだった。

早くこの空気を変えなければと察したのだろう。

これにより、さっきの空気はガラリと変わり、普通の空気へと変わった。

そして、ようやく落ち着きを取り戻したミウラもそれに返す。

「は、はい」

ミウラが帰ることになるが、チビ桜は止めようとしなない。
また会えることを確信しているからだろう。

「じゃ、じゃあ、また・・・明日」

「うん、また明日」

こうして、ミウラの恋が始まったのであった。

side out

「なあ、桜。なんであんなこと言ったん？」

「？ 何の事？」

「ミウラに「好きだよ」って言った事や」

その日の夜。

チビ桜はまたはやてと一緒にお風呂に入っていた。
そして何故いきなり告白をしたのかわからなかったはやては一応聞いてみる事に。

「えーっと、そう思ったから？」

答えは案外普通だった。

別に何か特別な訳でもなく、本当に普通な理由だった。

「後、可愛いし、組み手してる時もすっごく楽しかった」

「そ、そうかぁ・・・（あかん。これ聞いたらミウラ本人は喜びそ

うやけど、フェイトちゃんやシグナムはがっかりするやろうな・・・」

「?..?..?」

「（でもまあ、これも今のうちだけかもしれん。元に戻って記憶も戻ったらちゃんと選ぶかもな）」

「お母さん?」

「あ、ゴメンゴメン。手、止まってたな。・・・って今なんて?」

「お母さん」

「・・・ええ!..?」

話を切り替えて。

さっきの一言はさりげなかった。

いや、まずどうしてそう呼んだのかわからない。

「な、なんで!..? なんでウチがお母さん!..?」

「んゝ、そう思ったから?」

「疑問形!..?」

素直すぎるのがチビ桜の特徴でもある。

それにしても、この子は本当に正直で、騙されるんかないかと思っ
てしまいそうだ。

まあ、そんな輩はいたとしてもやらせないが。

「イヤだ？」

「ううん。イヤじゃないよ。むしろいいくらいや」

「やったー！」

別に断る理由もなく、こう言った子供相手も得意な方だ。

それにこれはこれで面白そうだと思い、はやては返事をした。
何かの選択を間違えなければ大丈夫なはずだ。

間違えなければ、だが。

「さ、流すから目、瞑ってなー」

「ん」

髪の毛に付いている泡を流し、湯につかる。

2日目にしてもうこれが定着してしまっていた。

こうしてまた夜が更けて行った。

side out

「・・・？」

翌朝。

特に何かあったわけではなかったが、チビ桜は1人早めに起きてしまった。

「・・・うん？」

ただ、今日は昨日とは少し違った。
なにやら、顔のあたりに柔らかい感触がある。

まあ、率直に言ってしまうえばはやての胸だ。
今チビ桜ははやての胸の谷間に顔をうずめていたのだ。

「んあ・・・！」

ちよっと顔を動かしたせいかな、はやてが反応する。
その声にビククリしてしまい、飛び退こうとした時だった。

ガシッと体をホールドされ、さらに引き寄せられる。
これのせいで完璧にチビ桜の眼は覚めてしまった。

「・・・」

だが、意外や意外。

チビ桜はちよっとずつだが眠たくなってきていた。
はやてのいい匂いが香ってきて、胸の感触もあり、眠たくなるのが
良く判る。

「・・・スー、スー」

程なくしてチビ桜は眠りについた。

きれいな寝息を立て、先ほどまでと同じような状態になる。

で、こんどは――

「・・・ん」

はやてが起きた。

そしてすぐさま胸元のチビ桜に気付く。

「あ・・・／＼」

違和感ではあったのだが、ちょっとよかったりもしていた。
つまりは、若干感じていたと言うことだ。

「うう・・・もっかい寝よ・・・／＼」

眠りに就こうとしたが、なかなか眠れない。

こうしてはやては一番最初に目を覚ましたのであった。

第16話 理由は普通／朝起きたらある意味ハッピー（後書き）

あれ？なんか微妙でしたか？

自分的にはちよつと微妙でしたね。

でも、楽しんでいただけたなら幸いです。

それにしても、もうどうしようか悩みまくってますね。

このままチビ桜で行くか、もしくは戻して行くか。

どうしよう・・・。

まあ、それは後々考えるところでしょう。

うん、それがいい。

最後に誤字脱字、感想あればお願いします。

第17話 復活の相棒／新しい家族×4（前書き）

今回からさりげなくあの人が復活！

だが残念ながら、記憶は・・・。

第17話 復活の相棒／新しい家族×4

「え？今日、来るん？」

桜がチビ桜になってからだいたい1週間。

ある日の朝、はやてに連絡が入った。

今日、なのはとフェイトが遊びに来るらしい。

「うん、わかった。じゃ、後でな」

「お母さん、誰か来るの？」

ちなみにチビ桜はあれ以来、はやての事を”お母さん”と呼んでいる。

本人いわく、そう思ったからそう呼んでいるらしい。

はやてもイヤがっていないし、まあ、よしとしよう。

「友達が来るって。この前来たなのはちゃんも来るんよ」

「・・・？」

「どんな人だったか忘れたって顔やな。まあ、しょうがないわな・・・」

「だって・・・」

「いいんよ。覚えてないなら、今日覚えればええんやから」

「うん」

正直言って、チビ桜がなのは顔を覚えていないのは無理があった。
この1週間、本当にいろいろあった。
そう例えば――

side out

だいたい4日ほど前。

その日、チビ桜は魔法の練習をしていた。

なんか魔法の事を知っていて「使ってみたい!」と言ってみたところ、「ちゃんと使って約束するなら、使ってええよ」と言っただけで、驚く事がいくつかあった。

まずは一つ目。

「これ、桜の魔導書」

持ってきていて、放置しっぱなしだった死霊秘法。

めくってみると、『管理人格の体を形成し、再び活動させるためには後399ページの魔力が必要とされています。なお――』
などなどと書かれていた。

管理人格とはアルIIアジフの事だろう。

こういう事なのか本人に聞いてみたかったが、今の状態では無理だ。

「んー、仮契約してウチらも魔力供給ってできんのかな?」

その言葉に反応したか、文字が消えて一言浮かび上がった。

『仮契約、およびその状態での魔力供給は可能です』と。

もし本人がこれを出来たら驚くだろう。

仮契約でも出来たの！？と言いたいそうぐらい。

そんな感じで、八神家のみんな（ザフィーラとチビ桜以外）が呼び出された。

そして、死霊秘法の餌食になったのであった。

side out

「桜、ちょっと、来て」

「？」

「新しい家族が出来たから。桜に紹介せなあかんからな」

そう言ってチビ桜も呼び出された。

そして、会う相手は――

「あなたが私のマスター？」

「ますたあ？」

「うんとな、この子は桜の融合機って言って、一緒に魔法を使って、桜を補助してくれる子や。わかる？」

「た、たぶん・・・」

「で、桜がこの子は魔導書って言う本が元の姿や。その魔導書の持ち主が桜やから、桜の事を『マスター』って呼ぶんや」

「・・・」

「つまり、わかりやすく言うと桜の新しい家族って事や。今日から、一緒に暮らす新しい家族」

「家族・・・」

「私、アルⅡアジフ！よろしくね、マスター！」

「アル・・・うん！」

最速で仲良くなっていた。

飛びついてきたアルを頭の上に乗せ、スキップをして走り回る。

何か、お互いの共通点的なものを見つけたのだろうか。

どちらにせよ、本当に仲がよさそうで何よりだ。

「？」

「なんだ？こいつら」

桜の後を付けていく、奇妙な3匹の生物をアギトとリインが見つけた。

1匹は鳥のように羽を生やし、もう1匹も羽を生やしているが、どちらかと言うと翼で、4足歩行する獣、最後の1匹は長い尻尾、鋭いくちばしをもち、まさしく日本にいなそうな竜だ。

「? 君達、何処から来たの?」

程なくしてチビ桜も後ろの生物に気付く。

話しかけるが、なんと言ってるかわからない。

何せ、鳴き声なのだから。

「これ、マスターの召喚獣。今は小さいけど、マスターがちゃんと力を使ってくれば元の姿になるよ」

「へ〜。名前は?」

「ピューー」

「ギュグワー」

「ギャワー」

「???」

「この青い鳥がシャンタク。白いこの子がティンダロス。最後にこの竜がハスター」

再度おさらいしよう。

一番最初に「ピューー」と鳴いたのが青い鳥シャンタク。

次に「ギュグワー」と鳴いた白い翼をもった獣がティンダロス。

最後に「ギャワー」と鳴いた竜がハスターだ。

さて、まずこれが一つ目だ。
で、二つ目――

「あれ？」

魔法の練習を再開した時だった。
何でか、氷が出来あがっている。
やった本人も、他みんなも驚いていた。

「へ、変換資質・・・？」

「そうみたいですネ・・・」

「????」

頭に大量の疑問符を浮かべ、さっき出来た氷を眺めている。
ちなみに今は頭の上にシャンタクが乗っており、右肩にティンダロスとハスター、左にアルが座っていて、チビ桜と一緒に氷を眺めていた。

「そう言えば、桜君って変換資質、持ってませんでしたよね？」

「ああ、持ってないな。アルと契約したからって着くもんじゃねえし」

「どうしてなのでしょう？」

「さあな」

side out

と、まあ、いろいろあったのだ。

アルが復活して一緒に生活したり、召喚獣計3匹の世話。
大変なので一度しか会っていないなのは覚えられなくて当然だろう。

「シャンタク、起きなよ。そろそろ重たくなってきたから降りて
」

「ピュイ？ピュ〜♪」

「えらいえらい。さ、今日も元気に行こう〜！」

「ギュグー」

「ギャワー」

「私は〜？」

「アルもちゃんというよ。と言うか、シャンタクどいたばかりなのに頭の上に乗るのは・・・」

「あ、ゴメン」

「まあ、いいよ」

そしてアルがいたためか、最初のころよりチビ桜の表情に種類が増えた気がする。

わかりやすく言うなら、最初は笑いは笑い単体と言った種類の無いものだったが、今では一つの表情に種類が増えた。

苦笑いだったり、満面の笑みだったり。

それに関しては、はやてもとてもうれしく感じていた。

「あ、来た見たいや。桜、出迎えにいこ」

「うん」

第17話 復活の相棒／新しい家族×4（後書き）

今回は久しぶりにメインキャラ（フェイト、シャナ、ヴィヴィオ）が登場！

みんなが期待していた展開になるか！？

さて、ここで今回出てきた召喚獣×3の紹介をしよう。

シャンタク

備考…元ネタは「幸せの青い鳥」他。

普段はフリードと同じように小さい姿。

レアスキルではなく、普通の長呪文詠唱で本来の姿へ。

メインカラーは蒼。

好きな食べ物は冷たいもの。

好きな場所は高い場所と桜の頭の上。

ティンダロス

備考…元ネタは「ベリオロス」と「クトゥルフ神話」他。

普段はシャンタク、ハスター同様、小さい姿。

同じように普通の長呪文詠唱により本来の姿へ。

メインカラーは白。

好きな食べ物は冷たくて柔らかいもの。

好きな場所は涼しい所と、桜の肩と頭。

ハスター

備考…元ネタは「アグナコトル亜種」と「クトゥルフ神話」他。

上2匹と同じように普段は小さい姿。

長呪文詠唱により本来の姿へ。

メインカラーは灰色と氷色（水色）。

好きな食べ物は冷たいものと桜の料理。

好きな場所は冷たい（涼しい）場所と桜の背中と肩。

今のところの設定はこんな感じです。

後々しっかりとキャラ紹介で紹介したいともいます。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第18話 O☆H☆A☆N☆A☆S☆H☆Iしましょう。そうしましょう

「こんにちわー」

「いらっしやーい。フェイトちゃんはお久しぶりやな」

「うん、久しぶり。今日はヴィヴィオ達も来てるんだよ」

「そっか。じゃ、桜。出て来な」

「・・・」

「「!」?」

今日の来客はなのは、フェイト。

それにヴィヴィオとシャナだった。

そして、前と同じようにはやての陰からチビ桜がひょこっと出てきた。

やっぱり大人の人に対しての人見知りは治っていないようだ。

「・・・ハ、桜です」

「まあ、今はこんななんってるのは前に話した通りや。人見知りは許したげて」

「ヴィヴィオ、シャナ？」

「「か」」

「「か？」」

「「可愛い!!」」

「（ビクッ!!）」

例によって例がごとく、ヴィヴィオとシャナもあえなく撃沈。フェイトはかろうじて我慢をしていたので暴走はしていない。と言うかしたらなのはに止められること間違いなしだろう。

「なのは」

「な、なに？」

「お持ちか——」「ダメだよ?」——でもでも!こんなに可愛いのに!」

「（ガクガク）」

「フェ、フェイトちゃん、本当にいきなりおっきな声出すのやめてくれへん?桜が怖がって・・・」

「そうだよ。ヴィヴィオもシャナも、大きな声出したら桜が怖がっちゃうからね」

「「はい」」

side out

「へー、アルって名前なんだ」

全員玄関で話すのはやめ、リビングにいた。

ちなみに復活して記憶のないアルと召喚獣×3匹を紹介などをしていたところだ。

「この子、記憶が無いんやけどな。何でかまっさらな状態じゃなかったんよ。不思議やな〜って思ってた」

「確かにそうだね。リィンも最初はまっさらな状態だったのに」

「お母さん、僕お茶入れようか？」

「あ、頼んでええか？」

こんなさりげない会話だった。

だが、このさりげない会話を見逃すなのではない。

チビ桜がキッチンへ向かおうとした時だった。

「”お母さん”？」

「あ」

「お母さん？」

「え？あ、何でもないよ。みんなの分入れてな」

「う、うん」

そう言って再びキッチンへ向かう。
そして、キッチンへ姿を消した後のことだった。

「はやてちゃん、向こうで少しO☆H A☆N A☆S H Iしようか」

「え、あ、ちょ、なのはちゃん。それはホンマにやめてほしいって言うか、やめてくれないとウチが大変なことになるって言うか、あの、その」

「言い訳は後で聞くからね」

「ぎゃーーーーー!!!!!!」

八神家にはやての叫びが響いたのであった。

side out

「あれ？お母さんは？」

「・・・えっと、ちょっと散歩に行ってくるって」

「そ、そうなんだ」

「ところで、桜はどうしてはやてを”お母さん”って呼ぶの？」

「ん、そう思ったから？」

「どんなところがお母さんだっと思ったの？」

「えっと、優しいし、一緒にいるといい匂いがして、暖かくて、安心できるから」

めちゃくちゃ素直な意見で正直フェイトは驚いた。

それと、ちよつと疑問が浮かぶ。

一緒にいると言う事は夜も一緒ということだ。

そうならば当然――

「一緒に寝たりしてるの？」

「うん。毎日一緒」

と言う事になる。

そしてさらに爆弾発言。

「お風呂も一緒に、髪洗ってもらったりとか」

この一言でフェイトにもスイッチが入った。

「ちよつと、私も散歩に行ってくるね。ヴィヴィオ、シャナ、桜の事見ててね」

「うん、フェイトママ」

「行ってらっしゃい」

「行っちゃうの？フェイトお姉ちゃん」

だがしかし、さらに重ねられたこの一言でスイッチはOFFになる。ピタリと足を止め、戻ってきた。

「やっぱりいいかな。なんだか、桜危なっかしいから」

「ホント？」

「うん」

さすがはフェイト。

子供の相手はお手の物である。

エリオ、キャロに続きヴィヴィオ、シャナの相手を今までしてきているのだ。

チビ桜の相手もしっかりこなしていた。

「た、ただいま・・・」

「あ、お帰り——って大丈夫！？ぼろぼろだよ！？」

「う、うん、大丈夫やから」

「お母さん、無理しちゃダメだよ？」

「うん、ありがとうおな」

side out

場所は変わって八神家道場。
ちなみに今日は誰もいない。
休みと言うことだ。

「本当にやるの？」

「うん」

「・・・そっちは？」

「私はいいかな。やるのは今度で」

「そう。じゃ——」

一呼吸置き、言い放った。

「本気でやろうか」

第18話 O☆H A☆N A☆S H I しましょう。そうしましょう（後書き）

次回はヴィヴィオ対チビ桜！

お互いの全力と全力のぶつかり合い！

勝つのはどっちか！

誤字脱字、感想あればお願いします。

第19話 対決! チビ桜VSヴィヴィオ!! (前書き)

はつきりって今回は短いです。

これも、次回のためなんで許して下さい。

第19話 対決！チビ桜vsヴィヴィオ！！

「はああ！！」

先ほど、チビ桜とヴィヴィオの戦いが始まった。

チビ桜が格闘技をやり始めたと聞いて、居てもたっても居られなくなった。

それで、八神家道場を借り、今に至ると言うことだ。

「・・・」

「はっ！！」

なぜかいつも防戦一方のチビ桜。

どうしてかわからないが、これがチビ桜の戦い方なのだろう。

ヴィヴィオのカウンターヒッターよりも一つ上、カウンターアサル
トと言ったところだろうか。

「・・・強い・・・」

「まだまだ！」

チビ桜は防戦一方なので、常に攻撃を受け続ける。

しかも、ヴィヴィオは普通に強く、攻撃も早い。

なので反撃の隙ができないのだ。

「・・・うう」

反撃のチャンスが見えない。

それすなわち、チビ桜に勝ちへの道が閉ざされたままと言うことだ。

一撃もくらってないからダメージはない。

だが、体力がなくなればいずれはくろう事になる。

だからこそ、早く反撃したい。

「はああ!!」

「・・・いま!」

ヴィヴィオは力が込めた一撃を入れようとした時だった。

待ちに待ったチャンス到来とばかりに、チビ桜は今回は受け止めずに流した。

そしてそのまま流した腕を掴み、ミウラの時と同様に胸ぐらをつかむ。

一瞬にして脚を掛け、バランスを崩し始めたところで背負い投げをかました。

なんで毎回背負い投げかと言うと、本人も何でかよく判っていない。ただわかる事は、カウンターにはうってついで、なお且つ相手を傷つけない。

それと、相手の顔を汚したり、傷をつけたりしなくて済むと言う事だ。

「ふう・・・危なかった・・・」

「・・・」

「大丈夫?」

「う、うん」

一瞬で投げられ、啞然としていたヴィヴィオ。
いや、なのは達も驚いていた。

何せ、記憶が無い上について先日格闘技を始めたばかりだと聞いている。

なのにヴィヴィオの攻撃を一撃も当たらずかすめず、さらには流して背負い投げをした。

通常なら、まず出来ないだろう。

でもチビ桜はやったのだ。

これを見て、驚かないのは無理と言うものだ。

「君、強いね」

「そ、そう？」

「うん、粘り強くて、攻撃も早い。普通、攻撃が当たらないといらいらくるでしょ？ そうなったら無意識に力んで攻撃を入れてくるから返しやすいんだけど、君はいらつくことなく、しっかりとした攻撃をしてきた。それだけでも十分強いってわかる」

これは6、7歳の言葉ですか？ と思えるほどの確且つわかりやすい言葉だった。

記憶をなくしても頭の良さはほとんどそのまんまかもしれないと思えてしまうほどだ。

「私は攻撃なんか仕掛けない」 ってね」

こんなカッコイイ言葉も言ってしまった。

まさしく、頭の良さがそのまんまだと確信させる。

だが、実際そんなことはなく――

「まあ、これは知り合いの受け売りだけどね」

「へ？」

ただ覚えたことだった。

知り合い、と言うのは研究所にいた時の唯一一緒に戦った人物だ。戦い方を教わったのも、何もかも全部そいつに教えてもらった。ある意味での恩人であり、師でもあったが、殺されてしまった。

「僕の戦い方はあいつが教えてくれた。似てない部分がたくさんあるけど、それでもいい。だって僕が好きになれて、好きになってくれた人だったから」

「そ、そうなんだ」

「って、君に言ってもわかんないか。もう、死んじやったし。半分は僕が殺したようなもんだし」

「ねえ、桜」

「？ 何、フェイトお姉ちゃん」

「その、出来たらでいいんだけど。覚えてる事だけでいいから――」

この一言で、なのは達は桜をもっと知ることができるだろう。そして、さらに好きになった。

「昔の事を教えてくれないかな」

第19話 対決！チビ桜VSヴィヴィオ！！（後書き）

次回は過去の話かな。

桜が研究所にいた頃の話になります。

とりあえず、桜の初恋の相手が登場（名前は無い）！

誤字脱字、感想あればお願いします。

第20話 過去の記憶／私は攻撃なんか仕掛けない

「いいよ」

返答はあっさりだった。

聞いた本人、つまりはフェイトが一番驚いていた。

普通、昔の事なんて思い出したくないんじゃないかと思っていた。それも踏まえて、聞いてみた。

なのに、こんなあっさり「いいよ」なんて言われれば驚きもするだろう。

「どのあたりから話そうかな。最初から？」

「そ、そこは桜に任せるよ」

「じゃあ、めんどいけど最初から」

side out

少し昔の事。

まだ桜が研究所にいた頃。

実験体、数だけで言ったら軽く1000は超えていた。

そんな中、1人のクローンの少年が目覚めました。

No. 44

それが少年の名前、と言うより呼ばれ方だった。

目が覚めたらわけのわからないポッドの中。
何もせず、その中で目が覚めてもまた眠り続けた。
悲しい夢を何度も、涙を出しながら見続けた。

何年か経つと実験室と言う名の殺し合いの戦場に放り込まれた。
そして、ただ1人生き延びるためだけに殺しまくった。

「!？」

「おゝ、危なかったゝ」

不意をつかれ、殺されかけた時だった。

その不意を突いてきたやつを自分ではない誰かが殺した。

振り向くと、そこには自分よりも年上だとわかるぐらい少し身長が
高く、血が飛び散った綺麗な銀髪を持った少女がいた。

「礼は言わないぞ」

「ありゃ？そう来る？」

「まず誰だよお前。ここで誰かを助けるなんてバカじゃねえの？」

「ひどいわね。命の恩人にそれはないんじゃない？」

「うるさい、黙れ。バカは嫌いだ、殺すぞ」

「出来るものならね」

「なら、早速！」

遠慮なく、見境なく攻撃を仕掛けた時だった。

目の前にいた少女は消え、いつの間にか天井が見えた。

「・・・今何した？」

「投げただけ。私は攻撃なんか仕掛けないもん」

「・・・何したいんだよ、お前」

「普通に生きたい。この殺し合い、私たち以外殺せばもしかしたら2人で生き残れるかもよ？」

この言葉を聞いた時は一瞬でこいつがバカだと悟った。

ただ、実力は本物。

それだけは保障できた。

「聞いてなかったのか？生き残れるのは最後の一人だって」

「だから、あえて2人残るのよ。残った2人が殺し合わないのを見かねた研究者がどっちも生き残らせてくれるとか」

「あっそ」

「ちなみに聞くけど番号は？」

「44」

「あ、奇遇ね。私4番」

「だからなんだよ」

「運命ってヤツ？番号が似た者同士、頑張らましょ」

「勝手にしろ。ただし、邪魔だけはするなよ」

「素直じゃないな、もう」

こんな感じで、2人は出逢った。

一緒にいた時間は短かったけれど、それでも良かった。戦い方を教えてもらって、2人で頑張ら続けた。

「はあ、一体どれだけいんだよ」

「さあね」

「しかも、周りのヤツら、全員僕たちに狙い定めてるし。ある意味でフルボッコだな」

「じゃあ、とことんやりましょう。そっちの方がいちいちこっちら仕掛けなくて済むもん」

「もしかして、楽しんでる？」

「あ、ばれた？」

「殺しを楽しんで・・・何処の殺人鬼だよ」

「そんな殺人鬼に手を貸してる君はなんなのかな？」

「ただのもの好きで、バカな奴さ」

「違うよ」

「え？」

「君は私の王子様」

ちよつと、ビックリした。

まさかいきなりそんなこと言われるなんて。
予想外にも程がある。

「な！？お前、何言って——んむっ！？」

これもやっぱり突然だった。

しかも、さっきのなんて比じゃない。

ビックリなんてもんじゃなかった。

だって、キスされたんだもん。

「・・・」

「全部終わったら、ちゃんとしようね」

「う、うん・・・」

その言葉の直後、周りのヤツらが襲いかかってきた。

全て、軽くあしらい、投げ飛ばし、勝手に自爆させまくった。

そして、最後の1人まで減らした時だった。

「もらったああ！！」

「!?!? しま——」

どうしていつもこうなのだろうか。

不意をつかれて、殺されかける。

でも、いつまでたっても痛みは来ない。

瞑っていた目を開けると——

「大……丈夫……?」

血まみれのあいつがいた。

その姿を見て、すぐに何をしたかわかる。

「お、お前……まさか僕をかばって……」

「うん……。だって……。君には……。死んでほしくなくて……」

「だからって!?!?なんで!?!?そこらへんに転がってるヤツらを盾にするとかあったろ!?!?」

「はは……。ゴメン、君しか見えなくて……。盾にするためのヤツなんて……。見てなかったよ……」

「……。ふざけるな!?!?僕と2人で生き残るんだろ!?!?お互いに名前を付けあうんだろ!?!?一緒に楽しく暮らすんだろ!?!?こんな所で死ぬなよ……!?!?!?!」

眼から涙が止まらなかった。

人を殺していて、涙なんて流さなかったのに。

殺すのを見ても流さなかったのに、何で今更。

「私のために・・・涙を・・・流してるの・・・？」

「・・・当たり前だろ！だって、少しの間だけけど、僕はお前といて、すごく楽しかった！さりげない会話も！教えてくれた戦い方も！全部全部！お前がいたから！」

「・・・私って・・・そんなに君の中では・・・大きかったんだ」

「そうだよ！大きいよ！もう、全部って言っていていいぐらいさ！そんなに、僕は君が好きなんだよ！！大好きなんだよ！！だから・・・死なないでよ・・・」

「そっか・・・じゃあ、名前を・・・付けて頂戴。とびつきり・・・かわいいのを」

「・・・うん。君の名前は・・・ごめん・・・僕・・・バカだから・・・まだ考えてなかったんだ・・・」

「そうだろうと思った・・・なら、今回は――」

冷たくなってきた手で顔を触られた。

何もせず、ただ、何をするのか待っていた。

そして、またキスをされた。

冷たくなった唇でキスをされた。

「これで、許してあげる・・・」

「・・・ごめん・・・僕、何もできなくて・・・」

「泣かないの・・・男の子・・・でしょ？」

「うん・・・」

「眠たくなってきちゃった・・・寝てもいい？」

「うん・・・お休み・・・」

この言葉を最後に、彼女は動かなかった。ただ、やっぱり受け止めきれなかった。死んでしまった彼女を抱きかかえたまま、涙が枯れるまで、ただただ泣き続け、叫び続けた。

誰かが寄ってきたのを見ると、遠くからナイフを投げつけて殺す。彼女には指一本触れさせなかった。

「ねえ、4番だからフォーって名前はおかしいかな？」

1人、ただ自問自答を繰り返した。

周りからは狂ってると思われても気にしない。

それがその時の自分だから。

「いや、もういいや。全部終わってからゆっくり考えるよ」

その時からだったのだろうか。

理性を、感情をなくして、獣のように相手を蹂躪したのは。それでも、いくら殺しても自分の心は埋まらなかった。

side out

「で、500か600ぐらいかな。そんなぐらゐ殺した時に意識を失った。で、僕が体感していた時間では数十時間以上。そんなぐらゐして、目が覚めたら家にいたって感じかな」

チビ桜の話が終わった。

ちなみに、ヴィヴィオとシャナは刺激強すぎるので退席中。
聞いていたのはなのはとフェイト、はやてだけだ。

「好きな人を殺されて、暴れまわるって、僕ってやっぱりバカだよね」

今ではこんなにニコニコしていた。

さっきの話の内容からは想像もできない程の笑顔だ。

「僕ってさ、バカだけど、バカなりに考えてるんだ。強くあれば、隙なんか作らず、誰かにかばってもらうことなんてないって。そうすれば前みたいな事って、なくなるんじゃないかな」

「・・・」

「なんか、すごい暗いムード。つまんないからそう言うのなし！
！さっきみたいに元気に行こうよ！」

「桜・・・」

「お母さんも。ね？」

「そうやな。暗いムードは詰まらんもんな」

「だからさ。もっと笑顔でいようよ。そっちの方が絶対言いにかま
つてる！」

無理やりにも雰囲気をよくしようとしていた。

もし、なのはがあそこになければどうなっていたのだろうか。
それが気がかりではない。

「なのは」

「なに、フェイトちゃん」

「私、桜のこと全然わかってなかった。でも、これでやっとわかつ
た気がする」

「そう。私も同じ」

桜の涙と笑顔の意味。

それは、無くなったものたちへのせめてもの報いだった。

第20話 過去の記憶／私は攻撃なんか仕掛けない（後書き）

なんだろう、書いてて涙が・・・。

まあ、とりあえず、まとめましょう。

桜が本気で泣くのは自分が大切に思う人のため。

満面の笑みは感謝と、大切な人へ今の自分を見てもらうため。

よく判らないって言うってください。

最後に誤字脱字、感想あったをお願いします。

第21話 元に戻ってビックリだらけ（前書き）

今回はついにチビ桜が元通りに！

体と記憶は元に戻ったがはたして・・・。

第21話 元に戻ってビックリだらけ

桜がチビ桜になって1週間。

はやて達に過去を話してからこれまた1週間。

合計2週間がたったある日。

「これなに？」

渡された薬を見て呟いていた。

「これは、うーんと・・・」

無論、チビ桜を桜に戻すための薬だ。

だがどう飲ませるかが問題だ。

ストレートに言うのもありだろう。

だが、なんだかそれじゃ無理な気がしたので迷っていた。

「えっと、そう、お薬！桜君の病気を治すお薬！」

「僕、病気なの？」

「そう、だから、と、とりあえず、それ飲んでみて」

「むう・・・わかった」

しぶしぶ薬をのみこんだチビ桜。

だが、効力が見られない。

しかし、1分後・・・。

「では、俺がシャル先生の手伝いをしている時に頭から薬品を数種類かぶり、駆け付けた時には小さくなって記憶のない俺がいて、今の今まで俺の世話をしてくれたって事ですか？」

「簡単にまとめるとそうね。で、さっき飲んでもらったのが記憶だけを元に戻す薬。どういう作用かは秘密よ」

「そんなことはどうでもいいですけど、体の方はどうなるんですか？一生このままとか言ったら泣きますよ？」

「大丈夫。ちゃんと用意してあるから。飲んで効果が出た後着替えて頂戴」

「了解です。んぐ」

と言うわけで薬を飲んだ後。
ここは風呂だ。

一応体の大きさが異なるから、元に戻ったら服が破けるとの事で、こうなった。

ついでに風呂にも入りたかったらと言う理由もあるが。

「あ、戻った」

手を握ったりひらいたりして感覚を確かめる。

うん、しっかり動くな。

脚も、しっかり動くな。

「シャル先生、着替えは——」

「はい、ここに置いておくわねー」

「ありがとうございます」

少しゆっくりしてから上がる。

さっぱりして、良い気分だ。

それに久々に入ったって感じだな。

「ん？あれ？」

鏡を見ていて、あることに気がついた。
そして鏡に映った自分の顔を凝視する。

「左目が・・・蒼色になってる・・・だと・・・？」

そう、左目が蒼くなっていた。

右目はなんともないのに、何でか左目だけ。

まあ、いいや。

気にしないでおこう。

「シャル先生、あの、俺の魔導書、知りません？」

見当たらなかった死霊秘法。

一応何処にあるか聞いてみよう。

「え？アルちゃんならここにいるわよ？」

「へ？」

「んにゅう・・・マスター・・・」

見たいで可愛いし」

「ピューイ？」

「お？起きたみたいだな。おはよ」

「ピューイー♪」

「うわっと、そこがお気に入りか？」

「ピューイ♪」

「そうかそうか」

悪くないかもな。

召喚獣って、何かと大変だと思ったが大丈夫そうだな。

うん、ペットみたいで可愛い。

感想はそれだけだ。

「あ、マスター、おはようございます」

「お、俺がわかるのか？」

「マスターでしょ？だって、魔力が同じだもん」

「そ、そうか。って喋り方がおかしいな」

「そう？私は最初からこれだけど」

「アルちゃんは記憶とかないから気を付けてね」

「ああ、そうか。なら納得だ」

「そう言えば、今日はどうするの?」

「一応、今日も泊らせて下さい。お礼もしたいですし。この体を何処まで保ってられるかも不安ですもん」

「そう。じゃあ、明日には帰るのね」

「はい」

side out

時間は過ぎて夜。

みんなとまでは行かなかったが、シグナムさんとアギト、シャル先生がいない。

シャル先生は午後から仕事に行っていて、他の2人も仕事で帰りが遅くなるそうだ。

「いやゝ、元に戻ってよかったなゝ」

「はい。それと、今までありがとうございます。小さい俺を世話してくれて」

「ええんよ。こっちはこっちで楽しかったし。それに、小さかった桜も可愛かったしな」

「・・・俺、何かしました？」

「え？聞きたいん？」

「遠慮します」

これは聞いたら行けない気がする。
たぶん、黒歴史的な意味で。
まあ、その内知ることになると思うけど。

「と言うわけで、今日は俺がみなさんに感謝をこめて料理したい
と思います」

「手伝おうか？」

「いえ、大丈夫です。リクエストあれば、何でもお聞きしますよ」

「じゃあハンバーグで！」

「了解！他には？」

「ウチは特には」

「アタシもねえな」

「じゃ、30分程お待ちを」

（30分後）

「お待たせしました」

『早!』

「え? そうですか?」

レパートリーはちょっと豊富。

リクエストはハンバーグだったから、それに合うメニューとしてサラダ。

あと、これも付けたしたら美味しいだろうなと思い目玉焼き。
オリジナルのデミグラスソースが決め手だ。

「頂きます」

「どうぞ、お召し上がりください」

「はむ、美味しいです!」

「ああ、うめえ!」

「ハンバーグと目玉焼きのコンボはよかったかな? 後、オリジナルのデミグラスソース」

「ホンマに美味しいで」

「・・・それはよかった。俺の料理を食べて笑顔になってくれると、それだけで嬉しいですよ」

食事はいつでも楽しくなきゃいけない。
そう改めて思った時だった。

Side out

「ふう、なんだろうな。こんなに疲れたのは久しぶりだ」

「そんなに疲れたんか？」

「ってはやてさん！？なんでいるの！？」

マジでビックリだ。

いつの間に入ったんだ！？

「え？ああ、ゴメンゴメン、つい」

「つい！？そんなんで俺の命を消すつもりですか！？」

「まさか、そんなことするわけないやろ」

「いや、もうこの時点で無理ですね。誰かに見られたらマジ終わりますわ」

「まあ、まあ。そんなこと言わんで。背中流してあげるからな」

「・・・はあ、鬱だ・・・」

第21話 元に戻ってビックリだらけ（後書き）

次回はついに桜、帰宅！

あ、朝は八神家です。

シャナが久しぶりすぎて甘えまくるかも？

とりあえず、久しぶりの高町家の風景になる予定です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第22話 黒歴史は作られる（前書き）

まさか今回はR-15になるとは・・・。

まあ、別に大丈夫だと思ったぶん。

見たくない方は読むのをおやめになって下さい。

第22話 黒歴史は作られる

「ん・・・」

翌朝、1人早く目が覚めた。

ちなみに俺ははやてさんの部屋で、布団を敷いて寝させてもらっている。

理由をいくつかあげよう。

一つ目は、シグナムさんが襲ってこないようにするため。放っておいたら促成事実を作りかねん。

二つ目は、体と記憶が小さい時のものになった時のため。なんでも、小さい俺ははやてさんにすぐなついていたようだ。

と、まあ他にもいくつか理由はあるのだがここまでにしておう。そう言えば、なんだか体に違和感を感じるな。

「・・・」

「え・・・」

まさか、この人もか。

いつの間に布団に入ってきたんだ？

しかも抱きつかれてるせいか、胸の感触が直に・・・。

「んう・・・桜・・・」

「・・・はあ・・・」

起こしにくい。

こんな可愛い寝顔して、寝言で呼ばれたら、起こせるわけがないじゃないか。

胸の感触もいいし——って違うだろ。

何のために早く起きたんだよ。

朝食作るためだろ。

「・・・どうしょ」

とりあえず、起こさないようにそーっと腕を抜こうとした。

だが、それをさせまいとはやては回している腕の力を強くして放さないようにする。

さらには自分の脚を、桜の脚へと絡ませていく。

「うう・・・これ以上は・・・」

これ以上この状態が続けば理性がやばかった。

もし、理性のひもが引きちぎれば、はやてを襲いだす可能性もある。それだけはなんとしても避けたい。

だがそんな思いはむなしく、桜はなすすべもなくその状態が続いたのであった。

side out

「じゃ、ありがとうございました」

時間的には昼ごろ。

八神家の玄関にて。

ちなみに桜は朝の状態からどうやってか抜け出していた。
そのおかげで理性のひもはちぎれず、はやても襲われることもなかった。

「また、遊びに来てな」

「はい。薬が切れ次第、また来ますから。後、薬の効果時間の報告でしたよね」

「うん。それはまだ未完成だから。記憶の方は、たぶん問題ないと思う」

「そうだ桜、今度、家の道場に来い。腕のいい子がたくさんいる」

「それはそれは、もしかしたら未来の同僚が出来るかもですね」

「あ、ああ、そうだな」

ザフィーラが呼んだ理由はもちろんミウラの事だ。

だが桜自身は何も覚えていない。

そう、告白の事とか、ほぼ毎日一緒に組み手をやったりした事とか、チビ桜の時の記憶がさっぱりなのだ。

一応、戻しておいた方がいい記憶もあるため、そのきっかけも欲しい。

なので道場に呼んでみたのだ。

「その、なんだ、すまなかった」

「？ 何ですか？」

「あ、あれだ。この前のだな・・・」

「ああ、あの事ですか。別に気にしてませんから、シグナムさんも気にしないでください」

「わ、わかった。お前が言うなら、気にしないでおう」

ちょっと笑顔で返してみた。

すると顔を少し赤らめ、シグナムは返事を返してくれた。

「シグナムのヤツ、どうしたんだ？」

「さあ？」

なんであんな状態なのかわからないヴィータ達。
陰でひそひそと会話中。

「じゃ、そろそろ帰りますわ」

「なのはちゃんとフェイトちゃんによろしくな」

「はい。行くぞアル、シャンタク、ティンダロス、ハスター」

「はい」

全員がちゃんと返事を返してくる。

うん、いいことだ。

さて、帰りに食材でも買って帰るかな。

side out

「ただいまー」

無事、高町家へ帰宅完了。

なんだかすごくく久しぶりな気がする。

「お兄いちゃ〜ん!!!」

「おわっ! っと、おいおいシャナ、いきなり抱きつくな」

「だってすごく懐かしいんだも〜ん。今日はずっとこのまま〜」

「困ったな・・・これじゃシャナの好きなメロンパン作れないや」

「え!?! ホントホント!?! メロンパン作ってくれるの!?!」

「ああ。離れてくれればな」

「離れる離れる! 約束だからね!」

「はいはい」

突然抱きついてきたシャナをなだめてからリビングへ。
リビングへ入った次の瞬間――

「桜〜! 寂しかったよ〜!」

「フェイトさん・・・」

今度はフェイトさんが抱きついてきた。
いや、マジで勘弁して下さい。
胸が当たって・・・。

「あ、桜おかえり」

「おかえりお兄ちゃん」

「ただいま。あ、これ食材。冷蔵庫に入れといて」

「うん、ありがとう」

さて、フェイトさん問題児をどうしようか。
うーん、対処法が見つからないな。

「フェイトさん？」

「何？」

「離れてくれませんか？」

「ダメ。今までいなくて寂しかった分、今日はずっとこのまま」

「マジですか・・・風呂まで一緒ですか・・・」

「今まですっとはやてと一緒に入ってたんだからそれぐらいいいよね
？」

「え？今なんて？」

「はやてと一緒に風呂に入ってたんでしょ？」

「そう言うことだったのか・・・」

少し絶望したね。

うん、はやてさんが入ってきた時に「つい」って言った理由がようやく出来たよ。

俺はずっとあの人と一緒に風呂に入ってたのか。どおりで動揺しないわけだ。

「じゃ、決定ね」

「遠慮したいんですけど・・・」

「だから、ダメ」

「いや、俺と入るんならこいつらもいますよ？」

そう言って頭の方を指さす。

てっぺんにはシャンタク、右肩にティンダロス、左肩と背中にハスター、空中にアルがいた。

全員を世話するのが大変でしょうがない。

しかも、召喚獣3匹は冷たいところや涼しいところが好き。つまりは水風呂が好きなのだ。

だから、俺と入ると大変だと言うことだ。

「それでもいいですか？」

「うん♪問題ないよ（桜と入れるんなら別に気にしないもん。あ、でもアルはどうしよう）」

「そうですか（マジかぁ・・・）」

「マスター、どうしたの？」

「何でもないよ。アルは気にしないでいいから」

「うん」

「はぁ・・・（こいつの無邪気なところが羨ましいよ）」

side out

と言うわけで夜。

今のところ、フェイトは桜に抱きついたままだ。
料理の時とかぐらいしか離れていない。

その上フェイトに便乗してシャナも抱きついている。
大変すぎてどうにかするよりも諦めが出ていた。

「シャナ、そろそろ風呂入れよ。明日も早いんだろ？」

「うん、じゃあ入ってくる」

「アルも一緒に入ってきたよ。髪の毛洗ってもらえば」

「おお、そうする」

「(まさかそう来たか!)」

フェイトがアルへ一緒に入ってくるようにといった理由は、アルを桜と入らせる意味を無くさせるためだ。召喚獣なんて、後からはいらせれば問題ない。そう判断し、フェイトはそう言ったのだ。

「(まあ、いいか。疲れてきたし、もうどうでもいいや)」

「桜? どうかしたの?」

「何でもないですよ。ただ考え事を」

「そう。今日は一緒に寝るからね?」

「はいはい、わかってますよ」

フェイトさんと一緒に風呂に入る。
意外とまんざらでも無かったりしていた。

side out

「あの・・・フェイトさん」

「どうしたの?」

「さすがにこれはちょっと・・・」

風呂に入った後の事。
現在ベットの上ですけどなにか？
でも、状態が……。

「どうして？」

「どうしてって俺をまたいで寝るのは……」

「いつも隣だとシヤナがいるからね。今日は指向を変えて見たんだよ」

「フェイトさん軽いから別にいいんですけど。でも、これh——
—んむ!？」

「ん……んむ……」

何だろう。

最近よくキスされてるような気が……。
気のせいかな？

「ん!？」

さっきの考えはどうでもよかった。
今の事をどうにかしないと。

フェイトは、自分の舌を桜の口の中へ入れた。
それに応じ、桜もやるしかないと思い、フェイトの舌と自分の舌を
絡ませる。

「んちゅ・・・あふ、んむう・・・」

水の弾く音が聞こえてくる。

そして、口を離すと糸が引いていた。

「桜・・・」

「フェイトさん・・・」

「今日は、もう好きにしていよいよ」

「でも・・・俺はやっぱり・・・」

さすがに勢いだけではないけない。

マリナの時もそうだったじゃないか、学習しろ俺。

自分に言い聞かせ、落ち着きを取り戻す。

「気にしなくてもいいよ。私も、その・・・初めてだから・・・」

「!?!?」

そんな「初めてだから」とか言ったらダメですって。

抑えが利かなくなるから。

いや、マジでこれ以上は理性が。

「あ、でもそんなに激しくしちゃ、ダメだよ・・・?」

「!?!?」

あ、もうちぎれちゃったわ。

そんなこと言われたらもう無理に決まってるよ。
さようなら理性。

こんばんは性欲。

もう、マリナやシグナムさんは関係ない。
どうにでもなれだ。

「じゃ、じゃあ、入れますよ？」

「う、うん。その、優しく——」桜、入るよ——え？」

「あ・・・」

まさしく絶妙なタイミングだった。

ノックの後、すぐに入ってくるなのは。

そしてベットの上の2人を見てしまった。

「ゴメン、お邪魔だったね」

「ああ、母さん！？ちよ、ま——」

バタンツとドアが閉められる。

いや、もうタイミング悪すぎて俺が死にたいよ。

そう言えばどんな用事だったんだろう。

「ハ、桜・・・？」

「ごめんなさいフェイトさん。今日はもう寝ましよう」

「う、うん・・・それがいいね」

まさしく黒歴史だった。

第22話 黒歴史は作られる（後書き）

次回はどうしようかな。

まだまだ未定です！

とりあえず、ヴィヴィオ達はテスト期間に入るとしています。

あ、あと久しぶりに教導隊での風景を。

とりあえず、そんな感じで行きたいと思います。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第23話 魔王×魔王の息子（前書き）

なんだろう・・・。

最近Rー15を書きまくってる気が・・・。

これは俺の心の現れなのだろうか・・・。

第23話 魔王×魔王の息子

「か、母さん？」

翌朝。

誰も起きてこないうちになのはへ話しかける。

昨晚部屋に入ってきた時、何の用事だったか気になり一応聞いてみる。

「なにかな？」

「いや、昨日の事なんだけど」

「あゝ、あれ？えっと、その・・・」

「俺も勢いに任せすぎたとは思ってるから忘れて。と言うか忘れてください」

「まあ、それは良いんだけど。昨日、部屋に行ったのはね。桜が小さくなってたらフェイトちゃんが襲いかかるかもしれないから。一応様子見」

「そ、そうなんだ」

「それとね」

まだ理由があったらしい。

いや、本当に母親だから心配してくれるのは嬉しいけど。

「実はあれが羨ましかったり・・・」

「・・・は？」

「い、いや！違うよ！別に私もしたいな〜とか思ったわけじゃないよ！？」

桜は少し悟った。

あ、母さんはやりたいのか、と。

だったら相手としてはユーノがいるじゃないかと思うも、会う機会がなかなか見当たらない。

手短にいる仲の良い男性は最終的には桜になってくる。

またこのパターンかと思う所もあったが、どうしていいのやら困ってきた。

そして最近の桜の頭は若干おかしくなってきた。

とんでもない行動出る可能性もあった。

「で、でも、ユーノ君はあんまり会えないし。それに比べて桜は毎日一緒だし・・・ぶつぶつ・・・」

「・・・なら聞くけど、俺としたいの？」

「ふえ！？／＼」

もちろん、桜はとんでもない行動に出始めた。

そして桜のいまの言葉になのは顔を赤くしてしまう。

「ハ、桜！？な、何言ってるの！？いや、したいけど・・・でも私達、親子だから・・・／＼／＼」

「でも、したいんでしょ？」

「う、うん・・・／＼」

もはや何でもありだった。

桜は母親ですら落とせるのだろうか。

ある意味で才能でもあるかもしれない。

「ん、んむ・・・んちゅ・・・」

「あふ・・・ん・・・」

例によってキスから始まる。

母親とキスってダメなんじゃない？とか聞こえてきそうだが、気にしたら負けである。

まあ、早朝5時に誰かが起きてくる事はなく。

邪魔される事はなかった。

「桜・・・私・・・」

「息子とキスしただけでもうその気になるんだ。母さんもエロいね」

「そ、そんなこと——ん」

言葉は途中で遮られる。

そして再びディープキス。

今度は最初より少し長めだ。

「焦らさないでよお」

「いいや、これぐらいが母さんにはちょうどいい。もう少しは焦らす」

「私、我慢できない」

「しっ」

人差し指を立て、静かにさせる。

そして、少ししてから階段を下りる音がしてきた。
誰かと思い、少し警戒しつつ桜が出迎えた。

「おはよ、ヴィヴィオ」

「おはようお兄ちゃん」

「今日は早いな。どうした？」

「え？もう6時前だよ？」

「え？あ、ホントだ。時計見てなかったな」

壁に目を移し、時計の針を見る。

時計の針はもうすでに6時を指そうとしていた。

気がつかないうちにそんなにも時間がたっていたのか。

「私、ランニング行ってくるね」

「おう、行ってらっしゃい」

「朝ご飯、楽しみにしてるよ」

「あ・・・」

すっかり忘れていた。

未だに朝食を作っていなかった事を。

side out

場所と時間は変わって教導隊。

約2週間ぶりに行くことになり、今日もマリナの元へ来ていた。

「で、何の理由で1週間も無断欠勤してたのかな？ 1週間前はなのはちゃんから休むって聞いてたけど、その前は何にも聞いてないよ？」

「え、えっと・・・」

言い訳に困っていた。

なにせ、理由が子供になって遊んでました、なんて言えるわけが無い。

なのはがなんと言って休むことにしていたか気になってしょうがなかった。

「言えないならいいよ。その代わり、この場でやっちゃうから」

「ま、待て！ちゃんと言うから！だから俺とやろうとするのはやめてくれ！」

朝になのはとやろうとしていたヤツが何を言うか。

まあ、どちらにしろ言い訳できなければ大変なことになるだろう。

「じゃあ、何で休んでたのかな？」

「う・・・それは・・・」

ぶっちゃけるか？

いや、話を盛るか？

どうする？ うくん・・・。

「俺のユニゾンデバイスと召喚獣の世話。2週間前からずっとそれだ」

「ふくん、そんな嘘つくだあ・・・」

「え？」

え、いや、マリナ・・・さん？

本当ですよ？

アルもシャントクもティンダロスもハスターも全員いますからね？
呼べば出て来ますよ？

「これなら、やってもいいよね？」

「待て！だから、やm——んむ」

「ん・・・んむ・・・」

今日はキスしまくりだな。

そう思うがそんなことはどうでもいい。
もしこのままいけばまた襲いかねない。

「ぷは・・・どう？その気になれた？」

「俺が嘘つくと思うか？」

「うん、思うよ。でも、好きな人にはめったに嘘つかないでしょ」

「そう思うんだったら信じろよ。ユニゾンデバイスも召喚獣もいるんだから」

「じゃあ、見せて。見せてくれたら信じてあげる」

「わかった。・・・――――全員、出て来い」

魔導書（死霊秘法）を開き、呪文を詠唱してから召喚する。
魔法陣の中心からアルと召喚獣×3匹が現れた。

「な、言っただろ？」

「うん、わかった。じゃ、戻ってよし」

「はあ、アルく起きろく」

「んう？ますたあ？」

「今日は魔法の練習とかするぞく。起きたらいいもんやるからなく」

「ピュイ〜♪」

「なんでシャンタクが反応するんだよ！」

「ギュワー！」

「キュクワー！」

「ええい！お前らもか！昼になったらなんか作ってやるからおとなしくしろ！！」

「マスター、私には？」

「こいつらと一緒にだ。昼になったらなんか作るから、それまで我慢」

「ぶう〜」

「ああ、もう！そんなふてくされた顔するな！何も言えなくなるだろ！」

「じゃあ、やめる」

「ふう、ならいいけど。お前、狙ってるな？」

「何の事かな？」

「狙ってるな！？」

side out

「と言う事で、こいつら俺の召喚獣」

『ええええええ！？』

「まあ、かく言う俺も変化ありでさ。ユニゾンデバイスが出来た上に変換資質まで付いちまった」

『ええええええ！？』

みなさん絶賛ビックリ中。

いや、まあ誰でもそうなるよ。

何せ2週間前まで普通にすごい人が、もっと凄くなって帰って来た感じなんだから。

いや、本当にすごいねシャル先生は。

薬品ぶっかけるだけで人に変換資質つけるなんて。

まさしく天才ってヤツだよ。

「じゃ、今日も張り切って行こうか」

『この状況で！？』

「ダメなのか？」

『無理があります！』

「それだけ叫んでるんだ。大丈夫だろ」

『あなたは鬼か！』

「何とでも呼べ。どうせ呼ぶなら魔王の息子と呼ぶんだな」

『う、後ろ・・・』

「へ？」

おそろおそろ後ろに振り向く。

何だろう。

すごくデジャヴな気が・・・。

「桜・・・なんの息子だって？」

「え、えつと・・・母さんの息子だって・・・」

「つまりは私が魔王って事・・・？」

「あ、あははは、まさか」

「今日は寝させないからね？朝の続きだってまだなんだし」

「ええ！？マジで！？と言うかやるの！？」

「大丈夫。今日は私と桜だけだから。フェイトちゃん出張だし、ヴィヴィオとシャナはお友達とお泊まり会だし、アルと召喚獣達は先に寝させれば大丈夫だよ」

やばい、この人眼がマジだ。

どちらかと言うと、砲撃をぶっ放してもらった方が楽なんですけど。

「だから、ね？」

「いや、あの、「ね？」って言われても・・・」

「特別、今日は許してあげるから」

「は、はい・・・」

反論なんかできるはずがないよ。
だって本当に目がマジなんだから。
どうにかできたら奇跡だよ・・・。

第23話 魔王×魔王の息子（後書き）

次回！

桜が再びチビ桜になります。

だけど記憶、と言うか性格はそのまま。

体だけチビ桜です。

教導隊のみんながどうなるかはたぶん予想できるはず。

特になのはさんが——おっと、これ以上はネタばれになるのでやめときます。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第24話 弱みは握られるからこそ意味がある（前書き）

なんだかマリナがISの楯無さんに見えてきた。

いつそのこと楯無さんキャラにした方が面白そうになるかとも思うのは俺だけかもしれない。

友達に言ってみたら「微妙」の一言。

うーん、よし決めたぞ！

マリナは楯無さんキャラっぽく書こう！

第24話 弱みは握られるからこそ意味がある

「はい、午前はいったん終了。休憩入れるか」

教導隊ではいつも通りの風景が見られた。

きつい練習をいったん終了し、至福とも言える休憩の時間だ。それほど厳しくもあるのだが、その分力もつく。

それが桜の教導だつた。

「……ハ、桜……さん？」

「どうした？ リナ」

「その……桜さん……ですよね？」

「そうだけど？」

「じゃあ、お聞きしますが、いつからそのお姿に……？」

「え？」

リナが疑問を抱いている。

俺だと確かめる。俺だとわかっていなかった。

さつきの姿と全然違う姿……と言う事は……。

「……ええええええ！！！」

効果切れと言うことを意味していた。

side out

「お姉ちゃん！大変！」

「どうしたの。と言うかノックぐらいしなさいよ。ビックリしちゃうでしょ」

「そんなことより桜さんが！」

「桜君が？」

姉のマリナを呼びに行っていた妹リナ。

現状を軽く説明するなら――

「小さくなって追いかけまわされてる」

だそうだ。

アバウトすぎてちょっとわかりにくいかもしれない。

「は？」

もちろん反応は期待通りのものだった。

意味がわからないと言わんばかりに疑問符を頭の上に浮かべるマリナ。

リナはどう説明したらいいか困り始めていた。

「と、とりあえず！見てみればわかるって！」

「わ、わかった・・・」

side out

場所は変わって訓練場。

ちなみに現在の状態は――

「もう許して〜!!!」

さっきのリナの説明通り、桜は小さくなりいろんな人に追いかけまわされていた。

まあ、今の状態の桜を見たら誰もが「可愛い!」と言うぐらいだ。それほど可愛いと言う事なのだろうか。

「あ、母さ〜ん」

もちろん、最後の頼みはなのはだった。

頼れる人はそれぐらいだろう。

男メンバーではリーフとアウルだけでは心もとないし、違うやつでも絶対売り飛ばしてくる。

女性メンバーは現にこうして追いかけてきた。

もしマリナに頼めば逆に捕まってアウトだ。

上記の事を踏まえて母親のなのはが一番頼りだったのだ。

しかも今の桜は追いかけてまわされた事により若干泣きそうだ。

それが何とも言えないぐらい可愛く、さらに追いかけてまわされる原因に・・・。

「あ、効果が切れちゃったのか」

「（コクコク！！）」

「泣きそうな理由は・・・聞かなくてもよさそうだね」

「（泣き目で向こう側を指さし）」

「そっか。じゃ、捕まえた」

「へ？」

まさかのパターンだった。

母さんまで俺を裏切るとは！

こうなれば意地でもあの薬飲んで元に戻ってやる！

「アウル！リーフ！」

「はいはい？」

「兄さん・・・」

「俺のバック取ってきてくれ！いつもの場所に置いてあるから大至急頼む！俺はそれまで逃げ続ける！」

「あ、バックってこれの事？」

「!?!」

後ろから声がしてきたと思い、すぐさま振り返る。

そこには俺のバック（私物）を持ったマリナがいた。
やばい、オワタ。

「ふーん、なんか面白そうな事になってるね」

「マ、マリナ！それ返せ！」

「えー、どうしようかな。ねえ、なのはちゃん？」

「うん。どうせだからこのままでいいんじゃないかな？」

「それはイヤだ！だから返せよ！」

「そう。なら、条件を出してあげるわ。それを飲むなら返してあげない事もないわよ？」

「ぐ・・・条件って何だよ・・・」

「うんうん、話がわかる子は嫌いじゃないよ」

ものすごい笑顔で言ってくる。

やばい、何でかあの笑顔が可愛く見えたぞ。

そんなことは後にしよう。

今は条件とやらを聞こうじゃないか。

「なのはちゃん桜君を放して。ちょっと、耳貸そうか」

「？」

「えっと—————ってのはどう？まあ、イヤならいいんだよ。」

断るならあの事を教導隊中に叫んじゃうぞ」

「!?!? そ、それは、ず、ずるい!」

「ふふ、その顔可愛い。で、どうする?」

「うう・・・わかったから、早く返せよ・・・」

「よく言えました。はい、これ」

そう言いながら無邪気且つ悪戯っぽい顔でバックを渡してくる。
えっと、薬、薬・・・あった。

「んぐ・・・はぁ、後は待つだけだ」

「はーい、全員散った散った。桜君は私がかしとくから。なのはちゃん、ナイスだよ♪」

「いえいえ、私も桜の可愛い顔見れたんで良いですよ。マリナさんこそ、ナイスです」

「ところで聞くけど、何でそうなったの?」

まくっていた袖と足を元に戻して行く。

ベルトも一応ゆるめて、よしこれで準備OKだ。
マリナにこたえなきやな。

「八神家に行ってシャル先生の手伝いをして、その時に薬品数種類をかぶったらこうなった。ついでに変換資質も付いた。マジパね

えよ」

「うん、もう何でもありってのが良く判ったよ」

「ああ、俺もこれは大変だったよ。記憶が無くなって性格まで代わったからな。おかげではやてさんにお世話になりっぱなしだ。こんどまたお礼しなきゃな」

「そんなこと言いながら体、元に戻ったね」

「どちらかと言うと、これが代わった姿になってるんだよ。基本があの小さい体って事だ」

「ふーん。あ、さっきの約束、ちゃんと守ってよ」

「わ、わかったから！その事は人前で言うな！」

「はいはい」

これまた悪戯っぽい笑み。

まあ、それがこいつらしくていいんだけど。

「じゃ、後で行けばいいんだろ」

「うん、待ってるからちゃんと来るんだよ」

「了解」

side out

騒動は収まり事後。

先ほどの約束を果たすために今はマリナの部屋に来ていた。

「・・・」

「な、なんだよ・・・」

「いやゝ？何でもゝ？」

「はぁ・・・なんで条件が”思いっきり抱きしめながらのキス”なんだよ」

「いいじゃん。好きな人とキスするのは普通だと思うんだけどなゝ」

「・・・まあ、そうだな」

「お？なんか今回はやけに素直だな。さては何か企んでるな？」

「何でもいいだろ。俺はいろいろと悩みごとあるんだから」

「その悩みごと、お姉さんが聞いてあげましょうか？」

「いや、いいよ・・・」

「んむ!？」

もうめんどくさくなってきたから先に仕掛けた。
約束通り、抱きしめながらのキスだ。

と言うかどれぐらい続くんだったこれ。
ちよっときつくなってきた。
まあ、俺は先に離れる気はないぞ。

「ぶは・・・桜君、強引・・・」

「いいじゃねえか。どうせまたお前からキスしてくんだろ？目に見えてっからだよ」

「・・・じゃあ、もっかいしてよ」

「・・・わかった」

「ん・・・」

ちよっとどうしようか迷ったが普通にキスをした。
何故か今度はディープキス。
いや、こいつから舌入れてきたからしようがないだろ。

「・・・もう、いいか？」

「この先は・・・？」

「その内な」

「なら、最後にもう一回。今度は長くね」

「・・・はあ、しょうがねえな」

そう言いながら再びキスをした。

時間はさ程経ったわけではないが、その時だけなんでか時間が長く感じられた。

だが、この時2人は知ることもなかった。
この一部始終を見ていた人物がいる事を・・・。

side out

時間が経って夜。

母さんの言ってた通り、フェイトさんは出張、ヴィヴィオとシャナがお泊まり会でいなかった。

つまりは俺と母さん、アルと召喚獣達だけとなった。

「アルと召喚獣達はもう寝たの？」

「ん？うん、よく寝てる。朝までは起きないだろうね」

「じゃあ、その・・・」

「マジでやるの？」

「だって、朝のキスが忘れられなくて・・・それに続きもしてないし・・・だから、今夜は寝かせないよ？」

「・・・はあ（人生諦めが肝心だけど、こんな時に諦めていいのかな・・・）」

こうして夜はまた更けて行った。

ちなみに余談だが、翌日なのは肌がつやつやしていて、桜がげっそりしていたのは2人だけの秘密だ。

第24話 弱みは握られるからこそ意味がある（後書き）

次回はどうぞしような。

とりあえず、そろそろ泊りの回を入れようかな。

もしくはまだ日常を書くべきか・・・。

今のところはまだ未定です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第25話 高町桜の憂鬱 第三 微（前書き）

何だろう、最近キスシーンが多すぎるような・・・。

1話に1回はあるな。

今回もあるし。

まあ、泊りの回に入ればキスシーンも減るだろうな。

そう願うしかないし。

第25話 高町桜の憂鬱 第三微

「はぁ・・・」

「どうかしたんですか？」

「いや、なんでもない。ちょっといろいろあってだな」

「そう・・・ですか・・・」

翌日、教導隊にて。

若干、と言うよりも普通にげっそりしていた桜はリナに心配されていた。

無論、げっそりしていた理由は昨晚の事。
内容は読者の皆様に任せます。

「あ、あの・・・桜さん」

「ん？どうした？」

「桜さんって、お姉ちゃんと付き合ってるん・・・ですか？」

「は？」

聞かれた事は実に意外なことだった。

もしかしてマリナとのやり取りがそう見えたのか。
または何かを見てしまったか。

「な、なんでいきなりそんな事を・・・？」

「え、えっと、昨日、見ちゃったんです。お姉ちゃんと桜さんが・キ、キスするのを」

「・・・マジか？」

「は、はい。本当です・・・」

やばい、終わった、人生終了のお知らせ。
マイナス方面への言葉が大量に浮かぶ。
まさかりナが見ていたなんて思ってもいなかった。

「リナ、ちょ、ちょっと来い・・・」

「は、はい」

裏の方へリナを呼び出す。

こういう時はもうあれしかないだろう。

「な、なあ。ほ、本当に見たのか？」

「は、はい」

「・・・頼む、誰にも言わないでくれ」

「はい・・・って、え？」

「いや、これはマジなんだ。俺はマリナが好きっちゃ好きだが、いろんな人から好きって言われてるからさ。それでまだ迷ってて。昨日のあれは、薬を返す条件だから。その、なんて言うか、頼む！」

普通にお願いをした。

きれいに90度体をまげて頼みこんでいる。

「え、えっと、桜さん！顔を上げてください！私、誰にも言いませ
んから！」

「本当か!？」

「はい。だから、そんな顔しないでください」

「あ、ああ。そうだな。すまん」

正直リナが神様に見えた。

こんな子、めったにいないぞって言うぐらい。
よし、今度なんかお礼しよう。

「ごめんな、変なお願いしちゃって」

「いえいえ、私の方こそ、聞いちゃいけない質問しちゃったから」

「もう、戻っていいぞ。あ、今度なんかお礼するから期待してろよ」

「え? 本当ですか？」

「ああ。頼みを聞いてくれた礼だ」

「じゃあ、楽しみにしてます」

そう言い残してリナは先に戻った。

兎にも角にも、一応これで見られた事は解決したのであった。

side out

「お兄ちゃん、今度の期末テストもご褒美貰える？」

「ん？あゝ、あれか？去年はやってないからな。コロナは気合い入れてんじゃないか？」

「うん、すごく頑張ってた。でも、私も負けないもんね」

「何の話？」

シヤナが疑問に思うのも無理はなかった。

ヴィヴィオが学校に通い始めて、期末テストの度にやっているこれ。去年は桜が長期出張でいなかったのやっていなかったが、帰って来たのでやる事になった。

まあ、一番合計点数が高かった人にご褒美と言う単純なものだが。それはそれでヴィヴィオ達は嬉しいのだからいいのだろう。

「ま、一番頑張った人にはご褒美って事だ。頑張れよ」

「・・・」

「ご褒美ってのがわかんねえのか。そりゃ、しょうがねえな。じゃ、一番になった時のお楽しみだ」

「うん！」

「よし、良い返事だ」

最近はやナノ兄離れが若干出来てきているので、この調子で兄離れしてくれると嬉しいのだが。

あ、でも離れすぎても俺が寂しくなるからなあ・・・。

あれ？俺、完璧にロリコンっぽくなってね？

しょうがないよな。

俺は寂しがり屋なんだからさ。

「さて、今夜の夕食はっ」と

「何作るの？」

「いや、正直何でもいいんだけど。どうしようかな」

とりあえず、何でもいいので作り始めよう。

と言っても無難にカレーだが。

まあ、美味しいからいいんじゃないかね？

「ふふっ」

「？ 何したの？」

「いや、こうしてるとなんだか夫婦みたいに見えるなっって」

「ぶっ！」

一瞬で吹いた。

完璧に不意打ちで吹かざるを得ないだろう。

「ちょ、母さん！」

「あれ？変だった？」

「いや、あの、俺、あんたの息子なんだけど・・・」

「でもやったよね？」

「う・・・でも、あれは勢いとか、流れとかいろいろ重なったから・・・」

「それでもやっちゃったよね？」

「・・・」

「無語は肯定の意味だね。凶星ってやつ？」

「もう、いいです・・・」

ダメだ、最近いろんな人に口で勝てない。

どうしたらいいんだろうか。

と、とりあえず続き続き。

「ねえ、桜？」

「ん？何？」

「ちょっとここ向いて」

「ゴメン、今はちょっと・・・」

ダメだぞ俺。

向いたら絶対ダメだ！

向いたら絶対にやばい方向に行きかねない！

「・・・向いて」

「いや、あの・・・マジで後にして・・・せ、せめて全部やらせて貰えるとうれしいんですけど・・・」

「・・・」

なんだろう。

何で俺はこんなにビビってるんだ？

隣の人からめちゃくちやすごいオーラが出てんだけど。

怖くてしょうがなんだけど。

これ、もう向いちゃった方が楽じゃね？

「・・・わ、わかったから。わかったからそのオーラをひっこめてください」

「じゃあ、こっち向いて」

「ほら、向いたかr————」

ああ、やっぱりだ。

この人、キスしてきたよ。

と言うか、俺今手濡れてるから抱き寄せられない。

そう言えば俺、こう言うのに耐性出来てね？

あゝ、なんかいやだな、それ。

「・・・」

（母さん、離れてくると嬉しいんだけど。この体制きつい）

（ダメ。もう少しこのまま）

念話で離れてもらうように言うが無理っぽいな。

一回離れてくれれば今度はしつかりやるのに。

あ、そう言えばいいのか。

でも、それはさすがに・・・。

「・・・ぷはあ」

「ようやく手が拭ける。さて、もう一回・・・」

「んむ・・・」

もう一度、今度はこっちからキス。

マリナの時のように抱きしめながらだ。

そう言えば、俺って母さんに惚れてんのか？

自分からもキスするぐらいだし。

・・・待て、それはいかんだろう。

親子だし。血は・・・一応つながってるよな。

俺、母さんのクローンだし。

大丈夫なんて言ってもらえないな。

しかもいろいろと引っかかる部分ありまくりじゃないか！
うゝん、どうしたらいいかな。

「・・・今日は、このくらいで終わり」

「夜は・・・」

「今日は無し。また今度」

「・・・本当にダメ？」

「我慢する。俺だって連続では無理だよ」

うん、母さん相手だと連続でやるのはきついよ。

頑張っても2日連続が限界だな。

でも、今日はやらん。

何でって、疲れてるからだよ。

「さ、そろそろ煮えたかな。ちょっと味見してみて」

「う、うん。・・・いいんじゃないかな」

「どれどれ、うん、良い感じだ」

「!?!?」

「どしたの？」

「な、なんでもないよ／＼（か、間接キス／＼普通のキスよりものなにか嬉しい／＼）」

「？」

こうしてまた一日、夜が更けて行った。
ちなみに桜のカレーはヴィヴィオとシャナに絶賛されたそうだ。

第25話 高町桜の憂鬱 第三 微（後書き）

次回は・・・そろそろ泊りの回にしようかと思っています。

連続で戦闘シーンを書くなんて久々すぎるような気がする。

とりあえず、泊りの回は確定・・・かな？

もしくはその前辺りの話にしたいと思います。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第26話 異世界訓練合宿出発進行!!

「試験終了お疲れ様」

なんかかんやでヴィヴィオ達のテストの日。
無事テストを終えて、全員が高町家に集合していた。

「みんなどうだった？」

「花マル評価頂きました!」

「4人そろって」

「赤点なし!」

「優等生です!」

全員が渡された点数表を見せる。
みんな一教科80点以上を取っている。
コロナとシャナなんて全教科満点だ。

「あれ? そう言えばお兄ちゃんは?」

ふと疑問に思った。

みんなの前にいつもいるはずの桜がない。
それにいち早く気付いたのはシャナだった。

「桜ならまだ寝てると思うよ。最近疲れてたみたいだから」

「私、起こしてくるね」

そう言ったのはとフェイト。

何故かフェイトの肌がつやつやして見えたのは気のせいだろう。そして、なのはが立った時だった。

ドカ！バキ！グギャー！ドゴン！ズシャアアア！！！！

階段の方から無駄にすごい音が引いた。

急いで全員が向かうとそこには――

「桜！大丈夫！？」

「あははは、足踏み外しちゃいました・・・」

ものすごい体制で階段から転げ落ちた桜がいた。

すぐさまフェイトが駆け寄る。

目立った外傷はないようで大丈夫のようだ。

「んゝゝ！！よく寝たゝ」

さつき転げ落ちたのが嘘のようにすくつと立ちあがり伸びる桜。

さらには体中の骨をポキポキと鳴らし、体を動かす。

もはや寝起きの動きではない。

「お？みんなテストどうだった？今回は誰が一番だ？」

「えっと、今回はシャナとコロナが一番だよ。2人とも満点で」

「おお、そうか。みんな、特に2人はよく頑張ったな」

そう言ってみんなの頭を撫でた。

まあ、このぐらいは別に何の問題はないな。

「ご褒美だっけ？」

「はい！」

「楽しみ〜！」

「じゃ、まずはコロナからでいいか？」

「お願いします！」

「それじゃ、よっと！」

そう言って桜は突然コロナを持ち上げた。

しかも、お姫様だっこだ。

突然持ち上げられた事に驚きはするが、コロナはそんなに動揺していない。

前に一度経験しているからだ。

「今回はちよつとアクロバティックに行ってみるか」

「ひゃっ!？」

庭へ出てさらに壁蹴りからの宙返り。

まあ、ご褒美ってのはお姫様だっこで少しの間動き回るって言うのだったんだ。

最初にヴィヴィオとコロナがそう言ってきて「それでいいのか？」

って聞いたら「それでいい！（いいです！）」って言われたからなあ。

それからずっとってじゃないがこれが主流になってきている。

「よつと、こんなもんでいいか」

「あ、ありがとうございます／＼」

「2人ともどしたの？」

「な、なんでもないよ」

「う、うん」

「？」

「（羨ましいなんて言えない！ましてや、やってほしいなんて！）」

「ま、いいか。さ、次はシャナだな」

「やった〜！」

この後、普通にシャナの分もやってご褒美タイム終わった。

なんだか母さんとフェイトさんが羨ましそうな顔をしていたのは気のせいかな？

side out

「さて、そろそろ来るころかな」

「？ 誰が？」

「お客様」

「お客様？」

ピンポン。

インターホンの音がリビングまで聞こえてきた。

「お、来たな」

そう言いながらヴィヴィオを連れて玄関に行く。
待っていたお客様はと言うと。

「こんにちは」

「よっす」

「アインハルトさん！？・・・とノーヴェ！」

アインハルトとノーヴェだった。

荷物を持ってるのを見ると一緒に行くようだ。

「異世界での訓練合宿とのことで、ノーヴェさんと桜さんにお誘い
頂きました。同行させていただいても宜しいでしょうか？」

「はいっ！もー、全力で大歓迎です！！」

アインハルトの手を取ってぶんぶんと上下に動かす。
その顔はまさしく嬉しいさそのものだった。

「ヴィヴィオ、上がってもらおうか」

「あ、うん！アインハルトさん、どうぞ！」

「お邪魔します」

はっと気がついたヴィヴィオ。
すぐさまアインハルトを中へ案内してった。

「言わなくて正解でした」

「ああ、予想以上にな」

なんだかいつもよりヴィヴィオが元氣に見えた。
それは、昔の俺みたいに、母さんへ対する憧れのように。
ヴィヴィオからアインハルトへの憧れのように見えた。

side out

『じゃ、それで人数確定ね』

「はい！」

「あ、メガーヌさん」

『どうしたの桜君?』

「俺の生徒4人ほど連れて行っていいですか?」

『良いけど、食材が足りるかしら』

「なら、俺が買っていきます。それならいいでしょう?」

『ええ、こういうのはみんなで楽しくいかなきゃね』

「では、お世話になります」

『いいえ♪じゃ、待ってるわね』

メガーヌさんはやっぱりいい人だ。

そう言えば、ルールと会うのも久しぶりだ。
毎回モニター越しだから懐かしく感じるな。

「桜、急に決めちゃっていいの?」

「え? ああ、大丈夫。もう言ってるから」

「そうなの?」

「うん。次元港で待ち合わせしてある。俺、バイクで食材買ってか
ら行くから。あ、1人後ろに乗れるけどどうすっかな」

『私が乗る!』

「うお・・・」

ノーヴェさん以外がそう言ったからビックリだ。
と言うか、何でそんなに気合が入ってるんですか？

「あゝ、フェイトさんは無理じゃないッスか？車、運転できるのフェイトさんだけですし・・・」

「あ・・・」

「こ、今度、い、一緒に行きましょう・・・」

「そ、そうだね・・・」

「じゃあ、誰が乗るの？」

「無難にじゃんけんで勝った人。俺は準備してるから、決まったら荷物持ってこいよ」

『じゃんけん！はい！あいこでしょ！』

「早！」

ものすごい速さでじゃんけんを始めていた。

あいこの数が無駄に多いですよみなさん・・・。

ちなみに結局じゃんけんに勝ったのはノーヴェさんだった。
どうしてあなたも参加してるんですか・・・。

第26話 異世界訓練合宿出発進行!! (後書き)

今回は久しぶりに六課FWメンバー勢ぞろい!!

ルーテシアも今作初登場!!

そしてついに2代目WFメンバー(教導隊チーム)にデバイスが!!

異世界訓練合宿1日目は一体どうなる!?

それはまだ未定です(おい

あれ?でも、これって未定とは言わなくね?

まあ、いいか!

誤字脱字、感想あればお願いします。

第27話 合宿1日目 01

無人世界カルナージ。

アルピーノ親子が住む異世界である。

首都クラナガンの次元港の臨時次元船で約4時間。
ゆったりと旅行の始まりにはちょうどいい。

ミッドとカルナージの標準時間差は7時間。
1年を通して、温暖な大自然の恵み豊かな世界だ。

「あ、そうだ。みんな、今回の合宿は気合い入れてけよ。周りは全員強敵だらけだからな」

「はい、頑張りますよ!」

「先輩ばつかりに負けてられませんからね!」

「それにすっごく楽しみです!」

「・・・頑張る」

「それと、あっちに付いたら俺からの嬉しいプレゼントがあるから
楽しみにしておけよ」

「嬉しい?」

「プレゼント?」

「ですか？」

「おう」

side out

「みんないらっしやうい♪」

「よっす、ルールー」

「桜兄い久しぶりー！」

「おう、元気で何よりだ」

出迎えてくれたアルピーノ親子。

直接会うのが久しぶりで話がはずむ。

うん、いいことだ。

「シャナと、リオは直接会うのは初めてだね」

「今までモニターだったもんね」

「会えてうれしいよ」

「そうね。私も会えてうれしいわ。それに2人とも、にもターで見
るより可愛い」

「ほんとー？」

「えへへ」

なんだかんだで仲良くなってるよこの3人。
普通に頭なでなでしてるし、見てるだけで仲がいいのがわかる。

「あ、ルールー！こちらがメールでも話した」

「アインハルト・ストラトスです」

「ルーテシア・アルピーノです。ここの住人でヴィヴィオの友達、
14歳」

「ルーちゃん、歴史にも詳しいんですよ」

「えっへん！」

「そういやエリオ達はどうした？先来てんだろ？」

「ああ、2人なら今——」

ルーテシアが言い終わる前だった。

後ろの方からガサガサと物音がし、後から声が聞こえてくる。

「お疲れ様です！」

「おっす、エリオ、キャロ」

「久しぶりだね桜」

「お前、また背え伸びたか？」

「そ、そう？」

「ああ、なんか去年より目線が高い」

「私も伸びたよ！1・5？！」

「前とほとんど変わらねえじゃん！」

こんなやり取りも久しぶりだ。

1年ぶりなのがつい昨日のように思い出せるぜ。

「アインハルト、紹介するね。2人とも私の家族で」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエと飛竜のフリードです」

「1人ちびっこがいるけど3人で同い年」

「なんですと！？1・5？も伸びたのに！」

「まだ伸びる・・・と思うから」

「その間が気になるよ桜君！」

なんだかキャロをちやかすの面白いな。

もうちょっとやってみようかな。

でも、そんなことしたらエリオが怖くなるからやめておこう。

「アインハルト・ストラトスです」

「うん」

「よろしくねアインハルト」

お互い挨拶を終えたところでキャロがついにあることに気がついた。
そう、俺の肩と頭に乗っているこいつらだ。

「桜君、その子たち何!？」

「ん?俺の召喚獣。全員挨拶。アルも起きろ」

「ん・・・おはよ、マスター」

「おはよ、みんなに挨拶しろ」

「りょくかい。アル||アジフです。よろしく。この青い子はシャ
ンタク、白い子がティンダロス、最後にこの竜がハスターよ」

「ピュイ〜」

「ギュグワ〜」

「キュワーン」

「キュクル〜」

「フリードも友達だって認めたみたい」

とまあ、こんな感じでワイワイ話している時だった。
また後ろの方でガサガサと物音がする。

それにいち早く気がついたのはアインハルトだ。

「!？」

「てい！」

「あう・・・」

「そんな警戒すんなって。こいつは敵じゃねえよ」

敵だと思い構えたアインハルトに軽くチョップを下す。

うん、やられた時の声が可愛かったな。

とりあえず、目の前にいる黒いヤツに目を向けた。

「よお、ガリユー。元気してたか？」

「・・・（コク）」

「そうか。こいつらはってさっき聞いてたか」

「・・・（コク）」

「あの、この子は・・・」

「この子は私の召喚獣で大事な家族。ガリユーって言うの」

「し、失礼しました・・・」

「私も最初はびっくりしたー」

「さて、じゃあ俺たち大人チームは着替えてアスレチックに集合な」

『了解』

みんなが一斉に返事をしてくる。

うん、楽しみだな。

こうして楽しい異世界訓練合宿1日目が始まった。

第27話 合宿1日目 01（後書き）

あれ？そう言えばみんなにデバイス渡してないような・・・。

次回でいいか！

うん、そうしよう。

次回は・・・まだ未定です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第28話 合宿1日目 02 (前書き)

今回はアインハルトの出番が多い!? (たぶん)

期待させといて少なかったらごめんなさい。

第28話 合宿1日目 02

「よし、アップは終了——なんですけど、休憩伸ばします？」

「だ・・・大丈夫です！」

「バ、バテてなんか・・・いないよ・・・？」

「と言うことらしいから休憩伸ばそうか」

「そうだね」

異世界合宿1日目での訓練前のアップ。

俺や母さん、教導隊メンバーはもちろん、スバルさんは普通にこなしていたのだが・・・。

俺たちのような激しい動きを常にしていないフェイトさん、ティアさん、エリオ、キャロはたくさん汗を流し、ハアハアと息を切らしてバテていた。

「そうだ、まだ渡してなかったな」

「？ 何をですか？」

「お前らがまだ持っていない、専用デバイスだ」

『・・・ええええええええええ！！？』

「ちょうどいい機会だからさ、まとめて作っておいたんだ。性能はデバイスマスターのお墨付き、限界まで使ってやれよ。これからの

パートナーになるんだからな」

そう言いながら4機のデバイスを渡した。

徹夜続きで疲れたが、まあこいつらのためだ。苦でもない。

ちなみにマリーさんに見せたら「今ならデバイスマスターも夢じゃないわ!」と言われたさ。

「名前はまだ決まってるからしっかりつけてやるんだぞ。それと、お前らに合わせるからたぶん使いやすいと思う」

「ありがとうございます!」

「本当に桜さんは最高です!」

「これからよろしくお願いします!」

「ありがとう兄さん」

なんだか全員にものすごいお礼を言われた。

まあ、誰だって嬉しいわな。

今まで自分で作ってきた訓練用の武器じゃなく、高性能の専用デバイスで戦えるんだ。

俺だって、母さんにWとSTを渡してもらった時は母さんに抱きついたぐらいうれしかったし。

なにせよ、喜んでもらえて何よりだ。

「俺、先戻って昼食の用意してくるわ。ついでにヴィヴィオ達の様子見」

「わかった。美味しい料理、期待してるよ」

「はいはい。じゃ、先に上がらせてもらおうよ」

side out

ドパアアアンツ!!!

ものすごい音が川の方から聞こえてきた。
もしかしたら、水切りをやっているのか？
少し急ぎ足で向かう。

「お、やってるな」

「お兄ちゃん！」

「桜さん！」

予想は的中。

川ではヴィヴィオとアインハルトが水切りをやっていた。
うん、まだコツを掴んでないみたいだな。

「おっす、そっちは終わったのか？」

「いや、俺は先戻って昼食の準備。ついでにこっちの様子見」

「そうか。もう戻るのか？」

「そうッスね、なんもすることないですし。ここで見てると俺も遊

びたくなりますから」

そう言いながらも平たい石を一つとる。

そしてそのまま川へ投げ飛ばした。

ちゃっ、ちゃっ、と水を切りながら石は向こう側まで到達する。
これぞ本当の水切り、なんちって。

「あ、そうだ。アインハルトちょっとこっち来い」

「？ はい」

「水切りのコツを教えてやろう」

「コツ・・・ですか？」

「ああ。構えの時は脱力して、途中まではゆっくり、だがそれでも少し早めに。インパクト時は遠心力を使い、それに合わせて一気に撃ち抜くんだ。そうだな、動きだけならこんな感じだ」

軽く動きだけをやってみる。

よく判んなかったらどうしようかと思うが。

「なんかよくわかんないって顔だな。しょうがないUC」

『防水用バリアジャケットですね、わかっています』

「ん、頼む」

セット・アップして水の中へ入る。

うん、防水用だ。水が服の中に入っていない。

「じゃ、見てろよ。構えは脱力、ゆっくりだけど早く。インパクトは遠心力で、一気に撃ち抜く！！！」

しゅっと拳を突き出す。

すると少しの間をおいてから――

ドッパアアアアンツッ！！！！

川の一部が割れた。

だいたい10メートルぐらい先まで割れたのがわかる。

「まあ、こんな感じだ――っておい」

「す、すごい・・・」

「関心は良いが、わかったか？」

「は、はい」

「そうか、なら、やってみろ。もし俺の半分以上行ったら今度は面白いもんを教えてやる」

「が、頑張ります！」

やっぱ子供っていいな。

なんにでも力いっぱい取り組めて、頑張れる。

俺も出来たらあなりたいよ。

「面白い持って何教える気なんだよ」

「さあ、なんでしょうね」

「教える気なしかよ」

「アインハルトがそれほどの技量を備えているなら、俺はその技量にあった技術を与えたい。そう思っているだけですから。だから、そこまでたどり着けたら考えます」

「なんだかお前がわかんねえや」

「人間だれしも他人はわからないもんですよ。あ、俺、そろそろ戻りますわ」

「了解」

「アインハルトがどこまでできたか報告お願いしますよ」

side out

と言うわけで昼。

みんなで楽しく昼食だ。

うーん、やっぱり料理は楽しいね。

「はい、完成！」

『おおー！』

ぱちぱちと拍手が送られた。
えっと、ただみんなの前でチャーハン作ってただけなんですけど・
・。

「後何かリクエストは？なければ俺も食べ始めるけど？」

「もう特にはないみたい」

「じゃ、俺も頂くとします」

リクエストを数個聞いて作り終わり、俺もようやく食事に。
うむ、我ながらいい味してるぜ。

「だ、大丈夫かアインハルト」

「だい、じょうぶ・・・です・・・」

「ずっと水切りやってたからな。それとこいつ、ちゃっかり半分行
つてたぞ」

「へー、頑張ったな。なら、今度面白いもんを教えよう。約束だ
からな」

「ありがとうございます・・・」

そんなに水切りやってたのか。
と言うか何処まで頑張り屋さんなんだよお前は。
余計にいろいろ教えたくないか。

「さて、何を教えたものかな。しょっぱなからレムリアか？それと

も基礎行つてストライクか？うゝん、こいつに合った技がいいよな」

悩みは募るばかりだな。

まあ、これは後にしても問題はないだろう。
別に休暇取って教えてやれば済むことだし。

「なんか、少し楽しみだな。こいつの未来が」

「？」

どんな強者に成長するかが楽しみでもあった。
でも、それはまだまだ先の話し。

第28話 合宿1日目 02（後書き）

次回は普通に模擬戦のターン！！

桜VSスパタイアコンビ！

氷結変化を身につけた桜はどう動く！

誤字脱字、感想あればお願いします。

第29話 合宿1日目 03 (前書き)

全開あとがきで氷結資質を使うとか書いちゃいましたが今回ははっきり言って使いません！

と言うか戦闘描写自体がめっちゃ短い方です！

でも最後の方が結構面白くかけたんで許して下さい・・・。

第29話 合宿1日目 03

「よし、次は模擬戦しますか」

「じゃあ、相手は私とティアでいい？」

「了解です。じゃ、母さん達はアウル達とでいい？」

「OK」

1日目の訓練はまだまだ続く。

昼食を終えた後のアップ他からの模擬戦。

変換資質は・・・使わないようにしよう。

俺に変換資質は似合わないからな。

「では、お願いします」

side out

「お、ヴィヴィオ、アインハルト！」

「あ、ノーヴェ」

「ブラブラしてんなら向こうの訓練、見学しに行かねーかー？そろそろ桜とスターズが模擬戦始めるんだってさ」

ヴィヴィオとアインハルトが2人で話しているところを見つけたノ

ーヴエ。

声をかけて模擬戦の様子を見に行けらしい。

「え？ ヴィヴィオさんのお母様方も模擬戦に・・・？」

「はい！ ガンガンやてますよ！」

「桜さんはわかります。でもお2人とも家庭的で、ほのぼのとしたお母様で素敵だと思ったんですが・・・魔法戦にも参加されてるなんて少し驚きました」

アインハルトの素直な感想を聞いてノーヴエは1人、腹を押さえ、笑いをこらえていた。

今にも笑いだしそうなぐらい面白かったのだろう。

「えっと、参加と言うかですね。ウチのママとお兄ちゃん、航空武装隊の戦技教導官なんです」

side out

「アクセル！」

大量の魔法弾を操作する。

そしてさらに加速、それよりもっと加速させる。

「シュート！」

ティアナはその加速する魔法弾を次々に相殺。

弾の数をどんどん減らて行く。

「!?!」

「はああ!!」

爆風の中からのスバルの奇襲。

それに対し桜は宙を一回転するようにして回避をする。

そしてソードにしたZEROで切りつけるが、それはかわされてしまう。

『ヴァリス』

「フェザーシュート、タイプ《クラスター》」

「クラスター拡散攻撃来るよティア!」

「オーライ!コンビネーションカウンター、行くわよ!」

「「シュート!!」」

拡散攻撃をティアナが次々と相殺して行く。

そしてその爆風の仲、スバルは1人特攻を仕掛けた。

「おおおおお!!!!」

『ソード』

「はあ!!」

リボルバーナックルと剣がぶつかり合い火花を散らす。
薙ぎ払い、そして距離を取った。

「こりゃきついな・・・」

久しぶりの2体1。

しかもこの2人のコンビは一筋縄ではいかなかった。

side out

「いつつ・・・い、一旦終了！」

「「ありがとうございます！」」

模擬戦は無事終了・・・なのか？

俺は結構来たのにあの2人はピンピンしてるぞ？
まあ、いいや。次々。

「2人はこの後、ウォールアクトでしたっけ？」

「フェイトさんとエリオも一緒だよ」

「じゃあ、母さんとキャラと、瑠璃は俺とやろうか」

「よろしくお願いします！」

「了解」

さて、まだまだ続きそうだな。
ウォールアクトと後は何があったかな。
どちらにしろ大変なのはよく判った。

side out

だいぶ時間は経って夜。

午後の訓練、トレーニングも終わり合宿1日目も終わりに近づいてきた。

「おお、こんなに新鮮な野菜とたまごが・・・」

「セインが持ってきてくれたのよ」

「そりゃ、ありがたい。なんかごちそうしなきゃな——ってその肝心なセインは？」

「たぶん、温泉でみんなにサプライズでも仕掛けて怒られてるんじゃない？」

「リアルな予想ですね・・・」

「あら？そう？」

キッチンに置いてあった食材を見ていた俺とメガーヌさんの雑談。
いや、マジでメガーヌさんの予想が全部当たりそうで怖いな。
と言うか温泉でのサプライズ・・・いかんいかん、鼻血が出てちまう！

考えるのをやめるんだ俺!! それ以上はダメだ!!

そんなちよつとエロい事を考えていた時だった。

ドゴォォン!!

急にものすごい音がする。

温泉の方だったな。

急いで行ってみよう!

走り出して、すぐさま温泉へ到着した。

「なんかあったのか!?!」

がら!つと勢いよく戸をあけながら言った。

いや、まず開けたのがいけなかったんだろう。

そう、みんな裸なんだから。

『え?』

「あ・・・／＼」

この後全員からフルボッコになったのは暗黙の了解だったとさ・・・。

ごふ・・・。。。

第29話 合宿1日目 03（後書き）

次回は合宿2日目！

赤組！（ティアナチーム）

フェイト、ティアナ、キャロ、ノーヴェ、アインハルト、コロナ。

青組！（なのはチーム）

なのは、スバル、エリオ、ルーテシア、ヴィヴィオ、リオ。

黄組！（桜チーム）

桜、シャナ、リナ、瑠璃、アウル、リーフ。

3チームのぶつかり合いの「大人も子供もみんな混ざって陸戦試合」が始まる！

1 o n 1 ! 2 o n 1 !

次回からは戦闘描写が長く続きます！

誤字脱字、感想あればお願いします。

第30話 合宿2日目 01 (前書き)

今回からは陸戦試合りくせんエキシビジョンが開始だ！！

桜たち黄組はどんな活躍をするか！

たぶん見ものです。

第30話 合宿2日目 01

「調子は良好。体の大きさにも異常はないし、何よりさっき昨日飲んだからまだ大丈夫だよな」

翌日の朝。

1人早く起きていた俺はランニングを終え、準備運動を済ませていた。

何度か腕をまわし、手を開いたり握ったりする。

うん、違和感も何もないな。

試合中に子供の姿に戻るなんてあったらイヤだけど、効力がその時その時で変わってくるってのがまた厄介だよな。

「・・・フリーズ」

手の上に小さな氷の塊を作り出した。

変換資質がついてしまい、練習に練習を重ねて使いこなせるようになった。

それにしても、ホントシヤマル先生の薬は怖いね。

何度も言うけど人に薬品ぶっかけるだけで変換資質つけられるんだからさ。

「はぁ・・・出来るだけ使わないようにしよう。うん、危なくなっただ時だけ・・・」

side out

「全員そろったな。では、試合プロデューサーのノーヴェさんから」

「ア、アタシか!？」

「はい」

「ごほん・・・えー、ルールは昨日伝えた通り赤、青、黄の6人3チーム別れたフィールドマッチです。ライフポイントは今回もD S A A公式試合用タグで管理します。後は皆さん怪我をしないよう正々堂々頑張らしましょう」

『はい』

ノーヴェさんからのルール説明（2回目）を聞き終えた後。
各チームずつに分かれ、少しの間作戦会議。
そして準備が整い・・・。

「赤組、元気に行くよ!」

「青組もせーの!」

「黄組、気合い入れろよ!」

『セーット・アープ!!!』

全員が一斉にセット・アープ。
カラーごとの配置とライフはこうだ。

赤組

ティアナ	CG	LIFE	2500
フェイト	GW	LIFE	2800
ノーヴェ	FA	LIFE	3000
キャロ	FB	LIFE	2200
アインハルト	FA	LIFE	3000
コ罗纳	WB	LIFE	2500

青組

なのは	CG	LIFE	2500
スバル	FA	LIFE	3000
エリオ	GW	LIFE	2800
ヴィヴィオ	FA	LIFE	3000
ルーテシア	FB	LIFE	2200
リオ	GW	LIFE	2800

黄組

桜	ALL	LIFE	2500
シャナ	FA	LIFE	3000
瑠璃	FB	LIFE	2200
アウル	CG	LIFE	2500
リナ	GW	LIFE	2800
リーフ	FA	LIFE	3000

『それではみんな元気に・・・』

メガーヌさんがモニター越しで試合の合図をしようとする。
その後ろには召喚獣チームが今にもゴングを鳴らそうとしていた。

『試合開始～～！！』

ジャアアアアンツッ!!!!!!

とゴングの音が鳴り響いた。

それと同時に各チームが足場を出す。

「ウイングロード!!」

「エアライナー!!」

「ウイングライナー!!」

ちなみにリナは前日、スバルさんとノーヴェさん2人に先天魔法を教授してもらい、気合いを入れて練習をして1日でものにした。本当に1回で出来たのを見た時はビックリしたがな。

「行くよりオ！」

「オツケー、ヴィヴィオ！」

「コロナさん、リオさんのお相手をお願いしても？」

「はい、任せてください！」

各チームが離れたところから中心に向かっていく。こっちもそろそろ動き始めないとな。

「いいか、作戦通り行くぞ」

「」「了解!」「」

「頑張るぞー!!」

「じゃ、お先!」

1人最大出力で中心地、ちょうど赤と青が両方見える場所までやってくる。

そして誰も予想が出来ない事をやるために、ZEROをいきなりバスターライフルに替えた。

「さあ、ZERO、いっちょ行くぜ!」

『イエスマイマスター。ブラスト・バスター』

「圧縮開始」

両手を広げいつでも撃てる隊背に入った。

砲撃の先は赤と青の正面。

カートリッジを2本ずつ消費し、さらに威力を高めていく。そして、圧縮が終わると同時に撃ち放った。

「!?!」

「全員回避!?!」

試合開始直後に砲撃による奇襲。

こんなド派手な作戦誰が考えるだろうか。

俺以外にいたとしたらそいつと友達になりたいね。

『赤（青）組、全員に通達! 中心にいる桜へ攻撃を集中!』

ニヤリと笑い、作戦が徐々に進んでいくことに喜ぶ。
まさかここまで予想通りに事が運ぶなんてこっちの方が予想外だ。
なにせ、俺に対しての集中砲火が狙いなんだから。

「うわ、早速きましたか」

「いきなりの奇襲くらっちゃ誰だって狙うだろ！」

「一番最初の脱落者になるのが狙いなのかな？」

「まさか。俺ははなからやられる気なんてありませんよ。だって――」

「「!？」」

「はあああ!!!」

「これが狙いですもん」

攻撃を仕掛けようとしていたスバルとノーヴェを横からリナが攻撃を仕掛けた。

その攻撃は空中と言うこともあり、しかも突然のことであつたため2人とも防御が間に合わず、ダメージを受けてしまう。

スバル、ノーヴェ

L I F E 3 0 0 0 ― 6 0 0 0 || 2 4 0 0

「ありゃ？結構力入れたつもりなんだけどな」

「作戦通り！このまま2 o n 1に持ちこめよ！」

「了解！」

リナがスバルとノーヴェの方へ走って行く。

今頃は全員が2 on 1の状況を作れているころかな。

そう考え、移動しようとした気だった。

ガキイイイイン！！！！

突如両横に現れたフェイトとエリオの攻撃をギリギリで防御することになった。

エリオにいたっては昔よりもスピードが上がっているのがわかった。

「ちっ、まさかこの2人が先にきちゃうとは・・・」

「いきなりの奇襲で驚いたけど、さすがにやられっぱなしはイヤだからね！」

「今回は負けないからね！」

「はいはい、なら————今度は違う奇襲をするまでです」

「「!？」」

ガン！！ガン！！

2人は突如後頭部に痛みが走り、力が緩んだ。

その隙を見逃さず、桜は2人を切りつけた。

エリオ、フェイト

「い、今のは・・・」

「さあ、流れ弾じゃね？」

もちろん流れ弾なんかじゃなく、ちゃんと狙った弾だ。

最初の地点、アウルがそこで待機している。

そこからの超精密射撃と兆弾を利用して得られる広範囲への射撃。

そう、俺たち黄組の作戦はこれだ。

第1に俺が砲撃で奇襲をかける。

第2に俺を狙って集中砲火が来ると予想し、そこへ来た2人組の相手を誰かが引き受ける。

もし、予想が外れたら各自散回、2on1の状況が無理やりにも作る。

そして第3、最後に全員が戦っている中アウルが精密射撃で全員を援護。

地味にライフを減らし、戦っているヤツがとどめをさすという作戦だ。

実質2on2でもある状況、相手の1人は視えない。

実戦でこれが出来ればたぶんほとんどの確率で勝ちが得られるであろう。

「（エリオ、ここは2人でフェイトさんをやらないか？）」

「（なんですさ。この状況ではフェイトさんと一緒に戦った方が断然有利だよ）」

「（バカだなあお前は。俺と組んで体力とライフを温存しながら戦

うのと、フェイトさんと組んで俺に大量のライフを削られるの、ど
っちが言いにかまってる？」

「(う・・・わかった。やろう)」

これにてエリオの敗北は確定したのも同然だ。

俺と組めば確かに体力とライフは温存できるだろう。

だが、しかし！その後が問題だな。

エリオが俺とサシで戦って勝った歴史はアルと出逢って以来ない！
つまりはエリオは(たぶん)俺には勝てない！

「さあ、勝負はここからですよ、フェイトさん」

「僕達、2人を相手に出来ますか？」

第30話 合宿2日目 01（後書き）

やべえ、なんか書いてて楽しくなってきたテンション上がってきました（笑）

桜の策略が酷い、もといすごい！

自分を餌にしてアウルの精密射撃でライフを削るなんて！
しかもしよっぱなから砲撃はもっとやばいですって！

とりあえず、次回も戦闘描写オンリーです！

誤字脱字、感想あればお願いします。

第31話 合宿2日目 02 (前書き)

今回はシャナ、リーフ、リナの場所を書きました！

3人とも結構頑張ってますね。

さて、それぞれの相手に勝つことはできるのか・・・。

第31話 合宿2日目 02

コロナVSシャナ&リオ 「仲良し元気っ子コンビ」

「雷龍！」

「炎風！」

リオが放った雷龍に対し、シャナは紅い翼から炎の風を送りだし、雷龍の威力をさらに高める。

炎の風を纏った雷龍は炎龍を粉碎し、片手を地に沈めているゴライアスへ一直線。

まとりつくようにするが。

「ゴライアス！」

コロナの合図と同時にゴライアスは埋まっていた右手を無理やり引き抜き雷龍を炎龍同様に粉碎する。

だが、それに乗じてリオとシャナはゴライアスの後ろへ着く。

そしてそのままコロナへ攻撃を仕掛けようと踏み込んだ時だった。

ビキ！ビキビキ！ビキ！

ゴオオオオオオ！！！！

すさまじい音を立てながらゴライアスの上半身がぐるぐると行き良いよく回り始めた。

突然の事にリオは急いで防御に入り、シャナは翼を利用し後ろへ下

がる。

「こ、このパンチは乗ったままだと危ないかも〜?」

『同感です』

ゴォー! とリオがいた瓦礫から炎と雷の柱が立った。
中心にはもちろんその柱を出した本人のリオがいる。

リオ

L I F E 2 8 0 0 — 1 1 0 0 ≡ 1 7 0 0

「(すごいやコロナ。あんなに速いゴーレム操作は並みじゃ出来ない)」

シャナ

L I F E 3 0 0 0 — 9 0 0 ≡ 2 1 0 0

「ゴーレムをあんなに速く動かせるなんて、コロナはすごいや!」

『お2人とも予想以上にダメージが少ないです』

「リオは防御もうまいし、シャナはすばしっこいから」

2 o n 1 の状態にもかかわらず、優勢を保ちつつあるコロナ。
そんな中、先に動いたのはリオとシャナだった。

「リオ!」

「うん! 雷神装!」

2人はゴライアスへと一気に間合いを詰める。
何かが来ると予想したコロナはゴライアスを防御の体制にする。
それを予想していたのか、2人はいきなり狙いをずらした。

「炎衝斬!!」

「轟雷砲!!」

狙いをずらした場所は脚と立っている場所。

バランスを崩せばこっちのものだ。

そして足場を悪くしたゴライアスは簡単にバランスを崩す。

「リオ、今だよ!」

「よい——」

耐性を保ったままではいられないゴライアスの右腕を、リオは両腕を
を広げ力の限り持ち上げた。
そしてそのまま背負い投げの要領で投げ飛ばした。

「——しよお——!!!!」

『マスターのお友達は力持ちですねえ』

「ブランゼル、そんなのんきな!」

投げ飛ばされたのにブランゼル自身、焦りが見えない。
それほどコロナを信じているのだろう。

「「イエーイツ!!」」

side out

リーフ (&アウル) VS ティアナ

「あわわわわ!!!!!! いで!?!」

リーフ

L I F E 3 0 0 0 — 4 0 0 || 2 6 0 0

現在リーフはティアナを相手にしている。
と言うものの・・・。

「ほらほら! 逃げてばかりじゃ勝てないわよ!」

「俺には無理がありますって!!」

実力の差が出てきていた。

ぶっちゃけリーフが一番弱いのでいきなりティアナの相手は無理だろう。

だが、残念なことにそれ以外はもっと難しかった。

残っていたのはなのは1人か、ヴィヴィオ&アインハルトのどちらかだ。

キャロとルーテシア、瑠璃は支援のセッティング中。

どちらにしろ一番弱いリーフではティアナの相手をして時間を稼ぐ

のが精いっぱいだった。

「ぬう・・・こうなったら！^{オーガ}O！」

『イエス』

諦めて決心したか。

リーフは逃げるのをやめ、デバイスを構えた。

そして向かってくるティアナの魔力弾を気合いで斬り落として行く。

「おお、やるう！」

「弱いヤツは弱いなりに頑張れるんです！はあ！！」

がむしゃらにティアナとの間合いを詰めて一閃。

だがその攻撃は届くことなく、ティアナの姿は消えて無くなった。

「あれ？痛！！」

リーフ

L I F E 2 6 0 0 — 8 0 0 || 1 8 0 0

姿を見失いきよきよとティアナを探しているさなか、後頭部に複数の痛みが同時に走る。

弾丸が飛んできた方向へ顔を向けるとそこには消えたはずのティアナがいた。

「私、これでも幻術使いなの。さっきのはフェイクシルエット」

「しまったあ！桜さんと何度も幻術対策してたのに！！」

「残念でした。まずは1人目!!」

「ちょ、ま——」

リーフの声はティアナの弾丸の音でかき消されたのであった。

side out

リナvsスバル&ノーヴェ 「ナツクル姉妹コンビ」

「おわ、つと・・・ふう」

「なかなかやるな」

「さすがは桜の教え子だね」

現在の3人の残りライフ。

スバル..2050

ノーヴェ..1950

リナ..2000

この2人相手にこの残りライフなら上々といったところだろうか。
アウルの援護もあるため十分勝てる可能性はある。
そう、へまをしなければだが。

「つてあれ？」

「あ！ノーヴェ！何処行くの！」

「後衛攻めさ！今なら弱ったヴィヴィオとお嬢を両方まとめてブン殴れるしな！」

現在ヴィヴィオはアインハルトとの1on1に敗れルーテシアのもとで回復中。

アインハルトはそのままなのは所へ行き、勝負を仕掛けて敗れ同じように回復中。

この比較的数の均衡を崩すチャンスノーヴェが逃すはずもない。

「スピードならアタシとジェットが上だ！追いつけるもんなら追いついて見やがれ！！」

「ちょ、ノーヴェ！」

「スバルさんは逃がしませんよ！」

「ええ！？こりゃ、困ったなあ・・・」

第31話 合宿2日目 02（後書き）

リーフ・・・お前はいつかきつと・・・。

さて、シャナとリオのコンビはなかなかよさそうですね。
以外にそのままコロナを倒しちゃうかも？

リナの場合はスバルとの1on1！
結果は果たして！

次回も引き続き戦闘描写オンリーです！！

誤字脱字、感想あればお願いします。

第32話 合宿2日目 03

フェイトVS桜&エリオ 「元六課年少男子コンビ」

『桜さん！リーフ君が撃墜されました！』

「何イ！？やっぱりあいつにティアさんの相手は無理だったか・・・」

現状説明と行こう。

今は3on1の状況が出来あがっているところもある。

アウルの高距離兆弾奇襲も相手には読まれ始め、次の作戦に移行。
瑠璃がアウルを召喚魔法で呼び、中心からの全方位遠距離兆弾奇襲をしかけた。

魔力散布も充分だ。

これなら集束砲で押し切ることができるが、何分今じゃ分が悪い。
速さのフェイトさんとエリオを2人同時に相手が出来る自信はそんなになかったからだ。

『桜さん』

「どうした！」

『キャラちゃんと一緒に囲まれちゃいました（T―T）』

「マジか！！アウルとシャナはどうした！」

『アウル君はティアナさんを探しながらの援護、シャナちゃんはさつきキャロちゃんに捕獲されて身動きとれずじまいですくく!!』

まさかここまで黄組が押されているとは。

シャナは捕獲されて、キャロと瑠璃が赤組に囲まれているだど？

ぶっちゃけキャロがやられてくれればうれしいが、こっちも瑠璃を失うのはきつい。

「アウル！今どこだ！」

『ティアナさん探して移動中』

「瑠璃の援護とシャナの救出に行けるか」

『・・・難しい』

「ならチャレンジしてみろ」

『頑張ってみる』

「頼んだぞ」

アウルへの頼みは終了。

瑠璃にも持ちこたえるように伝え、1人で戦っているエリオをそろそろ助けにいかないと。

「悪い、待たせた！」

「別に！まだまだ平気だけど」

エリオ

L I F E 1 6 0 0

桜

L I F E 2 1 5 0

フェイト

L I F E 1 8 0 0

「ソニック！」

桜がエリオと合流するのを確認したフェイトはソニックフォームへ姿を変える。

ここまで来たらいつきに決めるつもりなのだろうか。

大量の魔力弾を華麗にかわし、桜との間合いを一気に詰める。

「エリオ！飛べえ！！！」

「了解！！！」

剣を逆手持ちにしてクロスさせ、胸の前に足場を作る。

その上にエリオが片足をのせ、桜がばねの要領で勢いよく上空までエリオを飛ばす。

そして空中でフェイトに追いついたエリオが一気に切り裂く。

「うおおおお！！！！！」

フェイト

L I F E 1 8 0 0 — 1 3 6 0 〓 3 4 0

「追撃、ごめんなさい」

フェイト

L I F E 340－300＝40

ライフが100未満のため治療が行われるまで活動不可、行動不能

「「よっしゃあ！！！」」

s i d e o u t

「スバルさん！逃げないでください！」

現在スバルは逃走中。

普通に相手をしているさなか、いきなり逃げだしたのをリナは追っていた。

「ええ！？追いついてくるの！？」

「脚の速さには自信があるんです！」

ちなみにリナの脚の速さは異常だった。

100メートルを10秒切っていた。

その上今は桜に圧縮魔法を教えてもらい、瞬発力を高められている。スバルの速さに追いつくことだってできたのだ。

「到着！」

「うえ？」

急にスバルが動きを止める。

それに合わせてリナも動きを止めたがそこには――

「ええー!？」

「お前も来たのかよ」

ヴィヴィオとなのは、ノーヴェがいた。

しかも同じチームがスバルを合わせて3人。
ピンチにひとしいかもしれない。

なのは&ヴィヴィオ&スバル「仲良し親子&教え子トリオ」

vs

リナ&ノーヴェ「異色格闘型コンビ」

「ノーヴェさん」

「ああ、わかってる」

「「こうなりや（なったら）とことんやってやらあ!!」（やりま
す!!）」」

side out

リオ&ルーテシア「知的で元気コンビ」

vs

キャロ&瑠璃「サポート最強コンビ」

「キャロちゃん、ここは3人でどうにかしよう！」

「うん、頑張ろう！」

桜とエリオがフェイトを行動不能にしたころ。
はたまたリナとノーヴェが奮闘しているころ。

リオとルーテシアに囲まれた状態のキャロと瑠璃。
ちなみに向こう側にアルケミックチェーンで捕獲されたシャナが放置されてる。

最初は3対2だったにこうなっては分が悪い。

「でも、どうしよう・・・」

「大丈夫。私に秘策があるから」

「ホント!？」

「うん。だから・・・」

「・・・はい、わかりました！」

そう言って瑠璃はその場から早々とたち去る。

リオとルーテシアは「え!？」みたいな顔をしているが、これなら簡単にキャロを倒せると逆に勢い付いていた。

一方キャロはある作戦を実行するためにまずは逃げ続けていた。
ルーテシアのダガーも魔力弾で淡々と相殺させ、ダメージを受けず逃げ続ける。

「(2on1じゃ分が悪いけど・・・)アルケミックチェーン!」

「うっふふー♪当たらない当たらない!」

「それはそうだよ。当てるためじゃなくて、撃墜のための布石だから!」

その言葉の意味を指すものは少し向こう側。

そこには立ちあがり、復活を果たしたゴライアスとコロナ。

そして先ほど何処かへ行った瑠璃がいた。

「ナイスです、キャロさん!」

「コロナちゃん、必殺技いくよ!」

「はい!ゴライアスパージブラスト!」

「エクストラブースト!パワーアンドスピード!」

「「スーパードケットパーンチッ!」」

「「へ?」」

ゴライアスは右腕を上げ、発射の構えをとる。

構えた右腕は上半身と同じようにビキビキと音を立てながら回転し始め、やがてはギュルルル!!!!!!とものすごい音を立て高速回転している。

ただでさえ威力が高く、大きさも半端じゃないのにそこへ瑠璃のブースト。

回転速度はさらに上がり、ゆっくり回っているように見える。
そして、2人の掛け声とともにゴライアスの右腕は発射された。

突然の事に気の抜けたような声を上げたリオとルーテシアへ向けて
ロケットパンチは一直線。

もちろん、スピードも半端なく、範囲もそれなりに広いパンチを避
けられるはずもなく――

「うそーーーー!!?」

リオ

L I F E 1700—3000||l i f e o v e r
ルーテシア

L I F E 2200—3000||l i f e o v e r

直撃をくらい会えなく撃沈。

まあ、直撃でなくとも撃墜されていただろう。

「撃墜成功!」

「勝利の!」

「Vッ!!」

ピンチを脱出し完全に油断していた時だった。

「うへーーーー!?!」

キャロ

L I F E 1700—1700||l i f e o

「!？」

「これって！」

「キャロ撃墜にコロナちゃん、瑠璃捕獲！」

後ろの方からキャロは撃たれ撃墜。

コロナと瑠璃は捕獲されてしまった。

もちろん、これをやったのは――

「えー！ー！」

「なのはさん、いつの間に!？」

「勝ったと思った時が一番危ない時！現場での鉄則だよ！」

なのはだ。

リナ達との戦いから抜け出してきたようだ。

そして――

「ブラスター1!!」

ブラスターシステムを使用する。

ブラスタービットが周りに集まり始める。

そして試合の終わりが近づくのであった。

第32話 合宿2日目 03（後書き）

エリオと桜のコンビネーションはスバティア以上でなのフェイ以上です！

つまりは最強！勝てる人はいないんじゃないかな？

そして瑠璃。

キャロと2人ならサポート最強ですね。

たぶん、この2人が同じチームに入ったらルーテシア1人じゃ勝てないなw

リナの脚の速さは異常です。

本気出したら桜やフェイトはビックリですね。

未だに桜の前で本気の速さ出したことないようですからw

次回で陸戦試合は終わりです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第33話 合宿2日目 04 (前書き)

今回はいきなりクライマックス！

ティアナ&なのはのスターライトブレイカーが桜へ向けて打ち出された！

桜は果たしてどうする！

第33話 合宿2日目 04

「モード《マルチレイド》」

「シフト《ファントムストライク》」

なのは、ティアナが集束に入る。
目標はもちろん桜だ。

桜を中心にして、その射線上にお互いを捉える形となっている。

「「スターライト——」」

それを見越していたか、桜はすでに圧縮を始めていた。
右手には限界まで溜まった魔力あり、白銀の光を出していた。

「レムリア——」

「「ブレイカー——!!」」

「インパクトオ——!!」

次の瞬間、中心地は集束砲のぶつかり合いで光に包まれた。

「これ、なんて最終戦争？」というセインのコメントよろしく、誰が見ても最終戦争そのものだった。

その中心地に桜はいたのだ。

「ゼロドライヴ——!!」

右手のレムリアを地面にたたきつけて巨大なバリアを作るようにして爆発を起こす。

だが、それだけではもつ気配が無い。

このままではライフがけし飛ぶと判断した桜は最終手段に出た。

左手にも魔力をため始めたのだ。

白き冷気をまとった左手手刀でティアナのブレイカーを。

そして熱量をもつ右手でなのはブレイカーを受け止めた。

その刹那。

今度は最初よりもまばゆい光に戦場は包まれた。

side out

フェイト

LIFE 0

SLB着弾直前に桜とエリオの攻撃により撃墜

エリオ

LIFE life over

SLB—PS直撃・撃墜

シャナ

LIFE life over

SLB—MR直撃・撃墜

「なんだか私、今回活躍で来てな〜い!!」

『次がありますよ』

アウル

L I F E 5

S L B－M Rから逃げるも巻き込まれて戦闘不能

「残念・・・」

コロナ

L I F E 30

S L B－M Rをゴライアスで防御するも防ぎきれず戦闘不能

「ふにゃ～」

『大丈夫ですか、マスター？』

「な、なんとか・・・」

なのは

L I F E l i f e o v e r

S L B－P Sを相殺しきれず撃墜

「あーん、や～ら～れ～たあ～!!」

ティアナ

L I F E 2390－2280＝110

S L B－M Rをなんとか相殺

「な・・・なんとか生き残った・・・」

瓦礫から出てきたのはティアナだった。

ライフはかろうじて残っているものの、かすりでもしたら戦闘不能だ。

「残ってるのは私と・・・あと、3人？しかも2人は近付いてきてる！？この速さはスバル！？じゃあもう一人は！」

「俺ですよ・・・」

桜

L I F E 2150－1876＝274

S L B－M RおよびP Sをレムリア・インパクト、ハイパーボリア・ゼロドライブを使いなんとか相殺、ガードウイング（翼×6）での防御成功

「それとヴィヴィオです！」

ヴィヴィオ

L I F E 1800

「うそお！？何で生き残ってるの！？ヴィヴィオにいたってはなん
でほぼ無傷！？」

上空からは桜、地上からはヴィヴィオの奇襲だった。
この兄妹、コンビネーションが本当に強い。
ヴィヴィオにいたっては無傷だ。

「えへへ！見たか特救魂！！」
レスキューだまし

「あー、くそ。やられた！」

「私こと、ほとんどスルーなんて酷いです・・・」

スバル

L I F E 6 0

S L B－P S からヴィヴィオを庇い行動不能

ノーヴェ

L I F E l i f e o v e r

S L B 着弾後ヴィヴィオの攻撃により撃墜

リナ

L I F E l i f e o v e r

S L B－P S 直撃・撃墜

「ティアナさん、行きます！」

「あんな集束砲をぶっ放してくれたお礼はたっぷりしませんとね」

「別に来なくてもいいし、お礼もいらないんだけど・・・」

ティアナの撃つ魔力弾を巧みにかわしながら高町兄弟は迫ってくる。
だが、そんなピンチはすぐに過ぎ去ってゆく。

「霸王・空破断（仮）！！！」

「え！？」

「させるかよ！」

桜

L I F E 2 7 4 — 7 0 0 || l i f e o v e r

ヴィヴィオ

L I F E 1 8 0 0 — 1 5 0 || 1 6 5 0

「ティアナさんはやらせません」

「ご、ごめん、アインハルト・・・さっきのでもうやられちゃった」

「ええ！？」

アインハルト

L I F E 1 3 5 0

ティアナ

L I F E 1 1 0 — 6 0 0 || r i f e o v e r

桜がやられ際にティアナへ撃った一撃が当たり撃墜

「ヴィヴィオさん、私達が最後の2人のようです」

「はい！行きますよ、アインハルトさん！！」

最後に残ったライバル同士の2人の対決。

殴って蹴って、守って流しての繰り返し。

だがそんな中でもお互いを分析、解析をして見極める。

それを繰り返しているうちに2人のライフはいつしか少なくなっていくた。

ヴィヴィオ

L I F E 9 0 0

アインハルト

L I F E 7 5 0

「一閃必中——」

有効だを決めた後の最大のチャンス。

それを見逃さず、ヴィヴィオはさらなる追撃に出た。

「アクセルスマッシュ！！！！」

カウンターアッパーが決まり、アインハルトのライフが0になる。

それと同時にヴィヴィオは勝ちを確信するのだった。

だが、勝ちを確信するには早すぎた。

「!？」

ふらついていたアインハルトからの蹴り。
それが油断していたヴィヴィオに直撃する。

ほんの一瞬だった。

ほんの一瞬でお互いのライフが0になり、試合が終了した。

『はい、試合終了〜〜!』

青組・・・行動不能1名 撃墜5名

赤組・・・行動不能1名 撃墜5名

黄組・・・行動不能2名 撃墜4名

試合時間21分48秒

全員行動不能につき 引き分け

第33話 合宿2日目 04（後書き）

はい、やっと陸戦試合が終わりましたね。

今回は2日目の夜の話しと、出来たらつなげて3日目ですかね。

まあ、できたらですけど。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第33話 合宿2日目 05

「さて、休憩取って陸戦上の再構築終わったら2戦目だな。2時間後にまた集合」

『はい!』

「え? え? 2戦・・・目?」

桜の言葉とみんなの返事に1人だけ困惑気味のアインハルト。その姿を見てヴィヴィオと桜が近寄り声をかけた。

「い、言ってなかったか?」

「今日1日で3戦やるんです! 休憩はさんだり、作戦組み直したりして!」

「ならよかった。もっとやりたかったんです」

「じゃ、解散! 2戦目は12対6だから」

『え?』

「そこで!?」

全員に言ったはずが誰ひとり聞いた様子はない。まさか言い忘れた? まさか、そんなこと・・・ありえるな。しょうがない、メンバーだけでも言っておくか。

「6人チームは俺とフェイトさん、母さん。それとルールーとリオとリーフだから」

「ちょっと、それあんまりにも片寄りすぎてない？」

「大丈夫。ぶっちゃけたら数がハンディですから。12対6ですよ？」

「でも・・・」

「まあ、まあ。こういうのってあんまりないからいいんじゃないの」

「・・・しょうがないわねえ・・・」

「あゝ、意見があれば言ってくれてもかまわないんですけど・・・あくまで今のところなんで」

「反対意見は？」

『ありませーん』

side out

第2試合 結果 赤組（6人チーム）の負け

試合時間34分11秒

赤組 行動不能3名 撃墜3名

青組 行動不能4名 撃墜3名

第3試合 結果 9人1チームで分けて赤組の勝ち

試合時間47分51秒

赤組 行動不能5名 撃墜3名（ラストは桜）

青組 行動不能3名 撃墜6名

「ふう、さすがに3連戦はキツイわねえ」

「ホントだね」

「でもおかげで大分実戦勘が戻ったかも」

「よかったよかった」

全試合終了後、ホテルアルピーノ露天浴場にて。
ティアナとスバル、ノーヴェはゆったりとくつろいでいた。
ちなみに3人とも浴衣である。

コンコン

戸がノックされ、音が鳴る。

それに反応したティアナがどうぞと返した。

「ういっす。あ、浴衣似合ってますね」

「あ、桜」

入ってきたのは桜だった。

手にはトレイがあり、その上にドリンクが置いてあった。

先ほどの桜のコメントでノーヴェだけ少し赤くなったり、意外や意外、ティアナもちよっと赤くなってた。

「これ、俺特製のマスカットビネガーのジュースです。結構美味しいですよ？」

「頂きまゝす」

「気が効くわね」

「サンキュ」

3人とも勢いよく飲んでいく。

喉が渴いていたのもあったのか、一口が結構長い。

「そう言えば、みんなはどうしてた？」

「あー、フェイトさん一家はのんびり、母さんとメガーヌさんがキッチンで談笑中、でチビ達が部屋ぐったり」

「やっぱりか」

「まあ、みんなまだ子供ですから。でも瑠璃やアウルは俺の訓練受けて体力付けたのになんでかな？」

そう、なんでかあの2人もぐったりしていた。

俺の訓練を受けたらたいいのやつは体力着くのはどうしてだ？まだ子供だから体力着くのが遅いのか？いや、それはないだろう。ヴィヴィオだった結構体力あるんだから瑠璃がつかないのはかし——（長くなるので切らせてもらいました）

「じゃ、俺はチビ達に飲み物あげてくるんでこの辺で」

「ジュースありがとね」

「なら、またその内」

そう言いながら露天浴場を後にした。

そして再びキッチンへ戻りジュース作成。

ってあれ？ マスカットが・・・買い忘れだな。

「えっと、これとこれと、これは・・・まあ、いいか」

とりあえずフルーツをたくさん出してみた。

うーん、マスカットはやはりなしか。ならレモンジュースとかどうだろうか。意外に良いかもしれない。

小さめに切ってミキサーの中へin。

他にもフルーツ入れたからすっぱさは控えめだろう。

「よし、完成。母さんちよっと飲んでみて」

「あ、美味しい。フルーツジュース？」

「レモンメインだけどね」

「良いんじゃないかな？」

「じゃ、渡してくるわ」

呼びとめようとしてたのを振り切ってキッチンを出す。
もし止まってたら絶対にキスされてたな。メガーヌさんいるのに。
たまに母さんは大胆な行動に出るから怖いんだよな。

おっと、そんなことはどうでも——よくないな。
とりあえずそれは置いておいて、ドアの前。

コンコン

ノックって大切だよな。ノック考えた人は天才だよ。
だって入るよーって言わなくても伝えられるんだからさ。
ドア越しで出来るってのがまたいいよな。

「どうぞ」

中からルールーの声が聞こえる。
片手でトレイを持ってドアを開けた。

「栄養補給用のフルーツジュースだぞ、お？ インターミドルの映像か」

「そ。今、アインハルトの出場を勧誘中」

「ほー、いいな（出・・・たい・・・!!）!？」

「どしたの？」

「い、いや、なんでもない（今は・・・）」

頭の中で聞こえた声。それはまぎれもなく自分の声だった。

だけどなにかがおかしい。幼い昔の声だった。
一体なんだったのだろうか、謎は深まる一方だ。

一方その頃ヴィヴィオ達はインターミドルの話で盛り上がっていた。
ちなみに都市本戦上位あたりの選手の中には結構格闘家になる進む
子がよくいる。たぶんヴィヴィオ達が参加して上位に入ったらそう
なるだろうな。

「どうだ、出てみたくないか？」

「あ、その・・・」

「アインハルトさん！」

戸惑っていたアインハルトにヴィヴィオがずっと迫る。ちょっと
近すぎたなと思ったヴィヴィオは少し下がってさらに続けた。

「大会予選は7月からですから、私もまだまだ鍛えます。だからも
っともっと強くなって、公式試合のステージでアインハルトさんと
戦いたいです！！」

「・・・ありがとうございます、ヴィヴィオさん。インターミドル、
私も挑戦させていただきたいと思います」

「はいっ！」

「なら決まりだな。参加資格2つは問題なくOKなんだが・・・も
う1つがな・・・」

「もう1つって確か・・・」

「ああ、最後の参加資格は『安全のためCLASS3以上のデバイスを所有して装備すること』だ」

「桜兄いは作れないの？」

「エンシエント真正古代ベルカのデバイスはさすがに無理だな。それこそあの人達に頼まなきゃ」

「あの人達・・・？」

「そう、バリツバリにエンシエント真正古代ベルカな大家族——八神家だ！」

第33話 合宿2日目 05 (後書き)

次回は3日目！

どうなるかはまだ不明です！

誤字脱字、感想あればお願いします。

第34話 チビ桜再び（前書き）

サブタイトルの別名は『合宿3日目 01』です。

第34話 チビ桜再び

翌日。合宿3日目が幕を開けた。

チビ達よりも大人チームはちよつと早く起き、朝食の用意をしていた。だがその中に桜の姿が無い。

「・・・ん」

なのは達が起きたちよつと後、スバルも目を覚ました、だが何やらちよつとした違和感が胸のあたりにある。でも抱き枕としてはちよつといいサイズだ。そう思い抱きしめた。

「にゆう・・・スー、スー」

「？」

あれ？なんだかおかしいな？抱き枕って喋るの？
それに私抱き枕なんて持ってきたっけ？と言うか持ってたっけ？

疑問が頭の中に多数浮かぶ。

少し考えていると完全に目が覚めてしまった。

なら、確認しようと言わんばかりに抱き枕だと思っていたものを手放し、少年だと言う事を確認した。

「え・・・？」

スバルの朝はビックリで始まった。

Side out

「そう言えば桜の姿が見当たらないけど・・・」

「疲れてまだ寝てるんじゃない？」

「なのはさん！なのはさん！なんはさん！」

どたどたと足音を立てながらスバルがやってくる。

一体何事かと思い、みんながやってきた。

さらにはスバルの多足音でチビ達も起きてやってくる。

そんな中スバルはなのはに自分が抱いているもの(?)を見せた。

蒼と緑のオッドアイ、さらさらとした黒い髪、頭のとっぺんからはぴょんとハネたアホ毛。シャナよりも小さい体。見るからに――――

『・・・誰？』

誰だかわからない。みんな少し驚いているが、この子は誰？という方が大きかった。

一方少年はスバルの手から離れ、なのはの後ろに隠れてしまっている。人見知りが激しい性格なのだろう。

「桜、大丈夫だよ」

「（フルフル！！）」 ↑泣き目で首振り

「みんな襲ったりしないから」

「・・・ホント？」

「うん」

しゃがみ込み桜と呼ばれる少年と話すのは。

みんな、え？桜？このちっちゃいのが？みたいなことを思っている。
だがそんなことは気にせず普通に少年は涙をぬぐっていた。

「なのはさん、今桜って・・・」

「うん、桜だよ。でもほとんど別人だけだね」

「え・・・」

「さ、朝ごはん食べよ」

「うん！」

side out

朝食とともにみんなへ事情説明。

ようやく納得したか、みんなチビ桜を可愛がっている。

まあ、なんというかチビ桜は対応が早かった。

はやてがいなくてちよつと泣きそうになったがなのはが慰めてセーフ、さらにはヴィヴィオ達が話していたインターミドルの話を聞き、

「僕も出る！」と言い出した。

そして今はアインハルトのデバイスをはやてに連絡を取っているのだが……。

『あ、ルールーオーツス!』

「おいーす、アギト」

「アギト」

『おお、桜じゃねえか。何でいんだ?』

「合宿」

『そうか。えっと、デバイスの件だったよな? ちょっと待ってて』

「うん、お願い」

八神家に連絡をし、最初に出てきたのはアギト。

チビ桜がルーテシアの家に居るのにちよっと驚くがあまり表には出さず、すぐさまはやてを呼びに行った。

しばらくすると人影が出てきた。

そしてその顔は————狸?

『はあい、ルールー。お久しぶりや〜♪』

「八神指令、お久しぶりです」

「お母さん！」

「「え・・・」」

『桜、いい子にしてたか？』

「うーん、たぶん？」

『そか。みんなに迷惑かけちゃダメやで？』

「うん！」

話の主旨が変わりそうなところで話を戻す。

ルーテシアはアインハルトをはやてに紹介し、はやてはアインハルトを聞いていたらしく、快くデバイス作成を引きうけてくれた。

『桜がここに居るって事は、桜も出るんやね？』

「あ、はい。出たと言ってましたから」

『桜、デバイスもつとるやろ？』

「UCはイヤだ！ZEROはお兄ちゃんのだから使いたくない！」

『お兄ちゃん？』

「桜兄ちゃん」

『え？あ、ああ、そう言う事かあ』

一瞬どういうことかわからなかったが少し考えて整理完了。チビ桜はもう一人の桜の事を知っている。と言うか記憶まである様だ。まさかわざとこれをやっているのでは？と思うがああ無邪気な顔は演技ではない事を表していた。

『なら、どうしようか……。アインハルトみたいに補助形にする？それとも――』

「二丁銃！」

『え？』

「ティアナお姉ちゃんみたいなヤツ！」

『ん、ならクロスミラージュをベースにして、ダガーモードを抜けばええかな』

「やった！」

『その代わり、全力を出して戦うこと。ええな？』

「うん！約束！」

拳を前に突き出し、にっこり笑いながらそう言った。

それに対しはやても快く了承、デバイス作りをすることに。

「桜、今日から頑張って特訓ね」

「誰にも負けないよ、僕は強くなるからね」

第34話 チビ桜再び（後書き）

やばい、もう3巻が終わってしまった・・・。

どうしよう、この先がわからない（まあ、うる覚えでは若干覚えています
オリジナル要素入りたいけど、その前に合宿を終わらせないと。

まあ、そこら辺は頑張っと思いたいと思います。

誤字脱字、感想あればお願いします。

あ、『桜の花が咲くころに番外編 if story of AC
ES』の方もよろしくお願いします。

第35話 修行開始！（前書き）

3か月ぶりの更新、遅くなつてすみません！
それなのに今回は短め。
本当にすみません。

第35話 修行開始!

4日間の合宿を終えて。

ちびっこメンバーは『DASSインターミドル』に出場するべく、修行が始まった。

ヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナ、シャナの5人はノーヴェがコーチになって教えることに。

チビ桜は当然八神家メンバーと桜自身に教えてもらう。

今のところ、アインハルトとチビ桜のデバイスは完成していない。それまでの間はデバイスなしでの特訓となる。

(本当に良かったのか?)

(何が?)

(瑠璃に召喚獣全匹とアルを預けたことだよ。せつかく八神家のみんながアルを深津させてくれたのに)

ミッドに戻ってきて数日。

実は合宿中にとあることがあった。

それは桜の召喚獣達が異様に瑠璃になついたのだ。

別にチビ桜のことが嫌いになつたわけではなく、魔力の波長があっているからだろう。しかも3匹全と。

才能はあるし、キャロのように召喚獣を使える方が戦闘ではいろいろ便利だろう。そしてチビ桜の一存で瑠璃に預けることになった。

そこでその全匹の操作を出来るようにするためにアルも預けた。
まあ、アル本人も瑠璃とは仲がいいのですぐに了承してくれたのだが、そのせいで瑠璃にスター式を教えることになったのはしょうがないことだろう。

（いいの。僕にはお母さんたちが作ってくれるデバイスとUCがあるから）

（使いたくないとか言ってなかったか？）

（しょうがないじゃん。みんな瑠璃になついちゃったんだし。銃型デバイスだけじゃ不安なんだもん）

（絶対に昔の俺の戦い方思い出しただろ）

チビ桜と桜の記憶は共有してある。

当然チビ桜が桜の昔のことを思い出せるし、今まで桜が思い出せなかったチビ桜の記憶も思い出せたりする。

「さあ、今日も修行開始だ！！」

side out

「あー、なんていうか、寂しいなあー」

場所は変わって教導隊。

基本桜がこれない状況なので、二代目FWは寂しそうだ。

教えるのは桜に代わり、なのは。

教え方は2人とも同じなので支障はない。

だがやっぱりいつも桜なのでちょっと違和感があった。

「なのはさんから頼めませんかね？」

「うーん、桜は八神家にいるからなあ。頼めば時間作ってくれるとは思うけど、今は小さい桜の特訓で忙しそうだし・・・」

「なのはさんじゃ、スター式は教えられませんかし」

「あ、そこは大丈夫だよ。ちゃんと練習メニューもらってるから」

「桜さんって変なところで用意周到ですよね」

桜に来て、教えてほしい。

それは全員同じなんだが、中々これなのは知っていた。

だが自分よりも他人を優先する桜の性格上、チビ桜が一番優先される。

インターミドルに出たい。

そのチビ桜の言葉で桜は教えながら、体を使わせている。

つまり、余裕がないのだ。

「今度頼んでみるね」

「」「お願いします！」「」

side out

（とりあえず、UCでの戦い方から慣れていくか。銃型デバイスの方は出来てからな）

「（了解!）ということで、ミカヤさんお願いします!」

現在場所はミッドチルダ南部の抜刀術天瞳流第4道場。

正座するチビ桜の目の前には師範代の女性ミカヤがいる。

道場、ということとでチビ桜もしっかり道着に着替えてある。
そしてミカヤの手には刀が握られていた。

「えっと、確か桜君のもう一つの人格の桜君でいいんだよね?」

「八神桜です」

「承知した。まあ、私も出場選手だからね。あまり手加減はしてあげられないよ」

「むしろ負けません!」

「聞けばオールラウンダーだそうじゃないか。銃撃、斬撃、格闘。本当に楽しみだよ」

するりと抜いた刀をチビ桜に付きつけるミカヤ。
チビ桜は全然動じていない。
それどころか楽しそうにしてる。

ちなみにミカヤは18歳で桜よりも年上だ。

意外にもノーヴェと知り合いだったりと結構顔が広い。

「君は格闘と斬撃の修行。私は接近戦型に何もさせずに斬り落とす鍛練。互いに利害は一致したわけだ」

「役に立てるよう頑張ります！」

「おいおい、瞳がそうは言ってないぞ。ぶった倒す気満々じゃないか」

抜刀の構えに入るミカヤ。

それを見たチビ桜も立ち上がり、魔力刀のサーベルを片手に構える。

「行きます！」

「来たまえ」

第35話 修行開始！（後書き）

次回はついにアインハルトとチビ桜のデバイスが完成！
早速試合で勝つのはどっちだ！？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第36話 猫と銃と練習試合（前書き）

今回は何と戦闘描写が2つも！
しかも片方はしょっぱなから始まります！

第36話 猫と銃と練習試合

「でりゃあっ!!」

ガキインッ!!

魔力刀のサーベルと刀がぶつかり合う。

ギリギリとにらみ合い、チビ桜は苦戦している。
それにしては笑顔で楽しそうだ。

左手と頬の切れた所からは血が流れているが、まあ、大丈夫だろう。

ミカヤの戦い方は道場の名の通り抜刀居合。

鞘におさめた刀を抜くき、斬る速さはすさまじい。

チビ桜は最初の一撃は何もできず、ミカヤのやりたい『近接格闘型
に何もさせずに切り落とす』の状況だった。

だが、今は違う。

何度もやっているうちに慣れてきた。

サーベルの使い方も大体わかってきて、受け止めて斬りあうことだ
ってできる。

「ぐ……うらっ!!」

ガキインッ!!

無理やりミカヤの刀を弾くことに成功。

そしてそのまま左で逆手持ちにしたサーベルを首元に突き付ける。

「……これで5対5か」

「ハア、ハア、ハア・・・」

「ふむ、ちょうどいい。今日はこれでおしまいだ」

「え・・・？」

「君も疲れただろう。それにもう夕方だ」

「あ」

道場の外に目を向ける。

気がつくと、空は綺麗な夕暮れに染まっていた。

S i d e o u t

同日夜。

チビ桜は基本、高町家ではなく八神家で過ごしているため、帰宅する場所は八神家だ。

そして今は風呂に入っている。

もちろんはやてと一緒にだ。

「いちち・・・」

「切り傷多いな。まあ、湯に浸かっている間は慣れやな」

左手、右足、頬に切り傷を作ってしまった。

当然、湯船に浸かるとその切り傷が痛む。

別に大事に至るという訳ではないので、放っておいても大丈夫だろう。

何というか、頬についた切り傷が似合っているチビ桜。

どことなく男の子っぽい感じがして、悪くない。

はやても間近で見て、似合っていると思う、と言葉を漏らしているほどだ。

「さ、髪洗おか」

「うん！」

side out

数日後。

今日は待ちに待ったアインハルトとチビ作者のデバイスの完成日だ。先ほど2人にデバイスを渡したところである。

(((———猫?)))

(おお、こっちは弾丸か。デザインいいな)

(?)

一番上がアインハルトと連れできたノーヴェとチンク。
で、真ん中が桜で、下がチビ桜だ。

当のデバイスのデザインは普通(?)

アインハルトのデバイスのモチーフは雪原豹というよりは猫。そのせいで先ほどの3人の心の声は重なってしまった。

次にチビ桜の銃型デバイス。

デザインは銀色の弾頭にその下がメタリックな水色になっている。もしかしたら変換資質の氷結と掛け合わせているのかもしれない。

「にゃあっ」

「あ・・・」

「触れたげて、アインハルト」

ごそごそと箱から頭を出す猫。

それを優しく取り出してあげた。

（ああ、温かいんだ。本当に生きてるみたい）

優しく包んでいるその子は温かった。

デバイス、という概念から解かれ、生き物の概念が出てくる。

その子もアインハルトが気に入ったみたいだ。

「こんなにかわいらしい子を私がいただいてもよろしんでしょうか？」

「もちろん！」

「アインハルトのために生み出した子ですから！」

「マスター認証がまだやから、よかったら名前つけたげてな。桜も」

「うん！」

立ち上がりぞろぞろと庭に出る。

中心の辺りで2人が魔法陣を展開した。

アインハルトはベルカ。

チビ桜はスターだ。

「個体名称登録。あなたの名前は——『アステイオン』。愛称は——『ティオ』」

「にゅあ〜♪」

「アステイオン、セット・アップ」

マスター認証を済ませ、そのままセットアップ。

いつもの大人モードにバリアジャケット。

今回は肩にティオが乗っている

なんら変わりなしかと思ったが、いつもと違うちょっとした変化が。

「あれ？髪型変わってないんじゃない？」

「あ、そういえば」

そう、髪型が変化していない。

いつもなら簡単にまとめている状態で、子供の姿のときと違っていたのだが、今は子供の姿と同じ髪型だ。たぶんティオが調整してくれたんだろう。

「じゃ、今度は僕だね」

ピーインッ

高い音を出しながら弾丸を上へ向けてはじく。

落ちてきたそれをキャッチすると、それは先ほどの弾丸ではなく綺麗な銀色のボディに、これまたメタリックな水色のラインが入った回転式拳銃だった。

器用にそれをぐるぐると回し、また持ち直してから認証を始める。

「個体名称登録。名前は『イタクア』」

『登録完了。始めましてマイマスター。よろしくお願いします』

「ん、よろしく。イタクア、セット・アップ」

アインハルトに次いでセットアップ。

小さいため自分で考えなければならぬのはしょうがないだろう。

だがチビ桜はすでにそこら辺は考え済みだ。

はやてたちが着るような上着に、半袖のジャケットとシグナムの付いている小手。下は長ズボンに、これまたシグナムやはやてがの付いている腰当てを付けている。

そして両手には起動状態のイタクアが2丁握られていた。

「よし！想像通り！！」

ガッツポーズをするチビ桜。

大人モード、というものがあつたが桜に、小さい方が有利（かもしれない）と言われ、覚えてはいるが考えてはいない。

「さて、2人ともちょこちょこ調整とかしとこか？」

「あ、そうだ！調整終わったら一回試合しよ！」

「・・・はい、よろしくお願いします！」

side out

なんかんやで数分後。

場所を八神家道場の開けた庭に移し、アインハルトとチビ桜は対峙する。

ちなみにすでにセットアップ済み。

チビ桜に至っては本気なのでUCも装備している。

腕の辺りが何だかすごくてごてごてしてて物騒かもしれないが、本人は本気なので突っ込んではいけない。

「では・・・開始！」

ノーヴェの合図で試合開始。

先に駆け出したのはアインハルト。

チビ桜はまずは牽制で数発足元を狙って撃つ。

アインハルトは軽くかわし、さらに近づく。

だがやはり銃を使うので近づかれるのは嫌なチビ桜はバックステップで大きく距離をとるようにしながら逃げる。

『ソニックランサー』

「シュート！」

「っ!？」

目にもとまらぬ速さで単発の魔力弾が飛んでくる。

ヴィヴィオのソニックシューターよりも速いソニックランサーだ。幼少時代の桜の技の改良版ととらえてもらえばわかりやすいかもしれない。

アインハルトはそれに対し、回避ではなく受けに入った。

それは合宿時にも使った霸王流の対魔力弾用の技。

反射や吸収放出ではなく、受け流し。霸王流・旋衝破だ。

「おっ？」

同じ速さで返ってきたそれを相殺させる。

ちよつとビックリしたか、回避のための脚が止まってしまった。

そのチャンスの逃さず、アインハルトは一気に距離を詰める。

拳を一気にたたき込もうとした時だった。

「っ！」

ビュンッ!!

頬を掠める魔力弾。

アインハルトの拳は左手で受け止められ、右手に持った銃はアインハルトに向けられている。

掴んでいる腕を外側に投げ出し、両腕に持った銃で一斉射撃。

大量乱射能力は前に使っていたイタクア譲りで多大だ。
それを防御なしでアインハルトはまともに喰らい、吹き飛ばされる。
チビ桜はそれに手ごたえを感じていた。

「アインハルト」

「？」

「今度は砲撃をするから前にやったパンチで相殺してね」

「うえ？ え、ええと」

「アイス————バスター——！！！！」

ドゴォッ！！！！

目の前に現れた魔法陣から放たれる砲撃。
なのはよりも劣るが、それでも威力は十分だ。

（えっと・・・脱力した静止状態。足先から下半身。下半身から上半身。回転の加速で拳を押し出す！！）

迫りくる砲撃にアインハルトは動きを止める。

前の合宿で、なのはの砲撃とバインドを撃ち碎いたあのパンチ。
アンチエインナックルを繰り出す。

ドゴォォンッ！！！！

見事相殺成功。

拳を前に突き出した状態でアインハルトは呆けている。
顔には、またできた、と書いてあるようだ。

(おお、やるなあ)

「(すごいや！僕も負けてらんないね！) アインハルト、ナイス！」

「あ・・・はい！」

この後、試合はチビ桜の勝ち。

さらにその後にアインハルトがリベンジして勝ち。

1勝1敗の結果で今日は解散となった。

第36話 猫と銃と練習試合（後書き）

次回はまだ未定？

またもやミカヤさんのバトル（半分殺し合い）か。

もしくは久しぶりにミウラのターンか。

はたまた教導隊での日常か。

とりあえず上記のどれかか、それ以外の何かを書きたいと思います。

まあ、ぶっちゃけ全部書く予定なんですけどw

誤字脱字、感想あればお願いします。

第37話 裂空VS拔劍（前書き）

今回はミウラのターン！

どんな回になるかは楽しみですw

第37話 裂空vs抜剣

「っ・・・」

朝、というより早朝。

チビ桜――ではなく桜が目を覚ました。

まさかこんな早く起きるつもりじゃなかった。

というか表に出るのがすごく久しぶりな気がする。

いろいろ感想が出るがそれは後回し。

今は顔の辺りにある良い感触が何のかを確かめなければならない。

いや、これは知っている感触だ。

（ま、またこれか・・・）

予想通り、はやての胸だ。

フェイトにも同じことをやられたことがあるからわかる。

抜け出そうとすればがちりとホールドされるに違いないだろう。

だが、希望は捨ててはいけない。

ほんの少しの望みに期待を寄せ、はやての腕から抜け出そうとする。

スルッ

（あれ？こんなあっさりしてていいのか？）

意外に簡単に抜け出せたことに少し驚く桜。

こんなのでいいのかと思ってしまう。

まあ、どちらにせよ抜け出せたのだ。
朝食でも作ろうと、キッチンへ向かった。

side out

体が小さいせいで料理に苦戦しながらもしっかり作り終えた桜は、
たまには、と思い例の菓を飲む。

元の16歳の姿が本当に少しばかり久しぶりだ。

最近はずび桜に体をまかせっきりだったからである。

服はザファイラのを借りている。

本人には了承を得ているので大丈夫だ。

ただちよつとサイズが合わずブカブカだったりもするが気にしない。

どんどん起きてきた八神家メンバーは珍しく元の姿に戻っている桜
を見て少しばかり目を覚ましていたりもする。

まあ、基本はずび桜しか見ないからしょうがないだろう。

というかずび桜はまだ寝ている。

いつまで寝る気なのだろうか。

「・・・あ、そうだ。今日、道場に行ってみてもいいですか？」

「ん？あぁ、そうだな。いろいろと腕の立つ子がいる。見てやって
くれ」

「はい」

コーヒーを口に運ぶ桜。

その時、苦いとなぜか感じた。

これもチビ桜の影響なのか。

さりげなくミルクと砂糖を入れたのは秘密だ。

（本当に、これでいいのか？俺にはわかんねえよ、アル・・・）

side out

「おお、結構いるう」

場所は変わって八神家道場。

意外に人数がいることに結構驚いている。

これを全部教えるのは骨がいるだろう。

まあ、桜は教導隊で同じぐらいの人数を教えたことがあるらしいが。

「ミウラはいるか？」

「あ、はい！今行きます！」

ザフィーラが1人呼んだ。

たくさんいるこの中から1人、ミウラが出てくる。

見慣れない人物の桜をみてちょっと疑問。

というか16歳の姿の桜を見たことがないのでしょうがないと言え
ばしょうがない。そんな頭に疑問符を浮かべているミウラに、ザフ
イーラは耳打ちしで静かに告げる。

「あれは桜の本当の姿だ（ぼそっ）」

「ええええええ！？」

「？」

まあ、当然の反応だった。

つい先日まであんなにちっちゃくて、元気はつらつで、女の子みただけど普通の男の子よりまっくよく見えてたあのチビ桜がだ。今じゃ身長が高くて、落ち着きがあり、大人っぽくてチビ桜とは別のかっこよさがある。驚かないのは心がない人間に違いない。

驚くミウラを見て桜は、ああ、と思い出した。

記憶はチビ桜のものを勝手に引き出させてもらう。

うん、告白したね。

ちっちゃい桜が、だけどな。

とりあえず未だに驚いているミウラに目線を合わせる。
軽くしゃがんだ形になり、右手を出した。

「ミウラ・リナルディ・・・で、良いんだよね？高町桜だ。ちっちゃいもう1人の俺と仲良くしてくれてありがとう」

「うえ、え、ええと、その、よ、よろしく、お、お願いします！」

緊張しながらも握手をするミウラ。

やっぱり全然別人過ぎてどうしていいかわからない。
だがやっぱり思うことは同じだった。

(かっこいい・・・小さい桜君もかっこいいけど、こっちの桜さんもかっこいいなあ)

正直な感想だが口に出せず。

それでも思いは変わらなかった。

(お兄ちゃん、おはよー。って、あ、ミウラだ！)

(やっと起きたか)

(変わって〜！！)

(たまには我慢しろ。俺も少し久しぶりなんだからよ)

なんだかちょうどいいタイミングで目を覚ましたチビ桜。いつも通り、ちょっとした我儘を言うが断られてしまう。我慢、というのは我儘な子供には絶対必要なことだ。

でもって目の前のミウラは顔がちよっと赤い。未だにこういう顔をしていいかわからなようだ。

(ザフィーラさん、みんなどのくらいできます？)

(中々に出来るぞ。ミウラは特に出来るな)

「(そうですか) よし、腕に自信があるやつあかかってこい！」

side out

桜があんなことを口走ってから早1時間。

ミウラを残した道場の子供たちが1人ずつ桜に挑戦。

いろいろとアドバイスをもらいながらも、あっさりと負け。

そして今は最後に残ったミウラが挑戦しようとしていた。

「んー、そうだなー。ミウラ、デバイス使ってやってみるか？」

「え？いいんですか？」

「おう、實力見せてくれや」

「はい！」

そんなわけで場所を変えて道場外の砂浜。

お互いにセツトアップをして構える。

ミウラは愛機『スターセイバー』を。

桜は久しぶりに使うもとのデバイス『ZERO』を使う。

さらに桜にはしっかりとリミッターが付けられていた。

ぶっちゃけてしまえば魔力等いろいろをチビッ子メンバーと同じぐらいにしてあるため、本当に技術面の対決となる。

「ちよつとご無沙汰だな。出番少なくて悪い」

『ノープロブレムですよ。気にしていません』

「今回はあんまり武器は使いたくないから補助だけ頼む」

『了解しました』

ZEROとの少しばかり久しぶりの会話。

やっぱりチビ桜に体を任せると会話がなくなってしまう。

出番が少ないのも同じ理由だ。

「頑張るよ、スターセイバー。桜さんは一筋縄ではいかないから特
にね」

『はい。頑張りましょう』

一方ミウラは緊張気味。

深呼吸をして、落ちつこうとしているが少し落ちつかない。

今更だが、高町桜、という名前は聞いたことがあった。

友達が見ていた雑誌に載っていたあの『翼の英雄』

当時は今の自分と同じ年で、あんなすごいことができて少しあこが
れた。

それから少しして、八神家道場に入って憧れていた桜みたいに強
くなりたいと思って上を目指し始め、いつか会ってみたいと思っ
ていた。

そしてついに会えることができたのだ。

今はそれが嬉しくてたまらなくて、しかもこうして手合わせできる。
これ以上に嬉しいことはない。

「では・・・始め！」

ザフィーラが合図をする。

先に駆け出したのはミウラ。

桜がどんな戦法を使うかわからない。

チビ桜の場合カウンタータイプだが、人格が違えば戦い方も違う。ならば先手必勝で出方を見るのが一番だ。

「っ!？」

ガキッ!

ミウラが出したのは瞬速の蹴り。

防御に成功した桜だが、それだけではいけない。

「ハンマー・シュラーク!!」

遠距離から速く重い蹴り。

そこから密着しての重撃の連打。

公式試合であれば、相手のライフを一気に削れるミウラの戦法がこれだ。

「痛っう・・・こりゃ、すごい・・・」

(ミウラ、強いでしょ? 後、可愛いでしょ?)

「(そうだな、お前が好きになるのもうなずける) でも、負けてらんないな」

殴り飛ばされた桜は立ち上がる。

まさかこんなに強いなんて思ってもみなかったのだろう。久しぶりに本気が出せそうだった。

「ミウラ」

「あ、はい!」

「悪いが、早々に終わらせてもらおう。次の一撃でな」

「・・・なら僕も、僕の全てをぶつけたいと思います」

何かを理解したか、ミウラは桜のやることに気付いた。自分の最大にして最強、集大成でもある技『抜剣』脚に付けた鎧が開く。そして魔力をため始めた。

桜もほぼ同じ。

ミウラのように脚に鎧は付けてないが魔力をため始める。圧縮した魔力を縮退、さらに小さくしてもっと溜める。

「裂空——」

「抜剣——」

魔力を溜め、技を繰り出す。そして同時に動いた。

「衝脚!!」

「飛燕!!」

バキィインッ!!

空中でお互いの脚がぶつかり合う。脚を弾き、再び距離をとった。

「今度は、裂空——」

「一閃必墜——」

また動いた。

空中で桜は上から、ミウラは下から撃激する。
今度こそ決める。そのつもりで。

「極深撃!!」

「抜剣・星煌刃!!」

バキィィイツ!!!!!!

一瞬で勝負は決まった。

ミウラを蹴り飛ばした桜の勝ちだ。

急いで翼を展開し、ミウラを抱きかかえるようにして後ろに回って支える。

「あ、負けちゃったんだ・・・」

「大丈夫か!?!悪い、本気でやりすぎた!」

「いえ、ありがとうございました」

ちょっと弱い声で笑顔でお礼を言うミウラ。

相手をしてくれた。本気を出してくれた。

そして、桜に会えたこと自体に感謝する。

そんな笑顔に桜も笑顔で返した。

「・・・ああ、こっちこそ。ありがとう」

第37話 裂空vs拔劍（後書き）

なんやかんやでチビ桜の出番がんなし。

意外なことになって書いた自分でもちよつとびっくりですW

そしてなんだか桜がミウラを選びそうW

意外にあの子はガンバリ屋さんですからね。

桜も年下だからといっても惚れちゃうかも？

次回は今回の続きから。

そして教導隊での日常が久々に。

どんなことになるかはまだ未定です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第38話 ミウラの思い 懐かしき思い出（前書き）

今回はミウラがついに・・・！！
そしてアルとのちよつとの絡みで、桜が懐かしさを思い出します。

第38話 ミウラの思い 懐かしき思い出

「ありがとうございました！」

ミウラとのマジバトルで大人気ないにしろ勝利を収めた桜。お互いに大技をぶつけ合ったせいで、ミウラは気絶。

チビ桜に怒られながらも看病をした。

そして先ほど目が覚めたミウラからの一言。

ミウラは、桜に感謝をこめてしっかりとお礼を言った。だが当の桜本人はよくわかってない。

「えっと僕、4年前から桜さん憧れてたんです。それで、今日相手をしてくれて本当にうれしくて。だから、ありがとうございました！」

「・・・なんつうか、こう正面切って礼言われるの慣れてねえからなんていえばいいかわからねえけど。その、あれだ。俺はそんなにすごくないぞ？」

「いえ、そんなことないです！僕にとっては、物凄く憧れなんです！」

いつものミウラと、今のミウラは何か違った。

おっちょこちょいで口下手。人見知りも激しかったけれど、桜にあらがれ初め、八神家道場に入ってから変わり始めた。

今もあがり症などは治ってないが、それでもいい方。

昔、何もできなかったときに比べたら比じゃない。

「だから、僕は小さい桜君も、今の大人な桜さんもどっちも好きです！」

『!?!』

ミウラは大きな声で、みんなに聞こえるぐらいの声で言った。それを聞き、この場に居る全員が驚く。

先ほど本気で手合わせをして、再確認したのだ。

僕は、この人が好きだ。

小さくて元気で、ちょっと我儘な桜君も。

大人で、落ち着きがあって優しい桜さんも。

どっちも大好きなんだ。

言ってから、恥ずかしくなった。

でも、イヤじゃない。

目の前で困ってる桜を見ているミウラの眼は本気だった。

「・・・本気で俺ともう一人の俺が好きなのか？」

「本気です！」

正直、桜は困っていた。

上司に告白され、今度は道場の女の子。

チビ桜が好きだから、自分も好き、というのは成り立たない。ならどう返すのが正解だろうか。

桜の答えなんて決まってるようで決まっていなかった。

「・・・悪い、考え中じゃダメか？」

「大丈夫です。僕、返事待ってますから！」

「（待たれても困るけどなあ・・・）ありがとな」

~~~~~♪~~~~~♪

突然携帯が鳴り響く。

驚くことなく取り出し、桜は電話に出た。

「はい、もしもし」

『もしもし、お久々』

「今日は一段とノリが軽いことで」

『そう？ たぶん久しぶりに桜君と話すからだと思うよ』

電話の相手はマリナ。

噂をすればなんとやらはまさしくこのこと。

すぐにそれを実行してくれるマリナには、違う意味で敵わないと思うってしまう。

「で？」

『みんなが今度、時間があるときに来てほしいって』

「・・・了解、今から行くわ」

『え？ いいの？』

「ああ。久しぶりに表に出れたからな」

『？』

「じゃ、切るぞ」

『あ、ちょ、ま——』

ブツッ

何の躊躇も迷いもなく電話を切る。

今の状況——ミウラと顔が合わせずらい、と言うところから速く移動したかった。

逃げる、と言うことになるが気にしない。気にしたくない。

今は何でもいいから、考える時間がほしかった。  
出来るなら、誰かに相談を……。

「じゃ、俺、教導隊に行ってきます」

「あ、今の電話マリナさん？」

「え？ああ、そうですよ。みんな来てくれーって」

「なのはちゃんにもよろしくな」

「はい。それと、ミウラ」

「は、はい」

「また今度な」

「はい！」

side out

「と言うことです」

現在、教導隊についてマリナの前で正座中。  
今の今までの説明していた。

まあ、ある程度は母親であるのはが言っておいてくれたので、特に時間がかかった、と言うことはなかった。

だが、それでもマリナは不機嫌。

それはなぜか。理由は先ほどのミウラからの告白だ。

「桜君はどうしてこう、次から次へと女の子を落としちゃうのかな」

「わ、わかりません」

「まあ、各言う私もそうなんだけど？でも、年下の12歳の女の子にまで手を出しちゃうとは・・・」

「とりあえず行っていていいですか？ドアの向こう側で数人ほど覗き見をしながら待ってるんで」

「・・・わかりました。ではもう行ってください」

ドアの方をちらつと見る。

リナ、瑠璃、アウル、リーフ。

二代目FWメンバーが覗き見していた。

少しばかり不機嫌なまま、マリナは桜を解放する。

このまま何かやったら、むしろ何かされかねなくて怖い。

「さて、久しぶりに模擬戦でもやるか」

「「「はい！」」」

side out

（前のアルと話したいな）

今では瑠璃の融合機となったアルを見てふと思った。

アルは、融合しても魔力が上がらず、補助しかできない融合機。

そんな、当初は『欠陥機』と呼ばれていた最高の魔道書の管制人格に、桜は一度も不満を持たず最後まで一緒に戦った。

笑ったり、泣いたり。

いがみ合って喧嘩したりで、今じゃ懐かしい。

「マスター？」

「ん？なんだ？」

契約を解除し、魔道書ではなく本体の主が瑠璃になった今でも、二

代目のアルは桜をマスターと呼んでいた。

最初は、マスターは瑠璃だ、と言ったのに聞かず、桜をマスターと呼び続けてきたので、もう諦めてこの呼び方を許している。

そもそも、今のアルが桜を名前で呼ぶのはあまりしっくりこない。そのせいで瑠璃本人からもマスターという呼び方を了承してほしいと言われたほどだ。

「なんだかマスター、寂しそう」

「そうか？別に寂しいとかそういうのではないぞ？」

（ウソ付いてる）

（うっせ。誰にも心配かけたくないんだよ）

「なら、私がずっとそばにいる。マスターが寂しくないように」

そう言いながらアルは桜の肩に腰を下ろす。

顔を頬にこすりつけてきて、むしろ甘えるような様子だ。

やはり懐かしい。

よくではないが、アルは寂しい時などにこんな風に寄り添ってきた。これのせいで、さらに昔のアルと話したくなる。

「あ、そうだ。桜さん」

「どうした、瑠璃」

「ちょっと、アルのことで」

「何・・？」

**第38話 ミウラの思い 懐かしき思い出（後書き）**

次回は瑠璃と桜の話から。

アルにちよつとした異変が？

誤字脱字、感想あればお願いします。

### 第39話 涙

「ブラックボックス？」

「えっと・・・その、先日来てくれたデバイスマスターのシャーリーさんに診てもらったんです。それで・・・」

瑠璃から聞いたアルの異変。

頭の中に、小さなブラックボックスがあるらしい。

リンやアギトで言う記憶の部分。

本当に小さく、忘れていることの塊なんじゃないか、と言われたが、心配で今日来てくれた桜に話したのだ。

「記憶・・・か」

「何か思い当たることでも？」

記憶、と言うキーワードに考え、黙り込む桜。

忘れていたことの塊、と言うのにも引かなかった。

思い当たること、と言われると物凄くある。

と言うか思い当たるものがこれしかない。

（最初の記憶かな？）

（かもな）

そう、初代の記憶だ。



八神家の調べによると、空っぽではなかったらしい。

リインは最初は何もないまっさらで空っぽな状態だったらしいが、アルはほとんど空っぽ。つまり、何かが残っていたのだ。

「桜さん？」

「ん、あ、ごめん。えっと、ブラックボックスだよな」

「疲れてるんですか？」

「大丈夫だ」

「・・・不安です」

意外に鋭い瑠璃。

疲れている、と言うのはあながち間違いではない。

今日はいろいろありすぎて大変だったのだ。

ミウラからの告白。

少し久しぶりの教導。

二代目アルの異変。

一日でこんなに疲れるものなのか。

ビックリするぐらい体力が落ちたと思う。

「なあ、瑠璃。アルを少しの間返してもらってもいいか？」

「え？あ、大丈夫ですよ。アルも桜さんと居る方がよさそうですし」  
そう言いながら向こう側でみんなと話しているアルを見る。

少し初代と違い、違和感があるがほとんど変わりなし。  
こちらの視線に気づいたか、手を振ってくる。

「もしかしたら、返せなくなるかもな」

「構いません。それがアルのためならなおさらです」

「瑠璃は優しいな。俺よりもすごく」

ポンッと瑠璃の頭の上に手を置く。

そしてそのまま撫でた。髪をくしゃくしゃしたりもする。

なんだか瑠璃は嬉しそうで、その顔を見た桜もちよっと笑顔だ。

「さて、続きをやるか！」

「はい！」

side out

時間が経ち夕方。

仕事も終わり、後は家に帰宅するだけとなった。

「え？また・・・？」

「どういう意味、それ？」

「いや、だって母さん俺と2人つきりだと何しでかすかわかんないからさ。あ、でも今夜はアルがいる。よかった」

桜の言葉通り、今日はなのはと2人。

家に帰ってもヴィヴィオとシャナは特訓&合宿。

フェイトはいつも通り仕事の出張でいない。

そこに久しぶりにアルが入ることによって桜の救世主となる。

まさか二代目アルにここまで感謝する日が来るとは。

桜本人は思ってもみなかっただろう。

「ま、2人の方が話しやすかったけど」

「？」

「何でもない。さ、帰ろ」

「あ、うん」

頭に疑問符を浮かべていたなのはを催促して帰宅準備。

桜自身の頭の上でぐったりなアルを起こさないように気をつけながら、珍しくなのはの車に乗り込む。バイクの免許は持っても車の免許はない。

と言うかまだ16歳なので取るにとれなかった。

「今日、母さんの料理食べたいな」

桜の意外な発言。

いつもなら「俺が作るよ」などと言っているのにだ。

珍しすぎる事を言うので、なのはは少し考え込んでしまう。

（ど、どうしたのかな？最近私の料理食べてないから？あ、いや、

それならまだ大丈夫だね。ならなんで元気ないんだろう。え、でも、本当になんで？突然すぎてわかんないよぉ〜）

結果、なのはの中で美味しい料理を作ろうとなった。

元気がないのならば、どうにかして元気になってもらえばいい。それでもだめなら小さいころの様に、話を聞いてあげればいい。

だが、改めて考えると本当に桜らしくない。

元気がない、といあいまいな表現だがそれが一番わかりやすいだろう。

ここまで元気がないのは見たことがなかった。

（でも、なんで桜はそんなに悲しそうな顔をしてるの・・・？）

side out

「ふう、ようやく寝てくれた」

夜。

帰宅してから食事の準備。

アルがなのはの手伝いをするという珍しいことをしている間、桜は特になにもしていない。強いて言えば、ぼーっとするか、なんでか何も書かれていない魔道書をぺらぺらとめくっているぐらいだった。

さらに、夕食を食べている時になんでかぽろぽろと涙を流した。

本人は、目にゴミが入っただけ、と言っていたがその後もずっと涙を、ちよっとだけだがこぼしながら食べ続けた。

先ほどアルが眠りに就いたようで、一息つく。  
ようやく、と言うことはなのはと2人きりになるのを待っていたようだ。

「ごめんね、なんかいつもの俺らしくなくてさ」

「あ・・・」

「ただ、母さんと2人で話したくてね。小さい俺ももう寝たから、ちようどいいかな」

静かな声で、表情はやはりかなしそうだ。

どことなく遠くを見つめるような眼は、なのはを優しく見つめる。  
なのはの隣で、桜は話し始めた。

「俺、今すごく不安なんだ。小さい俺と今の俺。どちらも両立できる自信なくてさ。そのくせ馬鹿だからいろんな人に好かれる。もう、限界だし無理なんだよ」

一瞬、なのはは桜が何を言っているのかよくわからなかった。

だがすぐに理解する。今、桜は極限の状態なんだと。

なのはが理解してくれている、と言うのを少し話を止めて確認し、押さえられなくなった涙を流しながら桜はさらに続けた。

教導隊でみんなに教え切りたい。

だがそうするとチビ桜をほっとくことになる。

もう一人の自分を放っておくことはできないから、教導隊に行く時間を削ってチビ桜に体を預けている。

ヴィヴィオやシャナ、チビッ子たちともっと過ごしたい。

チビ桜の中からじゃなく、表に出て接したい。  
それでも、やはりチビ桜がいるので難しくなる。

他にも色々ある。

そして一番は、お互いに顔を見て話したい。

頭の中で、言葉だけを交すんじゃなく、顔を、眼をみて話したかった。

だが無理なのだ。

チビ桜が悪いわけじゃない。

だけど、チビ桜がいるから何もできない状態だった。

「俺、どうしたらいいの？もう、いつそのこと小さい俺に、今の俺の全てを託せばいいのかな・・・？」

「桜・・・」

「わかんないんだよ！もう、何もかも。全部が・・・！！前のアルはもういない！すごく不安で不安でたまらないんだ！」

今の桜は、出会ったころの様に涙を流していた。

何もわからず、それをどうすればいいかもわからない。

誰も頼れる人がいなくて、不安しかない。

だからなのは泣いている桜を抱き寄せた。

「不安なら、私やみんながついてるよ。だから、私たちを頼ってね？」

「・・・うう、うあああああ・・・！！！！！！」

「泣きたいなら、泣くのが一番だよ」

「っ」

静かに泣こうとする桜。

なのはの言葉で、あることを思い出した。

『泣きたいときは泣いてもええ』

『泣きたかったら泣いていいよ』

はやてとフェイトに言われたことがある言葉。

フェイトの言葉は六課時代、アルを失ったときに。

はやての言葉はチビ桜が泣いている時に言われた言葉だ。

そして今、なのはにも言われた。

あんなことを言われ、同じことを思い出したせいで押さえていた涙が簡単に溢れ出した。

夜だが、大きな声で。

だがそれでも近所迷惑じゃない程度に。

子供の様に桜は泣いたのだった。

### 第39話 涙（後書き）

今回は桜が泣く回でしたね。

チビ桜は例によって例がごとく出番は少ないです。

次回もまだ続くぞ桜のターン。

アルを再びシャーリーさんに所に連れていくために本局へ向かいます。

誤字脱字、感想あればお願いします。



## 第40話 気持ちのない料理

「じゃ、ちよっくら本局にいるシャーリーさんどこ行ってくる」

「うん、行ってらっしゃい」

翌日。

肩にアルを乗せた桜は家を出て、デバイスマスターでありフェイトの補佐官をやっていたりするシャリオ・フィニーノことシャーリーのところへ向かう。

目的はもちろんアルのこと。

ブラックボックスについてだ。

どうしてこうなったか。

それは昨晚のことだった。

『今の俺の人生全てを、小さい俺に託す』

桜のこの一言から始まった。

いや、それよりも早く始まっていたのかもしれない。

だが桜も思い残すことがたくさんある。

数えれば手足の指だけじゃ数えきれないだろう。

そこで一つだけに絞り込んだ。

『リミッター付きでもいい。本気の本気、全力全開で闘いたい』

最後の願いと言ってもいい。

だが、桜の本当のデバイスはないといってもよかった。

そう。正常起動した死霊秘宝とその管制人格である初代のアルだ。今の二代目アルは桜のデバイスと言えそうですが、違うと言えは違う。

正直言って初代を復活させることなんて叶わない。

二代目がいる時点でそれはもう無理だ。だが、ブラックボックスの話を聞いて全てががらりと変わる。

もしかしたら、前のアルに戻ってくれるかもしれない。

その可能性は意外と高かった。

シャーリーいわく、そのブラックボックスは忘れている記憶の塊だそう。

忘れている、と言うことは思いだせるということ。

なにかきっかけがあれば思いだすかもしれない、と言うことだ。

「えっと、デバイスルームってどこだったかなあ」

場所と話を変えて本局到着。

一応目的の場所にシャーリーがいるかどうか確認をしたい。

まあ、いなかったらいなかったで探すのだが。

もしかしたらフェイトと一緒にいて、今はいないと言うパターンもあり得るかもしれないが、出来るだけそのことは頭からはずす。

滅多に本局に来なかったものでどこがどこか少しあやふや。

だんだんと思いだしてきたのか、周りをキョロキョロして確認はしなくなった。

ほどなくしてデバイスルームの前まで着き、ドアをノックする。

『はい、どうぞー』

曇り声だが声が聞こえてくる。  
女性の声なのでもしかしたらシャーリーかもしれない。

「失礼します」

「あ、桜君久しぶり」

「シャーリーさん。よかった、いてくれて。今日はちょっと用事で」

デバイスルームにいたのは眼鏡をかけた女性。

この人物こそがシャリオ・フィニーノその人だ。

ちなみに自称『メカニックデザイナー』でデバイスマスター。

早速桜は今回来た理由を説明。

さりげなく肩に乗っているアルを指さし、シャーリーもどういこうとか納得してくれた。

「うーん、どうにも言えないなあ」

アルの精密検査も兼ねていろいろチェック中。

頭の中にある小さなブラックボックスを開けられないか、という桜の頼みは中々に難しいものだった。

今のアルの状況は至って全開。

魔力上昇はなし。補助はいつでも。召喚魔法の手伝いもばっちりだ。だが、ブラックボックスを無理やり開ける、となると危険だった。

もしかしたら機能に異常を致すかもしれない。

動かなくなる可能性だってある。記憶の塊、だといってももしかし

たら違うものでバグの塊かもしれない、などなど。

たくさん危険を冒してまで開けるのか、と言われれば『NO』と答える。

だが、開いてほしい、と言うのもまた本心だ。

「でも、どうして急に？」

「・・・このことは、他言無用ですよ？母さんだけにしか話してないんですから」

「大丈夫。口は堅い方だから」

「人の過去を勝手に話したことあるのに？」

「昔のことは気にしないの」

「はぁ・・・調子のいい人だ」

side out

「さて、帰るか」

「了解！」

一時間程で用事を終えた桜とアルは、特に残る用事も見当たらないので帰ることにした。ちなみに帰宅先は八神家。

用事が済んだので表に出ている理由もない。

チビ桜に体を預ける、となると帰宅先は決まってしまうのだ。

なんでアルがいるんだ、と聞かれると思うが気にしない。  
ちょっと返してもらった、で済むはずだろう。

「食材買ってから帰るかな」

「何作るの？」

「アルは何食べたい？」

「シチュー！」

「よし。じゃ、シチュー作るか」

「やった！」

もしかしたら最後の料理になるかもしれない。

一瞬そんなことを考えたがやめた。

いつ最後になるかわからないのに、そんなことを考えていても意味がない。

だが意外に早くそれが来るかもしれないと言うのも事実だった。

『インターミドルチャンピオンシップ』

世界中の魔導師が集う大会。

勝ち進めば、上位選手と必ず当る。

アルはユニゾンデバイスだからダメなのでは？と思われるが、しっかりと機能説明をし、補助のためだけだ、と言えば納得するはずと考えている。（桜の考え）

だがまあ、ダメと言われればそれまで。

インターミドルが終わってから相手を選ぶことにするらしい。

「ま、その時はその時だ」

「?」

「なんでもないよ」

side out

同日夜。

八神家で夕食の支度を終え、疲れて桜は眠ってしまった。  
アルも桜の隣でおねむだ。

「ただいまー……って桜？」

家にいたのはアギトとフィーラ。

桜とアギトとアルが夕食の支度をしていて、それが終わった後にアギトはどこかへ行ってしまう、ザフィーラはいつも通り道場で子供たちに教えていた。

そして先ほどはやてが帰宅。

リビングのソファで顔を伏せて寝ている桜を見つけ、寝顔をのぞき込んでいた。

「スー、スー」

「寝顔はちっちゃい桜に負けないぐらい可愛いなあ」

はやての桜の寝顔に対しての感想。

なんだか久しぶりにみるのでつい声に出てしまったようだ。

さすがにずっと見ているのも疲れてくるので、寝ている桜の代わりに夕食の支度をしようと桜から離れてキッチンへ入る。

だがそこにはすでに鍋が置いてあった。

「？　これ、シチュー？」

鍋の中身は作りたてのシチュー。

まだ温かいので温め直す必要はなかった。

気になったはやてはスプーンで一口いたただく。

「・・・なんか、普通やな」

桜の料理はいつも想像以上においしかった。

なのに今回のこのシチューは、本当に普通と言える味。

桜が作ったとは少し思えなかった。

人には得手不得手があると思うが、料理に関して桜に無理なものはない。なかった。

なのにどうしてか、この料理は違った。

まるで作った本人の気持ちが入っていないような気がしてならない。

「桜、泣いとるんか・・・？」

ふと何かを思い、顔をリビングへ向ける。

そこにはぼろぼろと涙をこぼしながら眠っていた桜が見えた。

## 第40話 気持ちのない料理（後書き）

次回は特になしで未定。

誤字脱字、感想あればお願いします。



## 第41話 選考会開始！（前書き）

予定よりも早めにインターミドル突入！  
その場限りのモブキャラって可愛そ・・・。

## 第41話 選考会開始!

月日は経ち、ついにインターミドル選考会当日。

チビ桜はもちろん参加ジムを八神家道場にして出場———と思いきや、まさかのフリーで出場。名義も『八神』ではなく『高町』だ。これは全部桜に言われたからだ。

やるんなら楽しめ、とのこと。

チビ桜いわく、こうしたら面白いんじゃないか、らしい。

ちなみに予選ブロックは6組。

『雷帝』ヴィクトーリア・ダールグリユンがいるブロックだ。

他のメンバーは順に

- ・アインハルト、コロナ———1組
- ・ヴィヴィオ、ミウラ———4組
- ・リオ———5組
- ・シャンテ———6組
- ・シャナ———8組
- ・ルーテシア———10組

となっている。

チームナカジマのメンバーでは唯一仲間同士での対戦がある1組は、一昨年の優勝者であるジークリンデ・エレミアがいた。勝ち進めば4回戦で当たることになっている。

「うわぁ、何これ。すごい人」

（まあ、世界中から集まってきたるからな）

そしてここ、ミッドチルダ地区選考会第一会場内では、たくさんの選手と観客が集まる中、選考会が行われる。

参加セレモニーがもうすぐ始まるというのに、チビ桜は暢気なものだ。

そしてほどなくして参加セレモニー。  
選手全員が綺麗に整列する。

『それでは、昨年度都市本戦ベスト10選手。エルス・タスミン選手に、第1会場に集まった選手に激励のあいさつをお願いしたいと思います』

呼ばれた選手が、前に出る。

眼鏡をかけたジャージ姿の少女。

彼女が前大会10位の選手エルス・タスミンだ。

「エルス・タスミンです。年に一度のインターミドル。みなさん、練習の成果を十分に出して、全力で試合に望んでいきましょう。私もがんばります！みなさんも、全力で頑張りましょう！えいえい！」

「おー！ー！ー！ー！！！！！！！！！！」

会場の選手全員の声が一つになる。

腕を上げ、全員やる気は十分。気合も十分。そんな時だった。

『ありがとうございます。では次に、時空管理局員の高町桜選手、お願いします』

『え?』

「?」

何というアドリブ。

チビ桜はおろか、桜ですらやることなんて聞いてない。

大会側が桜の名前を見つけ、やってもらおうと勝手に考えたのだ。

さらには会場全体にも疑問符が浮かぶ。

高町桜、という名前を聞けば真っ先に思いつくのは『翼の英雄』の異名。

しかも管理局員が参加、と言うことにも驚いてるはずだ。

「え、ええと・・・」

（代われ。こう言うのは俺の方が慣れている。ついでに適当に誤魔化すから）

（う、うん）

素早く人格交代。

全員がきよろきよろする中、小さい姿の桜は前に出た。

唯一動く人物に視線が行くのは当然。

まさかこんなちっちゃい子供が桜とは思うまい。

マイクのところまで着くと、大会側の人が注意してきた。だが本人なので、ちよっとした事を事情説明（嘘混じり）納得してくれたか、桜はマイクの前に立つ。

「えっと、高町桜です。何か言う前にみなさんに言っておきます」

ここで先ほども言った嘘事情。

選手全員がつばを飲んで耳をすませた。

「今の僕、記憶喪失なんです。体が小さいのは、なんでかわかりません。ホ、ホントですよ!？」

嘘を大暴露。

見事に騙された係員はきっと間違っではないはずだ。

こんな小さい子が真剣に言っているんだ。嘘なはずがない。そう思ってしまったからだ。

さらには会場の選手も騙されている。

理由はたぶん同じ。みんな純粋なのだろう。

「それと、何か一言とのことなので、早速一言。・・・全員、本気の中の本気、全力全開で頑張りましょう!!」

side out

参加セレモニーとアドリブの一言が終わり、選考試合開始。  
ゼッケンを付け、軽いスパーをすればいいらしい。

ちなみにチビ桜のゼッケンの番号は3013。  
番号がシャンテと近いため、お互いに勝ち進めれば2回戦で当たる。  
こう知り合い同士で戦う、となると緊張感が少ない。

「それにしても物凄い誤魔化し方したな」

「こっちの方が都合いいからだってさ」

選考試合を待つチビ桜。

一緒にいるザフィーラは、先ほどの誤魔化しに呆れていた。

「そろそろ呼ばれるだろうから、アップしておけよ」

「りょーかい」

軽く返事をし、早速ストレッチ。

向こうにミウラがいるが、とりあえずは緊張してなさそう。

人見知りなため、がちがちに緊張するかと思ったが違って何より。  
ノーヴェとヴィヴィオが挨拶に来て、話に花を咲かせてもいた。

「マスター、頑張りましょうね！」

「うん。でも、今日はアルの出番はないかも。お兄ちゃんは、保険  
って言ってたし」

「あう・・・」

それはさておき、アルが大会で使用出来ることが分かった。

銃型、籠手型、魔道書型の3つを登録し、アルは魔道書の管制人格  
と言うことになっている。大会側には、ユニゾンしても魔力が上が  
らない、と説明したらOKしてくれた。

それ以外にも、デバイスの2つ以上の使用を認めてくれたことにも  
感謝しなければならぬ。他の選手はたいてい1つなのに、チビ桜

だけは3つ。

普通ならダメと言われるかもしれない。

『ゼッケン367・554の選手、Cリングに向かってください』

「367ってミウラの番号。応援行かないとね」

「了解です！」

ミウラの番号を覚えていたチビ桜は、アルを肩に乗せてミウラのところへ向かう。

呼ばれた本人は先ほどの落ちついた雰囲気から一変、緊張し始めていた。

そこまであたふたする、という訳でもないのだががちがち過ぎるのではないか。

まあ、それがミウラなのかもしれない。

さらに続けてヴィヴィオも呼ばれた。

早速お出ましなので、気合も十分。

テンションも結構高めと、コンディションは悪くない。

「ミウラ、頑張ってね」

「う、うん！」

肩をポンポンッと叩き、軽く落ちついてもらう。

それでもやっぱり緊張しているミウラを見ると、上がり症はまだまだ治らなそうだ。

『それではCリング・Eリングの選考試合を始めます』

準備が整い、ヴィヴィオとミウラの選考試合開始。

ヴィヴィオの相手は武器をもっていて、身長が少し高め。

セコンドの男性は、怪我をさせないようにと注意をしている。

対してミウラの相手は素手の格闘型で、やはり身長差がある。

さらにはがちがちに緊張したミウラを見て勝てると確信していて、一撃で仕留める気だ。

『セコンドアウト。C(E)リング、スタンバイ・セット。レディ・ゴー!!』

side out

『Aリング、ゼッケン3013vsゼッケン2936』

チビツ子メンバーが全員終わり、少ししてから。  
ようやくチビ桜の出番となった。

相手選手は長身で槍型の武器を所持。

チビ桜との身長は差まさしく雲泥の差。

はつきり言えば見上げないと顔が見れないほどだ。

「うわっ、ちっちゃ。これが翼の英雄・・・？」

「相手に失礼の無いようにな」

「了解」



参加セレモニーで見たようだがやはり信じられない。

こんな小さいのが桜だなんて思うはずもなく。だがそれでも勝つ気でいるようだ。

「・・・」

「油断だけはするなよ」

「・・・（コクリ）」

「頑張れマスター！」

セコンドのザフィーラとアルが声をかける。

チビ桜は集中しているのか、返事はない。

うなずき返してはいるが、眼は相手選手を見ている。

選考会では武器は使わない、素手だけ。

小さく深呼吸し、拳を握りしめた。

『セコンドアウト。Aリング、スタンバイ・セット。レディ・ゴー  
！！』

カーンッ！！

甲高い鐘の音がする。

それと同時に、相手選手は突っ込んできた。

「はああ！」

槍を構え、チビ桜をとらえようと迫る。

対してチビ桜は構えたまま一向に動かない。  
それどころか目までつぶっていた。

当るか当たらないか。

そんなギリギリのタイミングまで引き寄せ、チビ桜は姿を消す。

「っ!？」

「星流————裂空・衝脚!!」

ドゴォッ!!

渾身の一撃。

魔力を纏った最高の蹴りが、相手選手の腹をとらえる。

魔力を圧縮し、脚に集中させる。

そしてそのまま勢いよくぶつけるだけの単純な技。  
単純だからこそ、威力も高かった。

「ふうっ・・・」

『Aリング、選考終了。勝者、ゼッケン3013』

## 第41話 選考会開始! (後書き)

次回は・・・どうしよう？

今のところは未定としか言えません。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第42話 トップファイター（前書き）

今回は例のあの3人が登場！  
うち1人とは知り合いです。

## 第42話 トップファイター

チームナカジマメンバーや、他の多くの参加選手の選考試合が終了して行った。チビ桜の選考結果は『スーパーノービスクラス』からのスタート。

相手選手を10秒足らずの一撃でKOしたのでまあ、当然の結果だ。チームナカジマの5人やミウラ、情報によると第2会場にいるルーテシアにシャンテと言ったメンバーも無事スーパーノービス入りを果たしたようだ。

初参加選手としては最良のスタートとも言っているだろう。

現在チビ桜は、内側にいる桜と代わって休憩中。

集中しすぎて疲れた、と言っていたが、これしきで疲れてしまうと次の試合ではもたないんじゃないかと思ってしまう。

だがやるときはやる子だと桜は知っていたため何も言わなかった。

「っ」

今は観客席の方に上がり観戦。

注目するような強い選手はいないかと試合の方をみていたが、観客席にいる1人の人物に気が付いてしまった。

「ジークッ」

「？」

一昨年の前の大会。

偽名を使って参加した時に知り合った1人の選手。

名をジークリンデ・エレミア。略称はジーク。

一昨年の世界大会優勝者だ。

そしてその隣にるのが予選6組のシード。

『雷帝』ヴィクトーリア・ダールグリユンだ。

「えっと・・・」

「一昨年の前は『シエル』って偽名だったけど、今は桜」

「桜君の身長、前のまんまなんや」

「ジークを覚えている事にツツコミなし？」

「そう言えば記憶喪失やったね。嘘なんやろ、あれ」

お互いが顔見知りなため軽い会話から始まる。

嘘だと見抜かれていた事に対して桜は「そそ」と、これまた軽く返した。

ジークの隣にいるヴィクトーリア（以降ヴィクター）は何が何だかわからない様子。桜とは戦ったことがないのでしょうがない。

すぐさまジークから紹介をされてようやく納得した。

ちなみにジークは桜の大人の姿も知っている。

まあ、会った回数は指で数える程度しかないのだが、結構衝撃だったのでジークはしっかりと覚えていた。

「今回はもう一人の僕が相手をするよ。ちなみに言うておくけどすつごく無邪気だから気を付けてね」

「ウチは予選で当たらへんから、当たるとしたら本戦でやな。ヴィクターとなら勝ち進めば当たると思うけど」

「うん、その時”だけは”僕がやるつもりだよ。最後の相手としてね（ボソッ）」

「今、なんて？」

「ううん、なんでも。あ、もし当たるときは正々堂々と」

「ええ。その時は、お互い良い戦いをしましょ」

握手を交わす2人。

勝ち進めば予選3回戦で当たる予定。

もちろん桜（チビ桜）も当たるまで負けるつもりはないし、ヴィクターも当たってきたらねじ伏せるつもりだ。

その後3人で軽く話をしていると、向こうから声が聞こえてきた。女性の声で、しかも複数人。気になった桜は顔を向けた。

「お？」

そこには赤毛のポニーテールをした少女。

さらにその後ろにマスクをした子、サングラスをした子、その2人よりも少し背が高い子の3人の女の子がいた。

すぐにこちらに気がついた赤毛の少女は、座っている3人を見る。

「ん？ 1人見ねえ顔だけど、誰だお前」

「あ、これは失礼。僕は時空管理局航空武装隊戦技教導官高町桜一

等空尉と申します。現在は一部記憶喪失で、今回は初参加です」

「え、ええっ？」

赤毛の少女――『砲撃番長』ハリー・トライベッカは、一瞬で出てきた言葉にどう反応したらいいか困ってしまった。

まあ、一度にこんなたくさん言葉を並べられれば誰だって困りもする。桜はわざとらしく頭の上に「？」を浮かべ、ハリーを見ていた。

「リーダー、この子、翼の英雄ツスよ」

「自分で高町 桜って言ってたじゃないですか」

後ろからぼそつと助言(?)

それを聞いたハリーは、思い出したかのように声を出した。

「あゝゝゝ……って、ええ！？こ、こんなちっこいのがあたしより一個上で管理局員！？」

「リーダー、失礼ツスよ」

「気にしないでいいですよ。一部記憶喪失ですから」

「それ、あんま関係ないんじゃない……」

軽くツツコミを入れられるがスルー。

なんだかこれが楽しくなってきた桜だった。

そして今度は横でヴィクターとハリーがいがみ合いを開始。

それを見ているも楽しくなってきた桜は、止めようとするジークに



加勢はせず笑顔で見守ることに。

だがさすがにうるさくなってきたので止めようとした時だった。

「「!？」」

「なんですか。都市本戦常連の上位選手がリング外で喧嘩ですか？」  
トップランカー

いがみ合いをしていた2人にバインドがかけられた。  
すぐにそれを行った張本人のエルスが声をかけた。

「ジーク、顔隠して」

「え？なんで？」

「いいから」

インターミドルがガラの悪い子ばかりの大会だと思われたらどうするんです！と、2人に思いっきり注意しているエルス。

参加選手の家族が会場内にいる中、そういう風に考えるのは普通だが、リング外で魔法を使うこともどうかと思う。

それを桜が言うと、こちらに気づいて顔を見られてしまった。  
主にジークの。

「ああ！チャンピオンに翼の英雄!？」

案の定大きな声で叫ばれてしまった。

ジークはフードをかぶろうとしていたのを見られ、急いで手に持っていたジャンクフード（ポップコーン）の入った器で顔を隠すが、ほとんど意味がない。

さらに下のリングの方にいた選手たちも見上げている。

こんな注目の的になるのをリング外では慣れてないジークにとっては大変だった。

見上げる中にはチームナカジマのメンバーもいた。

ジークはそこにいる碧銀の少女アインハルトを見つける。

勝ち進めば4回戦で当たるであろう彼女にサインを送った。

「騒ぎになるのはめんどくせえし、今回はおとなしく退散すっか」

「まったく、貴女と会うと、どうしてこう毎回グダグダになるのかしら」

ブチブチとなんの苦もなくバインドをちぎるハリーに、パキンツと簡単にバインドを砕くヴィクター。

それをみたエルスは驚くほかなかった。

自信のあったバインドをこうも簡単に壊されては落ち込むか、逆にやる気が出るかのどっちかだろう。

もちろんエルスは後者の方で、気合を入れ直していた。

「じゃ、僕もそろそろ退散しようかな」

「あ、うん。また今度」

「うん。また今度ね」

## 第42話 トップファイター（後書き）

次回から予選、本格的に開始！

誰を一番最初に書くかは不明。

もしかしたらランダム（鉛筆ころがし）で決めるかもですw

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第43話 スーパーノービス（前書き）

今回はチビ桜とシャナの戦闘シーンのみ！  
どちらかというとシャナメインです。

## 第43話 スーパーノービス

インターミドル地区予選。

現在数日間にわたり、スーパーノービス戦を行っている。

チームナカジマの4人（シャナ以外）、聖王教会のシャンテ、八神家道場のミウラ、そしてフリーで参加しているルーテシアの試合はすでに終了済み。

結果は全員勝利で、無事エリートクラスへの出場を果たした。

そして今日、チビ桜の試合が始まろうとしていた。本人はミウラほどではないが、結構緊張している。

『今日のSNクラス第25回目の試合は、あの翼の英雄、初参加の高町桜選手と、同じく初参加。新人のジャック・ライト選手です』

ルーキー

相手選手は身長的に15、6歳ぐらいだろうか。傲慢の大剣型デバイスを素振りでぶんぶんと振り回している辺り気合十分と見れる。

対してチビ桜は緊張気味。

試合が始まれば大丈夫だろうが、今はダメダメ。

表には出していないが後ろで見ている八神家メンバーにはバレバレだった。

「落ちつけ。まずは深呼吸して、それから相手を見ろ」

「う、うん」

すー、はー。

軽く深呼吸で大分楽(?)になった、いづらか緊張はほどけたみたいだ。

実況の説明も終わり、ようやく試合開始の準備が完了。  
高い鐘の音と共に、試合開始だ。

高町 桜

L I F E 1 2 0 0 0

ジャック・ライト

L I F E 1 2 0 0 0

たんっ、たんっ、軽いステップでリングに入る。  
お互い先にしかけず、静かに相手の動きをうかがった。  
そして先に動いたのはチビ桜だ。

ガガガガガッ！！！！！

牽制、にしては大量に魔力弾を乱射。

しっかりとガードされるが、それが狙いだった。

「なっ！？消え——」

「はぁ！！」

バキィ！

一番最初のヒットは、全力ではないチビ桜のアップーだった。

ジャック・ライト

LIFE12000—800〓11200

「くっ、油断した!」

威力は少なめなため、ダメージはさほどない。

すぐさま体制を立て直す相手選手は、再び剣を構えた。

そしてそのまま走りだし、勢いよく振り下ろす。

ガキンッ!

直撃したかに思えたその攻撃だが、当たった音が違う。

まるで剣と剣がぶつかるような音だ。

「いい!? マジかよ!」

渾身の力を込めて振り下ろしたはずの攻撃は止められていた。

先ほどまで持っていた銃はしまわれ、その手にあったのは魔力刀のサーベル2本。受け止めているチビ桜の顔はなぜか笑顔だった。

「星流・・・剣聖銃神騎行曲改」  
ナイト・オブ・トゥーソード・トゥーガン

受け止めている体制から、無理やりサマーソルトで蹴りあげる。

防ぐことを出来なかった相手は、そのまま宙を舞う。

ジャック・ライト

LIFE11200—1200〓10000

クラッシュエミュレート

軽度脳震盪

「まだまだあ！」

今度はイタクア持ち替え、魔法陣を展開したのち砲撃を放つ。  
空中では何もできない相手は、見事直撃。  
氷結変換の入った砲撃の威力は、文字通り強力だった。

「ラストオツ！！」

相手に休ませるひまもなく、チビ桜は飛んだ。  
右腕に持っていたサーベルに魔力を込め、切れ味を高める。  
そしてそのまま一撃をガラ空きの腹部にたたき込んだ。

「がはっ！？」

ジャック・ライト

LIFE1000—5470||4530

クラッシュエミュレート

あばら骨2本骨折

体温急速低下

『リングアウト・ダウン！桜選手、ニュートラルコーナーへ！ダウン  
ンカウント10！ 9！ 8！ 7！ 6！ 5！ 4！ 3！  
2！ 1！』

あっという間にカウントは0に。  
相手選手は立ち上がっては来ず、ダウンで負けだ。



つまり、チビ桜のダウン勝利と言うことになる。

『試合終了！！勝者、高町 桜選手！！強烈な技で相手選手をダウンさせました！！』

「イエイ！ブイブイッ！！」

side out

チビ桜が大勝利を収めてすぐ。  
今度はチームナカジマのシャナの番だ。

先ほど試合が始まったばかり。  
FHをソードモードにし、構えて待つ。  
珍しく普段は持たない鞆を持って。

「はああ！！」

相手選手は素手で格闘型。  
ヴィヴィオやリオとの組み手を何度もやったシャナにとっては、やりやすい相手かもしれない。

突っ込んでくる相手選手の勢いに対し、シャナは静かだ。  
ゆっくりと居合の構えをとり、魔力を刃に集める。  
そして間合いに入った瞬間だった。

・・・チンッ

一瞬一閃。

向かってくる相手選手に対し、一瞬で切りぬいた。

「抜刀居合、炎刀」

シオ・ジムト

L I F E 1 2 0 0 0 — 3 5 4 0 || 8 4 6 0

クラッシュエミュレート

腹部軽度火傷

格闘型に対し、この技は相手が拳を繰り出した時。

攻撃のときは誰もが隙ができるもの。この技は後だしなのだ。

じゃんけんでも後だしをすれば必ず勝てる。

それと同じで、この技も必ず当たる。

先手必勝、という言葉もあるがこれは後手必勝と言えるだろう。

だが相手もまだ終わっていない。

ダウンカウントを取られたが、すぐに立ち上がってくる。

再び拳を構え、走り出した。

「F H、フォームナックル」

『a i i    r i g h t .  
』

刀の形から、姿を変えて籠手の形に。

シヤナもストライクアーツができる。

ここからは格闘対格闘だ。

「たあっ!!」

「はっ！」

ドゴォッ!

バキィッ!

相手のパンチをかわし、シャナは先ほど傷を負わせた腹部へ拳を叩きこむ。

クラッシュエミューレートの痛みがあるせいで、余計にダメージがある。

対して相手はダメージを負いながらもシャナの頬を攻撃していた。相討ちの状況だが、どちらかと言えばこちらが不利。

腹部の痛みがさらに強くなった。

シオ・ジムト

L I F E 8 4 6 0 — 1 9 3 0 || 6 5 3 0

高町シャナ

L I F E 1 2 0 0 0 — 1 3 0 0 || 1 0 7 0 0

クラッシュエミューレート

軽度脳震盪

「ぐう・・・まだまだ!!」

『f l a m e   s h o t .  
』

得意の炎熱変換を使ったパンチ。

身体強化を合わせ、さらに速度を上げる。

さながら弾丸の様な速さの拳は再び相手選手の腹部をとらえた。

弱点集中攻撃。

ライフを多く削れるのであれば、削れるだけ削りたい。

最初の一撃も、この弱点を作るためだ。

「らあっ!!」

シャナに負けじと、相手選手もこの体制から攻撃に入る。

チビツ子に負けられないと言う意地もあるのだろうか。

空いていた脚でシャナの腹部を蹴りあげた。

「が・・・!？」

「ぐ・・・!!」

高町シャナ

LI FE 10700-2180 || 8520

シオ・ジムト

LI FE 6530-1120 || 5410

クラッシュエミューレート

火傷悪化（中度火傷）

『ダウン! シオ選手、ニュートラルコーナーへ! ダウンカウント10!』

ついにダウンしたシャナ。

相手も強い。それはわかっていたが、実践じゃやはり違う。再確認すると、よろよると立ちあがり、再び構えた。

カウントは少し危うく4。

後ろからノーヴェが声をかけてくるが、大丈夫と返した。

「一撃で全部削れるかな？」

『It can do, if it is master.』  
(マスターなら出来ます)

「そっか。じゃ、あれやってみようか」

『a i i right.』

FHをソードモードに戻す。

そしてしっかりと握り、強く構えた。

『Explosion』

カートリッジは出ないが、刀身に炎が宿る。

剣の師匠のような存在で、高く評価してくれた人。

同じ炎熱変換を持っていて、とても強い心を持った女性。

シグナムの必殺の一撃。

シャナは、今それをやろうとしていた。

「紫電」

一気に踏み込み、走り出す。

そして勢いよく切りぬいた。

「―――閃ッ！！！！」

## 第43話 スーパーノービス（後書き）

次回は未定。

どうしようか迷ってます。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第44話 拔劍・極神星劍（前書き）

展開が急だとか言わないでください。  
合間の話がいつかないんで・・・。



## 第44話 拔劍・極神星劍

スーパーノービスクラス、無事終了。

桜が知るメンバーはしっかりと勝ち残っていた。

そして、今日はついにエリートクラス試合当日。

チームナカジマはリオを除いて全員午後から。

八神家道場のミウラは午前。

シャンテとルーテシアは午後からとなっている。

肝心のチビ桜は午前。

しっかりとアップをしているとのザフィーラと桜の言い付けをしつかり守り、今は選手控室で軽く準備運動をしていた。

隣には、上がり症でがちのミウラ。

スーパーノービスでは3Rのギリギリ判定勝ちだったため、セコンドのザフィーラとヴィーたは心配していた。

本人は落ちつこうとしているのだが、やはりというか何と言うか。メールを受信したスターセイバーの声にも驚いてしまう。

あたふたしながらも、ミウラは画面を表示。

写真と音声付のメールらしく、それを見るなり笑いだした。

「な、なんだ、どうした？」

気になった3人はメールを覗く。

添付されたいた写真では、チームナカジマの5人がポーズをとっている。

励ましの言葉もあり、それも効果があったのだろう。

すでに緊張は解けていた。

「ヴィヴィオさんって、面白い方ですよねえ」

「まあ、少し変わった子ではあるが」

「友達連中もまた、付き合いがいいというか・・・」

気を取り直し、もう少しで始まる試合に集中するミウラ。  
時間になると、セットアップしてバリアジャケット姿になった。

「頑張ってね、ミウラ」

「うん。あ、あと、桜さんに言うておいて」

「？」

「圧縮魔法、教えてくれてありがとうございますっ」

「・・・うん」

side out

『みなさま、待たせいたしました。予選4組、エリートクラス一回戦。選手入場です。レッドコーナーからはIM7回出場！内5回が本戦出場！天瞳流抜刀居合師範代、ミカヤ・シエベル！！』

ざわめく会場。

片側のコーナーからミカヤが出てくる。  
後ろからはセコンドの道場の生徒2人が。

『対するブルーコーナー！こちらは初参加のフレッシュルーキー！  
ストライクアーツ八神家流、ミウラ・リナルディ！！』

もう片方のコーナーから、ミウラがジャブをしながら出てくる。  
やる気、気合、調子。全て良好。

がちがちな上がり症は見られず、後ろにいる2人も一安心している。

『熟練対新人。居合剣士対格闘戦技。経歴、体格、使用戦技。あらゆる要素が対照的なこの2人。この試合は果たしてどんな結果となるのでしょうか？』

実況の声が入る中、お互いリングの中心でにらみ合う。  
審判の人がしっかりと確認をとり、OKが出た。

ちなみにルールは4分4R。

規定ライフはスーパーノービス同様12000。

ダウンカウントが0になる、もしくはライフが0になれば負け。

4R戦いきり、勝敗が決しなかった場合は判定となる。

『さあ4組第1試合のゴングが今———』

カーンッッ！！

『鳴りました！』

ゴングと同時にミウラは走り出す。

それに反応し、ミカヤも居合の構えをとった。

「天瞳流拔刀居合——月輪」

ミウラは、上位選手の攻撃を全て避けるなんてできない。防御を固め、とにかく攻撃を当てる考えだった。

だが後ろではザフィーラとヴィータが叫んでいる。

突っ込むな！止まれ！と、叫んでいるがミウラの耳には届かず。ミウラはそのままミカヤの間合いに入った。

ブンッ！

風邪を斬る音が聞こえる。

ミカヤの居合は、ミウラをみごととらえた。

「おおおっ！」

どうにか防御をし、体を回転させて回避する。ジャンプして避けたのだが、それが失敗だった。

「水月・二連ッ！！」

ガキインッ！！

無防備な体に、追撃の一撃。

ミカヤは静かに晴嵐を鞘におさめた。

チンッ・・・ドシャアアッ！

宙を待っていたミウラは、重力に従い落ちた。それを見ていた観客、会場全体が静まり返る。

そしてある言葉が頭をよぎった。

# 『瞬殺』

新人が熟練者に勝てるほど、世界は甘くない。

当然、実力の差を見せつけられ、1RKOで終わる。

その様な結果は少なくもない。

現にミカヤは前の大会でハリーを瞬殺したことがある。

会場全体が、終わったと思い、カウントが減っていく時だった。

「ミウラーー！！諦めるなー！！」

チビ桜だった。

ミウラ側の席から、大声で叫んでいる。

その声に反応し、ミウラは起き上がった。

「た、立ちました・・・今、リングに戻りますから・・・」

ミウラ・リナルディ

L I F E 1 2 0 0 0 — 1 0 3 5 Ⅱ 1 6 5 0

ふらふらと立ちあがるミウラ。

それを見た会場は、再び歓声に包まれる。

ミウラ震える脚で、リングに戻った。

首の皮一枚つなげたが、このラウンドの残り時間は3分。

ミカヤが仕留めるには十分すぎる時間だろう。

（残りライフは1650。「撫でるだけで落とせる」と言うには少々多いな。守備に回って刻んでいくか？）

試合再開の後、お互いは動かない。

ミウラは攻めに転じなければ勝てないが、攻めようとすれば斬りかえしでKO。かといって防御だけでも勝てやしない。

「スーターセイバー。無茶しちゃうけど、付き合って！」

『all right!』

「抜剣・・・!!」

絶体絶命の状況。

一撃でも喰らえば即終了。

ならば一撃をくらう前に決めてしまえばいい。

そう考えたミウラは、抜剣の構えをとり、魔力を集め始めた。

それに対して、ミカヤは寒気がした。

抜剣？脚に魔力が溜まっているじゃないか。

とんでもない圧縮率だぞ？

そう思いながらも、ミカヤは構えた。

まさかこんな大物が隠れているなんて思ってもいなかったのだ。

楽しまなければ損でしかない。

「面白い・・・実に面白い！だからインターミドルは楽しい！思いもよらぬところで君の様な子と出会えるのだから！」

「ありがとうございます。僕の全部、ぶつけさせていただきますっ  
！！」

互いににらみ合う中、ミウラは駆け出した。

空中からの蹴りを繰り出そうとし、ミカヤは全力で晴嵐をふるった。

「抜剣・皇刃！！」

「天月・霞！！」

ガキインツツ！！！！

抜剣と晴嵐が激しくぶつかり合う。

ギリギリとお互いが押し合う中、ミウラは脚を振り抜き弾く。

ミウラ・リナルディ

L I F E 1 6 5 0 — 7 5 0 ∥ 9 0 0

ミカヤ・シェベル

K I F E 1 2 0 0 0 — 7 0 0 ∥ 1 1 3 0 0

ミウラのライフはついに4桁をきった。

集束系魔法の打撃は強烈だが、このまま同じことを繰り返していれば負ける。再び構えなおし、ミウラは突撃した。

対するミカヤも同じ。

刃が削げた晴嵐を鞘に戻し、居合の構えに入る。

あんな一撃、まともに喰らえば負けは免れないだろう。

ならば当たる前に斬り伏せる。今度は外さないつもりだ。

（桜さんに教えてもらった、圧縮魔法。当たった瞬間に、一気に爆発させる。大丈夫、僕ならできる・・・！！だって、だって――――  
――――あの人が応援してくれているんだから！！」

ドゴオツ・・・バキィツ！！

右足での一撃。

晴嵐で防がれるが、圧縮を解除。

威力を爆発させ、へし折りながらミカヤの腹部を蹴り上げる。

ミカヤ・シエベル

L I F E 1 1 3 0 0 — 7 3 0 0 || 4 0 0 0

「一閃必墜ッ！！」

まだ一撃も当てていない左足。

それでガラ空きの腹部に全力で蹴りを入れる。

そして当たった瞬間に爆発させた。

「抜剣・極神星剣ッッ！！！！」

ドゴオオオツッ！！！！

最強の一撃が、見事決まる。

その一撃にミカヤはなすすべもなく、飲み込まれながらリングを超え、壁まで叩きつけられた。



ミウラ・リナルディ

L I F E 9 0 0 — 5 0 0 ∥ 4 0 0

ミカヤ・シエベル

L I F E 4 0 0 0 — 2 5 6 9 0 ∥ l i f e o v e r

『し、試合終了ーッ！！4組第1試合1ラウンド目からとてつもない試合でした！今年も活躍を期待されていた熟練者のミカヤ選手が、まさかまさかの1回戦1ラウンドKO！そしてミウラ選手、見事金星でエリートクラス一回戦を突破！ルーキーファイターの鮮烈なるデビューです！』

s i d e o u t

観客席にいるチビ桜は、リングを見ていた。  
試合が終わった今、八神家のみんなはミウラのもとへ駆け寄っている。

良く見てみると、ミウラは物凄い笑顔だ。

そして少し見ていると、ミウラが手を振ってきているのが見えた。  
チビ桜は、笑顔で大きくそれに返す。

それが終わると、振り返り選手控室に戻ろうとする。

「さあて、今度は僕の番かな」

#### 第44話 拔劍・極神星劍（後書き）

今回はシャナの戦い！

今回かぎりのオリキャラだけど、ちょっといろいろあります。

少しネタばれすると、そのうち使うかもしれないキャラですね。  
わかりやすく言うとなげき？

まあ、あくまで予定なのでわかりませんが。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第45話 炎少女と道化の銃士（前書き）

道化って言ってますが、アレン君じゃありませんよ？

## 第45話 炎少女と道化の銃士

ミウラの試合後。

チビ桜に続き、リオの試合が終了した。

見事大勝利を収めた3人は2回戦まで待機。

少し前から午後からの1回戦が始まっている。

午前の時点で全体の3／2程終わっていたため、1回戦での時間はさほどかからないだろう。

さらに先ほど、コロナの試合が終了したところ。

ゴライアスを完成させた後、見事KO勝利を収めた。

そして次はシャナの試合。

相手選手も同じく初参加で名をレキ・クラウン。

体格からして年上で、バトルスタイルは見るからに射撃型。

全身に重そうな鎧を付けたような格好をし、両腕にはガトリングが付いている。一瞬、本当にデバイス？と、勘違いしてしまいそうだったのはシャナだけではないだろう。

だがこれでもれっきとしたデバイスらしいのだから驚きだ。

『お互いに新人で初参加。接近型と射撃型という、まさしく対立する立場。果たして刀と拳が勝つか。はたまたガトリングが勝つか。今、試合のゴングが鳴ります！』

カーンッッ！！

甲高いゴングの音が鳴り響く。

先に駆け出したのはシャナだった。

射撃型にとって、相手に近づかれるのは不都合。  
こう言った1対1なら対策があるかもしれないが、その準備をされる前にたたみかけてしまおう。それがシャナの考えだった。

ガキンッ！

まずは上段斬り。

見事に防御されたが、零距离射撃は難しくなる。

だがそんなのはレキの中では想定内だった。

ジャキッ

刀を防いでいる右手をそのままに、左手を無理やり突き付けた。  
近距離でそんなガトリングを連射されるなんて考えたくもない。  
シャナは急いでレキから距離をとった。

「カートリッジロード、マルチバレットセット」

『Yes, sir. Load Cartridge. Quan  
tity? (数は?)』

「Diez<sup>ダイエス</sup>」

右手のガトリングからカートリッジが一つ排出される。

その直後、レキの周りに10個のスフィアが現れた。

さらに右手のガトリングをシャナに向けた。

そしてそのまま・・・

ガガガガガッッッ！！！！

乱射した。

合間合間を置いてスフィアが一つずつ飛んでいく。  
一瞬のうちにシャナの周辺は煙で見えなくなってしまう。

ガシャンッ、と音を立てて攻撃をやめるレキ。

煙が晴れるのを待っていると、周りの煙を切り裂きながらシャナが  
すごいスピードで突っ込んできた。

「っ!？」

「後手必勝の戦法は、今回は使えないから徹底的に攻めに転じさせてもらうね。拔刀居合・炎刀!！」

ブウンッ!!

すぐさま鞘におさめた刀で、横に一閃。

だがその攻撃は空振りに終わってしまった。

「な!？」

「残念、すかしたよ」

声が聞こえたのは真上。

すぐさま顔を向けると、そこには宙を舞うレキがいた。

あんな重そうな装備で、そんな動きができるの!？

そう叫んでしまいそうなほど、レキの動きは軽やかだった。

そう、まるでピエロのような。

「まずは3000ほど削らせてもらおうかな」

素早くシャナの後ろに回り込み、両腕を構える。

ほぼ零距离射撃のガトリングの休みの攻撃は、容赦なくシャナのライフを削っていった。

高町シャナ

L I F E 1 2 0 0 0 — 3 6 5 0 ∥ 8 3 5 0

「うん、ちょっと削りすぎたけど大体計算通りだ」

『リングアウト、ダウン！レキ選手、ニュートラルコーナーへ！ダウンカウント10！』

見事に攻撃が直撃したシャナ。

まさかとは思うが、手加減していたのだろうか。

計算通り、という言葉からそのようなことが考えられた。

ダウンカウントが7のとき、シャナは立ち上がった。

ダメージを受けながらも、今度は自分が攻撃を入れる。

そのつもりでリングへ戻った。

『さあ、試合再開です！』

「ナックル！」

『a l l   r i g h t .  
』

先ほどと同じように、シャナは突撃する。

今度は迎撃のためにレキもスフィアを発射している。  
だが今度は直線ではなく、ジグザグにステップを使わないがらシャナは器用に避けながらどんどん距離を詰めていった。

「乱打!!」

炎熱変換が付与された打撃の乱打。

右手一本で防御をしているところに当たっていく。

だが、これだけに気を取られてはいけなかった。

「からの———アッパー!!」

バキィッ!!

なにもしていなかった左手のアップー。

下からレキの顎を捉え、力のまま拳を振り上げた。

レキ・クラウン

L I F E 1 2 0 0 0 — 2 4 0 0 ∥ 9 6 0 0

クラッシュエミュレート

軽度脳震盪

空中にいるレキに対し、追撃を行おうとシャナは大きく跳躍した。  
だがその判断は間違いだった。

目の前に来たシャナを見たレキの口元はにやりと緩む。  
そしてあるうことか、その場で体制を立て直し、左手のガトリングをシャナの腹部に付け付けそして撃った。



「ぐ・・・がはっ!!?」

高町シャナ

LI FE 8350—2420 || 5930

空中での一瞬の出来事。

落ちながらもシャナは痛みをこらえ、何とか着地に成功する。

レキの方は何事もなかったかのように距離をとって着地していた。

「さあて、そろそろ決めるよ」

『Load Cartridge. Gatling dreak  
er.』

レキが左手を構えると、ミッドの魔法陣が展開される。

大量の魔力が銃先に集まっていることから、集束系魔法ということが分かる。しかも、この場合だと集束砲と呼ばれる大威力魔法だ。

カートリッジを3本もロードすることを考えると先ほどの言葉通り、この一撃で終わらせるつもりなのだろう。

「FH、あれやるよ!」

『yes. Explosion.』

シャナはFHを鞘に納める。

そして静かに目を閉じ、集中した。

あの一撃を喰らえば、負けは確実。

逆にこちらの一撃を決められれば逆転できる。  
その考えから、この一撃を選んだ。

「ガトリング————」

「飛竜————」

「ブレイカー——ッッ——！！！！」

ドゴオオオッッ！！！！！！

先に仕掛けたレキが、集束砲を撃ち放つ。  
対してシャナは、未だに目を閉じて集中していた。  
目の前まで迫っていた集束砲に次の瞬間————

「一閃ッッ！！！！」

巨大な炎を纏った刃が、集束砲と当る。

互いの最強の一撃は、お互いを殺そうと真正面からぶつかり合う。  
そして……

「やった！」

勝ったのはシャナの炎だった。

勢いはそのまま、レキの元へ迫る。

誰もがそう思っていた。

だが、レキ本人は笑っている。

なぜならば、集束砲は一撃ではないのだから（……………）。

「油断大敵だよ」

ドゴオオッ！！

先ほどと同威力の集束砲が、シャナを包み込む。

その後からも2発、3発と砲撃が続いている。

そう、ガトリングなのだから休む暇を与えてもらう得るはずはない。一撃だけ防いでも無意味なのだ。

高町シャナ

L I F E 5 9 3 0 — 2 0 0 3 0 || l i f e o v e r

『試合終了！！8組第1回戦1ラウンドで勝負は決まりました！勝者はレキ・クラウン選手です！！』

s i d e o u t

「シャナッ！」

試合終了直後、チビ桜と交代していた桜は変身魔法を使い、大人の姿になり観客席から飛び降りた。

大切な妹が心配。

その一心で、他のことはどうでもよかった。

係員にも止められたが、今はそんな関係ない。

急いでシャナの元まで行き、倒れている体を抱き起す。

負けて悔しいのを我慢しているのか目尻には涙が見え、今にも泣き

そんな思いをこらえていた。

「お兄ちゃん、負けちゃった」

「・・・ああ、負けちゃったな」

「私、弱かったのかな・・・？」

「そんなことないよ。シャナは十分強い。今回は、相手がシャナより強かったただけだ」

「そう・・・かな？」

「ああ。シャナの強さは、俺が保障してやる」

「そっか。残念だなあ・・・」

泣きそうになりながらも必死にこらえる。

あんなすごい戦いしたのに、負けた。

逆転できたかもしれないが、今一步届かなかった。

悔しい思いがあふれ出てきてしょうがない。

そんな時だった。

相手選手——レキがこちら側にやって来た。

「最後の一撃、正直驚いたよ」

「え・・・？」

「僕の集束砲、一撃の威力は弱い方なんだけど、それでも威力はあ

る。それを打ち消すんだから、君は度っても強い子だと思ったよ。  
それに途中のアップパーもね」

「・・・あ、ありがとう・・・」

「それと・・・」

「悔しいなら、優しいお兄さんの胸で泣いたら？その後、次に向けて頑張ればいいと思う」

「っ・・・う、うああああっつ！！」

その言葉通り、シャナは桜に抱きつきながら泣きだした。  
負けて悔しかった。勝てなくて悲しかった。

実力の差を知って、どうすることもできなかった。  
そして、桜に期待にこたえることができなかった。

それらの思いが重なり、涙となってあふれ出た。

その鳴き声は、恥ずかしいものではなく、誇らしいものだ。  
桜ははそう思いながらシャナを慰め続けた。

## 第45話 炎少女と道化の銃士（後書き）

レキの元ネタはわかった人はいるのかな？

両腕にガトリングって言えばわかるかと・・・。

後、弾切れしたら自爆？

まあ、こっちだと基本は弾切れがありませんが（笑）

次回は2回戦の光景。

またく書いてない原作キャラ達の描写かな？

もしくはさらに話を進めるかのどちらか。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第46話 双剣VS二闘流

「負けちゃったか。まあ、今回は実力が足らなかったってことで、また来年だな」

「うん。来年は絶対に負けない」

ノーヴェ達のところに戻ったシャナは、すっかりいつも通りだった。負けて、悔しくて、悲しくて、泣いて。いろいろと吹っ切れたか、すがすがしい顔だ。

チームナカジマからの最初の脱落者だが、めげない。来年に向けて、また頑張ればいい。

そう思いながら、今はチームメンバーの応援をした。

残ったアインハルト、ヴィヴィオ、共に勝利。

2人とも1ラウンドKO勝利。

アインハルトに至っては1分もかかってないのが驚きだ。

「次の2回戦の組み合わせは……え？」

シャナの言葉通り、少しばかり前に1回戦がすべて終了した。

気になる2回戦目の組み合わせを確認すると、そこには意外な組み合わせがあった。

6組第1回戦

高町 桜

VS

シャンテ・アピニオン

チームナカジマメンバーやルーテシアは特に目立った組み合わせはなし。

唯一目に止まったのが、この2人の組み合わせだった。しかも順番から見えてすぐに始まるだろう。

シヤナも何度かシャンテと面識はある。

ヴィヴィオと聖王教会に行き、手合わせしてもらったこともあった。

だからこそ思ってしまった。

この2人が戦ったらどっちが勝つんだろう？

チビ桜の実力は、スーパーノービス、およびエリートクラス1回戦の試合である程度分かっている。確実に強いと言えるだろう。

だがシャンテのスピードも計り知れない。

まさしく消えるほど速く、姿が捉えられなかったのだから。

「さて、そろそろアインハルトたちが戻ってくる。ドリンクとタオル用意しとくか」

「あ、うん」

side out

『エリートクラス4組第2回戦。レッドコーナーからは初参加『翼の英雄』高町桜！対してブルーコーナーからも初参加、聖王教会のシスターシャンテ・アピ二オン！オールラウンダー対スピード。ま



もなくゴングです!』

2回戦が始まり、すぐにこの2人の試合の順番が回って来た。  
今はリングの中心で互いはにらみ合っている。

「桜さん、いや今は桜君かな? 言っとくけど、負けないよ? 私が勝つんだから」

「いいや、勝つのは僕だね」

カーンッッ!!

会話が終了すると同時にゴングが鳴る。

それと同時に2人はバックステップをし、距離をとった。

リングの端に着くと、動きは止まる。

2人はなぜだか動こうとしない。

試合時間がどんどん過ぎて行く。

「・・・(攻めてこない? シャナ見たいな、後手必勝?)」

イタクアを構えたチビ桜は警戒していた。

シャンテは見るからに近接格闘型。

両腕に持っている双剣は飾りではないはずだ。

それなのに攻めてこない。

本来ならば、近づいて斬るが定石の剣術。

これを警戒せずしてどうするのか。

対してシャンテは何か考えがあった。

一応相手は幼くても桜。油断はできないだろう。

それを警戒したうえで後手に回っているのかもしれない。

「（攻撃しないことには何も始まらない）——イタクア!!」

『ice lance.』

「シュートッ!!」

単発の魔力弾が数発、シャンテに向かって直進していく。  
速さはそこそこ。牽制としては十分だろう。  
だがそんな攻撃はいとも簡単に打ち消された。

「だよね」

「じゃ、今度はこっちからっ」

駆け出し、突っ込んでくるシャンテ。  
身構えるチビ桜だったが、驚くことが起きた。

シャンテの姿が消えた。

見失い、周囲を見渡す。

姿が見ないまま、次の瞬間——

ガンッ!!

「痛ッ!?!」

高町 桜

L I F E 1 5 0 0 0 — 1 5 0 0 ∥ 1 3 5 0 0

（急所攻撃・・・！！）

真後ろから首筋への攻撃。

ギリギリでガードのため腕を回すが、間に合わずダメージを少ししか軽減できなかった。

「のおっ！！」

ブンッ！

腕のトンファーを展開し、振り回す。

だが攻撃は当たらず、軽々と避けられてしまう。

向き直ると、シャンテはそこにいた。

さっきは前から後ろ。後ろにいたかと思えばまた前。

まさに手品のようだ。

「速いなぁ・・・」

「へへーん。どお、すごいでしょ？」

「うん、すごい」

言葉では軽く言っているが、正直言ってきた。

チビ桜はこう言った戦闘には慣れていない。

桜やフェイトのように高速戦闘をするフォームもない上に、そう言った経験が皆無。今までやってきた戦い方ではシャンテの攻撃に対して間に合わないだろう。

「（1ラウンド目は様子見。勝負は2ラウンド目からってことだね）  
・・・イタクア、頑張るよ」

『all right. Load Cartridge.』

「選ぶは水と氷。使うは雨と氷壁。レイン&フリーズバレットツ！  
」

『shoot.』

右手を真上へ、左手を真横へ向ける。  
先に真横へ放ち、その直後に真上へ撃った。

パキィ・・・パキキ・・・！！  
サアアアアツ・・・

リングの淵がニュートラルコーナーを挟んで凍り、リングだけに雨が降り注いだ。だがこれだけではダメージを与えることなんてできない。

なんでこんなことをするのかシャンテはおろか、会場全員が疑問に思った。

「さあ、2ラウンド目に行く前に決めようか」

## 第46話 双剣VS二闘流（後書き）

次回は決着！（速いな

チビ桜が大威力なあの技を使う！

なんなのかは次回のお楽しみです。

まあ、察しが良すぎる人はすぐにわかるとは思いますが。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第47話 銀の翼 氷結の息吹

『1ラウンド目は何事もなく終了。シャンテ選手は中々攻めず、対する桜選手は全く攻め切れていない様子。ポイントではわずかにシャンテ選手がリードの状況となりました』

1ラウンド目で決められなかった桜。

シャンテの速さに追いつけずに翻弄され、防御はできれど攻撃ができずに終わってしまった。

せっかく1ラウンド目で決めるつもりで降らせた雨も無意味。リング淵に設置した氷壁も半分以上解けてきていた。

「インターバルの回復は終わった。次で決めてこい」

「うん。もうあの手品は見切った」

一足先にリングへ戻るチビ桜。

インターバルでの回復のおかげでライフはある程度ある。

それにシャンテへの対策はすでに十分だ。

それに対して当の本人。

回復中なのか、未だに座っていた。

「珍しいですね、貴方が攻めに行かないなんて」

「んー。まー、小さくても桜さんだしね。1ラウンド目は様子だよ。それに本番はこれから。リズムにのって、テンポも上げて。あたしの『重奏』をお披露目しちゃう♪」

その言葉を残してすたすたとリングへ戻って行くシャンテ。  
2人が戻ってきたことを確認し、試合は再開。  
2ラウンド目が始まった。

ガガッ!!

開始早々、シャンテの先制攻撃が仕掛けられた。  
見事直撃した。そう誰もが思っていた。  
しかし――――

「迷彩幻術ミラージュ・ハイド。手品は見破ったから、もう四角攻撃はさせないよ」

右手で無理やりな白羽取り。

左手のトンファーでしっかり防御していた。

しまった!と言いたそうな顔をしるシャンテ。

だがそんなことは計算の内。

なぜならこれも迷彩幻術なのだから。

「なーんちゃって」

「っ!?!」

「奏剣・二重奏!  
デュエット」

意表を突いた攻撃。

それを防いでも後ろからの攻撃。

正直、初撃を防ごうと結局は攻撃を受けている事になるのだ。

「剣舞四天唱・ベルカントカノーネツ!!」

ドゴォンッ!!

2人のシャンテによる二重攻撃。

撃ち上げ、そして叩き落とし。

十分威力のそれをチビ桜はまともに受けてしまった。

ちょうどリングアウトし、ダウンカウントが始まる。

しかし会場はそれどころではない。

2人いるシャンテに目が行ってしまっていた。

「僕はまだ、リングにいるよ?」

「っ!?!」

「まずは右から!」

思わぬ誤算。

リングアウトさせたはずのチビ桜はカウントはおろか、ダウンすらしていない。確かに直撃させた感触はあったシャンテは驚くしかなかった。

そう、チビ桜も幻術が使えたのだ。

「星流・水氷斬!」

リング上にある水を利用し、水しぶきを凍らせて斬撃を決めた。

二分の一の確率で本物のはずだが、運悪くはずれ。

攻撃を当てたシャンテは消えてしまった。



だがそれなら最後に残った1人が本物確定。  
流れるようにもう1人のシャンテに回し蹴りをたたきこんだ。  
その時だった。

「あれ!?!」

「残念、それもハズレ」

最後に残っていた1人も幻術だった。

いや、それだけじゃない。

振り向くとその場にはまたさらに2人、いや3人のシャンテがいた。

そして再び驚いている状態のチビ桜に対し、同時攻撃開始。  
囲むように配置し、同時に走り出した。

「さらに真打ち登場——!!」

追加でまた1人登場。

いったい何人いるのだろうか。

とっさにガードの構えをとるが、所詮は前だけ。  
後ろからの攻撃はどうしたって対処ができない。

『幻楽四重奏、これにて——ファイナーレッツ!!』

4人同時に喋るため、声が重なって聞こえる。  
再び叩き付け、宙からリングの中心へ戻る。  
その威力は、たたきつけられた衝撃で大きな水柱が立ってしまうほどだ。

『こ、今度は4人います！先ほど消えたのを合わせて6人！ど、ど  
ういうことでしょうか！？』

「最後に出てきたあたしが本物。2ラウンド目の頭からずーっと迷  
彩幻術で隠れてました」

見事、してやっつたりのシャンテ。

今の攻撃でチビ桜はダウン中。

ダウンカウントがもう少しで0になってしまう。

「痛つつ・・・ハア、ハア・・・」

高町桜

L I F E 8 0 0 0 — 5 9 5 0 || 2 0 5 0

クラッシュエミュレート

中度脳震盪

左腕打撲

ギリギリのところでは何とが立ちあがった。

ふらふらな状態で、何かブツブツとつぶやいているが、シャンテは  
気にもとめない。一気にたたみかけるつもりで大技を繰り出そうと  
する。

だがその前に動いたのはチビ桜だった。

「呪文詠唱完了。灰白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に  
染めよ。来よ、凍結の息吹・・・！！」

「あ、あれは！？」

「ま、まさか!？」

観客席とセコンドにいる八神家メンバー全員が驚愕した。

呪文詠唱が必要で、尚且つ融合機がないと調整も難しい大魔法。チビ桜は唱えた呪文で全てが分かった。

だが時すでに遅し。

止めることはできない。

「アーテム・デス・アイセスツ!!」

パツシャツ!

足元の水に向かって拳を叩きつける。

その瞬間、全てが凍りつく。

リング上の水。その場の空気。

シャンテの立っていた場所、チビ桜がいる場所以外全てが凍った。

『フィールド形成魔法』

もともとの広域殲滅型の魔法が劣化した結果だ。

威力が低いおかげか、会場の機材、観客には何の影響はなし。影響があると言えればリング内にいる選手とセコンドぐらいだ。

「氷がどうした! オクトデクテツト 十八重奏ツ!!」

対してシャンテも大技発動。

周りに合計18人が一度に現れた。

見事に足元を凍らせた1人も偽物。

これでまたわからなくなってしまうた。

「全員突撃い!!」

「・・・一つだけ注意しておくね」

『?』

「急に走り出したら転ぶよ?」

『っ!?!』

ズルッ

18人同時に滑った。しかも盛大に。

「UC」

『yes. Load Cartridge.』

「星流・・・流れ星ッ!!」

右腕のトンファーを展開し、構える。

そして勢いよく、スケートのように滑りながら攻撃を開始した。

ザシュッ!ザシュッ!

端から順番に、流れるように。

尚且つ威力をとどめたまま確実に倒していく。

だが見事にハズレ、ハズレの連発。

さすがは十八人。数が多い。

しかし今なら確実に見つけ出せるだろう。

そして最後の1人を倒した時だった。

「奥義！『ホントは十九重奏！』」  
もっぴとり

ザンッ！！

上空、上から背中をめった斬り。

これで終わり。そうシャンテは確信した。

だがしかし。

『残念でした♪』

パリインッ

めった斬りにしたはずのチビ桜がガラスのように砕けた。

シャンテにはわかる。同じ幻影だと。

すぐさま本体を探すもう遅い。

攻撃を入れた後、すぐに体を戻すことはできないのだから。

「銀翼発動。五連箒星ッ！！」

背中に大きな4枚の銀色の翼を生やしたチビ桜の両腕にはサーベルが2本。

身体強化魔法をかけ、物凄いスピードを出しながら突っ込む。

そして接触と同時に両腕のサーベルを同時に、左右に合計5回振る。

まるで箒を使うかのように。

ザシュシュッ！！

最後の締めには斬り払い。

大量にライフを削るが、まだとどめまで行けない。

シャンテ・アピニオン

LI FE 15000—7840 || 7160

「まだ、ダウンはしないよね？」

「痛・・・あたりまえ・・・！」

「よかった。なら、これで決める！アイスバインド！」

「な！？」

「今の僕の最強の一撃。受けてみて」

足元と目の前に魔法陣が展開される。

足元はミッド、目の前はベルカと違う。

そしてベルカの魔法陣に魔力が集まり始めた。

集束。

今までシャンテが使ってきた迷彩幻術。

チビ桜の魔力弾と幻術、そして劣化版広域魔法。

それらすべてで使った魔力を集めていた。

「一閃墜滅・・・トライデント————」

凍った足元から生えてくる氷のバインドにより身動きが取れないシャンテ。

ただやれるのを待つ状況だが、どうにか回避しようとあがいていた。しかし、この氷のせいで体温が低下している。

そんな状況では力を出そうにも出せるはずもない。

よって、バインドブレイクでもない限りほどけないということだ。

「————スターダストッ!」

ドゴオオオツッ! ! ! !

集束砲撃三連射。

普通最初の一撃で終わりのはずだが、あいにくこの魔法元が殲滅用の砲撃。大量に敵を倒すことを想定しているのに1人に対して使うと言う何ともひどい話だ。

桜の母親のなのも似たようなことをフェイトにやったことがあるが、それはスターライトブレイカーの強力な一撃のみ。

チビ桜がやっているのも、威力は劣っているが似たようなこと。

しかもそれが三連射と思うと、見ているフェイトはぞっとしていた。

シャンテ・アピニオン

7160—30000||life over

『し、試合終了! しょ、勝者、高町桜! 見事な集束砲でシャンテ選手を打ち倒しました! 少しやりすぎな気もしますが、あの笑顔を見ると何とも言えません・・・!!』

「えへへ、ブイッ!」

## 第47話 銀の翼 氷結の息吹（後書き）

次回は今のところは未定。

本当に原作キャラ達の出番がないから書こうとは思っていますが、正直言ってもう少して終わりだからどうしようかと思ったりもします。

誤字脱字、感想あればお願いします。



## 第48話 相棒（前書き）

結局、今回は桜VSヴィクターとなりました。  
あれ？つまりはもう少しで終わり？

・・・まあ、頑張って行きましょう！

今回はついにあの人が復活！？

## 第48話 相棒

「もう、無理だな・・・」

1人悲しくつぶやいた。

桜は、次の第3試合でヴィクターと当る。

それは願ってもないことだ。

だが、まだ足りないものがある。

「アル・・・」

自分の相棒であるアルだ。

初代の記憶も、性格も戻っていない。

未だにブラックボックスの中身も分からないまま。

桜は最後の戦いをアルと戦いたかった。

それが叶わないとなれば、1人で闘うしかない。

どうしても心残りだが、あまり時間はかけたくなかった。

「だけど、ただでは終わらねえ。しっかり勝って、桜にバトンを渡さなきゃな」

そう言いながら桜は死霊秘宝に手を伸ばした。

side out

試合当日。

第3試合まで進んだ選手、応戦の選手で会場は湧いていた。

「今回は一番最初だ。気合を入れろ」

「わかってますよ」

今回の試合だけ桜が出る。

それはしっかりと八神家メンバーに伝えられていた。

優勝候補でもあるヴィクトリア・ダールグリユン。

彼女とチビ桜が戦うのは少し荷が重すぎる。

そんな言い訳の様な理由で交代した。

「今回はアルの出番があるかもしれないから、準備しといてくれ」

「了解です、マスター」

試合中、何かのはずみで初代に戻るかもしれない。

そんなかな望みを持っていたが、あまりあてにはしていない。  
だがいざというときには手伝ってもらおうつもりだ。

桜は、深く深呼吸する。

目の前にいるヴィータとザフィーラにあまり心配かけないよう悲し  
そうな表情は隠し、寄る気満々だという表情だけを出す。

しかし、それはいとも簡単に見抜かれてしまった。

「お前、なにが悲しいんだよ」

「えっ？」

「誤魔化しているのはわかっている。なにがあったか言ってみろ」

一瞬でバレてしまい、桜は笑う。

それでも表情は悲しそうで、どうにもできなかった。

「バレバレですか？」と聞くと、当然の答えが返ってくる。

「バレバレだ。同じ仕事場でほぼ毎日顔見てんだ。表情でわかんだよ」

「そうですか。でも、なにがあったかは言いません。まあ、そのうちわかりますけど」

そう言いながら桜は立ち上がる。

時間なので、UCとイタクアを使いセットアップした。

首をコキコキと鳴らし、桜はこう言った。

「最後の戦いぐらい、本気でやりたいですよね？」

ヴィータはその言葉を理解できなかったが、ザフィーラはすぐに理解した。桜がどうしてあんな悲しそうな表情をしていたのかを。

死霊秘宝をしまい、リングへ向かう。

その顔はまるでわくわくしている子供そのものだった。

side out

『予選6組第3回戦。ブルーコーナーからは『翼の英雄』高町桜選手！レッドコーナーで待ち受けるのは『雷帝』ヴィクトーリア・ダ

ールグリユン選手！まもなく試合開始です！』

会場内は歓声に包まれていた。

先にリングの中にいるヴィクターは凛々しく、涼しい顔で待ち構えている。手に持つ槍のような、斧の様なデバイスは持ち主と同じように凛々しくきらりと光っていた。

桜は、一応再確認。

デバイスの調子を確認、正常なのを確認するとリングに上がった。

「桜さん、よろしく願いますわ」

「こちらこそ。お互い、良い試合にしましょう」

挨拶と共に握手。

試合が始まればお互いこんな状況じゃなくなるだろう。

だが、こう言う礼儀はしっかりとしないと失礼だ。

そして少し離れ、準備完了。

次の瞬間ゴングが鳴り、試合が始まる。

カーンッ！！

しかし、2人はゴングが鳴ったにもかかわらず動かない。構えた状態ではあるが、攻撃に移る兆しが見えなかった。

「（最初は様子見だ、落ちつけ）すう・・・はー。イタクア」

『a i i   r i g h t .  
』

空中に大量のスフィアが現れる。

様子見と言いながらも数は30と少し多め。

やはりというか何と言うか、ヴィクターはそれをみて驚きはしたが、むしろ面白そうに笑っていた。

「弾幕、発射！」

その声と同時に、大量のスフィアが発射される。  
さらに桜も構え、魔力弾を乱射した。

一瞬にして大量の弾幕が張られる。  
ヴィクターを中心に、辺り一面が煙で覆われた。  
だからといって、倒したわけではない。  
手ごたえが全く感じられなかったからだ。

「え、マジ・・・！？」

ヴィクトーリア・ダールグリユン

L I F E 1 5 0 0 0 — 2 0 0 ∥ 1 4 8 0 0

「マジですわ。わたくしの防御の堅さは並みじゃありませんもの」

ほとんど当てたはずなのに、削れたライフはほんの200。

ヴィクターの強みは自分の多大な魔力で行う強固な守り。

雷撃変換を使った攻撃の二つ。『雷帝』の子孫、というのは伊達ではなさそうだ。

「では、今度はこちらの番ですわ！」

(くるっ！)

「四式・・・『瞬光』」

雷を纏った突き。

素早く、エリオのような重い一撃。

桜は紙一重で攻撃を避けるが、槍での突きだけではなかった。

「————っ!?!」

「外式、天瞳・水月ッ!！」

ドガアッ!!

ヴィクターの真横に避けた桜の腹に、仕込み刀のような魔力刀の一撃が入る。もし桜が先の槍での攻撃を防御していれば、この一撃は受けずに済んだろう。

しかもご丁寧に鳩尾。痛みは大きく、削られるライフも多い。

高町桜

L I F E 1 5 0 0 0 — 2 3 0 0 ∥ 1 2 7 0 0

「かはっ・・・!！」

ダウンをとられなかったかものの、現状では桜が圧倒的に不利。強固な守りの前では砲撃でなければライフを大きく削るのは無理だろう。

かといって接近戦に持ち込んで勝てる見込みもない。

器用貧乏、というのがここで響くとはあまり思ってもみなかった。

しかし、いつも通りの万全な桜なら勝てる自信はあっただろう。それができないと思ってしまうのは、今の心の心境のせいだ。

相棒の不在。

待っていれば、もしかしたら昔のアルが戻ってきてくれるかもしれない。

そう、心のどこかで思っているのだろう。

そののせいで桜は次第に攻撃をやめ、防御に回る。

いっしか牽制で撃っていた魔力弾とスフィアの弾幕も止まり、どんどんヴィクターに有利な状況が出来上がって行った。

このまま行けばギリ貧。もし耐えきったとしても判定負けで終わるだろう。

まもなく3分経つ。

1ラウンド目の終了が見えてきた。

チラチラとセコンドにいるアルを見る。

未だに何の変化もなしで、駄目かと思えた。その時だった。

「よそ見とは余裕ですわね！」

「っ!？」

「十八式『兜割』！」

ドゴォッ!!



後ろに回り込まれ、頭を掴まれたかと思ったらそのまま勢いよくリングにたたきつけられる。それは油断が招いた相手の会心の一撃だった。

高町桜

L I F E 1 2 7 0 0 — 3 7 0 0 〓 9 0 0 0

クラッシュエミュレート

強度脳震盪

『ダ、ダウン！ダウンカウント10！！』

一撃で意識が飛びかける。

カウントの声も、セコンドの声も耳に入らない。

『5！』

ついにカウントが半分を切った。

だが桜に起き上がる兆しは見えない。

ヴィクターも起きてきてほしいと願うがピクリともせず、このまま勝ってしまうのかと思っていた。

だが、次の瞬間だった。

「————さっさと起きぬか、このうつけもの————っ！！！！！！」

物凄い少女の怒声が聞こえる。

いったい何事かと思い、会場全体の視線はその少女へ向いた。

ブルーコーナーセコンド、アルIIアジフ。

薄い紫色の髪をした少女が目尻に涙を浮かべて桜を見ていた。それどころではない。その場から叫び、怒っていたのだ。それに反応したか、桜は体をゆっくりと起こし始める。表情はどこか嬉しそうにしている様だとヴィクターは思えた。

「ようやくお目覚めか・・・」

『た、立った！立ちました！し、試合再開です！』

ギリギリ、本当にギリギリのところで桜は立ち上がった。体はふらふらとしているが、どうせすぐに1ラウンド目の終了のゴングが鳴る。

お互い、勝負は2ラウンド目からと念話をし、その場を動かなかった。

カーンッ！

数十秒後。

1ラウンド目が終わり、双方のセコンドへ戻っていく。桜は、目の前にいる仁王立ちしたアルにこう言った。

「お帰り、アル」

## 第48話 相棒（後書き）

次回かその次辺りに終わりですかね。

その前に途中で終わっている『番外編ステージX』を終わらせたいけど、なんだか無理な気がします（長さに

まあ、もしそうなる場合は『ステージX 02』のあとがきに「続きません」と書きたいと思っています。  
勝手すぎて申し訳ありません。

今回はアル&amp;桜コンビ復活！

え？ユニゾンデバイスは反則だろうって？  
ユニゾンしても魔力値増大しませんし、ティオ（アステイオン）とかクリス（セイクリット・ハート）と似たような存在だから大丈夫じゃないですかね？

魔導書の管制人格で人型デバイス、っていう設定なら大丈夫だと考えています。

基本、アルはサポートが得意ですから。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第49話 炎髪灼眼の討ち手VS雷帝

「一度でいいんです。願います」

桜は、試合前日にシャーリーの元へ訪れていた。名目はアルの点検。だが本命は違った。

ブラックボックスの強制開口。

アルに支障が起らない程度に。  
尚且つ、確実に開けてほしい。  
それが桜の要望だった。

シャーリーは、難しいと言っていたが、しぶしぶやってくれた。  
本当に、これでなにもなかったら諦めると。  
その桜の思いに負けたのだ。

正直、アルのことは心配だったが、大丈夫だと思っていた。  
何かの集まりであるブラックボックス。

今までアルはバグなどのそう言ったものは見られなかったため、開けたとしてもそんなものは出てこないだろうとシャーリーは推測しており、実行したのだ。

だがしかし。

アルに何の変化もなかった。  
ただいつも通り笑顔で。

ただいつも通り無邪気で。  
ただいつも通り優しい。

これで、桜の望みは途絶えた。

だからヴィクターとの試合はほとんど1人で闘い抜こうと決めた。

「ハ……ル……」

「どうした？」

「っ!?! い、いえ、何でもありませんよ?」

「そうか。なら、帰るか」

「はいっ」

その日は何事もなく、翌日の試合当日。  
ついにヴィクターとの試合が始まった。

最初は互角に見えた戦い。

どんどんと桜が受けに回り始めていた。

両腕を顔の前に持っていていき、歯を食いしばりながら攻撃に耐えている姿を、兜割を受け、ピクリとも動かない姿を見てアルは思っていた。

マスターが負けちゃう。

少しばかり幼いアルでも、これはすぐに分かった。

分かったところまでいいが、どうすることもできない。  
どうにかして元気づけてあげたい。立ちあがってほしい。

そんな時だった。

（少し代われ）

一瞬、そんな声が頭に響いたと思うと、アルは意識を失った。  
しかし、アルの体は倒れたりもせず、しっかりと眼も覚めている。  
そしてリングのふちまで行き、桜に向けて叫んだ。

「さっさと起きぬか、このうつけものーっ！！！！」

side out

『1ラウンド目はブルーコーナーの少女の怒声で桜選手、首の皮一枚で助かりました。現状はライフ的、ポイント的にも見てヴィクトーリア選手が有利となっております』

現在、状況は実況の言葉通り。

ダウンカウントギリギリのところでき上がった。  
アルの強烈なお叱りの声がなければどうなっていたことだろう。

ヴィクターは、良かった、と言いたそうな安堵の表情を浮かべながら、それでも凛々しくリングを降りて行く。

セコンドにいる男性も、ヴィクターのその顔をみて笑顔だ。  
本人が楽しそうだと言うことがすぐに分かったのだろう。

対して桜は口元を少しばかり緩め、ふらふらとリングを降りた。  
クラッシュエミュレートのせいで少し眼がぼやけて見えるが、目の前にいる仁王立ちしたアルの姿を捉える分には十分だった。

「お帰り、アル」

「お、おう」

さながら、六課時代かアルハザードにいたころを思い出す。身長が少しばかり違えど、それはまさしく昔そのもの。

桜はアルの頭の上に手を置き、そのまま撫でた。

背丈が同じぐらいだが、それでも構わない。

アルが戻ってきてくれた、それだけで嬉しかったのだから。

「さて、早速」

桜は審判を呼ぶ。

そしてあることを報告した。

『桜選手、なんとここでデバイス変更だそうです！登録されているデバイスなので、反則ではありません！』

アルと一緒に戦う。ということはデバイス変更を意味するのだ。

しっかりと魔導書型『死霊秘宝』管制人格兼制御用人型デバイスで登録してあるため、もちろん反則ではない。今まで使わなかっただけだ。

インターバルでの回復を済ませた桜は、すぐさまアルと契約する。といっても、いろいろな設定を確認するだけなのだが。

「バリアジャケット再設定確認。魔導書内召喚可能武器『ロイガー』『ツァール』。以上だ。他に何かあるか？」

「設定した事項はすべてセッティング後に実行しろ」

「承知」

バリアジャケットをそのまま、UCとイタクアを置く。

そしてそのまま死霊秘宝と小さくなったアルを連れ、リングへ戻る。  
その顔は、いつにもまして桜らしい顔だった。

高町桜

LIFE9000

インターバル回復+6000||150000

side out

「あちらは手の内を変えてきましたね」

レッドコーナーセコンド。

ヴィクターの執事であるエドガーは、桜を見てそう呟いた。

しかしヴィクター本人はそんなことは全くと言っていいほど気にしてない様子。チラッと見るが、すぐに目を離れた。

「これでようやく、本気で闘ってもらえますわ」

「楽しそうでなによりです」

くすくすと笑うエドガー。



やはり、今回の大会は一味違々と睨んでいた通りだ。

こんなに嬉しそうなヴィクターを見るのは久しぶりなのだから。

その当の本人も嬉しそうな顔。

ダメージ回復をしないままリングに戻って行った。

「セットアップ、ユニゾン・イン」

リング上に、ヴィクターが来たのを確認した桜はアルとユニゾンする。

最大魔力値は増大していないが、処理能力が格段に上がる。

そして何より、外見全てが変化した。

白銀の魔力光と対照的な漆黒な色のバリアジャケット。

先ほどまで黒かった髪は、炎のような赤色に。

蒼と緑の瞳は、燃えるような灼眼に。

まさしく『炎髪灼眼の討ち手』

それを見た会場全体が湧いた。

『お互いの準備が整ったところで、2ラウンド目開始です！』

カーンッ！！

試合開始のゴングが鳴る。

ヴィクターは1ラウンド目同様、構えたまま動かない。  
しかし、桜は違った。

「見せましょう、双剣二刀流・・・ロイガーッ！」

右腕をかざし、名を叫ぶ。

光が、魔力が集まり、やがては形を成した。  
その剣はしっかりと桜の手の中に納まる。

「ツァールッ！」

今度は左手。

右手と同じよう、光と魔力が集まり剣となる。  
逆手持ちにした短剣と呼ぶには少し長い剣と、右手に持った剣を交  
差させ、構えた。そして、数秒としないうちに動きだす。

「っ！？（速———）」

ザシュッ！！

ヴィクターが頭で考えるより速く、桜が斬った。  
防御をさせるひまも与えず、鎧ごと切り裂いたのだ。

ヴィクトーリア・ダルーグリユン

L I F E 1 4 8 0 0 — 1 5 0 0 ∥ 1 2 3 0 0

「くっ・・・！！」

再び走ってくる桜に応戦し、槍を振る。

桜は後ろへ空中を一回転し、しっかりと避ける。  
しかし、本気の桜は避けるだけじゃなかった。

「斬り裂け！！」

空中で、2つの剣を合体させる。

巨大な手裏剣となったそれを、空中からヴィクターへ向けて投げた。

ガキンッ！！

しかし、手裏剣はいとも簡単に上へはじかれた。

それはすでに着地していた桜の手の中へ帰ってくる。

その桜の顔はとってもいいものだった。

「行くぞ、アル」

（おうとも！）

「よし・・・ニトクリスの鏡ッ！！」

その掛け声とともに、一瞬で桜が増える。

幻術を使ったトリックで、ヴィクターを瞬く間に包む。

しかし、それでも中心のヴィクター自身は笑っていた。

こんなに楽しいのはハリーなどと当った時以来だと。

だからこそこちらも本気で行かなければ失礼だと思い、大技に出た。

「九十一式『破軍斬滅』ッ！！」

ドゴオオッ！！！！

手に持つ槍を縦横無尽に振り回す。

強烈なその攻撃の前では、桜の幻術など無意味。

これまた一瞬にして桜本体1人がリングに残った。

しかし、桜の狙いはこれだ。

大技の後には必ず隙ができる。

そこに何の躊躇もなく突っ込んだ。

「幻術三爪——」

懷に飛び込むと同時に、2体の幻術を出す。  
そして3人同時に斬り上げ、空中にヴィクターをあげる。  
さらに飛び、また同時にたたき落とした。

『炎痕ッ!!』

ドガアアッッ!!!!!!

桜とアルの声が重なる。

叩き落としたと同時に幻術の桜は消えた。

今の一撃、確実に耐えきられただろう。

手ごたえはあったが、堅さが半端じゃなかった。

やはり1ラウンド目で確認した堅さは不意を突いても健在だ。

ヴィクトーリア・ダルーグリユン

L I F E 1 2 3 0 0 — 2 3 0 0 || 1 0 0 0 0

「中々、手も足も出ませんわね」

ダウンをとられながらも、1秒足らずで起き上がるヴィクター。  
楽しそうな表情だが、状況は芳しくないのであまり良いとは言えないだろう。

とはいえ、負けるつもりは毛頭ない。

手も足も出ないのならば、手も足も出す。  
届かないと言うのであれば届かせるまで。  
それぐらいの気持ちの入れようだ。

「（装甲は薄いはず。あれだけのスピードを出すんですもの、一撃  
当てれば相当響くはず・・・）行きますわ！」

ヴィクターの猛反撃開始。

構える桜に対し、正面から突っ込んでいく。  
そして衝突した。

ギリギリと鏝迫り合いをするなか、ヴィクターはまず左手を弾く。  
さらに続けて右手。本体に攻撃する前に、再び左手が来るが、これ  
もまた先ほどと同じように全力で弾いた。

「しま————」

「四式『瞬光』ッ！！」

ゴウッ！！

何度にもわたる桜の防御を弾き、崩した末、ついに攻撃が入る。  
見事、桜の胸のど真ん中にヴィクターの一撃が入った。

高町桜

L I F E 1 5 0 0 0 — 3 5 0 0 ∥ 1 1 5 0 0

「ぐ・・・がはっ・・・！！」

弱点攻撃成功。

ヴィクターの反撃はしつかりと決まった。

ダウンはとられなかったが、やはりこの一撃は強烈だ。

「痛っつ・・・はははっ、楽しいねえ」

「ええ。本当、今までで最高の試合ですわ」

## 第49話 炎髪灼眼の討ち手VS雷帝（後書き）

今回ではまだ終わりません。

次回で終わりかな？

オチはどうかお楽しみ。

桜は、アルはいつたいどうなるのか・・・。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3435r/>

---

魔法少女リリカルなのはvivid 鮮烈で桜色の物語

2012年1月3日22時50分発行